

一般国道253号

上越三和道路関係発掘調査報告書IX

下割遺跡 V

2012

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道253号

上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅸ

しも わり
下 割 遺 跡 V

2 0 1 2

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道 253 号上越三和道路は、上越市寺と上越市三和区本郷を結ぶ地域高規格道路（自動車専用道路）で、上越市から南魚沼市に至る一般国道 253 号上越魚沼地域振興快速道路の一部です。この地域振興快速道路は上越地域と魚沼地域の交流を促進するとともに、北陸自動車道や関越自動車道と合わせて、信頼性の高い循環型広域ネットワークを形成することを目指しています。これにより産業・経済・文化の広域的な交流が活発になり、地域の活性化を促進するものと期待されています。

本書は、この上越三和道路建設に先立ち、平成 22・23 年度に実施した下割遺跡の発掘調査報告書です。

下割遺跡は、縄文時代、古墳時代、古代、中世を中心に、長期間にわたって営まれた大規模な遺跡で、平成 14 年度から発掘調査を順次実施しています。今回の調査区は、下割遺跡の東端に位置し、調査によって、中世・近世の集落の一部が見つかりました。中世の集落は 13 世紀後半～14 世紀を主体とするもので、平成 14・15 年度の発掘調査結果と合わせることで、当時の集落の様相が一層明らかになりました。また、当時の大規模な道路状遺構も見つかっています。近世の集落は、17 世紀後半以降に発展してきており、中江用水の開削が契機となった可能性があります。

発掘調査で得られた資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されるものと期待しています。

最後に、この発掘調査で多大な御協力と御理解をいただいた上越市教育委員会並びに地元の方々、また発掘調査から本書の作成まで、格別な御配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所に対して、厚くお礼を申し上げます。

平成 24 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長 武藤克己

例 言

- 1 本書は、新潟県上越市大字米岡字番場780番地ほかに所在する下割遺跡の発掘調査記録である。下割遺跡の発掘調査は多年度にわたることから、調査年度ごとにローマ数字の連番を付して通称した。2010年度調査を「下割遺跡V」、2011年度調査を「下割遺跡VI」と呼称し、本書の記述でもその語を使用する。
- 2 2010・2011年度の調査成果をまとめたものが、本書『下割遺跡V』で、これは下割遺跡の5冊目の発掘調査報告書である。
- 3 発掘調査は一般国道253号上越三和道路の建設に伴い、国土交通省（以下、国交省）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。
- 4 発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に依頼した。
- 5 埋文事業団は掘削作業等を、2010年度は株式会社イビソクに、2011年度は株式会社吉田建設にそれぞれ委託して発掘調査を実施した。
- 6 整理作業及び報告書作成に係る作業は、平成23年度に埋文事業団が県教委から受託し、これにあたった。
- 7 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は、下割遺跡Vの略記号を「下ワリV」、下割遺跡VIの略記号を「下ワリVI」とし、出土地点や層位等を併記した。
- 8 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 9 本書に掲載した遺物番号は種別に係りなく通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 10 引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を本文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。「第VI章自然科学分析」については、引用・参考文献を巻末に掲載した。また、本文中の敬称は略した。
- 11 調査成果の一部は、現地説明会、広報紙「埋文にいがた」、「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」、遺跡発掘調査報告会等で公表しているが、本書の記述をもって正式な報告とする。
- 12 自然科学分析は、株式会社古環境研究所に委託した。分析結果は、金原明が執筆し、第VI章に掲載した。
- 13 遺構図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、有限会社不二出版に委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 14 本書の執筆は、石川智紀（埋文事業団 班長）、山下研（株式会社吉田建設 調査員）、日型祐輔（株式会社イビソク 調査員）があたり、編集は石川が担当した。執筆分担当は以下のとおりである。第1章、第2章は、過去の発掘調査報告書から引用・再編した。
第1章、第3章、第V章1・2A・2C・2E、第VII章…石川
第2章、第V章2B・2C・2D…山下
第IV章…石川・山下・日型
- 15 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力をいただいた。ここに記して厚くお礼を申し上げる。（敬称略 五十音順）
相羽 重徳 安藤 正美 川上 勇 川上 義人 寺田 喜男 水澤 幸一 山本 幸俊
上越市教育委員会 上越市米岡町内会

目 次

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	2
A 試掘確認調査	2
B 本発掘調査	4
3 調査体制	6
A 試掘確認調査	6
B 本発掘調査	6
4 整理作業と整理体制	7

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	8
2 歴史的環境	10
A 周辺遺跡の概要	10
B 周辺の水利環境	12

第Ⅲ章 調査の概要

1 グリッドの設定	13
2 基本層序	13

第Ⅳ章 遺 構

1 記述の方法と遺構の分類	15
A 基本方針	15
B 遺構番号の表記方法	15
C 遺構の形態分類	15
2 遺構各説	16
A 古代の遺構	16
B 掘立柱建物	16
C 井 戸	21
D 土 坑	30
E ビ ッ ト	32
F 溝	34
G 道路状遺構	37
H 用 水	39
I 性格不明遺構	41

第Ⅴ章 遺 物

1 概 要	42
2 遺物各説	43

A	土器・陶磁器	43
1)	中世以前の遺構から出土した中世以前の遺物	43
2)	近世以降の遺構から出土した中世以前の遺物	50
3)	遺構以外から出土した中世以前の遺物	51
4)	近世の陶器・瓦器	52
B	土製品	54
C	石器・石製品	54
D	木製品	55
E	銭貨	57

第VI章 自然科学分析

1	はじめに	58
2	放射性炭素年代測定	58
A	原理	58
B	試料と方法	58
C	測定結果	58
D	所見	59
3	樹種同定	59
A	原理	59
B	試料と方法	60
C	結果	60
D	所見	61
4	まとめ	62

第VII章 まとめ

《要約》	68
《引用・参考文献》	69
《観察表》	71

挿図目次

第1図	上越三和道路の予定路線と 調査遺跡の位置……………1	第8図	近代掘立柱建物平面図……………21
第2図	下割遺跡 試掘確認調査トレンチ位置図…3	第9図	須恵器 出土重量分布図……………44
第3図	下割遺跡 本調査必要範囲と2010・2011年度 (下割遺跡V・VI)発掘調査範囲……………3	第10図	土師器 出土重量分布図……………44
第4図	高田平野の地形分類図……………9	第11図	珠洲焼 出土重量分布図……………45
第5図	高田平野における古代・中世の遺跡分布…11	第12図	土師質土器 出土重量分布図……………45
第6図	下割遺跡V・VIの基本層序……………14	第13図	暦年校正結果……………59
第7図	遺構の形態分類図……………15	第14図	木製品顕微鏡写真……………63
		第15図	明治22(1889)年 諏訪村大字米岡更正図…67
		第16図	明治22年更正図と遺構配置図……………67

表目次

第1表	周辺の主要な遺跡……………10	第3表	測定試料及び処理……………58
第2表	遺構の形態分類表……………15	第4表	測定結果……………59

図版目次

【図 面】

図版1	下割遺跡全体図
図版2	調査前地形測量図
図版3	土塁壁断面図(1)
図版4	土塁壁断面図(2)
図版5	下割遺跡V・VI 遺構全体図
図版6	遺構分割図(1)
図版7	遺構個別図(1)
図版8	遺構個別図(2)
図版9	遺構個別図(3)
図版10	遺構個別図(4)
図版11	遺構分割図(2)
図版12	遺構個別図(5)
図版13	遺構分割図(3)
図版14	遺構個別図(6)
図版15	遺構分割図(4)
図版16	遺構個別図(7)
図版17	遺構個別図(8)
図版18	遺構個別図(9)
図版19	遺構分割図(5)
図版20	遺構個別図(10)
図版21	遺構個別図(11)
図版22	遺構個別図(12)
図版23	遺構分割図(6)
図版24	遺構個別図(13)
図版25	遺構分割図(7)
図版26	遺構個別図(14)
図版27	遺構個別図(15)

図版28	遺構個別図(16)
図版29	遺構個別図(17)
図版30	遺構分割図(8)
図版31	遺構個別図(18)
図版32	遺構個別図(19)
図版33	遺構個別図(20)
図版34	遺構個別図(21)
図版35	遺構分割図(9)
図版36	遺構個別図(22)
図版37	遺構個別図(23)
図版38	遺構出土土器・陶磁器(1)
図版39	遺構出土土器・陶磁器(2)
図版40	遺構出土土器・陶磁器(3)
図版41	遺構出土土器・陶磁器(4)
図版42	遺構出土土器・陶磁器(5)
図版43	遺構出土(6). 土塁出土. 遺構外出土(1) 土器・陶磁器
図版44	遺構外出土土器・陶磁器(2). 越中瀬戸焼(1)
図版45	越中瀬戸焼(2). 唐津焼. 瓦器. 越前焼(1)
図版46	越前焼(2)
図版47	土製品. 石製品(1)
図版48	石製品(2). 木製品(1)
図版49	木製品(2)
図版50	銭貨
【写 真】	
図版51	下割遺跡V・VIの位置
図版52	下割遺跡 東部全景
図版53	遺跡完掘状況(1)

- 図版54 遺跡遠景・遺跡完掘状況(2)
- 図版55 道路状遺構検出状況・調査前現況・土塁
- 図版56 掘立柱建物・基本層序
- 図版57 遺構個別写真(1)
- 図版58 遺構個別写真(2)
- 図版59 遺構個別写真(3)
- 図版60 遺構個別写真(4)
- 図版61 遺構個別写真(5)
- 図版62 遺構個別写真(6)
- 図版63 遺構個別写真(7)
- 図版64 遺構個別写真(8)
- 図版65 遺構個別写真(9)
- 図版66 遺構個別写真(10)
- 図版67 遺構個別写真(11)
- 図版68 遺構個別写真(12)
- 図版69 遺構個別写真(13)
- 図版70 遺構個別写真(14)
- 図版71 遺構個別写真(15)
- 図版72 遺構個別写真(16)
- 図版73 遺構個別写真(17)
- 図版74 遺構個別写真(18)
- 図版75 遺構個別写真(19)
- 図版76 遺構個別写真(20)
- 図版77 土器・陶磁器(1)
- 図版78 土器・陶磁器(2)
- 図版79 土器・陶磁器(3)
- 図版80 土器・陶磁器(4)
- 図版81 土器・陶磁器(5)
- 図版82 土器・陶磁器(6)
- 図版83 土器・陶磁器(7)
- 図版84 土製品・石器・石製品
- 図版85 木製品
- 図版86 銭貨

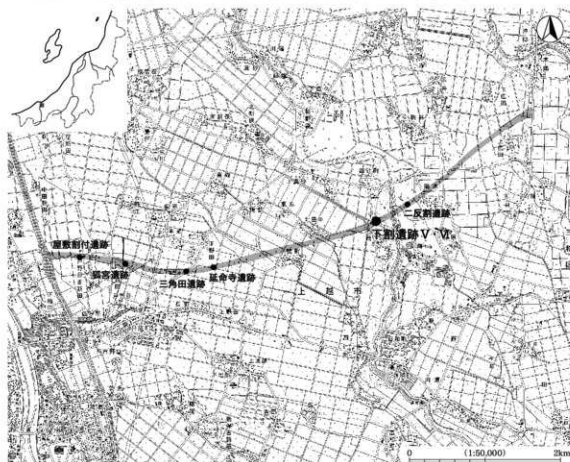
第I章 序 説

1 調査に至る経緯

上越魚沼地域振興快速道路(延長約60km)は上越市と南魚沼市を結び、両地方の交流を促進するとともに、高規格幹線道路の北陸自動車道と関越自動車道を合わせて、信頼性の高い循環型広域ネットワークを形成する地域高規格道路である。同道路の完成により上越～十日町～六日町間の通行時間は大幅に短縮され、日本海と首都圏を結ぶ最短経路となり、広域的な交流が活発になるものと期待される。

上越三和道路は、上越魚沼地域振興快速道路の一部で、上越市寺から同市三和区本郷までの7.4km区間の道路である。上越地方拠点都市地域内の連携強化を図り、地域の活性化を促進することを目的としている。同道路は1998(平成10)年度に整備区間に指定され、2000年度に都市計画道路に決定された。

これを受けて国交省は、県教委に計画予定地内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。県教委の委託を受けた埋文事業団は、2001(平成13)年4月18日～20日に計画予定地の上越市寺～同市三和区本郷の法線内を対象に分布調査を実施した。調査の結果、19か所から中世以前の遺物が収集されたため、ほぼ全域にわたり試掘確認調査を行い、遺跡の有無を確認する必要があると報告した。



第1図 上越三和道路の予定路線と調査遺跡の位置

【国土地理院発行「高田東部」1:25,000原図 平成19年発行】

2001年3月、国交省から試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、調査を埋文事業団に委託した。2002年3月、埋文事業団は上越市米岡地区にて調査を開始した。調査の結果、法線北側に隣接する周知の下割遺跡が計画予定地内に拡がることと判明した。この後、下割遺跡は2001～2003・2008・2010年度の試掘確認調査を経て、本発掘調査必要面積は94,827m²（上層55,327m²・中層25,500m²・下層14,000m²）となり、2002・2003・2008・2009年度に本発掘調査（下割遺跡Ⅰ～Ⅳ）を行った。

なお、2010（平成22）年度の本発掘調査（下割遺跡Ⅴ）は、2010年3月、国交省から調査を受託した県教委が、埋文事業団に実施を依頼した。調査区は下割遺跡の東端に位置し、「市道米岡上良砂線」の付替え工事に必要な範囲、約2,550m²（堂古遺跡分280m²含む）が対象となった。同年4月、埋文事業団は現況測量から調査を開始し、同年8月に調査を終了した。

2011（平成23）年度の本発掘調査（下割遺跡Ⅵ）は、2011年3月、国交省から調査を受託した県教委が、埋文事業団に実施を依頼した。調査区は下割遺跡Ⅴから遺構の延伸が確認された西側隣接区約2,800m²であり、埋文事業団は同年4月から調査を開始した。

2 調査の経過

A 試掘確認調査（第2・3図）

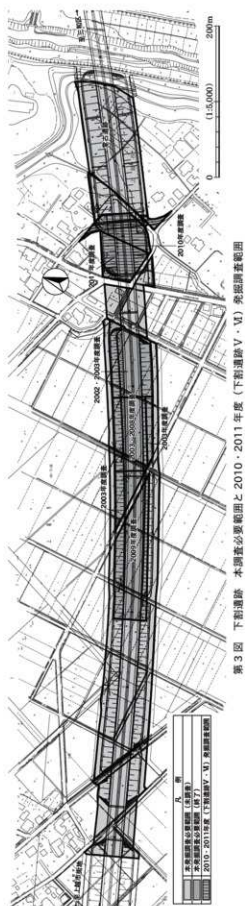
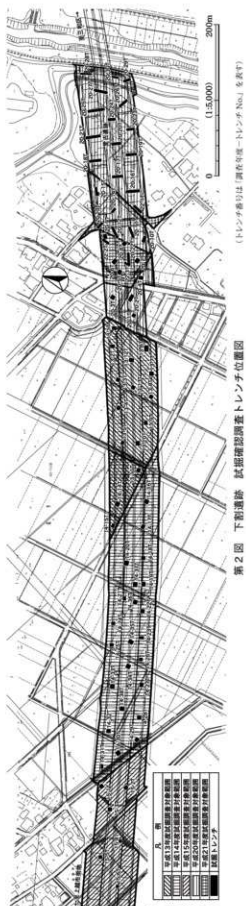
用地取得の関係や調査対象面積が広範囲に及ぶことなどから、2001～2003・2008・2010年度の5か年にわたり行われた。上層（古代・中世）、中層（古墳時代）、下層（縄文時代）の3層が確認されており、下層は深部に存在するため、上・中層の本発掘調査終了後に試掘確認調査を行った部分もある。トレンチは任意に設定し、重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無、土層堆積状況などを観察・記録した。

2001（平成13）年度

県教委から委託を受け、2002年3月4～8日に埋文事業団が実施した。調査対象範囲は市道米岡荒屋線の東側で、法線センター杭No.205～219間である。面積14,000m²に任意のトレンチを13か所設定した。調査の結果、上層（現地表下20～30cm）ではすべてのトレンチで古代～中世の遺物が出土し、多くのトレンチ（H13-3・4・6～8・11・12T）で遺構を検出した。また、中層（現地表下120～150cm）では、H13-1・2・4・6～10・13Tで古墳時代の遺物が出土した。このような状況から、調査対象範囲の東側13,000m²（上層6,500m²・中層6,500m²）を本発掘調査必要範囲とし、西側7,500m²は調査未了のため、再調査とした。

2002（平成14）年度

県教委から委託を受け、2002年4月15日～5月8日（1回目）、2002年10月7・8日（2回目）に埋文事業団が実施した。1回目の調査対象範囲は、2001年度調査未了範囲とその隣接地、法線センター杭No.190～210間である。面積24,150m²に任意のトレンチを25か所設定した。調査の結果、上層ではすべてのトレンチで遺物、または遺構が検出された。また、中層ではH14-27・28・33・34Tで古墳時代の遺物が出土した。さらに下層（現地表下380～420cm）では、H14-30・33～35Tで縄文時代後期の遺物が出土した。このような状況と昨年度の試掘確認調査結果を加味し、面積36,550m²（上層24,150m²・中層12,400m²）を本調査必要範囲とした。また、下層は深部のため十分な精査・観察ができな



かったことから、上・中層の本発掘調査終了後に試掘確認調査を行うこととした。

2 回目の試掘確認調査は、2001 年度に本発掘調査必要範囲とされた法線センター杭 No.209 ～ 219 間 (6,500m²) の下層を対象とした。上層の調査が終了した時点で 4 か所にトレンチを設定した。調査の結果、遺構・遺物は認められず、本発掘調査不要と判断した。

2003 (平成 15) 年度

県教委から委託を受け、2003 年 5 月 6 日～6 月 17 日、7 月 15 日に埋文事業団が実施した。調査対象範囲は下割遺跡以西の法線センター杭 No.70 ～ 190 間である。面積 167,000m² に任意のトレンチを 140 か所設定した。下割遺跡に関係するトレンチは H15-1 ～ 6T である。調査の結果、上層 (現地表下 20cm) では H15-1 ～ 4T で古代～中世の遺物が出土し、H15-1・3・4T で遺構を検出した。また、中層 (現地表下 30cm) では H15-1・3・4T で古墳時代・古代の遺物が出土した。下層 (現地表下 340cm) では土器は伴わないものの、H15-3T で径 20cm の柱根が出土した。このような状況から、面積 13,200m² (上層 6,600m²・中層 6,600m²) を下割遺跡の範囲拡大とした。下層は深部にあるため、上・中層の調査が終了後、再度、試掘確認調査を実施することとした。

2008 (平成 20) 年度

県教委から委託を受け、2008 年 8 月 27 ～ 29 日、11 月 17 ～ 21 日に埋文事業団が実施した。調査対象範囲は法線センター杭 No.219 から飯田川までである。面積 22,700m² に任意のトレンチを 30 か所設定した。調査の結果、遺構・遺物の検出層は上層の 1 面で、H20-1・2・8 ～ 10・15・17・19 ～ 21・23 ～ 30T から古代～中世の遺物が出土し、H20-1・2・4・10 ～ 16・19 ～ 21・23 ～ 27T で遺構を検出した。また、これらは法線センター杭 No.219 ～ 221、225 ～ 228、230 ～ 235 にまとまる傾向が見られた。このような状況から、調査対象範囲の西側 7,967m² は下割遺跡の範囲拡大として、東側 11,006m² を新発見の『堂古遺跡』として本発掘調査必要範囲とした。

2010 (平成 22) 年度

2010 年度の本発掘調査 (下割遺跡 V) の結果、中世以前の遺構群が 2008 年度試掘確認調査で「本発掘調査不要」と判断した範囲まで広がる可能性が出てきた。そこで本発掘調査終了後の 9 月 7・8 日に、任意のトレンチを 3 か所設定して調査した。その結果、中世以前の遺物は出土しなかったが、すべてのトレンチで中世～近世と考える遺構を検出した。よって対象範囲にも中世の集落が存在する可能性があることから、3,260m² を本発掘調査対象とした。

B 本発掘調査

1) 下割遺跡 V

2010 (平成 22) 年度の調査は、「下割遺跡 V」と称して、4 月 26 日～8 月 30 日の期間で実施した。調査対象となったのは、「市道米岡上真砂線」の付替え工事に必要な範囲約 2,550m² である。調査区は市道を挟んで、北区 (2,270m²) と南区 (280m²) に分かれる。市道から南側は堂古遺跡の範囲だが、下割遺跡 V として同時に調査を行った。

4 月上旬から事前準備を開始した。北区は土塁や濠によりほぼ方形 (南北約 70m、東西約 60m) に囲まれ、東側には鍵の手状の出入口もあり、中世の館のような景観を呈していた。このような土塁や濠で囲まれた屋敷地は、「環濠屋敷」と呼称され、その成立時期は中世後期から近世と考えられている。築造が中世の可能性も考慮し、掘削前に地形測量及び写真撮影することにした。4 月 26・27 日に地形測量を行い、下

草刈りや片付け・清掃をした後、5月10日に高所作業車による全体写真撮影を行った。

北区の写真撮影準備と並行して、南区の重機による表土掘削を5月6・7日に行った。近・現代の攪乱が多く、また遺物包含層相当層も検出できなかったことから、遺構確認面まで掘削を行った。掘削後に調査区壁面を清掃し、基本層序の把握に努めたが、良好な部分は残っていない状況であった。

5月11日から北区の表土掘削を開始した。調査区北西側から着手し、中世以前の遺物包含層も検出できたが、遺物が少ないことから、包含層も重機で慎重に掘削した。掘削が終了した範囲から順次、人力による調査区壁面の清掃と開渠掘削を行った。

土塁・濠の築造時期を判別するため、北側に2本、東側に1本のトレンチを設定し、5月11日から調査を行った。土塁の清掃と濠の掘削も同時に進め、5月18日に撮影した。調査の結果、盛土内に18世紀後半以降の陶磁器が含まれること、盛土以前の旧表土や、その下位に中世以前の遺物包含層が認められたことなどから、築造は近世以降と判断した。再度検討用に一部を残して、土塁も重機で掘削した。

表土及び包含層の掘削は、予想以上（盛土等）の土量があったこと、樹木や竹の根株が多かったことから大幅に遅れ、5月28日に終了した。5月31日に調査区内にグリッド杭を打設し、ベルコンも導入して本格的に遺構検出及び遺構掘削を開始した。調査区が南北に分かれることから、2班体制で作業を進行させた。両調査区ともに遺構検出面は1面であり、多くの遺構が検出されたが、土色・土質から時期（中世と近世）の判別は困難であった。近世以降の遺物が出土しないうちは、通常の手順で掘削し、判別できた時点でその遺構の取扱いを判断した。よって近世以降の遺構には、完掘したものと掘削途中で終了したものが混在する。検出できた遺構数は予想を上回り、切り合いも多くあった。また、根株の下にも遺構が存在し、人力で抜根する必要があったことから作業は難航した。規模の大きな溝や、井戸等はホソ等の大型道具を用いて掘削し、7月15日から順次、作業員を増員して対応するようにした。

図面の記録作業は、遺構断面図の作成は作業員が行い、遺構平面図は掘削が終了した範囲から順次、測量業者が電子平板で作成した。7月1日から8月27日まで延べ15日間作業した。

南区は6月29日に遺構掘削を終え、平面測量後の7月2日に作業を終了し、北区に合流した。

北区は、8月上旬に大部分の遺構の掘削が終了する目処が立ったことから、8月10日に全体清掃を行い、8月11日にラジコンヘリで空撮を行った。同日、一部の遺構の掘削は終了していなかったが、県教委から調査終了確認を受けた。その後、夏季休暇に入り、8月17日から作業を再開した。切り合い関係で新しい時期の遺構測量が終了した範囲から、古い時期の遺構掘削に着手した。

空撮が機械の故障で撮影されていないとの連絡を8月19日に受け、再空撮のための準備に移った。24日に遺跡全体の完掘写真を、ラジコンヘリと高所作業車で撮影した。25日には報道公開を行い、28日に現地説明会を開催して161名の参加があった。8月30日にすべての掘削作業を終了した。

その後、国交省の要望により、調査区の埋め戻し作業を8月31日から9月7日まで行った。9月7・8日に隣接地の確認調査を行い、9月10日に近隣住民に挨拶をして現地を撤収した。

2) 下割遺跡VI

2011（平成23）年度の調査は、「下割遺跡VI」と称して、4月12日～7月12日の期間で実施した。調査対象面積は2,800m²である。

4月12日から重機によって調査区内に残されたコンクリート片、木根の撤去・集積を行い、下割遺跡Vの調査で明治以降の構築と判断された土塁の除去も行った。4月15日には調査区西側の盛土を重機に

3 調査体制

よって除去し、調査区外周に開渠を掘削した。

4月22～27日に表土及び包含層の掘削を行った。調査区西半は水田耕作土直下が遺構検出面であったが、調査区東半では包含層が確認できた。遺物の出土量がわずかであることから、遺構検出面まで重機で掘削することとし、作業の効率化を図った。4月26日から作業員を使用して開渠壁面の整形を行い、4月28日にはメインベルトの整形、土層観察用のトレンチ掘削を終了した。

5月9日からベルトコンベアーを設置して、調査区西側から遺構検出を開始した。5月12日から遺構検出と並行して遺構発掘も行った。近世以降の用水路のほか、中世の井戸や溝などを確認した。5月19日には調査区西半の遺構検出が終了し、5月20日以降は西半の遺構発掘と、東半の遺構検出を並行して進めた。

6月20日に東半の遺構検出が終了し、下割遺跡Vから延長する道路状遺構や近世と考えられる用水路などを確認した。6月24日にはすべての遺構発掘が終了し、6月29日に空掘を行った。また、同日マスメディアに遺跡の共同公開を行った。6月30日に県教委から終了確認を受け、7月2日に現地説明会を開催した。125名の見学者が参加した。

7月12日には近世以降の用水路の杭を重機で引き抜き、年代測定用試料を採取して調査を終了した。その後、国交省の要望により調査区の埋め戻し作業を行い、7月19日に引渡して撤収した。

3 調査体制

下割遺跡の試掘確認調査及び本発掘調査は多年度にわたるため、ここでは下割遺跡V・VIに直接関係する調査体制を記述する。下割遺跡V・VIは法線センター杭No.222～227間に位置し、その範囲に係る試掘確認調査は、2008・2010年度に実施している。

A 試掘確認調査

調査期間	2008(平成20)年8月27～29日、11月17～21日	2010(平成22)年9月7・8日
調査主体	新潟県教育委員会(教育長 武藤克己)	新潟県教育委員会(教育長 武藤克己)
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村 正昭(事務局長)	木村 正昭(事務局長)
管理	斎藤 栄(総務課長)	今井 亘(総務課長)
応務	長谷川 靖(調査課班長)	伊藤 忍(総務課班長)
調査総括	藤巻 正信(調査課長)	藤巻 正信(調査課長)
調査担当	田海 義正(調査課課長代理)	石川 智紀(調査課班長)
調査員	品野 義昭(調査課主任調査員)	

B 本発掘調査

調査名称	下割遺跡V	下割遺跡VI
調査期間	2010(平成22)年4月26日～8月30日	2011(平成23)年4月12日～7月12日
調査主体	新潟県教育委員会(教育長 武藤克己)	新潟県教育委員会(教育長 武藤克己)
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村 正昭(事務局長)	木村 正昭(事務局長)
管理	今井 亘(総務課長)	今井 亘(総務課長)
応務	伊藤 忍(総務課班長)	伊藤 忍(総務課班長)
調査総括	藤巻 正信(調査課長)	北村 亮(調査課長)
指導	高橋 保雄(調査課課長代理)	
調査担当	石川 智紀(調査課班長)	高橋 保雄(調査課課長代理)
支援組織	株式会社イビソク	株式会社吉田建設
現場代理人	小林 史尚(文化財調査課主任)	洗木 宏人(埋蔵文化財調査課課長)
調査員	日聖 祐輔(文化財調査課調査員)	細井 佳治、山下 研、今井 昭俊 (以上、埋蔵文化財調査課調査員)

4 整理作業と整理体制

2010（平成22）年度は、図面の基礎整理、出土遺物の水洗・注記等を、調査現場（現地事務所）で本発掘調査と並行して行った。下割遺跡Vの調査終了後、9・10月には、株式会社イビソク新潟営業所（新潟市中央区）で、主に図面・写真整理、遺構図面の点検修正を行った。その後、12月から3月にかけて、株式会社吉田建設巻文化財整理室（新潟市西蒲区）で、遺構図面の整理、現地事務所所未了だった遺物の水洗・注記、原稿執筆等を行った。

2011（平成23）年度は、下割遺跡Vの整理作業を4月から埋文事業団（新潟市秋葉区）で行った。また下割遺跡VIの整理作業は、現地調査と並行しながら進めた。下割遺跡VIの出土遺物は、現地事務所6月から水洗・注記を行い、終了した時点で随時埋文事業団に搬送した。

埋文事業団では、4・5月に図面整理、6～8月に接合、8～12月に実測・拓本、11・12月にトレース、1月に写真撮影などの作業を中心に行った。下割遺跡VIの調査が終了した7月からは、株式会社吉田建設巻文化財整理室でも注記・実測・トレース・写真撮影の一部を行い、主に下割遺跡VIに関わる図面類の修正などを行った。原稿執筆・編集・校正は随時行い、平成24年3月に印刷・刊行した。

各年度の整理体制は以下のとおりである。

2010（平成22）年度

整理期間	2010年6月23日～2012年3月31日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村 正昭（事務局長）
管理	今井 亘（総務課長）
庶務	伊藤 忍（総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（調査課長）
指導	高橋 保雄（調査課課長代理）
整理担当	石川 智紀（調査課班長）
支援組織	株式会社イビソク（2010年9月13日～10月31日）
調査員	日置 祐輔（文化財調査課調査員）
整理作業員	石田 純子、横山 尚美
支援組織	株式会社吉田建設（2010年12月13日～2011年3月31日）
調査員	山下 研（埋蔵文化財調査部調査員）
整理作業員	岡 潤、柏木 裕子、鈴木ゆかり、中村美智子、矢部千栄子

2011（平成23）年度

整理期間	2011年4月1日～2012年3月30日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村 正昭（事務局長）
管理	今井 亘（総務課長）
庶務	伊藤 忍（総務課班長）
調査総括	北村 亮（調査課長）
指導	春日 真実（調査課課長代理）
整理担当	石川 智紀（調査課班長）
囑託員	小熊 紀子、宇塚 真弓
支援組織	株式会社吉田建設（2011年7月13日～2012年3月30日）
調査員	山下 研（埋蔵文化財調査部調査員）
整理作業員	矢部千栄子

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

下割遺跡は2002(平成14)年度から断続的に調査が行われており、遺跡の立地、地形・地質の特徴や、周辺地域の歴史概観はそれらの発掘調査報告書で詳述されている。そこで、ここでは『狐宮遺跡Ⅱ・下割遺跡Ⅳ』の「第Ⅱ章 1 地理的環境」[矢部 2011]と「第Ⅱ章 2 遺跡の分布と歴史的環境」[今井 2011]、『下割遺跡Ⅰ』の「第Ⅱ章 2B 周辺の水利環境」[山崎・外山ほか 2003]を一部改変して引用する。

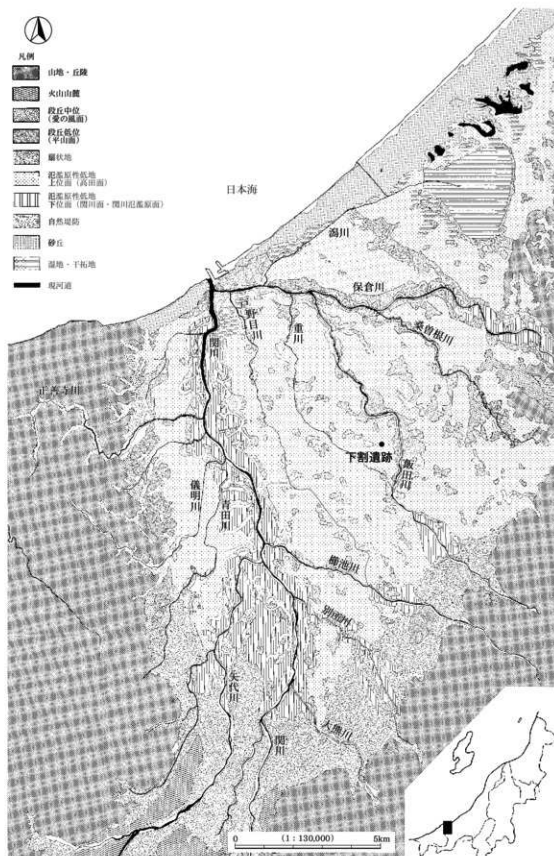
1 地理的環境

下割遺跡が立地する高田平野は、新潟県南西部に位置する沖積平野である。その形状は、上越市五智、同柿崎区竹鼻、同三和区岡田、妙高市小出雲付近を頂点とする不等辺四角形におおむねなっている。北辺は、長さ約20kmにわたり潟町砂丘が発達し、海岸と平野を区画している。東辺から南東辺には、東頸城丘陵が広がり、柏崎平野・越後平野・十日町盆地・長野盆地と高田平野を隔っている。東頸城丘陵北端には、米山を主峰とする米山山地、南東部には信越国境をなす関田山脈、南端には斑尾山がそびえている。西辺には西頸城丘陵が広がっている。この丘陵は、海岸に沿って西方に延び、糸魚川市の平野部と高田平野とを隔っている。西頸城丘陵南方には西頸城山地が連なり、その北端には青田難波山、南端には主峰の火打山(2,462m)がそびえている。さらに、その南には、富士火山帯の北端をなす、焼山(2,400m)及び妙高山(2,454m)の両火山がそびえ、平野南端は、妙高山の岩屑流、火砕流により形成された丘陵と接している。

平野には、これら周辺の山地・山脈、丘陵から多数の河川が流入している。平野最大の河川である関川は、火打山・妙高山及び長野県との境をなす高妻山・乙妻山の地域を水源とし、平野を西偏しながら北流し、日本海に注いでいる。途中、妙高山から白田切川・大田切川など、西頸城山地から矢代川・青田川など、西頸城丘陵から儀明川・正善寺川などが関川に合流する。また、東頸城丘陵や関田山脈からは、大熊川・別所川・柳池川・飯田川・保倉川などの中小河川が関川に合流する。平野の北東部では、東頸城丘陵・米山山地を水源とする吉川・大出口川・柿崎川などが平野に流れ出し、直接日本海に注いでいる。

北東部から南西部にかけて、関川や矢代川をはじめ、大熊川・別所川・柳池川・飯田川などにより形成された扇状地が発達している。

高田平野の地形面は階段状であり、最も低い関川氾濫原面・関川面、最も高い高田面の2段の沖積段丘を形成している。下割遺跡をのせる高田面は、主に礫・砂・シルトの互層からなる高田層によって形成された堆積面であり、その分布は平野の大部分を占める。平野の中央部において高田面の表層地質や珪藻遺骸について検討した結果、この地域にはかつて沼沢地のような環境が広がっていたことが明らかになった[高田平原団体グループ1962]。一方、関川面は、関川とその支流に沿って分布する氾濫原堆積物である関川層からなっている。平野に分布する遺跡の時代を検討した結果、高田面は古墳時代初頭から段丘化し始め、数回に及ぶ洪水性堆積物によって覆われながら平安時代には完全に段丘化したものと考えられている[高田平野団体研究グループ1981、岡本1999]。しかしながら、本遺跡から約3km西に位置する狐宮遺跡では、縄文時代の早創期の石器や縄文時代後・晩期の土器が出土したことにより、少なくとも縄文時代の後半には人々が居住し得る環境が整っていた可能性があり、高田面の形成年代について検討が



第4図 高田平野の地形分類図
 (【飯坂・高橋=2011】を一部改変の上転載)

必要であろう〔飯坂・桐原ほか2007〕。飯田川と関川の間には、小規模な自然堤防が点在し、その分布は、一定の方向性をもって配列している。その配列に従って灌漑水路が通り、戸野目川・重川のような小河川が流れているので、かつてはここに丘陵地から流れ出した川が流れていたのではないかと推察される〔高野2002〕。このような自然堤防上の微高地に、現集落が成立している。

2 歴史的環境

A 周辺遺跡の概要

下朝遺跡が立地する高田平野と、その周辺に広がる古代・中世の主な遺跡の分布は第5図に示すとおりである。この平野における古代の遺跡は、多くが各流域の自然堤防上や扇状地に位置する〔笹澤2003a〕。この自然堤防上や扇状地に立地する傾向は、城館跡を除く中世の遺跡にも同様に見られる〔戸根2003〕。

古代 頸城郡は、大宝2年(702)に古志・魚沼・蒲原の3郡とともに、越後国へ編入される以前は越中国に属していた。越後国に編入後、頸城郡に国府が設置されていたことが『和名類聚抄』に「国府在頸城郡」という形で記載されている。その所在は先学によって複数の推定地が存在している。1980～82年の発掘調査の結果、有力視されているのは関川右岸の段丘上に立地する今池遺跡(8)周辺の地域である〔相沢2004〕。この今池遺跡の周辺には、子安遺跡(9)、下新町遺跡(10)、本長者原廃寺(11)がある。今池遺跡は8世紀前半～9世紀前半の東西棟の掘立柱建物が多数検出され、円面硯・瓦片・近畿地方からの搬入土器が出土した〔坂井ほか1984〕。子安遺跡は今池遺跡の衰退後に遺構数が増加し、当地域の中核となる遺跡である〔坂井ほか1984、野村ほか2009〕。本長者原廃寺は南北に主軸を持つ基壇跡や、今池遺跡との位置関係などから国分寺跡と推定されている〔小島1984〕。また、頸城郡衙関連遺跡として有力視されているのは栗原遺跡(12)である。栗原遺跡は8世紀初頭～中葉の遺跡で関川と矢代川間の段丘上に立地する。周辺の同時期の遺跡に月岡遺跡(13)、倉田遺跡(14)、東沖遺跡(15)がある。栗原遺跡では基壇跡や大型の掘立柱建物が検出され、「郡」と記された墨書土器や帯金具が出土した〔坂井1982、高橋1984〕。倉田遺跡では倉庫と考えられる総柱建物が検出され、栗原遺跡出土の瓦片と同種の瓦片が出土したことから栗原遺跡と関連のある遺跡と推定されている〔高橋1997〕。

下朝遺跡周辺の8～9世紀代を中心とする遺跡は、狐宮遺跡(2)、三角田遺跡(3)、延命寺遺跡(4)、越前遺跡(6)などがある。三角田遺跡では8～9世紀にかけて集落が営まれ、それに伴う畑も検出された。自然堤防とその周縁において断続的に居住・生産活動が行われた遺跡と推定されている〔沢田ほか2006〕。延命寺遺跡では出芽・貝注罫・売券などの内容が記載された木簡が出土し、その中に現在の地名との関係が想定される言葉が記されているものもあった。また、一度使用した木簡を削り再利用していることや、

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	下朝遺跡	古墳～中世	10	下新町遺跡	弥生～古墳・古代	18	山畑遺跡	弥生・飛鳥	27	日向宮跡	奈良
2	狐宮遺跡	縄文～古代	11	本長者原廃寺	古代	19	若ノ原遺跡	平安	28	下長場古家跡群	古代
3	三角田遺跡	古代～近世	12	栗原遺跡	古代	20	種田遺跡	中世	29	滝寺古家跡群	古代
4	延命寺遺跡	古墳～古代	13	月岡遺跡	古代	21	水久保遺跡	中世	30	大貫古家跡群	古代
5	原敷里村遺跡	古代	14	倉田遺跡	奈良	22	柳田遺跡	古墳・中世	31	至徳寺跡	中世
6	越前遺跡	古代	15	東沖遺跡	平安	23	川宮寺遺跡	平安・中世	32	御籠跡	中世
7	横巻橋1遺跡	中世	16	一之口遺跡	古代	24	池田遺跡	平安・中世	33	安国寺跡	中世
8	今池遺跡	奈良・平安	17	八反田遺跡	古代	25	宮ノ本遺跡	古墳・中世			
9	子安遺跡	弥生～中世				26	木野宮跡	平安			

第1表 周辺の主要な遺跡



第5図 高田平野における古代・中世の遺跡分布

(国土地理院発行「高田平野東部」・「高田平野西部」・「静岡」1:50,000原図【施設・高橋=2011】を一部改変の上転載)

磨の使用などから官術の性格を持つ遺跡と推定されている[山崎^{ほか}2008]。越前遺跡では自然流路に沿って計画的に配置された遺構が検出され、遺物では律令祭祀具や大量の墨書土器が出土したことから公的機関、または富裕層が関わった遺跡と推定される[笹澤2003b]。

中世時代が中世に推移しても頸城地方には国府が依然として存在し、越後国の中心となっていた。その中枢は直江津であり、中世都市として発展する。この地域には守護所と考えられる至徳寺跡(31)、上杉氏の居館である御館跡(32)や安国寺跡(33)などが立地する[戸根2003]。一方、中世の集落遺跡は樋田遺跡(20)・水久保遺跡(21)・子安遺跡、平成14年度調査時の下割遺跡などがある。これらの集落遺跡は溝が建物群を区画し、複数の屋敷地が集合して集落を形成している。横曽根1遺跡(7)の場合は堀で区画されており、集落というより居館的性格を持つと考えられる[水澤2003]。仲田遺跡(22)や用言寺遺跡(23)も集落遺跡であり、どちらも中世前期から後期にわたる遺跡である。仲田遺跡[加藤^{ほか}2003]では集落の変遷を把握することができ、用言寺遺跡[加藤^{ほか}2006]では居住域と生産域が一体的に検出され、散村的な景観がうかがえる。

B 周辺の水利環境

下割遺跡VIから約50m西には下割遺跡Iが位置し、その調査区東縁は中江用水と接している。中江用水は、1674(延宝2)年～1678(延宝6)年にかけて高田城主松平光長の藩営事業として、江戸から河村瑞賢を顧問に招き、家老小栗美作が指揮を執って開発した用水と伝えられている。飯田川左岸末端の水利改善と新田開発を目的とした事業であるが、普請や水利の取り決めの度に米岡の肝煎の名も見える。しかし、この水路は昭和22(1947)年に米軍が撮影した空中写真では確認できない。大正8(1917)～昭和6(1931)年の県による飯田川改修工事の後、昭和19(1944)～28(1953)年にかけて県営中江用水改良事業が行われ、直線化した飯田川に平行する現在の水路が造られた。それを受けて昭和32(1957)年からは団体営による耕地整理事業が随時実施され、一帯は現在の景観になっている。明治29(1896)年の『中頸城郡諏訪村大字米岡更正地図』によれば、遺跡周辺の道路・水路は現在よりも多く、現存するものも現在とは若干ずれた位置を通っている。米岡集落在住の川上環氏によれば、この付近の水利権も県営事業以前は中江用水ではなく重川用水であったという。

重川用水は、中江用水開削以前からある飯田川左岸地域を灌漑する用水であり、古墳群のある上越市牧区(旧、東頸城郡牧村)宮口と北方の間から分岐する重川に水源を負っている。また、その重川そのものが用水路として開削され時間の経過とともに侵食が進んで自然流路のようになったという[池田1967]。1597(慶長2)年の「越後国頸城郡絵図」では「わうま川」(現、飯田川)から分岐する人工的な重川が見られ、その先に重川用水及び真砂堰(現、上真砂)が掲載されている。

「越後国頸城郡絵図」には米岡を含む周辺集落が現在の大字名のまま掲載されている。また、同絵図の記載によると、米岡の検地高534畝石は中江用水域52か村の中で2番目、本納高283畝石は3番目の高さを誇っており、隣接する鶴町も高い生産力(検地高874畝石は1番目、本納高277畝石は4番目)を示していることから、この付近の農業生産力が当時すでに相当高い水準にあったことがうかがえる。

海岸に向かってなだらかに傾斜していく飯田川左岸は、右岸に比べて水利のよい場所であり、扇状地扇端の水田開発とあまり時期を違わずに水田化が進んだ可能性もある。これら水田の成立時期の違いは水利権の優先順位と関連することが多いが、その関係を示す水争いの史料には未だ十分な考察が加えられていない。それら史料の整理が、遺跡調査の成果とともに飯田川水系の集落展開を検討する上で重要となろう。

第三章 調査の概要

1 グリッドの設定 (図版1)

下割遺跡 I～IVのグリッド方向と区割りは、国家座標軸 (日本測地系) と一致させてある。グリッドは大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドはそれを2m四方に25等分したものである。大グリッドの名称は、北東隅の杭を基点に東西方向 (東→西) を算用数字、南北方向 (北→南) をアルファベットとし、両者の組合せで表示している。また、小グリッドは1～25の算用数字で表し、北東隅を1、南西隅を25とし、「22L13」のように大グリッド表示の後に付けて呼称している。

今回の調査区は、2008年度確認調査で東側に拡大された範囲であり、過去と同一のグリッドを使用することも考えたが、東西方向・南北方向共にマイナス方向となるため断念した。そこで基本的な考えは踏襲しつつ、東側に隣接する堂古遺跡も含めた範囲で新たにグリッドを設定した。その結果、過去の調査の1A杭と今回設定した34P杭の位置は一致する。今回の調査区にあたる杭の座標値 (世界測地系に変換) は、21N杭 (X=125850.659, Y=-16180.952)、27N杭 (X=125850.658, Y=-16240.950) を示す。なお、21N杭の経緯度は、北緯37度08分03秒、東経138度19分04秒である。

2 基本層序 (第6図)

下割遺跡は遺跡の東側を北流する飯田川によって形成された左岸の沖積地に立地する。周辺の微地形は、飯田川に近い東部から南東部が高く、飯田川から離れた西部から北西部が低くなるが、傾斜自体は緩い。今回の調査範囲は、下割遺跡の東端で、標高14.4～14.8m前後の自然堤防上に位置する。現況は山林・荒蕪地・水田である。以下、基本土層をI～V層に大別したが、人為的な客土 (盛土・造成土等) は0層とした。集落内であり、また地形的に高所に位置するためか、後世の地形変化が多い。

0層: 基本層序のII～V層を主体とする土で、盛土や造成土を一括して本層とした。旧水田面を覆う造成土、屋敷地区画の造成土、土塁の盛土等があるが、その造成時期の特定は困難である。

I層: 褐色 (10YR4/6) ～暗褐色 (10YR3/3) 土 粘性なし、締りあり。現代表土層または水田耕作土。現代に近い水田耕作土をI a層、近世以降の水田耕作土と考えられるものをI b層とした。

I'層: 暗褐色 (10YR3/4) 土主体 粘性なし、締りあり。φ1～3cmの黄褐色土を斑状に少量、φ2～3mmの炭粒を含む。土塁の盛土層下に残存し、旧表土層と考える。

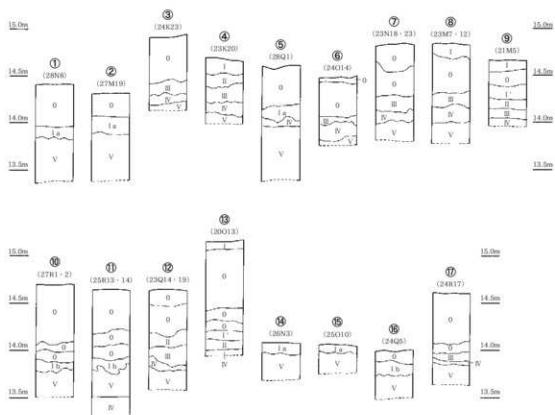
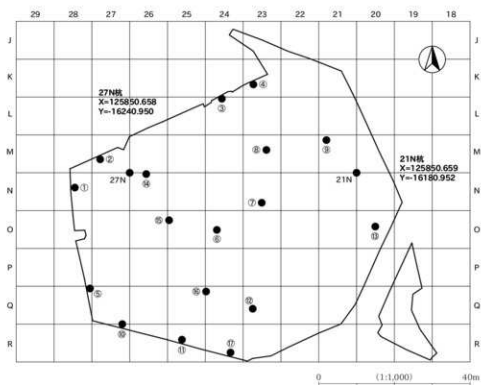
II層: 褐色 (10YR4/4) ～暗褐色 (10YR3/4) 土 粘性なし、締り強。炭粒微量含む。近世以降の遺物包含層。II層とIII層は色調が似ている場所も多く、掘削中は分別しにくかった。

III層: 黒褐色 (10YR3/2) ～暗褐色 (10YR3/4) 土 粘性なし、締り強。明黄褐色粒少量、φ1～2cmの炭粒含む。中世以前の遺物包含層。

IV層: にぶい黄褐色 (10YR5/4) ～黄褐色 (10YR5/6) 粘質シルト 粘性弱、締りあり。漸移層。古代の遺物を包含する地点もある。遺構検出面であるが、遺構の大半はV層上面で検出した。

V層: 明褐色 (7.5YR5/6) ～浅黄色 (2.5Y7/3) 粘質シルト 地山であり、遺構検出面。

2 基本層序



第6図 下割遺跡V・VIの基本層序

第IV章 遺 構

1 記述の方法と遺構の分類

A 基本方針

遺構の説明は、本文（遺構各説）・観察表・図面図版・写真図版を用いた。すべての遺構について種別・グリッド・出土遺物を記載した表を作成し、主要遺構や掲載遺物出土遺構について、規模等を記載した観察表を作成した。遺構の平面形状及び計測値は、遺構検出面での数値である。特に重要と思われる遺構について、本文・図面図版・写真図版での解説を加えた。写真図版は選択して掲載した。

B 遺構番号の表記方法

下割遺跡V・VIの遺構番号は、時代・グリッド・種別に関係なくすべて通し番号とし、遺構種別の後ろに番号を付した。なお、発掘調査の進行過程で、通し番号に欠番が生じたものもある。下割遺跡V（2010年度調査）の南区は1番から、北区は100番から始め、下割遺跡VI（2011年度調査）は1001番から順に番号を付した。ただし、掘立柱建物に関しては、調査年度に関係なく別途に1番から番号を付してある。

遺構種別は略称を用い、掘立柱建物を「SB」、井戸を「SE」、土坑を「SK」、溝を「SD」、ピットを「P」、性格不明遺構を「SX」とした。後世の変更が多い地区でもあり、明治以降の構築と思われる遺構については、捩乱の意で「KR」と称したものもある。

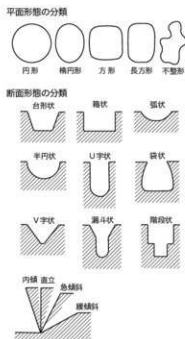
C 遺構の形態分類

遺構の平面及び断面形状の表記は、和泉A遺跡〔荒川・加藤^{ほか}1999〕の分類基準（第2表・第7図）に準拠した。

平面形の規模は長軸（最大長・径）を計っているが、部分的に極端な張り出しがある場合は、全体の形状を考慮して、残存率が高い位置で計測している。短軸は基本的に長軸と直交する方向の最長部で計測した。深度（深さ）は遺構検出面からの最深部を計測した。井戸と土坑の分類については、深度が長軸に比して1.2倍を超えるものを基本的に井戸としたが、埋土の堆積状況や遺物出土状況を考慮して井戸に分類したものもある。

平面形態	
円形	長径が短径の1.2倍未満のもの
楕円形	長径が短径の1.2倍以上のもの
方形	長軸が短軸の1.2倍未満のもの
長方形	長軸が短軸の1.2倍以上のもの
不整形	凸凹で一定の平面形をもたないもの
断面形態	
台形状	底部に平坦面をもち、緩やか～急角度に立ち上がるもの
箱状	底部に平坦面をもち、ほぼ垂直に立ち上がるもの
弧状	底部に平坦面をもたない弧状で、緩やかに立ち上がるもの
平円状	底部に平坦面をもたない筒状で、急角度に立ち上がるもの
U字状	確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの
筒状	確認面の径よりも底部の径が大きく、内相して立ち上がるもの
V字状	点的な底部をもち、急角度に立ち上がるもの
漏斗状	下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの
階段状	階段状の立ち上がりをもつもの

第2表 遺構の形態分類表



第7図 遺構の形態分類図

2 遺構各説

遺構は、掘立柱建物 18 棟、井戸 75 基、土坑 70 基、ビット 876 基、溝 63 条、性格不明遺構 16 基などを検出した。また 2 条の溝が平行する範囲を道路状遺構とし、1 基を検出した。いずれも基本層序 IV・V 層を検出面とする。古代に属する遺構は検出数も少ないので別個に記述した。中世以降の遺構は、埋土や形態に明確な区別ができず、帰属不明なものも多いことから、遺構種別 (SB→SE→SK→P→SD→その他)、遺構番号 (小→大) の順で記述した。時期が推測できるものは、本文中に記述した。

A 古代の遺構

古代の可能性のある溝を 2 条検出した。SD260 及び SD1070 で、確認できる範囲の切り合い関係ではすべての遺構よりも古い。2 条の溝はどちらもほぼ直線的に延びる。方位(走向)は SD260 が N-51°-W、SD1070 が N-42°-E を示し、その延長は 24L18 でほぼ直角に接する位置関係にある。

SD260 (図版 15・17～19・30・34・59～61)

調査区東端の 20O22 から 24L18 まで直線的に延び、北西端部は緩やかに立ち上る。検出した長さ約 52m、幅 0.9～1.9m を測り、深さ 22～78cm とばらつきがあるが、おおむね 50cm 前後である。断面形は、23M 以西では下部が幅の狭い半円状を呈し、上部が弧状、あるいは V 字状に大きく開く漏斗状を呈する。22M 以東でも部分的に中場を持ち、漏斗状を呈する部分もあるが、U 字状、または半円状を基本とする。埋土は黒褐色系が主体で、中世・近世の遺構埋土とは明確に異なる。出土遺物は少ないが、須恵器杯蓋 (1) などが出土したこと、中世・近世と考える溝の方位と符合しないことなどから、古代の遺構と推測した。

SD1070 (図版 11・12)

26O10 から 27O23 に位置し、南西端は用水 3 に切られる。直線状に延びる溝で、断面形は弧状を呈する。検出した長さ約 9.1m、幅 0.32～0.6m を測り、深さ 3～14cm である。埋土は V 層に近似するが、褐灰色、または灰白色粘土を含み、砂質が強い。出土遺物は無いが、古代の溝の可能性が高い SD260 と直交関係にあること、埋土が周辺の中世・近世の溝と異なることなどから、古代の遺構と推測した。

B 掘立柱建物

地形的に高所に位置する下割遺跡 V の範囲を中心に、柱穴と考える多数のビットを検出した。ビットからの出土遺物は少なく、構築時期は不明であるが、他の遺構から出土した遺物量の傾向は、近世が最も多く、次に中世のものが続く。さらに近・現代のものもある。中世以前の遺物のみが出土したビットで構成される建物は無く、大半は近世以降の建物の可能性がある。掘立柱建物を 18 棟図示したが、方位や深さを検討した上で、すべて図上による復元である。遺構の切り合いが多く、柱穴が既に失われている可能性もある。8 割以上のビットは関連が見出せなかった。

柱間の多い方向を「桁行」(長軸)、少ない方向を「梁間」(短軸)とした。観察表の桁行・梁間の規模は、基本的に数値の大きい面を優先し、床面積はそれに乗じたものである。またここでは、現代の規模と比較しやすくなるため、畳数 (1.8 × 0.9 = 1.62m²) にも換算して記述する。方位は桁行方向が、北を中心に東西に偏する角度で表した。柱間寸法は復元推定線上で、柱の中心と考える位置同士で測定を行った。なお、

平均値±σで数値を示したが、ここでは一般的な標準偏差ではなく、上限と下限を示している。

SB01 (図版 34・35・56・57)

19Q・R、20Qに位置する。遺構の北東部は調査区外となるが、現状では桁行4間(8.04m)、梁間2間(4.08m)の建物と推定する。桁行方向N-59°-Wの東西棟の側柱建物で、床面積は32.8m²(20.2畳)である。柱間寸法は、桁行南面が1.97±0.25m、梁間西面が2.04±0.02mとほぼ同じ平均値を示す。SB02と共有するP17から17世紀前半の近世陶磁器が出土しており、近世の建物と考える。

SB02 (図版 35・36・56・57)

19Q・Rに位置し、遺構の北東隅が現代の擾乱に切られる。現状では桁行3間(4.64m)、梁間1間(2.64m)の建物と推定する。桁行方向N-60°-Wの東西棟の側柱建物で、床面積は12.2m²(7.5畳)である。SB01と位置が重複しているが、新旧関係は不明である。桁行方向が同じなので建て替えの可能性もあるが、規模・構造は大きく異なる。桁行南面の柱は、東西の梁間に寄る形となっており、梁間寄り部が1.27±0.05mなのに対し、中央部は2.10mと広がっている。数値は異なるが、桁行北面も同様の傾向を示す。SB01と共有するP17から17世紀前半の近世陶磁器が出土しており、近世の建物と考える。

SB03 (図版 35・36・56)

19Q・Rに位置し、遺構の北東部が現代の擾乱に切れ、また調査区外に延びる。現状では桁行2間(4.06m)、梁間1間(3.76m)の、ほぼ方形の建物と推定する。桁行方向N-27°-Eの南北棟の建物であるが、梁間方向はN-63°-Wであり、SB01・SB02の軸向きと大差ない。床面積は15.3m²(9.4畳)である。SB01・SB02と重複しているが、新旧関係は不明である。両遺構に比べてピットの深さが全体的に浅いので、掘り込み面が上位であった可能性もある。桁行西面の柱間寸法は、南寄りがやや広いが、2.03±0.29mとその差は1尺以内に収まる。ピットから出土した遺物は無い。

SB04 (図版 6・7・56・57)

23J・Kに位置し、遺構の南西隅が調査区外にある。現状では桁行2間(5.86m)、梁間2間(3.94m)が身舎で、西面に1間(0.58m)の廂が付属する建物と推定する。この廂柱P106-P110の柱穴の深さは身舎よりわずかに浅い。桁行方向N-5°-Eの南北棟の建物で、全体の床面積は26.5m²(16.4畳)である。桁行方向が同じSB05と重複しているが、新旧関係は不明である。桁行東面の柱間寸法は、2.93±0.09mとほぼ等間隔である。梁間北面の中央の柱はほぼ中間に位置するが、南面はやや東寄りに位置する。これと対応するように、内柱P115が存在し、間仕切りされていた可能性がある。P114から古代の遺物が、P111から17世紀後半から18世紀前半の近世陶磁器が出土している。近世の建物の可能性が高いが、中世の溝SD180の方位とも大きく異なるものではないため、時期決定には慎重を要する。

SB05 (図版 6・7・56)

23J・Kに位置し、遺構の南西隅が調査区外にある。現状では桁行2間(5.88m)、梁間2間(4.10m)の総柱建物と推定する。桁行方向N-4°-Eの南北棟の建物で、全体の床面積は24.1m²(14.9畳)である。SB04が廂を持つ以外は、ほぼ同規模であり、建て替えの可能性が高い。柱間寸法は桁行東面が2.94±0.08m、梁間北面が2.05±0.17mで、ほぼ中間点に柱が位置する。梁間北面の中央の柱P112で2つの落ち込み(P112東、P112西)を検出した。このP112西と身舎中央の柱P303を通したラインが、梁間南面のP1115と対応する。P1115の東側にはP1116が隣接するが、これはP112西とP112東の位置関係と似る。建て替えて位置をずらした可能性とは別に、柱の補強のため当初から2本を1組としていた構造も考えておきたい。これと類似する構造はSB09にも認められ、時代は大きく異なるが、後述

する近代掘立柱建物でも認められる。

SB06 (図版 6・8・56・57)

22J・Kに位置し、遺構の北側が調査区外にある。現状では桁行2間(5.14m)以上、梁間2間(4.30m)の建物である。桁行方向N-2°-Eの南北棟の建物で、現段階での床面積は22.1m²(13.6畳)である。柱間寸法は桁行西面が2.57±0.07m、梁間南面が2.15±0.09mである。桁行東面の柱は南寄りに位置する。同じ南北棟のSB04・SB05の柱間寸法と比較すると梁間は同じだが、桁行は狭い傾向にある。桁行が北側に延びる可能性もあるが、建物面積は現段階でもほぼ等しいため、2間×2間の建物かもしれない。

SB07 (図版 6・8・56)

22J・Kに位置する。周辺の建物が南北方向に桁行を持つため、同様に南北棟の建物と考える。北側に延びるものと推測するが、北西側の柱の推定位置が、SE123に切られているため不明である。現状では桁行1間(5.14m)以上、梁間1間(4.30m)の側柱建物で、床面積は6.8m²(4.2畳)以上である。桁行方向は推定N-1°-Eで、柱間寸法は桁行西面が2.80m、桁行東面が2.68mと差は少ない。梁間南面が4.02mと広いが、ほかに梁間1間の建物SB09も4.16mとほぼ同規模なので、規格性をうかがわせる。

SB08 (図版 6・9・56・57)

21・22Kに位置し、遺構の北側が調査区外にある。現状では桁行3間(6.44m)以上、梁間2間(3.82m)の建物である。桁行方向N-7°-Eの南北棟の建物で、床面積は24.6m²(15.2畳)以上である。桁行西面P165-SK160間のほぼ中央に根株があり調査できなかったが、対面の東面にP174が存在することから、桁行は3間以上と見てほぼ間違いがない。柱間寸法は桁行東面で2.22±0.02mで、P165-SK160間の中間点が2.12mであることから妥当と考える。また、梁間南面が1.91±0.03m、間仕切りの中面(D-D')が1.90±0mなので、規格性の高さがうかがえる建物である。遺物が出土したピットはないが、南東端のP178が中世の土坑(SK340)を切っていることから、それよりも新しい時期の建物である。

SB09 (図版 19・21・58)

20・21Lに位置し、遺構の北東側が調査区外にある。現状では桁行2間(6.56m)以上、梁間1間(4.16m)の建物である。桁行方向N-22°-Eの南北棟の建物で、床面積は27.3m²(16.9畳)以上である。桁行西面のP216-P277間と東面のP225南-P284間は、明治以降の掘削である濠によって分断される。柱間寸法から推測すると、当該位置にピットが存在した可能性は高い。この建物で注目されるのは、桁行のライン状に並ぶ、2基1組の配置である。西面P215-P216(0.68m)と東面P225北-P225南(0.70m)が対応し、西面P277-P276(0.96m)と東面P284-P286(0.94m)が対応関係にある。柱の補強目的や床束柱などが考えられる。中世の溝SD180やSD267と方位がほぼ一致しているが、P215から17世紀後半～18世紀前半の近世陶磁器が出土しているため、近世の建物である。

SB10 (図版 15・16)

22・23Lに位置し、南西隅が時期不明のSK250に切られる。桁行2間(4.58m)、梁間2間(3.26m)の建物である。桁行方向N-3°-Eの南北棟の建物で、床面積は14.9m²(9.2畳)である。柱間寸法は桁行東面が2.29±0.09m、梁間北面が1.63±0.09mである。桁行、梁間共に、中央の柱が両端の隅柱に比べて深さが浅い。

SB11 (図版 15・16・56)

22Nに位置し、中世の溝にかかる部分も多く、全体的な形状は不明である。現状では桁行3間(5.98m)以内、梁間2間(3.64m)の側柱建物である。桁行方向N-70°-Wの東西棟の建物で、床面積は21.8m²(13.5

登)以内である。柱間寸法は桁行北面が $1.99 \pm 0.01\text{m}$ とほぼ等間隔で、梁間西面が $1.82 \pm 0.10\text{m}$ である。北面 P322 に相対する位置 (南東隅部) を精査したが、ピットは検出できなかった。また、北面 P320 に相対する位置も溝 SD269 が存在したため不明だが、この建物は 2×2 間であった可能性も残す。

SB12 (図版 19・20・56・58)

21・22N・O に位置する。地形的に高所に位置し、最も地形改変 (削平) が多い場所でもあったので、既に関連するピットが湮滅した可能性もある。現状では桁行 5 間 (10.36m)、梁間 2 間 (5.34m) が身舎で、西面に 1 間 (0.86m) の廂が付属する建物と推定する。規模は異なるが、SB04 と同様の構造をとる。また、西側中央には、廂部を跨ぐように、桁行と方向を同じくする $2 \text{間} \times 1 \text{間}$ (P932・P868・P843・P874・P926) の施設が認められる。桁行方向 N-22°-E の南北棟の建物で、床面積は 64.2m^2 (39.6 畳) である。柱間寸法は桁行西面 (廂部 B-B' で計測) で P333-P878 西間が 3.20m と広いほかは、P878 西-P833 間が $1.79 \pm 0.15\text{m}$ と現代の 1 間 (1.8m) の寸法にほぼ近い。また、廂部を除いた梁間北面が $2.67 \pm 0.07\text{m}$ 、梁間南面が $2.67 \pm 0.11\text{m}$ で、現代の 1.5 間 (2.7m) にほぼ相当する。

間仕切りと考えられる中柱も幾つか認められた。しかし数も少なく、その構造は現段階では不明である。西側のピットに特徴的に見られたのが、P878 東-西-P870 東-西-P792-P793-P833-P791 のように、一つの掘形に対して 2 本の柱が据えられる点である。いずれも梁間方向に長軸を持つ。また東面の P351 と P759 を見ると、柱痕跡は 1 本しか確認できなかったが、柱掘形は同様の規模・形状を呈する。今後同様の遺構が検出された場合、掘立柱建物を復元する際の指標となる。西側に認められた $2 \text{間} \times 1 \text{間}$ の施設は、出入口に関する施設の可能性があるが、北西方向に向いているため、冬場の天候を考慮した場合は不向きと考える。

遺物は P351・431・759・792・793・874 から近世陶磁器が出土した。時期の判別できるものでは、P351 から 17 世紀後半～18 世紀前半、P759 から 18 世紀末～19 世紀初頭、P792 から 17 世紀前半が出土しているため、建物の時期は江戸時代後期以降と考えたい。

SB13 (図版 30・31・56・58)

21・22O・P に位置する。身舎内部が大型の遺構と切り合っているため、不明な点が多い。推定される桁行 3 間 (6.78m)、梁間 1～2 間 (4.94m) で、南東側に幅狭の間仕切りが付く。桁行方向 N-66°-W の南北棟の建物で、床面積は 33.5m^2 (20.7 畳) である。柱間寸法は桁行南面が $2.26 \pm 0.30\text{m}$ 、梁間西面が 4.94m である。梁間の間に柱が存在すると仮定すれば、中間は 2.47m の位置にあり、桁行の柱間寸法とも符合する。北面の SK758 は、柱痕が確認できなかったために土坑に分類したが、SB12 のように梁間方向に長軸を持つ柱掘形の構造と類似する。遺物は、P563 から 17 世紀後半～18 世紀前半の近世陶磁器が、P761 から中世～近世の瓦器片が出土している。

SB14 (図版 30・32)

21・22Q、22R に位置し、遺構の南東側が調査区外にある。現状では桁行 3 間 (5.62m) 以上、梁間 2 間 (3.12m) 以上の建物の西側に、桁行 2 間 (6.56m)、梁間 1 間 (1.56m) の幅狭の施設が付属する建物と考える。桁行方向 N-79°-W の南北棟の建物で、わかる範囲での床面積合計は 27.8m^2 (17.2 畳) 以上である。これと構造が共通するほかの掘立柱建物は無い。桁行方向が周辺にある近世の溝と同じ方向であることや、P472 から 17 世紀前半の近世陶磁器が出土しているため、近世の建物と考える。

SB15 (図版 25・26)

23Q に位置し、南西側がほかの遺構に切られる。桁行 4 間 (3.90m)、梁間 2 間 (2.54m)、桁行方向 N

-77°-Wの東西棟の建物で、床面積は9.9m²(6.1畳)と小型である。桁行北面の柱間寸法は、中央のP718を中心に左右対象であり、P733-P718-P719間が1.14mと等しく、東側梁間寄りP732-P733間が0.76m、西側梁間寄りP719-P720間が0.86mとなっている。しかし、桁行南面にそのような一定の規格性は見出せず、梁間東面についても同様である。柱掘形の規模も小さく、住居よりは小屋的な機能が想定される。

SB16 (図版25・26)

23Qに位置する。桁行2～4間(4.14m)、梁間1～3間(3.20m)、桁行方向N-85°-Wの東西棟の建物で、床面積は13.2m²(8.1畳)と小型である。柱間寸法は、桁行北面(4間)で1.01±0.17m、桁行南面(2間)で2.07±0.05mとなる。梁間西面の柱は桁行寄りに位置している。SB15同様に、柱掘形の規模も小さく、住居よりは小屋的な機能が想定される。P650から18世紀～19世紀前半ころの近世陶磁器が出土した。

SB17 (図版25・26・58)

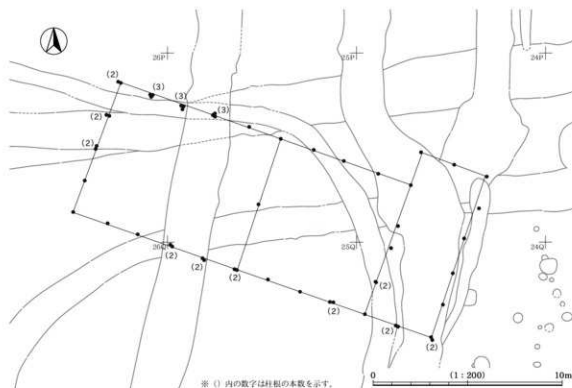
23Qに位置する。桁行1間(4.24m)、梁間1間(1.98m)、桁行方向N-78°-Wの東西棟の建物で、床面積は8.4m²(5.2畳)と今回復元した建物の中で最も小型である。4基のピットは深さも0.75±0.15mと十分にあるため、関連するピットが無いか丹念に検討したが、認識することはできなかった。

SB18 (図版25・27・58)

23Qに位置する。南東隅をSE622と切り合い、SB16・SB17と重複するが、それぞれの新旧関係は不明である。桁行2間(3.68m)、梁間1間(3.54m)とほぼ方形を呈し、桁行方向N-13°-Eの南北棟ではあるが、梁間方向がN-77°-Wなので、SB15～17と軸向きは大差ない。床面積は13.0m²(8.0畳)で、桁行西面の柱間寸法は1.84±0.02mである。P650はSB16と共有するが、18世紀～19世紀前半ころの近世陶磁器が出土している。

近代掘立柱建物 (第8図、図版76)

24P・Q～26Pに位置する。桁行9間(16.28m)、梁間4間(7.29m)の東西棟の東側に、桁行5間(8.2m)、梁間2間(3.7m)の南北棟が付随するもので、平面形は北東隅が1間分張り出したL字状を呈する。東西棟の中央には柱根が1点確認でき、間仕切りと考えられる。柱間寸法は1.7～1.9mで、総面積は149.02m²である。表土及び包含層を除去した時点ですべての柱根が立った状態で確認できた。用水1や用水2の埋没後に構築されたことが明らかであったことから個別に断面などの記録はしていない。第8図のドットは検出面上で確認した柱根の上端中央を示す。柱筋から外れるものは、傾いた柱根の上端を測点としたため、本来の位置を示さない可能性が高い。柱根はすべて下端を杭状に加工し、検出面から2～3m程度打ち込まれている。また、柱根の周囲には拳～指先大の礫が認められた。これらの礫は検出面から約10～20cmの深さまでしか確認できないことから、柱を立てる際にある程度穴を掘ってから柱を打ち込み、根固めとしてすき間に詰められたものと推測できよう。柱は通常単独で打ち込まれるが、本遺構では同一か所に2本、ないし3本の柱根が1組となるものがある。その配置を見ると、規則性が認められないことから建物の高さを増すなどの理由は考えにくい。中世や近世以降の溝と重複する位置に比較的多いが、そうした部分は周囲より地盤が軟弱であった可能性がろう。複数打設することで、柱をさらに強固に固定しようとしたものと推測する。柱根は直径11～19cm、断面円形を呈するもので、いずれも樹皮を取り去った丸木である。調査終了後に重機ですべての柱根を引き抜いたところ、約90cmを一単位とする線状の刻みが認められるものがあつた。柱材の長さを示すもの、あるいは打ち込む深度の



第 8 図 近代掘立柱建物平面図

目安と考えられる。

本遺構は用水 2 の埋没後に構築されたものであるから、明治時代以降の建物といえる。1946 年の米軍が撮影した空中写真（図版 61）には、同位置に規模や方位がほぼ一致する建物が確認できることから、昭和の中ころに機能した建物の可能性がある。

C 井 戸

下割遺跡 V の範囲で 56 基、下割遺跡 VI の範囲で 19 基の井戸を検出した。すべて平面形が円形または楕円形を呈する素掘りの井戸で、井戸側などの施設を持つものは無い。时期的には中世～近世、あるいはそれ以降に構築された井戸があるが、出土遺物がないものも多く、埋土の観察だけで帰属時期を決定することはできなかった。中世以前の可能性が高いもの 21 基、近世の可能性が高いもの 19 基、近代以降のもの 2 基、帰属時期不明のもの 33 基を検出した。

SE5（図版 35・36・64）

19Q20・25 に位置し、SD4 の埋土掘削後に検出した。1 層は SD4 の埋土より濃色であるのに、その時点まで検出できなかったことから、SD4 より古い時期の遺構である。平面形が長軸約 105cm の円形を呈する素掘りの井戸で、深さ 214cm を測る。掘削は底面の締りが強くなった時点で終了したが、底面状況は湧水が多く確認できなかった。埋土上層は中央がやや窪むが水平に近い堆積で、ブロック状の土も認められないことから、自然堆積と考える。須恵器長頸壺の把手 (3) が 2 層から出土しているが、周辺の状況から中世の遺構である可能性が高い。

SE25（図版 35・36・64）

19Q10・15 に位置し、平面形が楕円形を呈する素掘りの井戸で、深さ 169cm を測る。長軸 166cm

であるが、径約 110cm の円形の井戸部の南半に、10cm 弱の浅い掘り込みが巡る形状を呈している。掘り込み面がもっと上位と仮定すると、この浅い掘り込みは掘形部の底面が残存した可能性もある。埋土は上半と下半で堆積が異なり、上位には縦方向の層境が認められる。地山と近似した土が大半を占めることから、下半埋没後に人為的に埋め戻されたものとする。6 層から土師器長甕片、9 層中から 17 世紀前半ころの越中瀬戸焼壺 (143) が出土した。

SE30 (図版 35・36・64)

19Q14 に位置する、平面形が円形の素掘りの井戸である。深さ 155cm を測るが、長軸 62cm と小型である。埋土 1・2 層は暗褐色が主体だが、地山近似のブロックが多く認められるので、下位埋没後に人為的に埋められた可能性もある。土器類は出土せず、最下層付近で下駄 (195) などが出土した。

SE39 (図版 35・36・64)

19Q15 に位置する、平面形が円形の素掘りの井戸である。長軸 65cm、深さ 168cm で、SE30 と同様に小型であるが、埋土は下層まで地山近似の土が主体となり、人為的な埋土と考える。埋土 4・5 層から古代の土師器椀片と 17 世紀後半～ 18 世紀前半ころの近世陶磁器が出土した。

SE40 (図版 35・37・64)

19P3・8 に位置し、東半は調査区外にかかる。素掘りの井戸で、深さ 109cm まで掘削したが、底面とは考えられず、中央部は調査区外に存在する。出土遺物は無く、壁面で掘り込み面を観察したが、基本層序Ⅱ・Ⅲ層が無かったために構築時期は不明である。埋土 1・2 層は地山近似の土を含み、層境が南方向で斜位になっていることから、南からの流れ込みまたは投げ込みにより堆積したものとする。

SE59 (図版 35)

19Q14 に位置し、東半を明治以降の遺物が出土した SE または SX60 に切られる。平面形状は円形に近く、壁面は直立に近い。調査区外が崩落する可能性もあることから、深さ 60cm で掘削を終了したが、湧水は多くあった。近世後期と考える越前焼の甕の口縁部 (160) が出土した。

SE61 (図版 35・37・64)

19Q5 に位置する、長軸 70cm 前後の円形を呈する素掘りの井戸で、深さ 116cm である。暗褐色を主体とした均質な土がほぼ水平に堆積する。1 層から土師器椀片が出土しているが、混入の可能性も高く、構築時期は不明である。

SE62 (図版 35・37・64)

19P24・19Q4 に位置する、平面形が楕円形を呈する素掘りの井戸である。長軸 77cm、深さ 133cm で、埋土上層は地山近似の土を層状に多く含むことから、人為的に埋め戻された井戸と考える。出土遺物は無く、構築時期は不明である。

SE65 (図版 35・37・65)

19Q4・5・9・10 に位置する、平面形が円形を呈する素掘りの井戸である。SK70 に切られる。長軸 125cm、深さ 124cm で、埋土 1～3 層は地山近似の土を含み、層境が西方向で斜位になっていることから、西からの流れ込みまたは投げ込みにより堆積したものとする。下層から越中瀬戸焼の皿 (142) や広口壺 (144～146) と一緒に、17 世紀後半～ 18 世紀前半ころの近世陶磁器も出土しているため、構築時期は近世である。

SE66 (図版 35・37・65)

19P23・19Q3 に位置する、平面形が楕円形を呈する素掘りの井戸である。長軸 94cm、深さ 91cm で、

埋土は地山近似の土を多く含む。出土遺物は須恵器のみで、無台杯(4)が包含層出土の破片と接合した。長頸壺(5)は基本層序IV層から出土したものが大半で、井戸から出土したものは小片である。構築時期は古代の可能性が残すが、周辺の遺構の状況と合わせて考えると、さかのぼっても中世であろう。

SE77 (図版35・37・65)

調査区際の19Q3に位置する。近世の遺構SK70と近代の遺構KR67に切られるが、平面形が円形を呈する素掘りの井戸である。長軸94cm、掘削できた深さ110cmで、埋土は水平堆積に近く、地山近似の土も多い。出土遺物は無く、構築時期は不明である。

SE78 (図版35・37・65)

19Q4・9に位置し、近世の遺構SK70の埋土掘削後に検出した。平面形が長軸約71cmの円形を呈する素掘りの井戸で、検出面であるSK70の底面からの深さは88cmを測る。珠洲焼甕の体部片(90)と一緒に17世紀後半～18世紀前半ころの近世陶磁器も出土しているため、構築時期は近世である。

SE79 (図版35・37・65)

19Q3・4に位置し、近世の遺構SK70の埋土掘削後に検出した。平面形が長軸約98cmの円形を呈する素掘りの井戸で、検出面であるSK70の底面からの深さは167cmを測る。埋土1層は地山近似の土であり、埋め戻しの可能性が高い。近接するSE78と同様に、17世紀後半～18世紀前半ころの近世陶磁器が出土しているが、その新旧関係は不明である。

SE123 (図版6・8・66)

22J25に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸110cm、短軸90cm、深さ122cmを測る。断面形は箱状を呈し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は灰黄褐色土、黒褐色土を基本として8層に分かれ、上層は斜位に、下層は水平に堆積する。また、上層に灰色、灰黄色のブロックを含む。遺物は出土していない。

SE125 (図版6・9・66)

22K8に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸88cm、短軸76cm、深さ125cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁は垂直に立ち上がる。埋土は黄褐色土を基本に9層に分かれ、上層に黄褐色ブロックを含む。遺物は出土していない。

SE135 (図版6・10・66)

22K19に位置する。平面形は円形を呈し、長軸102cm、深さ154cmを測る。断面はU字状を呈し、側壁はやや内湾気味に立ち上がる。埋土は灰黄褐色土を基本に8層に分かれ、上層に黄褐色ブロックを含む。中層位から青磁(6)・珠洲焼(7)、最下層から砥石(175)と銭貨の紹聖元寶(230)が出土している。出土遺物から中世の遺構と考える。

SE142 (図版6・10・66)

22K15に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸180cm、短軸108cm、深さ146cmを測る。断面は箱状を呈し、上半部が外側へ開きながら立ち上がり、下半部は垂直に立ち上がる。埋土は黄褐色土を基本に9層に分かれ、上半層に黄褐色ブロックを含む。遺物は底部から10～20cm上で、板状木製品(196)が出土しているが、時期は不明である。

SE261 (図版15・16・66)

22M19・20に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸120cm、短軸110cm、深さ170cmを測る。埋土は下層の締りが緩く、半割中に崩落したため記録できなかった。断面は箱状を呈し、側壁は外側へ緩

やかに開きながら立ち上がる。埋土は褐色土を基本とし、中層から下層にかけて拳大礫を含む。検出面から30～40cm下で珠洲焼鉢(19)が出土しているが、これと同一個体の可能性がある破片が、SD180・SD269・SD500・SD695・SE937・SD938と広範囲に散在していた。出土遺物から中世の遺構と考える。

SE281 (図版19・21・66)

21M17・22に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸103cm、短軸94cm、深さ123cmを測る。断面は漏斗状を呈し、側壁は外側へ開きながら立ち上がる。埋土は灰色土を基本に4層に分かれ、下層に黄褐色ブロックを含む。遺物は出土していない。

SE300 (図版6・10・66)

21K8・9に位置する。遺構の北半分は調査区外へ延びており、検出状況から見て、平面形は隅丸方形を呈すと思われる。長軸270cm、深さ198cmを測る。断面形は漏斗状を呈し、側壁は外方へ緩やかに開きながら立ち上がる。埋土は黄褐色土、青灰色土を中心に10層に分かれ、上層に黄褐色ブロックを含む。遺物は上層から珠洲焼鉢が出土している。出土遺物から中世の遺構と考える。中世の溝SD180と切り合い関係を持つが、それより新しい。

SE304 (図版6・10・66)

21L5に位置し、SD180の埋土掘削後の底面で検出した。埋土の上面の色調はSD180と似ており、新旧関係はとらえられなかった。平面形は円形を呈し、長軸70～76cm、深さ72cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁は外方へ緩やかに開きながら立ち上がる。埋土は褐色土を基本に8層に分かれ、全体的に灰・褐・黄褐色ブロックを含む。遺物は中層から珠洲焼鉢(20)、磨石(174)が出土している。出土遺物から中世の遺構と考える。

SE352 (図版19・21・67)

21N5に位置する。平面形は円形を呈し、長軸86～92cm、深さ213cmを測る。断面は箱状を呈し、外壁はほぼ垂直に立ち上がる。下層に拳大礫を含み、割れた石臼(192・193)も含まれていた。ほかに、中～下層位から近世陶磁器、須恵器が少量、漆器碗(200・201)、部材(202・203)などが出土した。

SE391 (図版19・21・67)

21N11に位置する。平面形は円形を呈し、長軸75～78cm、深さ177cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁は垂直に立ち上がる。埋土は黄褐色土を基本に3層に分かれ、上層に灰・黄褐色ブロックを含む。下層は粘性の強い灰色土が厚く堆積する。遺物は出土していない。

SE396 (図版19・22・67)

20N15に位置する。平面形は円形を呈し、長軸84～92cm、深さ170cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黄褐色土を基本に4層に分かれ、上層に灰色ブロックを含む。下層は粘性の強い青灰色土が厚く堆積する。土器類は出土しなかったが、底部から自然木や板状木製品(197)が出土している。

SE397 (図版19・22・67)

20N14・15に位置する。平面形は円形を呈し、長軸91cm、深さ176cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黄褐色土を基本に6層に分かれ、全体的に黄褐色ブロックを含む。下層は粘性の強い灰色土が厚く堆積する。遺物は上層から近世陶磁器が出土している。

SE401 (図版19・22・67)

21N16・21に位置する。平面形は長方形を呈し、長軸120cm、短軸88cm、深さ112cmを測る。断面は台形状を呈し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は黄褐色土を基本とし、上層に灰色・黄褐色ブロックを含む。下層には粘性の強い黄灰色土、灰白色土が堆積する。遺物は上層位から近世陶磁器が出土している。また、SD403と切り合い関係を持ち、それより古い。

SE410 (図版19・22)

20N24に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸140cm、短軸100cm、深さ139cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は褐色土を基本に5層に分かれ、全体的に灰色ブロックを含む。遺物は上層位から近世陶磁器が出土している。また、SE441と切り合い関係を持ち、それより新しい。

SE433 (図版19・22・67)

21N9・14に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸80cm、短軸70cm、深さ143cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は褐色土、黄褐色土を基本に5層に分かれ、褐色・灰色・黄褐色ブロックを含む。遺物は出土していない。また、P355、SK348、P432と切り合い関係を持ち、それらより古い。

SE441 (図版19・22)

20N23・24に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸110cm、短軸80cm、深さ136cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁は外方へ緩やかに開きながら立ち上がる。埋土は黄褐色土を基本に8層に分かれ、全体的に灰色ブロックを含む。遺物は上層位から近世陶磁器が出土している。また、SE410と切り合い関係を持ち、それより古い。

SE443 (図版19・22・67)

22N1 杭周辺に位置する。平面形は円形を呈し、長軸84～97cm、深さ196cmを測る。断面はU字状を呈し、西壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁は外方へ緩やかに開きながら立ち上がる。埋土は褐色土を基本に4層に分かれ、上層に黄褐色・褐色ブロックを含む。遺物は上層位から青磁(21)が出土している。出土遺物から中世の遺構と考える。

SE444 (図版19・22・68)

20O4・5に位置する。平面形が円形を呈する素掘りの井戸である。長軸90cm、深さ156cmで、埋土は地山近似の土が主体で水平に堆積する。人為的に埋められたものと考えられる。出土遺物は無く、構築時期は不明であるが、周辺に近世以降の遺構が多く、同様に近世以降の可能性がある。

SE445 (図版30・32・68)

20P25、21P21に位置する。平面形が円形を呈する素掘りの井戸である。深さ154cmで、長軸70～80cmと北東-南西方向がやや大きい。埋土は3層に分層でき、層境がレンズ状を示すことから自然堆積の可能性はある。出土遺物は無く、構築時期は不明である。

SE451 (図版30・32・68)

21Q13・18に位置する。平面形が楕円形を呈する素掘りの井戸である。長軸72cm、深さ108cm、埋土は3層に分層でき、層境は南下がりに傾斜する。1・2層は地山に近似した土がブロック状に混じり、人為的な埋め戻しと考える。出土遺物は無く、構築時期は不明である。

SE504 (図版30・33・68)

22Q23に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸97cm、短軸80cm、深さ147cmを測る。断面は漏斗状を呈し、北壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁は外方へ開きながら立ち上がる。埋土は暗褐色土を基本とし、下層は暗灰色の粘質土が堆積する。遺物は上層位から、珠洲焼(34)が出土している。出土遺物から中世の遺構と考える。

SE530 (図版30・33・68)

21P13に位置する。平面形が楕円形を呈する素掘りの井戸である。中世の溝であるSD695を切る。長軸136cm、湧水が多く、深さ141cmまで掘削した。埋土を6層に分層したが、上位と下位で堆積は異なる。6層は壁面の崩落土と思われ、その後、崩落土の上面まで埋め戻し、さらに1～3層を南方から入れたものとする。出土遺物は無く、構築時期は不明である。

SE621 (図版25・28・69)

23R18に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸80cm、短軸60cm、深さ114cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁は外方へ緩やかに開きながら立ち上がる。埋土は黄褐色土を基本に5層に分かれ、上層に黄褐色ブロックを含む。下層には粘性のやや強い、褐灰色の粘質土が堆積する。遺物は中層位から須恵器(36)が出土しているが、中世の遺構と考える。

SE622 (図版25・26・69)

23Q23に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸110cm、短軸92cm、深さ157cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は灰色土を基本に5層に分かれ、上層に黄褐色・灰色ブロックを含む。遺物は上層位から青磁(37)や珠洲焼(38)、砥石(181)が出土している。出土遺物から中世の遺構と考える。

SE623 (図版25・28・69)

23Q8・13に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸78cm、短軸60cm、深さ88cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁は外方へ開き気味に立ち上がる。埋土は褐色土を基本に3層に分かれ、上層に黄褐色ブロック、下層に灰色ブロックを含む。遺物は上層位から土師器が出土している。

SE627 (図版25・28・69)

23Q24に位置する。平面形は円形を呈し、長軸100～120cm、深さ150cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁は外方へ開き気味に立ち上がる。埋土は黄褐色土、暗褐色土を基本とし、下層に灰色ブロックを含む。遺物は上層位から越中瀬戸焼(150)が出土している。

SE675 (図版25・28・69)

23R19に位置する。平面形は円形を呈し、長軸76～84cm、深さ70cmを測る。断面は台形状を呈し、側壁は外方へ開きながら立ち上がる。埋土は黄褐色土を基本に5層に分かれ、上層に黄褐色ブロックを含む。遺物は出土していない。

SE737 (図版25・28・69)

23P22に位置する。平面楕円形の素掘りの井戸で、断面形は徐々に狭まってから直立に落ちる漏斗状を呈する。長軸180cmと本遺跡では大型の部類で、深さは173cmまで掘削した。埋土1～3層が水平に堆積し、4層は比較的均質の粘質土である。自然堆積と考える。出土遺物は無いが、17世紀後半～18世紀前半ごろの近世陶磁器を出土したSD460に切られているため、それ以前の構築である。

SE775 (図版30・33)

22016に位置する。平面形は円形を呈し、長軸84～94cm、深さ137cmを測る。断面は漏斗状を呈し、側壁は外方へやや内湾気味に立ち上がる。埋土は黄褐色土を基本に3層に分かれ、上層に黄褐色・褐色ブロックを、下層に灰色ブロックを含む。遺物は上層位から中世陶磁器が出土している。また、P774と切り合い関係を持ち、それより新しい。

SE786 (図版30・34・70)

20P10・15に位置する。平面形は円形を呈し、長軸84～92cm、深さ158cmを測る。断面は台形状を呈し、埋土は褐灰色土、褐色土を基本に5層に分かれる。遺物は出土していない。また、SK520と切り合い関係を持ち、それより古い。

SE834 (図版15・16・70)

22014に位置する。平面形は円形を呈し、長軸96～108cm、深さ189cmを測る。断面は漏斗状を呈し、側壁は下半部が垂直に立ち上がり、上半部は外方へ開きながら立ち上がる。埋土は褐色土を基本とし、下層は灰褐色土が堆積する。遺物は下層位から部材と思われる木製品(199)が出土している。またSD180・SD938・SD269と切り合い関係を持ち、それらより新しい。

SE840 (図版15・16・70)

23011に位置する。平面形は円形を呈し、長軸76～80cm、深さ66cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁は垂直に立ち上がる。埋土は褐色土を基本に3層に分かれ、黄褐色・褐色・灰色ブロックを含む。遺物は出土していない。

SE884 (図版25・28・70)

22P20に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸98cm、短軸84cm、深さ136cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁は垂直に立ち上がる。埋土は灰色土を基本に5層に分かれ、上層に白色・灰色ブロックを含む。遺物は上層位から須恵器が1点出土している。また、SK885と切り合い関係を持ち、それより古い。中世の遺構と考える。

SE895 (図版15・16・70)

2205、2301に位置し、近世のSD900より古い。平面形は円形を呈し、長軸69cm、深さ90cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁は垂直に立ち上がる。埋土は褐色土を基本に3層に分かれ、灰白色ブロックを含む。3層から土師器碗片が出土しているが、中世以降の構築と考える。

SE916 (図版15・16・71)

22010・15に位置する。平面形は円形を呈し、長軸80cm、深さ50cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁は垂直に立ち上がる。埋土は褐色土を基本に4層に分かれ、全体的に灰色ブロックを含む。遺物は出土していない。また、SD180と切り合い関係を持ち、それより新しい。

SE925 (図版30・31・71)

22016・21に位置する。SD500の埋土掘削後の底面で検出したが、新旧関係は不明である。検出時の平面形は円形を呈し、長軸57～67cm、深さ70cmを測る。断面は台形状を呈し、側壁は外方へ開き気味に立ち上がる。埋土は青灰色土を基本に3層に分かれ、全体的に黄褐色ブロックを含む。遺物は出土していない。当遺構はSD500の付属施設とは思えず、SD500の検出面から掘り込まれているとすれば、その深さは139cmになるため、素掘りの井戸と考えた。

SE936 (図版30・34・71)

20O17・18に位置する。平面形は円形を呈し、長軸68～73cmを測る。断面形は箱状を呈し、側壁はほぼ垂直に立ち上がる。上層部は攪乱を受けているが、埋土は褐色土を基本に5層に分かれる。中層から下層にかけて黄褐色ブロックを含む。遺物は出土していない。また、SD500・SD260と切り合い関係を持ち、それらより新しい。

SE937 (図版15・17・71)

22N24・25、22O4に位置する。平面形は不整形を呈し、長軸192cm、短軸132cm、深さ154cmを測る。断面は漏斗状を呈し、東壁は外方へ直線的に立ち上がり、西壁は外方へ開きながら立ち上がる。埋土は黄褐色土を基本に7層に分かれ、黄褐色・褐色・灰白色ブロックを全体的に含む。遺物は上層部から珠洲焼(19)が出土している。出土遺物から中世の遺構と考える。またSD180と切り合い関係を持ち、それより古い。

SE1001 (図版11・12・72)

27N17に位置する。平面形は楕円形を呈し、断面形は下部がやや袋状に膨らんだ後、垂直気味に立ち上がる形を呈する。規模は長軸108cm、短軸77cm、深さ208cmを測る。埋土は4層に分層でき、下部ほど締りが弱い。最下層は黒褐色を呈し、腐植物を多量に含む。遺物は珠洲焼の甕、片口鉢(52)のほか、曲物の底板(204・205)、割板(206・207)、箸状木製品(208～217)、用途不明品(218)、棒状木製品(219・220)、板状木製品(221)などの木製品が出土した。珠洲焼は埋土上～中位の1～3層で出土した。一方、木製品は2～4層で出土したが、大半は最下層の4層からである。出土遺物から中世の遺構と考える。

SE1020 (図版13・14・72)

25L12に位置する。平面形は開渠によって一部壊されるが円形と推測できる。壁面の崩落により、調査時には断面形や底部を把握できなかったため、調査終了後に重機で掘削して確認した。規模は長軸114cm、深さ272cmを測る。掘形は極めてシャープで、埋土はII層に近似する明るい褐色土を呈し、中世の遺物が出土するほかの井戸の埋土とは異なる印象を受けた。遺物は須恵器長頸瓶、珠洲焼甕、肥前系陶磁器や砥石(184)が出土した。肥前系陶磁器が下層で出土したことから、近世以降の構築と考える。

SE1024 (図版11・12・72)

27O15・20に位置し、用水3とSD1027に切られる。平面形は円形、断面形はU字状を呈する。長軸は推定95cm、深さ145cmを測る。6層に分層した埋土は灰色、または黒褐色粘質土を基本とするが、V層の緑灰色、あるいは青灰色シルトの粗大なブロックを多量に含むことから、埋め戻された可能性がある。遺物は珠洲焼の片口鉢(55)、土師質土器の皿(56)が出土した。出土遺物や中世のSD1027に切られることから、中世の遺構と考える。

SE1028 (図版11・12・73)

27O14に位置する。平面形は楕円形、断面形は上部が大きく広がる漏斗状を呈する。規模は長軸140cm、短軸78cmで、深さは152cmを測る。埋土はブロック状の緑灰色シルトを極めて多量に含む。珠洲焼の壺(58)が出土したことから、中世の遺構と考える。

SE1041 (図版13・14・73)

25L11に位置し、用水2に切られる。平面形は円形、断面形は中位で大きく膨らむ袋状を呈する。規模は長軸114cm、深さ126cmを測り、中場の最大径は152cmである。遺物の出土はないが、埋土がSE1020と近似することから、近世以降に構築されたものと推測する。

SE1057 (図版 11・12・73)

2604・5に位置する。平面形は楕円形、断面形は底部から垂直に立ち上がり、中～上部にかけてわずかに開くU字状を呈する。規模は長軸92cm、短軸75cmで、深さは131cmを測る。遺物は掘形の途中で、上部に向かって広がりはじめの部分にまとまっており、珠洲焼の甕、片口鉢(78)、土師質土器の皿などの土器や、部材(222)、棒状木製品(223)などの木製品が出土した。また、同部分で拳大～30cm大の礫を数点検出し、被熱したのも認められる。出土遺物から中世の遺構と考えられる。また、出土状況から本遺構がある程度埋没した段階で、これらの遺物をまとめて廃棄したことが推測できる。

SE1058 (図版 13・14・74)

2608・9に位置する。平面形は円形、断面形はU字状を呈し、規模は長軸76cm、深さ120cmである。埋土は4層に分層できる。下半はオリーブ黒色を呈し、締りが弱い。遺物は珠洲焼の甕体部片が出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。

SE1075 (図版 13・14・74)

2309に位置し、用水1(SD1045)に切られる。平面形は円形、断面形はU字状を呈する。規模は長軸88cm、深さ156cmを測る。埋土は上下2層に分層でき、上部は褐色、下部はオリーブ黒色を呈し炭化物を含む。遺物は出土していない。SD1045は近世の遺構で、切り合いからそれ以前に位置づけられることは明らかである。本遺構の下半部の埋土はオリーブ黒色を呈し、中世の井戸の埋土と類似する。したがって、出土遺物はないが、埋土から本遺構は中世に所属するものと推測する。

SE1094 (図版 25・29・74)

24Q17に位置する。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸94cm、深さ71cmを測る。埋土は上下2層に分層でき、下部はブロック状の黒褐色粘質土を多量に含む。遺物は珠洲焼の甕の破片が出土し、SD1031・1032、SE1105など中世の遺構から出土した破片(85)と接合した。出土遺物から中世の遺構と考える。

SE1105 (図版 25・29・75)

24Q16に位置し、SE1106に切られる。平面形は円形を呈し、断面形は比較的平らな底面からほぼ垂直に立ち上がった後、中位で階段状にやや広がり、急斜度で上端に至る。規模は長軸110cm、深さ97cmを測る。埋土は黒褐色、褐色を呈して緑灰色シルトを多量に含み、下部ほど締りが弱い。遺物は須恵器の杯蓋(82)、甕(83・84)、珠洲焼の甕(85)、板状木製品(224)などが出土した。85はSD1031・SD1032などから出土した破片と接合した。出土遺物から中世の遺構と考える。

SE1106 (図版 25・29・75)

24Q17・21・22に位置し、用水1に切れ、SE1005を切る。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸121cm、深さ103cmである。埋土は1層が灰色を呈し、明るい色調であるのに対し、2・3層は黒褐色、褐色など色調が暗く、その境は極めて明瞭である。また、2・3層は腐植物を多量に含む。遺物は土師質土器の皿(86)が出土した。出土遺物から中世の遺構と考える。

SE1109 (図版 25・29)

23R5に位置する。用水1(SD1045)の底面で確認した遺構である。上部は用水1によって壊されるため本来の形態や規模は不明であるが、検出面では楕円形を呈し、断面形はU字状である。規模は長軸75cm、短軸62cmで、深さは128cmを測る。埋土は明るい褐色を呈する。遺物が出土していないので、時期の特定はできないが、用水1の検出時や埋土掘削の際にSE1109のプランを検出できなかったこと

から、少なくともそれ以前の構築といえる。

SE1110 (図版 25・29・75)

23R10に位置し、用水1 (SD1045)に切られる。平面形は円形、断面形は底部からほぼ垂直に立ち上がりU字状を呈する。規模は長軸83cm、深さ192cmを測り、平面形は検出したほかの井戸よりも小振りながら、深さは下割遺跡VIの中では3番目に深い。埋土は4層に分層でき、褐灰色粘質土主体の層と、緑灰色シルト主体の層が交互に堆積する。遺物は4層の上部で須恵器の甕(104・105)、それより下部で肥前系陶器の埴鉢が出土した。出土遺物から近世の遺構と考える。

SE1183 (図版 25・29・76)

23P14・15を中心に位置し、SE1182に切られ、SD1031を切る。SE1182は近代以降の新しい遺構で、下割遺跡Vの調査では完掘していない。SE1183の平面形は円形、断面形は台形状を呈する。大型の井戸で直径は3mを超えるが、深さはほかの井戸に比べ浅く、84cmである。埋土は4層に分層でき、ほぼ水平に堆積する。遺物は中層で珠洲焼の片口鉢、底部で漆器椀(225)、板状木製品(226)、部材(227)などの木製品が出土した。切り合いや出土遺物から中世～近世の構築と推測する。

SE1191 (図版 25・29・76)

23Q4に位置する。平面形は円形、断面形はU字状を呈する。規模は直径72cm、深さ98cmを測る。埋土は4層に分層した。1層は地山に近似する。2層以下は褐灰色を呈し、下部ほど色調が暗く、締りが弱い。遺物は3層で土師器の長甕が出土した。古代の遺物が出土しているが、埋土は古代の遺構と判断したSD260とは異なり、近世以降の井戸と共通する。よって、SE1191は近世以降に構築されたものと推測し、古代の遺物は混入と考える。

D 土 坑

下割遺跡の調査では多数の土坑・ピットを検出したが、その大半は相対的に標高の高い24列以東に分布する。埋土は、灰黄褐色～黄褐色土を基本とする。遺物を伴うものはわずかで、帰属時期を特定できるものは少ない。

SK70 (図版 35・37・65)

19Q3・4・8・9に位置する。南側を近代の溝(KR84)に切られ、東側は調査区外に延びるため、正確な平面形は不明だが、おそらく円形または楕円形に近い形状と推測する。深さは39cmで、埋土掘削後の底面からSE77～79を検出した。壁の立ち上りは急傾斜で、その壁際に埋土3層が堆積する。1～3層は地山に近似した土であり、ほかの遺構を構築した際の上を入れた可能性がある。遺物は土師器片と19世紀前半ころの近世陶磁器が出土している。

SK81 (図版 35・37・65)

19Q24に位置する。径115cmの円形の土坑で、深さ31cmの断面形は台形状を呈する。単層で地山に近似した埋土であり、認識し難いが、炭粒を斑状に多量に含んでいる。底面中央のやや東寄りに、径18cmの小ピットを検出したが、関連性は不明である。遺物は出土しなかった。

SK340 (図版 6・9・67)

21K20・25に位置し、SD180の埋土掘削後の底面で検出した。平面形は不整形を呈し、長軸232cm、短軸170cm、深さ65cmを測る。断面は台形状を呈し、埋土は褐色土を基本とする。SD180、P178と切り合い関係を持ち、P178より古い。SD180との新旧関係は不明である。しかし、断面を

観察すると、6層上面の標高はSD180の底面高とほぼ同じ値であるが、SD180の底面のように平らでない点、7・8層が壁面に沿って最底部まで認められる点から、SD180の埋没後にSK340が掘り込まれた可能性がある。遺物は6層から出土せず、SD180の底面標高より上位で、青磁、珠洲焼などが出土した。調査時はSD180の遺物と認識していたため、SD180として掲載した。当遺構に該当する遺物は、11・14・17・18・176である。

SK446 (図版30・32・68)

21P22・23に位置する。東西に長い楕円形を呈し、長軸130cm、短軸90cm、深さ31cmを測る。埋土は3層に分層でき、中層に植物の茎が炭化したものを多く含む。出土遺物はない。

SK448 (図版30・32・68)

21Q14・15に位置し、P449より新しい。長軸140cm前後の円形を呈し、深さ68cmを測る。南から北へ緩やかに3段の段差を持って落ち込む。埋土は地山に近似した土が主体となるブロック状の堆積で、人為的に埋め戻されたものと考えられる。出土遺物はない。

SK520 (図版30・33・68)

20P15・20、21P16に位置し、SE786より新しい。溝状に近く、北西側に一部張り出しを持つ不整形の遺構で、南北方向の長軸は444cmを測る。検出面が地形改変により南側に緩く傾斜していることから、深さは北端で29cm、南端で3cmとなる。状況によっては更に南側に延びていた可能性もある。埋土は黒褐色系で、2層に分層できる。越中瀬戸焼壺片が出土していることから、構築は近世以降である。

SK714 (図版25・28・69)

23Q9に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸64cm、短軸53cm、深さ88cmを測る。断面は台形状を呈し、埋土は黄褐色土を基本に4層に分かれる。遺物は出土しなかった。

SK762 (図版30・33・63)

21P15に位置し、中世のSD695より新しい。長軸186cm、短軸130cmの平面楕円形を呈し、深さ42cmを測る。南から北へ緩やかに3段の段差を持って落ち込む。埋土は地山に近似した土が主体のブロック状の堆積で、人為的に埋め戻されたものと考えられる。17世紀前半の近世陶磁器が出土した。

SK777 (図版30・33・70)

22O16・17に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸80cm、短軸70cm、深さ74cmを測る。断面形は漏斗状を呈し、側壁は外方へ緩やかに開きながら立ち上がる。SB12の柱のライン上に位置し、大型の柱穴の可能性もある。埋土は黄褐色土を基本に4層に分かれ、全体的に黄褐色ブロックを含む。上層位から近世陶磁器が出土している。また、SD500と切り合い関係を持ち、それより新しい。

SK783 (図版30・31・70)

22O12に位置する。平面形は円形を呈し、長軸82～92cm、深さ65cmを測る。断面は箱状を呈し、側壁は垂直に立ち上がる。埋土は褐色土、灰黄褐色土の2層に分かれ、黄褐色ブロックを含む。遺物は出土していない。

SK1018 (図版13・14・72)

25M4・5に位置する。平面形は楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長軸106cm、深さ76cmである。形状は井戸に近いが、深さがほかの井戸に比べ浅い。埋土の所見や、調査時に湧水もなかったことなどから土坑とした。埋土は4層に分層でき、3層は多量の炭化物からなる。色調や混入物など土質は周囲の中世の遺構に近いが、遺物の出土がないため帰属時期は不明である。

SK1044 (図版 15)

24M3～5・8～10に位置する。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸344cm、深さ41cmである。埋土は2層に分層でき、褐灰色土を主体とする。遺物は少量出土し、近世以降の陶磁器、珠洲焼の片口鉢(99)、須恵器の杯が出土した。出土遺物から近世以降に位置付けられる。

SK1107 (図版 25)

23Q20に位置する。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸75cm、深さ53cmである。埋土は灰色粘質土を基本に、灰黄色シルトをブロック状に少量含む。遺物は越中瀬戸焼の広口壺(154)が出土した。本遺構は下割遺跡Vとの調査区域に残したベルト下で検出し、中世の包含層よりも上位の層から掘り込まれていることから、近世以降の構築であることが確実である。

SK1181 (図版 13・14・76)

25N17・22に位置する。平面形は円形、断面形は台形状、ないし箱状を呈する。規模は長軸80cm、深さ72cmである。埋土は3層に分層でき、ほぼ水平に堆積する。遺物は土師器の小甕が出土した。古代の遺物が出土しているが、本遺跡では古代と考えられる遺構は限られる。また、埋土は近世以降の遺構に近似し、混入の可能性もあることから積極的に古代の遺構と評価することは避けたい。

SK1124 (図版 15・75)

24Mに位置する。平面形は楕円形、断面形は台形状を呈する大型の土坑である。規模は長軸936cm、短軸429cmで、深さは94cmを測る。近世以降の掘り込みであるため、断面図などの記録はしていない。埋土は炭化物を極めて多量に含む黒褐色土で、焼土をまばらに含む。また、上部にV層近似の黄褐色土が厚く堆積する部分もあり、埋め戻した可能性が高い。底面に被熱の痕跡は確認できず、柱穴や建築部材なども見当たらないことから、本遺構内での燃焼、あるいは住居の火災などは考えにくい。周囲で何かを燃やしたか、あるいは火災があり、それにより生じた炭などを処分するために構築されたもので、同時に多量の陶磁器を廃棄したものと推測する。出土遺物は須恵器の有台杯(101)や土師器、青磁(102)、土師質土器の皿(103)など古代・中世の遺物もわずかに含むが、主体は近世の陶磁器で、越前焼の甕(161～164)、鉢(167～170)が出土した。

SK1126 (図版 15・17・76)

24L2・7に位置する。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長軸67cm、深さ53cmである。埋土は灰黄褐色を呈し、上下に二分できる。土器などの遺物はないが、底面には直径2～5cmほどの小礫が敷き詰められていた。柱の沈下を防ぐためのものであろうか。埋土は周囲の近世の土坑・ピットと等しく、本遺構も近世以降に位置付けられる可能性が高い。

E ピ ッ ト

調査区東側では、ほぼ全域でピットを検出した。調査区西側では、270杭周辺に約30基の集中するピット群を検出した。遺物を伴うものはわずかで、帰属時期を特定できるものは少ない。ただし、270周辺のピット群は周辺に中世の井戸が数基確認できること、埋土がそれと近似することなどから、中世の可能性が高いものと推測する。幾つかは掘立柱建物を構成する柱穴である可能性が高いが、調査区の西端であるため、調査区内では建物として認識することができなかった。

P83 (図版 35・37・65)

19Q24ほかに位置し、平面形は楕円形、断面形は漏斗状に近い。南東側を現代の掘削に切られる。長

軸約 72cm、深さ 63cm。埋土は 4 層に分層できる。4 層上面は水平で、その面に石臼 (191) を北側に寄せた状態で検出した。認識できなかったが、埋土 3 層が柱痕とすれば、石臼は根固めとして利用された可能性がある。しかし、ほかに根固めを入れた柱穴は無く、地鎮祭的な意味も考慮しておきたい。

P254 (図版 19・21)

21L11・16 に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸 60cm、短軸 50cm、深さ 69cm を測る。断面は細い漏斗状を呈し、中央部に柱痕を確認した。出土遺物はない。

P857 (図版 15・16・70)

23N11・12 に位置する。平面形は円形を呈し、長軸 64～72cm、深さ 134cm を測る。断面は台形状を呈し、埋土は灰黄褐色土の単層である。出土遺物はない。

P905 (図版 30・34・71)

22P2 に位置し、平面形は径 66cm の円形を呈する。深さ 90cm と、土坑としては深く、井戸としては浅いためビットとした。埋土は 3 層に分層でき、1・2 層は地山近似的土が主体の堆積で、人為的に埋め戻されたものとする。3 層から珠洲焼の甕 (49) が出土しており、中世の遺構と考える。

P1025 (図版 11・12・73)

27O9 に位置する。平面形は円形、断面形は U 字状を呈する。規模は長軸 29cm、深さ 33cm である。埋土は単層で、灰色粘質土を主体にブロック状の緑灰色シルトを多量に含む。柱痕は確認できず、遺物も出土していない。P1037 と同様に、中世の遺構と推測する。

P1037 (図版 11・12・73)

27O8 に位置する。平面形は円形、断面形は漏斗状を呈する。規模は長軸 27cm、深さ 42cm である。埋土は単層で、柱痕は確認できない。遺物の出土はないが、埋土は周囲の井戸など、中世の遺構に近似することから中世の遺構と推測する。

P1103 (図版 23・24・74)

24R4 に位置する。平面形は円形、断面形は U 字状を呈する。規模は長軸 28cm、深さ 48cm である。埋土は上下に二分でき、褐灰色粘質土を主体に、黒褐色粘土ブロックを多量に含む。これは周囲のビットとは異なり、27O 周辺のビット群と共通するものである。

P1104 (図版 23・24・74)

24R4 に位置し、P1103 に近接する。平面形は円形、断面形は U 字状を呈する。規模は長軸 15cm、深さ 32cm である。埋土は単層で、黒褐色を呈する。P1103 同様、27O 周辺のビット群と共通する。

P1108 (図版 25・29・75)

24R8 に位置する。平面形は円形、断面形は漏斗状を呈する。規模は長軸 28cm、深さ 47cm である。底部で杭と考えられる木製品 (228) を検出した。埋土は褐灰色を呈する。時期は不明である。

P1148 (図版 15)

24L21 に位置し、SD260 を切る。平面形は円形、断面形は U 字状を呈する。規模は長軸 42cm、深さ 20cm である。遺物は須恵器の長頸壺 (87) が出土した。P1148 の埋土は近世の遺構に類似し、古代の溝である SD260 と切り合うことから 87 は混入した可能性が高い。

F 溝

下割遺跡Vと下割遺跡VIの調査区は隣接しているため、両調査区にまたがって検出した溝も多くある。番号を統一した溝もあるが、調査時の所見を活かすためにそのままとしたものもある。合わせて溝63条を検出したが、前述の理由により、その数は若干少なくなる。溝の方位（走向）は大きく南北方向と東西方向に分けられる。構築時期によりおおまかな傾向はあるようだが、かならずしも厳密ではなく、地形に制約されていた部分が多い。その内、2条の溝が平行する範囲は道として考えることができたため、次項「G 道路状遺構」で詳述する。

SD4 (図版34・35・63)

19R4を南東端として東西方向に走る溝で、20Q17で調査区外へ延びる。検出長さ8.20m、幅0.3～1.4m、深さ4～7cmと幅広く浅く、方位はN-57°-Wを示す。西側の幅が細くなるのは、検出面の傾斜によるもので、本来の形状を保っているかは不明である。数基のピットに切られるが、中世の井戸と考えるSE5よりは新しい。埋土は単層で、土師質土器皿(2)が1点出土した。中世の遺構と考える。

SD180 (図版15・17～19・59～61・71)

南北方向の溝で、SD500と合流する22O20を南端とし、北端は21K9でSE300に切られるが、調査区外に延びていくものと推測される。調査区内の北端21K9からSD269と交差する22N18付近まではN-17°-Eの方向でほぼ直線的だが、そこから緩く湾曲し、SD500に合流、もしくは切り合い関係をもって終息している。SD500との合流部で断面観察を行ったが、埋土は近似しており、その新旧関係は不明である。同時期の可能性が高い。検出長さ46.0m、幅1.2～1.8m、深さ25～87cmを測る。断面は半円状や台形状を呈し、埋土は褐色土を基本とする。底面標高は南側より北側がやや低い傾向にあるが、その差は10cm程度であり、水利目的の溝とは考え難く、区画溝の可能性が高い。遺物は珠洲焼(12～15)を中心に、須恵器(8～10)、青磁(11)、土師質土器(16～18)、砥石(176)、硯(188)などが出土している。近世陶磁器も出土しているが、後世の攪乱で混じり込んだ可能性が高く、中世の溝と考える。22L16で切り合うSD267よりは古く、22N8・9で切り合うSD269よりは新しい。

SD253 (図版15・18・60)

東西方向の溝で、調査区内の東端20M17から西に走り、23M10で用水1(SD1046)を切って南に進路を変える。用水1は近世以降の溝と考えられることから、それ以降の年代が与えられよう。検出長さ約36m、幅0.68～2.0m、深さ24～45cmを測る。断面は箱状または台形状を呈し、埋土は褐色土を基本とする。20M17から22M10まで方位N-80°-Wでほぼ直線的に走り、22M10付近で南寄りにおわずかに屈曲する。同じ22M10でSD1017と接し、方向もそのまま直線的に抜けているが、SD1017より下位の層で検出されているので、新旧関係はSD1017が新しい。SD1017掘削時にSD253をそのまま利用した可能性もある。遺物は18世紀後半～19世紀前半の近世陶磁器が多く出土したので、江戸時代後期以降の溝である。越中瀬戸焼(147)、砥石(177)を掲載した。

SD267 (図版18・19・61・62)

東西方向の溝で、22L16・21から20M8・13に位置する。検出長さ約17m、幅1.2～1.88m、深さ49～82cmを測り、22L16の西端は急斜度で立ち上がって終息するが、東端は調査区外へ延びている。断面は台形状・半円状を呈し、埋土は暗褐色土、黄褐色土を基本とする。水が染み出す深さであったが、底面は行き止まりとなる西側に向かって緩く傾斜する。調査区外の状況は不明だが、引き込み溝と区画溝、

両方の性格が考えられる。遺物は土師質土器皿(92)、擾乱で混入した18世紀代の近世陶磁器が出土している。22L16で中世の溝SD180と切り合い関係を持ち、それよりも新しいが、埋土や土塁断面B(図版3・4)での観察から、中世の溝と考える。

SD268 (図版18・19・61・62)

南北方向の溝で、22L16から22O16に位置する。北端はSD180、SD267と切り合うため不明だが、南端は緩やかに立ち上がる。検出長29.8m、幅0.8～1.2m、深さ22～36cmを測る。断面は弧状を呈し、埋土は褐色土、暗褐色土を基本とする。SD267より古い、SD180との新旧関係はとらえられなかった。SD180よりは浅いが、南端での位置関係は似ており、同様に中世の区画溝として考えたい。

SD269 (図版15・17・18・59・60)

ほぼ方位に沿った南北方向の溝で、22M8・9から22O19に位置し、両端は緩やかに立ち上がる。検出長23.7m、幅1.2～1.4m、深さ54～81cmを測り、断面は台形状を呈し、埋土は上層が暗褐色土を基本に、下層は地山と近似した土を主体とする。人為的に埋め戻された可能性もある。遺物は珠洲焼、土師質土器、須恵器甕が出土しており、中世の溝である。調査区内で完結した溝であり、区画溝と考えたい。SD268と4m弱の間隔を保って平行関係にあるが、規模(特に深さ)や埋土の状況が大きく異なり、同時存在では無く、別の時期の遺構ととらえたい。

SD460 (図版25・30)

東西方向の溝で、21Q11から23P24付近に位置する。東端は調査区外に延び、延長方向の南区でも同様の溝は検出できなかった。西端は中世の溝SD695の上で不明となる。幅0.54～0.76m、深さ18～35cmを測り、17世紀後半～18世紀前半の近世陶磁器が出土している。左右のぶれは多少あるが、N-76°-Wの方位でほぼ直線的に延びている。この周辺には同様の方向性を持った溝が多くあり、それらはすべて近世の遺構の可能性がある。

SD831 (図版25)

東西方向の溝で、22R15から23R9に位置する。下割遺跡Vの調査時は、近代以降の新しい時期の遺構と判断し、上面から20cm程下げて掘削を終了した。その掘削時に、17世紀前半の近世陶磁器(149など)、須恵器、土師器(97)、土師質土器、硯(189)などが出土している。下割遺跡VI調査時には、その西側延長方向を近世以降の「用水1」として調査を行っている。

SD900 (図版15・16・18・19)

ほぼ方位に沿った東西方向の溝で、22O7から23O3・8に位置する。幅0.5～1.0mを測り、深さ9～17cmと浅いため、西側延長方向の下割遺跡VI調査時には検出できなかった。東端は中世の溝SD268と合流するが、切る形で立ち上っているためSD268より新しい。東側の延長、16m程離れた位置にあるSD939と一連であった可能性もある。土師器、珠洲焼、近世陶磁器、寛永通宝(236)が出土しているので、近世の遺構である。

SD938 (図版15・17・59・60)

南北方向の溝で、22O4から22O19・20に位置する。中世の溝であるSD180とSD269の埋土掘削時に検出され、それより古い時期の溝である。長さ7.6m、幅0.7～0.8m、深さ37～48cmを測る。北端はSE937につながり、南端は緩やかに立ち上がる。断面は弧状を呈し、埋土は地山に近似したぶい黄褐色土を基本とする。遺物は底面付近から須恵器(51)、土師器、珠洲焼(19)などが出土している。

SD1002 (図版 13・14・60)

26M18 から 27M12 に位置し、用水 3、SX1006 に切られる。直線状に延びる溝で、方位は N-73°-W を示す。規模は長さ 8.8m、幅 0.86m、深さ 7～33cm である。断面形は台形状を呈する。SD1002 は SD1047 の延長線上に位置し、方位や規模、埋土もほぼ一致する。なお、SD1002 の底面標高は 13.6m 前後で、SD1047 は約 13.8m である。両溝は連続しないが、浅い溝のため後世の整地などによって削平された可能性があり、一連の溝であった可能性がある。遺物の出土はないが、SD1002 の方位が近世の溝とほぼ同一であることや、SD1047 が近世の用水 1 から分岐することなどから、本遺構は近世の構築と考える。

SD1003 (図版 13・14・60)

24～27N に位置し、SD1004・1005、用水 2・3 に切られる。24N20 で近世の用水 1 (SD1045) から直交するように分岐して北西に延び、方位は N-75°-W を示す。断面形は弧状を呈し、埋土は単層である。底面標高は用水 1 との接点で 13.74m、用水 3 との接点では 13.64m となり緩やかに北西に下る。遺物は近世陶磁器が出土した。用水 1 の一部で、同時に機能したものと考えられる。

SD1008 (図版 11)

28M22 から 28N16 に位置する。南端は用水 3 に切れ、北端は調査区外へ延伸するため不明である。方位は N-1°-W を示す。検出した長さは約 8m、幅は 0.24～0.93m で一定でない。深さは最大 12cm で、2～3cm 程度と極めて浅い部分もあり、底面は平らでない。埋土は単層で、V 層に近似する青灰色シルトをブロック状に多量含む。近世以降の陶磁器と珠洲焼の片口鉢 (98) が出土した。出土遺物から近世以降に位置付けられる。

SD1017 (図版 15・18・60)

SD1017 は調査区東端の 20M17 から北西に延びる SD253 と重複する。調査年度が異なるため、23M2 以西を便宜的に SD1017 と呼称する。調査区を横断して直線状に延び、方位は N-79°-W を示す。検出した長さは約 27m、幅 0.44～1.03m、深さ 17～35cm を測る。SD1017 は SD253 と二股に分岐するが、23M2・7 では検出した面が異なり、先後関係がある。SD253 は SD1017 より下位の層から掘り込まれていることから、相対的に SD1017 の方が新しい。ただし、SD253 は近世の用水 1 (SD1046) を切ることから、いずれも近世以降の構築である。遺物は珠洲焼の甕が出土しているが混入といえよう。

SD1022 (SD1071 と同一。図版 11・12・59)

27P14 から 28P7・12 に位置し、用水 3 に切られる。用水 3 を挟んだ東側の SD1071 は、方位や埋土が類似することから同一の溝と考える。幅は 1.19～1.54m である。用水 3 より西側の深さは約 50cm で、埋土は 3 層に分層できる。1～2 層は黒褐色粘質土や緑灰色、青灰色シルトのブロックを多量に含む。用水 3 より東では深さが 30cm 程度と浅くなる。西側と同じく、褐色粘質土を基本に黒褐色粘質土、緑灰色シルトのブロックを多量に含む。こうしたブロック状の埋土から、本遺構は埋め戻された可能性がある。遺物は須恵器の甕、有台杯 (79)、長頸壺 (80)、珠洲焼の甕 (81)、片口鉢 (53) が出土した。珠洲焼が底部で出土することから中世の溝と考えられる。

SD1027 (SD1101 と同一。図版 11・12・23・24・59・62)

調査区南端の 24R15 から S 字状に大きく蛇行し、北西端の 28N13 に至る。調査の過程で 25P の用水 2 以西は SD1101 の遺構番号を付したが、同一の溝である。ここでは SD1027 に統一して記述する。

27～28 列は用水 3 によって切られるが、SD1027 は用水 3 の底面より深く掘り込まれており、底部

を確認することができた。280 杭付近で用水は三つ又に分岐するが、北西に向かう流路底面でSD1027を確認した。平面図の中場が用水3の下端に相当し、一段低い部分がSD1027の延長と考えられる。また、調査区南端では池状の広がりを確認したが、西に隣接するSD1102も同様の形状を示す。調査区境界と開渠の間のわずかな面であったため、この広がりがいずれか一方のもので切り合っている可能性もあるが、本調査では確認できなかった。複数の遺構と切り合い、用水3のほかSD1102、用水1 (SD1045)、用水2に切れ、SD1031・1032を切る。SD1027の断面形はほぼ半円形を呈するが、24Qの周辺のみ階段状となる。規模は幅0.8～1.28m、深さ34～59cmである。底面標高は全体を通じて13.35m前後を保ち、底面の顕著な傾斜は認められない。埋土は2～3層に分層でき、ほかの遺構に比べ腐植物が目立ち、砂粒をまばらに含む。遺物は須恵器の杯、土師器の長囊、珠洲焼の甕(57)、片口鉢などが出土した。遺構の切り合いや出土遺物から中世の遺構と判断でき、道路状遺構を構成する2条の溝(SD1031・SD1032)よりも確実に新しい。

SD1093 (図版13・14・60)

250に位置する。SD1003と同様に、用水1 (SD1045) から分岐する溝である。方位はN-80°-Wで用水1にほぼ直交する。用水2に切れられ、それ以西では確認できない。遺物は出土していないが、用水1に付随するものと考えられることから近世の構築と判断でき、SD1003と同様の機能が推測できよう。

SD1102 (図版23・24・63)

24Q～24R、25Rに位置し、中世の溝SD1101を切る。用水1と重複する部分では試掘トレンチが掘削されており、平面での切り合いは確認できなかった。しかし、底部付近で缶が出土したことから、近世と考える用水1を切るものと推測する。また、SD1101の延長線上にあるSD1239は深さ10cm前後と浅く、用水1との切り合いも不明瞭であった。両遺構が一連の溝であった可能性もあろう。SD1101の底面標高は13.3～13.45mで、北東が高く、南西に向け傾斜する。なお、SD1239の底面標高は約13.7mである。

G 道路状遺構 (図版11・12・23・24・25・27・59・62・63)

調査区を横断するように東西に平行して延び、西端付近で南に進路を変える2条の溝で構成される。これらの溝を道路の側溝と考えたことから、本書では道路状遺構として報告する。細かな記述をする前に、まずこれらの遺構番号を整理しておきたい。調査区東半の下割遺跡Vで検出した2条の溝は、北側がSD500、南側がSD695である。下割遺跡VIでは西側から調査したこともあって、それらと同一の溝に異なる遺構番号を付している。SD500は下割遺跡VIのSD1023・1031と、SD695はSD1032と同一の溝であり、各図版もその遺構番号をそのまま使用している。しかし、ここでは煩雑になることを避けるため、SD500とSD695に統一し、ほかの遺構番号は使用しない。

SD500は調査区西端28Pから東端20Oまで調査区を横断して延び、27P12付近で南に延びる溝と分岐してT字状をなす。この分岐点から南、東に延びる部分と、SD695に挟まれる部分を路面と考えた。したがって、調査区内における道路状遺構の延長は約78mとなる。側溝を含めた幅は8.1～8.9m、路面幅は局所的には3.56～4.56mの幅を持つが、おおむね4m前後を保つ。ただし、南へと屈曲する部分は大きく広がり、その幅は約9mになる。これはSD500がほぼ直角に折れるのに対し、SD695が緩やかに弧を描くことに起因し、注意すべき点である。また、路面には盛土や整地、敷設物の痕跡や波板状凹凸面などは検出できず、路面が硬く締まるなどの特徴も見受けられなかった。

出土遺物は、SD500では須恵器(22～26・59)、土師器(60)、青磁(27・28)、珠洲焼(29～33・61)

～66)、土師質土器(67～69)、越中瀬戸焼(157)、土製品(172)、石製品(179・180)が出土した。古代の土器はわずかで、主体となるのは中世の土器である。近世の遺物は重複する遺構からの混入や埋土の誤認と考えられ、SD500の年代を示すものではない。遺物の出土傾向は、調査区東半がほぼ均一に出土して顕著な偏りはないものの、西半では26P・27P～Qの分岐点周辺に若干の集中が認められる。

SD695では須恵器(40・41・70～76)、土師器、青磁(42・77)、珠洲焼(43～46)が出土した。古代と中世の土器の出土点数はほぼ半数ずつで、須恵器の出土が比較的多い。各グリッドで平均的な出土傾向を示し、偏りは認められない。ただし、古代の土器は調査区南端の26P20付近、東端の20P10付近で出土量のわずかな増加が指摘できる。

いずれの溝も底部から出土する珠洲焼が少なくないことから、中世に構築されたものと判断でき、古代の遺物は混入と考えられよう。珠洲焼から得られる年代観はSD500がⅡ～Ⅴ期(13世紀～15世紀前半)で、SD695はⅠ～Ⅳ期(12世紀末～14世紀前半)である。出土量がそれほど多くないため明らかでないが、SD500とSD695の時期幅はややずれる。構築時期が異なるとすれば、曲がり方など形状の違いも理解しやすい。片側側溝の状態で機能した期間もあったのかもしれない。いずれにしても、道路状遺構はSD1027に切られる段階で、その機能を失ったものと考えられる。SD1027は珠洲焼が出土した中世の溝であるが、年代は特定し得ない。

次に、個々の溝について記述する。SD500は前述のように調査区を横断する溝で、27Pで南へ分岐しT字状をなす。この分岐点ではベルトを残して埋土を観察したが、東西方向と南北方向に切り合いは認められず、同時に機能した可能性が高い。また、多くの遺構と重複する。特に調査区東半は多数のピットや土坑と切り合うが、大半は近世以降の遺構である。中世の遺構ではSD1027(SD1101)に切られ、SD1071(SD1022)を切る。なお、明治時代以降と考えられる用水3によって切られるため、南北方向の西側上端は失われている。そこで、底部で確認できた立ち上がりを上端に代えて結び、図示した。SD500の断面形は平らな底部から急斜度で立ち上がる台形状である。長さは東西約82m、分岐点から調査区南端までは約13.5mである。幅は調査区東半では2.5～3mを測るが、中央から西側へは徐々に狭まり、西端で1.4mとなる。検出面からの深さも同様に、調査区東半は80cm前後であるのに対し、西側ほど浅くなり、西端で46cmとなる。幅や深さの差は、調査区東半が宅地・畑地であったのに対し、西半は耕地整理事業がなされて現況が水田で、耕作土直下が検出面であることを考慮する必要がある。底面標高は調査区西端で13.46mを測り、東に向かって緩やかに下る。23P3～25P7間は最も低く、13.04～13.07mを推移し、その後わずかに上昇して調査区東端では13.15mとなる。南北方向では調査区南端が最も高く13.44mを測り、北に向かって緩やかに下る。

SD500の南側壁面には段が認められ、断続的に中場を形成する。断面図29(図版24)や断面図40(図版27)などの土層堆積状況から、こうした段が平面では確認できなかったほかの遺構との重複も考えることもできる。埋土の特徴は調査区西端付近で切り合うSD1071に類似することから、中場とした段がその延長にあたる可能性もあろう。また、断面図38B(図版27)で見られるSD500の5～7層の堆積状況は、北側からの流入によって土が堆積し、再度掘削されたことを示唆するものとする。これら土層断面の観察から、SD500以前にはほぼ同じ位置にSD1071が存在し、SD500の構築後は改修などを行いながら一定の期間使用し続けたものと推測する。

SD695は調査区東端の20PからSD500に平行して西へ延び、26Q杭付近で緩やかに弧を描きながら南へ進路を変える。断面形は底部が比較的平らで台形状を呈する。SD500と同様に調査区東半では多

数の遺構と重複するが、大半は近世以降のものである。中世の遺構ではSD1101 (SD1027) に切られる。全長は約71m、幅は1.36～2.16mを測る。検出面からの深さはおおむね50cm前後を推移するが、調査区東端では40～45cmとなりやや浅い。底面標高は調査区東端で13.43mを測る。東半はほぼ水平で、西半に至って徐々に減じ、調査区南端では13.27mとなる。SD500は東に向かって低くなるのに対し、SD695は西に向かって低くなり、傾斜が逆であることを指摘できる。埋土は3～5層に分層できるが、25Pの用水2以東は1～2層が灰白色～灰黄褐色土の層で、SD500には認められない埋土である。この埋土は地山に近似した土であり、ある段階に人為的に埋められたものと推測できる。

H 用 水

下朝遺跡VIの調査範囲で、近世以降と考える用水を3条検出した。用水1 (図版13・15・18・25・60・61)・用水2 (図版13)・用水3 (図版11・12・59) で、南北方向を基本とする。用水1は切り合いや出土遺物から近世以降の構築と考えられ、用水2・3は明治時代以後に構築されたものである。用水2・用水3については、中世の遺構と重複する部分のみ完掘した。

用水1はSD831、SD1045、SD1046から構成される。SD831は下朝遺跡Vの調査で検出した範囲で、22～23Rにかけて東西に延びる溝である。SD1045とSD1046は24M～24Qにかけて南北に平行して延びるが、24Pで合流するように重複する。両溝には切り合いが認められ、SD1045が新しい。SD1045は25R杭付近で直角に折れて東へ向かい、SD831へ続くことが分かった。なお、下朝遺跡Vの調査では、SD831が近世の遺構を切るなどから新しい掘り込みと考え、完掘していない。また、南に分岐する流路を検出しているが、下朝遺跡VIの調査区では確認できなかった。

SD1045は前述のように、調査区南東端の22R14から西に向かうSD831と同一の溝で、25R杭付近でほぼ直角に折れ、末端の24M19まで直線的に北進する。24Pでは幅が4mを超える池状の広がり形成し、24O15や24O25では、底部が急激に落ち込む。これらの落ち込みは井戸などが重複した可能性も否定できないが、24O25では多数の杭が集中して打ち込まれていたことから、堰の可能性もあろう。底面標高はSD831との接点から24Pの池状の広がりまで13.27m前後、深さ約50cmでほぼ水平である。この池状の広がりは底面標高12.71m、深さ約1mで急激に深度が増す。それより北は標高13.3～13.4mを推移し、深さは40～50cmを測る。24O15、24O25の落ち込み底部はそれぞれ標高13.04m、13.12mとなり、深さは80～90cmである。SD1045の底面は部分的な落ち込みを除けば比較的平らといえるが、下流と推測した北側のほうがわずかに高い。また、25N16では直交方向にSD1003が分岐して北西に延び、25O11でも同様にSD1093が分岐する。SD1045との切り合いが確認できなかったことから、同時に機能したものと推測する。遺物は総じて少ない。須恵器や珠洲焼もわずかに含むが、主体は近世以降の陶磁器類で、18世紀前半と考えられるものもわずかに認められるが、大半は18世紀後半以降の所産である。石製品では砥石(185)が1点出土した。

SD1046は23M5付近を北端とする。SD1045に切られるほか、SD253にも切れ、古代の溝SD260を切る。SD253は遺物から18世紀後半～19世紀前半に位置付けられる溝である。24PではSD1045と同様に池状の広がりが確認できる。底面標高は24Pの池状の広がりで13.23～13.37m、深さ約50cmである。それより北は13.49～13.37mで、末端へ向かって緩やかに下る。遺物はSD1045と同様に少量で、近世以降の陶磁器を主体に須恵器、土師器をわずかに含む。瓦器の台付鉢(159)、SK1124から出土した破片と接合した越前焼の甕(164)、鉢(167)を図示した。出土遺物はいずれも

18世紀後半以降の所産である。

SD1045とSD1046の出土遺物には大きな時期差が認められないものの、切り合いから時間的な差があることは明らかである。しかし、形状や規模は類似しており同様の機能を推測できることから、SD1046が何らかの理由で廃棄された後、西側のSD1045が構築され、重複する部分より南側の流路は継続して使用されたものと考えたい。

用水2は土塁の外側を巡り、調査区を南北に縦断する溝である。この溝は土塁の構築のために掘削された可能性が高い。溝は土塁の北辺、西辺に沿うが、北西隅では北へ延伸する流路が確認でき、南北方向では上止めと考えられる杭列が両壁際に認められることから、用水路の機能を兼ねたものと考えられる。26Q杭付近では溝中央部に、流路をふさぎかねないほど多数の杭が密集していた。この土塁は明治時代に構築されたことが明らかであったため20cm程度掘削し、完掘はしなかった。遺物は近世以降の陶磁器や銭貨(238)のほか、土師器の小甕(106)、青磁の棧花皿(107)、珠洲焼の片口鉢(108)など古代、中世の遺物も出土した。

用水3は明治29年の『中頸城郡諏訪村大字米岡更正地図』で確認でき、用水路として使用されなくなると土砂や礫で埋め戻し、道となったようだ。昭和32年以降は耕地整理事業によって水田となり、現在の景観になっている。なお、同更正図では用水1や用水2は確認できない。用水3は中世の溝と重複する部分に限って完掘した。27P～27Rにかけて、上止めと見られる杭列が認められる。流路は27Pで大きく広がり4つに分岐する。この広がりでは、堰など構造物の一部であろうほぞ穴のある板材や、それを固定するために打ち込まれた方形の杭などを複数確認した。遺物は近世以降の陶磁器類や木製品が多いが、古代・中世の遺物も少量含み、土師質土器(109)や、中世～近世と思われる漆器(229)や、寛永通宝などの銭貨(233・239～243・247・248・250)を図示した。

用水1と用水2では、検出した杭の年代測定を行った。用水1は24O25で複数打ち込まれていた杭の内1点を、用水2は25P20で壁際に打たれた杭をそれぞれ試料とした。結果は用水1の杭が55±20年BP、用水2の杭が85±20年BPであった。用水2は土塁と同時に構築された可能性が高く、明治時代以降と考えられる。この土塁は宅地を囲むためのものであるから、用水1は埋没していたものと推測できよう。また、用水1の支流と考えられる溝が用水2に切られることから、用水1が相対的に古いと考えることができる。ただし、杭の年代から用水1も明治時代の可能性がある。用水1・2・3はそれぞれ機能した時期が異なり、切り合いや更正図との対比から用水1→用水2→用水3の順に変遷したものと考えられる。用水1の構築時期については出土遺物を重視して、18世紀後半に構築されて用水2が構築される直前、あるいはそれに近い時期まで機能し続けたものと考えたい。

ここで、用水1と第II章2Bで述べた中江用水や、周辺用水路との関連について触れておく。現在の中江用水は本遺跡の西に位置し、下割遺跡1の調査区東端と接する。この水路は1944(昭和19)年からの県営中江用水改良事業によって造られたもので、本来の中江用水は1674(延宝2)年に開削が開始されている。1947(昭和22)年に米軍が撮影した空中写真では、県営事業以前の中江用水を確認できないため、その流路は明らかでない。中江用水開削以前の様子は1597(慶長2)年の「越後国頸城郡絵図」に描かれており、飯田川から分岐する重川用水や真砂堰を確認できる。『新編中江用水史通史編』[久保田a 2006]によれば、関川右岸の中世後半から近世初期にかけての水田開発は主に小河川の表流水を利用して進められ、飯田川水系では重川用水、真砂堰用水、両口用水などが利用された。山間部の水田化が進むと水量が不足するようになり、水量が豊富な関川本流から導水するため開削されたのが中江用水である。

用水1が構築された年代は明らかにはえないが、上述したいずれかの用水路の末端、あるいはその支線の可能性があることを指摘しておきたい。

I 性格不明遺構

SX407 (図版15・19)

22M21～23ほかに位置する。東西長軸約770cm、南北短軸324cmを測り、平面形が不整形で、断面形状または漏斗状である。周辺のすべての遺構を切ることから、近世以降の遺構である。底面は南側に弧を描く溝状で、東側から西側に向かい徐々に傾斜する。西側で1段の段差を持って漏斗状に深さ174cmまで落ち込むため、井戸と切り合っていた可能性が高い。池としての性格が考えられる。遺物は16世紀末～18世紀前半の近世陶磁器を中心に、瀬戸美濃焼小皿(94)、砥石などが出土している。

SX412 (図版19)

20N22・23、20O2・3に位置する。東西長軸約326cm、南北短軸246cmを測り、平面形が不整形で、断面形は弧状を基本とする。底面は起伏があるため、深さ20～33cmと一定せず、整形された様子も認められない。遺物は18世紀後半～19世紀前半の近世陶磁器(170)を中心に、須恵器、瓦などが出土した。

SX414 (図版19)

20N8ほかに位置する。東西長軸約308cm、南北短軸300cmを測り、平面形が不整形な円形で、断面形は弧状を基本とする。東西両側に狭い段差があり、深さ約40cmの底面は比較的平坦である。遺物は18世紀末～19世紀前半の近世陶磁器(140・166)、瓦器などが多く出土しており、廃棄目的の穴と考える。

SX1090 (図版13・14・74)

25O7に位置する。平面形は楕円形、または不整形で、断面形は弧状を呈する。底面は起伏があり、平らでない。規模は長軸196cm、短軸151cmで、深さは18cmである。埋土は単層で、褐灰色を呈する。遺物の出土はないが、近世以降の掘り込みと推測する。

第V章 遺 物

1 概 要

下割遺跡V・VIからは古代、中世、近世、近代の遺物が出土した。近世の遺物が最も多く、中世、古代の順に続く。単純に比較できるものには無いが、その重量比は古代 7,739g (5.0%)、中世 18,959g (12.1%)、近世 130,029g (82.9%) である。

古代の種別では、須恵器 6,900g (89.2%)、土師器 839g (10.8%) となっており、須恵器の内訳が杯類 (24.0%)、壺・瓶類 (27.0%)、甕 (49.0%)、土師器の内訳が碗類 (40.4%)、甕・鍋類 (57.7%)、その他 (1.9%) となっている。中世の種別では、珠洲焼 18,118g (95.6%)、土師質土器 593g (3.1%)、青磁 237g (1.2%)、瀬戸美濃焼 10g (0.1%) となっており、珠洲焼の内訳が甕 (58.2%)、壺 (5.2%)、片口鉢 (36.5%) という構成比になっている。

須恵器、土師器、珠洲焼、土師質土器の出土重量分布を、第9～12図に示した。須恵器は遺構が集中する20～24Q～Rグリッドで比較的多く出土している。地形的にやや低く、遺物包含層(Ⅲ・Ⅳ層)が残っていたことも要因と考える。土師器は出土量も少ないためか、散在している状況である。珠洲焼は遺構を中心に出土しており、道路状遺構と考えた溝を中心に、重量の重いものが分布している。特に、道路状遺構の方向性が変わる26・27Pグリッドに、集中が認められる。土師質土器も量が少なく散在するが、調査区中央付近が特に希薄となっている。

各遺物の分類・編年及び年代観については次のとおりである。主に観察表に記述した。

古代の土器は〔春日1999〕を参考にした。時期的には、①8世紀前半～中ごろ(春日Ⅲ2期主体で、一部Ⅲ1期含む)、②8世紀末～9世紀初頭ごろ(春日Ⅳ2・Ⅳ3期主体)、③9世紀第2四半期ごろ(春日Ⅴ2期主体、一部Ⅴ1期含む)の大きく3時期に分かれる。記述上は、①をⅢ2期、②をⅣ2・3期、③をⅤ2期とする。また推定産地として、関川左岸に位置する窯跡で焼かれた可能性のある資料を「関川左岸産」、右岸に位置する窯跡のものを「関川右岸産」、小泊窯跡などのものを「佐渡産」と仮称した。

中世の青磁は〔上田1982・山本2000〕、瀬戸美濃焼は〔藤澤2008〕、珠洲焼は〔吉岡1994・2003、加賀1997〕、土師質土器は〔水澤2005・2007、伊藤2006〕を参考にした。特に珠洲焼の年代は、珠洲〇期として記述する。下割遺跡に関わるものとして、Ⅰ期(1180年～1190年代)、Ⅱ期(13世紀前半)、Ⅲ期(13世紀中葉～1270年代)、Ⅳ期(1280～1310年代)、Ⅴ期(1320～1350年代)、Ⅵ期(1360～1370年代)、Ⅶ期(1380～1440年代)、Ⅷ期(1450～1470年代)を目安とする。

近世の肥前系陶磁器は〔大橋1993〕、越中瀬戸焼は〔宮田1997、相羽2003〕、越前焼は〔楠2003、木村2004〕をそれぞれ参考にした。

2 遺物各説

A 土器・陶磁器

1) 中世以前の遺構から出土した中世以前の遺物

SD260 (図版 38・77-1) 1 は須恵器杯蓋で、口径 15.8cm、端部はかえりがあり無く、緩やかである。8 世紀末～9 世紀初頭のものと考えられる。

SD4 (図版 38・77-2) 2 は土師質土器の皿で、底径 5.2cm である。ロクロ成形で、底面は回転系切りされる。器面が荒れてボロボロしており、底部外面と見込みの一部にタール状の付着物が認められることから、灯明皿として使用されたものと考えられる。15 世紀中葉から後半のものと考えられる。

SE5 (図版 38・77-3) 3 は須恵器の把手付長頸壺の肩部付近である。体部のロクロナデは明瞭で、把手部は弱い稜を持って整形される。把手部の断面は楕円形で、長軸 2.2cm、短軸 1.6cm である。関川左岸に位置する上越市滝寺古窯跡〔小田田、2006〕に類例が求められる。

SE66 (図版 38・77-4・5) 4 は須恵器無台杯の底部で、底径 7.0cm、底面は回転系切りされる。5 は須恵器の長頸壺で、口径 7.3cm、底径 7.6cm、器高 17.8cm である。大部分は漸移層のIV層から出土し、井戸から出土した 1 片が接合した。口縁部は外側に面を持ち、口縁内面は端部付近でやや凹むが、全体的になだらかである。高台部は内端接地するが、稜は鋭くない。気泡の膨れが体部上半に多く認められ、外面に薄緑色の自然釉が半分ほど付着する。関川右岸産で、8 世紀末～9 世紀初頭のものと考えられる。

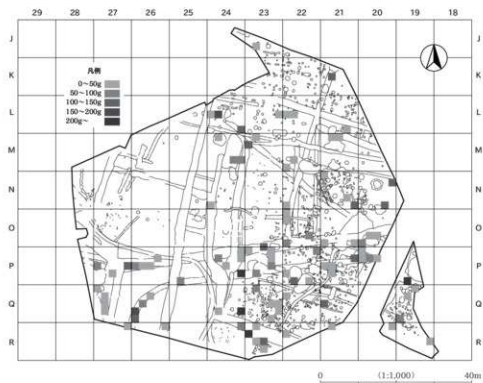
SE135 (図版 38・77-6・7) 6 は青磁の杯の口縁部で、推定口径 15.6cm である。口縁部は折縁で水平な面を持ち、端部が上方に屈曲して尖り気味に取まる。内面に幅 0.6cm 程の凹面のケズリを入れて花卉とする。7 は珠洲焼の片口鉢で、半分ほどが残存する。器形は歪んでおり、断面は形状を表すところで作図した。口径 20.2cm、底径 9.4cm、器高 8.9cm、底面は回転系切りである。内外面ともにロクロナデの凹凸が著しく、底部外面に指頭圧痕がある。鉚目は無いが、凸部がわずかに磨れている。珠洲Ⅱ期と考えられるが、I 期まで遡る可能性もある。

SD180 (図版 38・77-8～18) 8～10 は須恵器である。8 は横瓶の口頸部で、頸径 9.7cm で、内面の接合部に面を持つ。外面平行タタキ、内面同心円あて具痕で、内外面に少しだけ自然釉がかかる。9 は甕の体部片で、器厚は 1.3cm である。外面平行タタキ、内面上半は同心円あて具痕だが、下半は磨り消されているため不明である。10 も甕の体部片で、器厚は 1.0cm である。内面同心円あて具痕で、外面平行タタキ後のカキメが認められる。

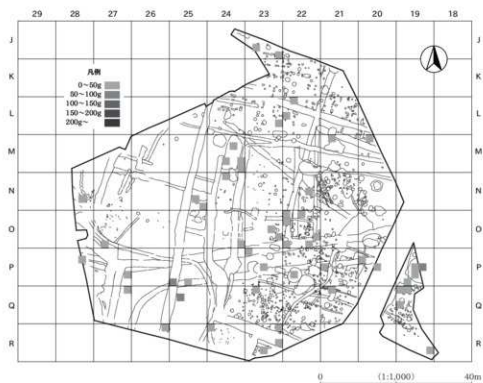
11 は青磁碗の底部に近い体部片である。釉薬に貫入が多く、厚みも薄い。胎土も灰色に近いので、中世の溝に混入した唐津の皿の可能性もある。

12～15 は珠洲焼である。12 は甕の口縁部で、口縁端面がわずかに凹状になる。頸部で短く屈曲し、端部が水平方向に外方へ引き出される形態で、珠洲Ⅲ期ころと考えられる。13 はロクロ成形 (R 種) の壺の底部と考える。底径 7.5cm で、底面は板目状圧痕にも見えるが、方向がランダムであり不明である。外面はロクロナデ後、器面調整のためか、縦方向のケズリが施される。14 は片口鉢の片口部で、口縁端部は上方に凹状の面を持つ。鉚目は 2 単位確認されるが、欠損しているため全容は不明で、現状では 1 単位 (幅 1.7cm) 6 条まで確認できる。15 は片口鉢の底部で、底径 14.2cm である。指頭圧痕と思われるものが、底部外面にある。底面には複数方向の板目状圧痕が認められ、周縁がやや高く、中央部が上げ底状になる。

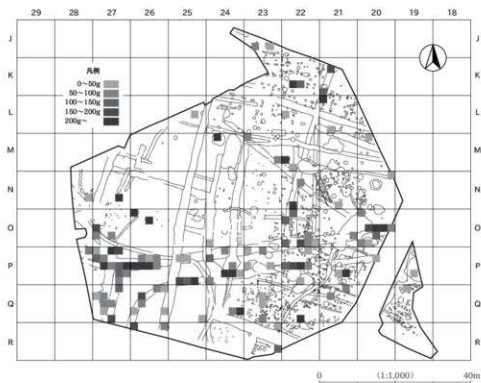
2 遺物各説



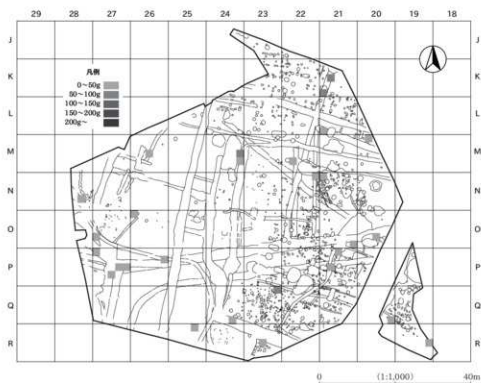
第9図 須恵器 出土重量分布図



第10図 土師器 出土重量分布図



第11図 珠洲焼 出土重量分布図



第12図 土師質土器 出土重量分布図

卸目は良く残るが、見込み部の厚さは1cm弱と薄い。1単位(幅2.6cm)16条の卸目が、放射状に3単位認められる。

16～18は土師質土器の皿で、すべてロクロ成形であり、底面は回転系切り痕が残る。16は底径6.9cm、体外外面の底部付近がケズリにより2段の面を持つ。17は底径7.1cm、体部と比べて底部が厚い。18は推定底径6.6cmで、内面は体部と底部の境が明瞭でなく、なだらかに立ち上る。

SE261(図版38・77-19) 19は珠洲焼片口鉢で、同一個体と思われる破片が遺構や包含層中に散在する。焼成が悪くて器面が荒れており、接合部も少なかったため、復元実測を行った。口縁端面はやや外方を向く。推定口径29.8cm、底径14.0cm、器高13.0cmで、底面は静止系切りである。底面中央がやや上げ底状になる。卸目は1単位(幅2.5cm)14条が確認できる。珠洲Ⅲ期～Ⅳ期と考える。

SE304(図版39・77-20) 20は珠洲焼片口鉢の底部で、底径13.0cmである。底面は静止系切りで、底面周縁及び底部外面幅1.2cm程が磨けて滑らかである。外面底部付近に指頭圧痕がある。卸目は1単位(幅2.5cm)16条で、見込み部では磨り消えている部分もある。珠洲Ⅳ期ごろと考える。

SE443(図版39・77-21) 21は青磁碗の体部片で、広弁な鎗蓮弁文が確認できる。中央の稜は明瞭である。

SD500(図版39・77・78-22～33) 22～26は須恵器である。22は杯蓋で、つまみ部径3.4cm、扁平な擬宝珠形を呈する。23は有台杯の底部で、底径8.0cmである。回転系切りで高台部付近にナデが認められる。高台は断面方形、端面は平坦～凸状で、内端接地している。24は高杯の脚部と考えるが、受け部内面は起伏があり、ナデも直線的である。外面は脚部を取り巻くようなロクロナデが認められる。25は長頸壺の底部で、底径11.8cmである。高台外面は緩く湾曲し、端面は平坦で、外端接地気味となる。26は甕の体部片で、器厚は1.3cmである。外面のタタキは擬格子、内面は明瞭でないが、平行+同心円あて具痕と考える。

27・28は青磁である。27は推定口径16.6cm、広弁な鎗蓮弁文の碗で、中央の稜は明瞭である。口縁端面内面がやや外反し、細く取まる。28は碗の体部で、口縁部付近である。軸は貫入が多く、厚みも薄い。端反碗の一部と考える。

29～33は珠洲焼である。29は甕の口縁部で、端部は外方に張り出し、端面がやや凹状になる。全体的に方頭状で、珠洲Ⅲ期と考える。30は甕または叩き成形(T種)の大壺の体部片で、ロクロナデ状の凹凸があるため、平行タタキが凹部まで届かず、あたかも横位の沈線を施したように見える。31は甕の底部で、底径14.6cmである。内面は凹凸も少なく、非常に滑らかである。底部外面付近は、斜方向に平行タタキを巡らせ、その後、やや水平方向に叩く。タタキの稜は鈍角で、珠洲Ⅳ～Ⅴ期と考える。底面周縁に幅1.5cm程のすれが認められる。32は片口鉢の口縁部で、外端部が面取りされ、内面が沈線状に凹む。内面右下隅に、卸目がわずかに確認できる。植物根状の暗褐色付着物がある。33は片口鉢の口縁～体部で、推定口径33.2cmである。内面に卸目は認められないが、下半が良く磨れて滑らかである。口縁端面は平坦で、外方を向く。32・33ともに珠洲Ⅱ期またはⅢ期と考える。

SE504(図版39・78-34) 34は珠洲焼甕の体部で、底部付近と思われる。全体的に歪んでおり、器厚は2.1cm前後と厚い。外面平行タタキである。

SK521(図版39・78-35) 35は珠洲焼片口鉢の口縁部である。つくりは粗雑で、焼成も悪いためか赤褐色を呈する。口縁部がわずかに外傾して、内側に面を持ち、端部は丸く取まる。外面の口縁部下3.5cm程の位置に沈線が巡る。口縁内面に波状文があり、1単位(幅1.4cm)7条まで確認できる。また、卸目

は1単位(幅1.9cm)8条まで確認できる。口縁部の屈曲こそ異なるが、SE622出土の38と同一個体の可能性がある。珠洲のVI期と考える。

SE621(図版39・78-36) 36は須恵器有台杯の底部で、底径7.4cmである。底面は高台付近が磨りのため判別しづらいが、回転糸切りと思える。高台断面は方形で、端面がわずかに凹状で外端接地する。

SE622(図版39・78-37・38) 37は青磁碗の口縁部で、外面の口縁部と体部の境は、凹凸により波状を呈する。蓮弁文の退化したものか、38は珠洲焼片口鉢の口縁-体部で、推定口径31.8cmである。口縁は外方に屈曲し、口縁端部は外側に折り返されたように肥厚する。口縁は内側に面を持ち、1単位(幅1.8cm)10条の波状文が施される。鉾目は重複しているので単位が把握しづらいが、1単位(幅2.8cm)11条程度に見える。口縁波状文と鉾目で、施文する櫛歯状工具が異なる可能性がある。SK521出土の35と同様に、赤褐色系を呈して造りは粗雑である。同一個体の可能性もあり、同様に珠洲VI期と考える。

P645(図版39・78-39) 39は珠洲焼甕の体部片で、外面平行タタキが交差している。

SD695(図版39・40・78-40~46) 40・41は須恵器である。40は無台杯の底部で、底径8.8cm、体部は丸みをもって立ち上る。胎土はやや軟質で白っぽい。底面は回転ヘラ切りである。41は甕の体部片で、外面格子タタキ、内面格子あて具痕である。器厚は8mm弱と薄い。

42は青磁の端反碗である、口径は14.2cm。軸はかなり薄い。

43~46は珠洲焼である。43は甕または大壺の口縁-体部で、頸部が短く、体部の張り出しは緩やかである。口縁は方頭状に近く、端部はやや上方に引き出される。珠洲IV期またはV期と考えるが、外面のタタキの角(稜)が鋭角的であり、珠洲IV期以前と考えたい。44は甕の体部片で、焼成はやや軟質である。外面は平行タタキにより綾杉状を呈する。珠洲III期~IV期と考える。45は片口鉢の口縁部で、現状では鉾目は認められない。上方の口縁端面(口唇部)に、1単位(幅0.6cm)3条の波状文が、途切れがちに施文される。口縁端面が外方を向き、端部が外側に引き出されており、波状文もあることから珠洲I期ころと考える。46は片口鉢の底部で、底径は13.0cmである。内面凸状部は良く磨れて、滑らかである。底面はやや上げ底状で、静止糸切り痕+板目状圧痕が認められる。1単位(幅2.6cm)13条の鉾目が、放射状に8目認められる。

P700(図版40・78-47) 47は須恵器有台杯で、口径14.4cm、底径10.0cm、器高4.3cmである。焼成は体部が硬質だが、底部はやや軟質になっている。底面は、回転ヘラ切り+ナデだが、劣化により不明瞭である。体部は直線的で、徐々に厚みを減しながら端部で丸く収まる。高台は内端接地で、端面は平坦~やや凸状である。関川右岸産で、春日Ⅲ2期(8世紀前半~中ころ)と考える。

P822(図版40・78-48) 48は珠洲焼甕の体部片で、外面は平行タタキにより綾杉状を呈する。珠洲III期~IV期と考える。

P905(図版40・78-49) 49は珠洲焼甕の口縁部で、頸部が短く屈曲する。内面は鈍角な稜があるが、全体的に緩く湾曲する。珠洲IV期~V期ころと考える。

SE931(図版40・78-50) 50は須恵器横瓶の体部片で、推定径は18.4cmである。外面は平行タタキ+カキメ、内面は同心円あて具痕であり、内外面に自然軸が付着する。

SD938(図版40・78-51) 51は須恵器杯蓋で、口径12.7cmである。口縁端部は屈曲して外方へ向き、内面が外反して細く収まる。内外面に斑状に自然軸が付着する。

SE1001(図版40・78-52) 52は珠洲焼で、底径12.2cmである。鉾目は確認できないが、一部が良く磨れているため、片口鉢と考える。底面の切り離しは静止糸切りと思われるが不明瞭で、板目状圧痕が

認められる。

SD1022 (図版40・78-53) 53は珠洲焼片口鉢の片口部で、卸目は認められない。口縁端部は内傾気味に上方に引き出され、端面は外を向く。端面から外面にかけて、整形によると思われる、カキメにも似た平行の線条痕がある。内面には薄く自然軸が付着する。

SD1023 (図版40・78-54) 54は珠洲焼片口鉢の体部片で、曲線状の卸目が一部だけ見られる。内面は自然軸が薄く付着する。珠洲Ⅰ～Ⅱ期と考える。

SE1024 (図版40・78-55・56) 55は珠洲焼で、器壁は薄いが、片口鉢と考える。底径12.6cmとやや小型で、卸目は認められない。ロクロナデが良く残り、底面は静止糸切りである。珠洲Ⅰ～Ⅱ期と考えるが、Ⅱ期で静止糸切りが大半となる状況を考えれば、Ⅱ期の可能性が高い。

56は土師質土器の小皿で、口径9.6cm、底径4.0cm、器高2.0cmである。手づくね成形で、口縁部内外面はナデられ、緩い稜を持つ。

SD1027 (図版40・78-57) 57は珠洲焼甕の体部片である。外面の平行タタキは幅広く、稜も緩やかなものが多い。珠洲Ⅳ～Ⅴ期と考える。

SE1028 (図版40・78-58) 58は珠洲焼壺(R種)の底部で、内面にロクロナデが明瞭に残る。器厚は体部に比べて底部が薄い。底径8.8cmで、底面は静止糸切り痕が認められる。

SD1031 (図版40・41・78-79-59～69) 59は須恵器横瓶の口縁部で、口径11.2cmである。ロクロナデ+ナデで、口縁端面は上方を向き、端面は凹状になっている。内面の体部との境は、接合時の胎土が厚く残る部分がある。外面に自然軸が少量付着する。

60は土師器碗の口縁部で、口径13.4cmである。器壁がやや厚く、土師質土器の皿の可能性もある。

61は珠洲焼甕の口縁部～体部である。やや歪みがあるため正確な口径を出すことができなかったが、46.2cm前後と考えて実測した。頸部は「く」字状に大きく屈曲し、体部は緩やかに湾曲して下方に向かう。頸部内面は面を持たない。口縁端部は水平～やや下向きに延び、端面は緩い稜を持って湾曲する。外面のタタキは、縦方向に4cm前後の幅を保って、境(交差部)が認められる。珠洲Ⅳ期ころと考える。

62は珠洲焼甕または大壺(T種)の底部近くの体部片である。外面は平行タタキで、綾杉状を呈する部分もある。タタキの境は縦方向よりも、左下がりの斜方向に並ぶ。内面はあて具痕のほかに、横～斜方向のナデが認められる。珠洲Ⅳ期と考える。

63～66は珠洲焼片口鉢である。63は推定口径32.8～34.0cm、底径11.0cm、器高10.9cmである。卸目は放射状に施され、1単位(幅1.6cm)約10条が認められる。原体を斜めにして施しているところもあるので、単位が分かりづらく、特に卸目端部は顕著である。外面にも施文具が触れたと思える部分がある。体部は直線的で、口縁部の内湾が弱く、端部がわずかに上方につまみ上げられる。端面は平坦～やや凹状となっている。底面は静止糸切りとなっており、珠洲Ⅱ期ころと考える。64は体部で、傾きは同時期と考える63と合わせた。卸目が1単位(幅0.6cm)3条確認できるが、SE1057出土の78と同一個体の可能性もあり、1単位(幅1.8cm)10条の原体を斜めに施文したものかもしれない。65は口縁部である。卸目は幅広く、1単位(幅3.0cm)10条以上が2単位確認できる。口縁端面は内側を向き、端面に4条以上の波状文が施される。珠洲Ⅴ期と考える。66は底部で、底径は12.4cmである。卸目は1単位(幅2.8cm)9条以上で、内面は良く磨れて滑らか、底面は静止糸切りとなっている。

67～69は土師質土器の皿で、形態こそ異なるがすべて手づくね成形である。67は口径12.6cm、ナデと外面下方に指頭圧痕が認められる。口縁端部は上方を向き、やや外方に面をなす。68は口径

12.4cm、体部は緩く湾曲して立ち上り、端部で弱い稜を持つ。69は推定口径9.4cmとやや小型で、体部が緩く湾曲する。

SD1032 (図版41・79-70～77) 70～76は須恵器である。70は口径10.6cmの杯蓋で、つまみ部を欠損する。口縁端部は短く屈曲して内傾し、端部は丸く収まる。71～73は有台杯である。71は推定口径14.1cm、内面下端部に屈曲が見られることから、身はほぼこの深さと思える。直線的な体部は徐々に厚みを減じ、やや尖り気味に収まる。72は底径7.4cmで、体部は弱い稜をもって立ち上る。底面は回転ヘラ切りで、高台部は内端接地する。内面に自然釉が厚く付着しており、重ね焼き時に一番上に置かれていた可能性がある。73は底径7.0cmで、体部は急斜度で立ち上る。底部に比べて体部の器厚が薄い。底面は回転ヘラ切りと思われるが、ナデ消されたものかもしれない。高台は断面方形で、端面はやや凹状～平坦を呈し、外端接地する。製作後に棒状のものの上に置かれたためか、高台の一部に潰れた跡が認められる。74は無台杯で、口径12.0cm、底径8.6cm、器高3.8cmである。体部の立ち上りは緩やかで、直線的に延びて端部で丸く収まる。底面は回転ヘラ切りの無調整で、板状圧痕とは少し異なる、方向が不揃いな直線状の圧痕が複数認められる。75は底部に近い甕の体部片で、外面は平行タタキ、内面は同心円あて具痕が見られる。内面は右→左、下→上方向への切り合い関係が認められる。76は甕の体部片で、外面格子目タタキ、内面平行あて具痕である。

77は青磁の竈蓮弁文の碗である。口径15.4cm、蓮弁は広弁で、中央の稜も明瞭である。左側の破損面に補修の漆が付着する。

SE1057 (図版41・79-78) 78は珠洲焼片口鉢の体部で、傾きは同時期と考える63と合わせた。卸目は器面に対して垂直に施されており、単位が分かりづらい。1単位(幅1.8cm)10条まで確認できる。珠洲Ⅱ期ごろと考える。

SD1071 (図版41・79-79～81) 79は須恵器有台杯の底部で、底径7.8cm、底面は回転ヘラ切りである。断面方形の高台は、低くて幅が広く、端面はわずかに凹状を呈する。80は須恵器長頸壺の頸部で、頸部最小径は7.1cmである。接合部は丁寧にナデ消されている。81は珠洲焼甕の体部片で、底部に近い部分と考える。外面は右下がりの平行タタキで、タタキの稜は鋭角的である。珠洲Ⅳ期と推測され、SD1031出土遺物と接合していることから、61と同一個体の可能性もある。

SE1105 (図版42・80-82～85) 82は須恵器の杯蓋の体部で、口径は推定でも12cm弱である。83・84は須恵器甕の体部片で、ともに外面平行タタキ、内面同心円あて具痕である。84は下→上方向への切り合いが認められる。85は珠洲焼甕の口縁～体部で、推定口径53.2cmである。頸部は「く」字状に屈曲し、頸部内面に緩やかな面を持つ。口縁部はほぼ同じ厚みで、斜め上方に延びて丸く収まり、端面は形成されない。体部は頸部から緩く湾曲しながら肩部に至り、肩部以下はほぼ急斜度で下がっていく。外面の平行タタキも、頸部～肩部は水平方向だが、肩部以下は右下がりの斜方向に変換していく。珠洲Ⅳ期(1280～1310年代)と考える。

SE1106 (図版42・80-86) 86は土師質土器の手づくね成形の皿で、口径10.3cm、現存高2.1cmである。口縁部は内外面ともに、丁寧な横方向のナデが見られる。体部外面は底部との境からほぼ直線的に延び、口縁部でわずかに反外する。内面は緩く湾曲しながら口縁部で屈曲し、上方に面を持つ。15世紀中～後半の、京都系の皿と考える。口縁上面に暗褐色系の付着物が少量あり、灯明皿としての使用が想定できる。

P1148 (図版42・80-87) 87は須恵器長頸壺の頸部で、頸部最小径(体部近く)は10.0cmである。

器厚は1.2cmと厚い。内外面のほぼ全面に自然軸が付着する。

2) 近世以降の遺構から出土した中世以前の遺物

KR50 (図版42・80-88・89) 88は土師器の椀で、推定口径18.8cmと大型で、鉢の可能性もある。しかし体部の器厚は薄く、口縁端部が肥厚し、玉縁状になっている。89は同心円状のロクロナデがあり、蓋としての可能性も考えたが、厚みがあるため土師器の皿または鉢の底部と考えた。胎土は88と近似しており、同一個体の可能性も残す。

SE78 (図版42・80-90) 90は珠洲焼甕の体部片で、外面平行タタキの稜は鋭角である。自然軸が付着する。

P241 (図版42・80-91) 91は須恵器有台杯の底部で、底径6.6cmである。高台端面は凹状で、内端接地する。

SD267 (図版42・80-92) 92は土師質土器の皿で、口径12.1cm、現存高1.9cmである。内面はなだらかな直線状だが、外面は口縁部と体部の境に段が認められる。器面が風化して調整不明だが、手づくね成形のものと考えられる。

KR275 (図版42・80-93) 93は須恵器の壺・瓶類の口縁～体部で、推定口径19.4cmである。口縁端面はほぼ真上に向き、やや凹状を呈する。口縁内外面は横ナデされるが、外面には、その前段階で施されたと思われる右下がりの平行な凹凸が幾つか認められる。体部に施す平行タタキにも似ている。体部内面は同心円状で具痕があるが、外面はナデにより不明である。広口壺とも考えたが、滝寺古窯跡群〔小田2006〕出土遺物に近似する、短頸長胴壺の可能性もある。

SX407 (図版42・80-94) 94は瀬戸美濃焼の緑釉小皿で、推定口径11.4cmである。体部下半に無釉の部分がある。古瀬戸後期様式の15世紀後半ごろと考える。

SD561 (図版42・80-95) 95は珠洲焼甕の口縁部で、「く」字状に大きく屈曲する。口縁端部は肥厚し、断面台形状を呈する。また、口縁内面は緩く湾曲する。珠洲IV₂～IV₃期ごろと考える。

SX616 (図版42・80-96) 96は土師質土器皿または土師器小甕の底部で、底径5.1cmである。割れて細片化しており、底面の調整は不明である。

SDB31 (図版42・80-97) 97は土師器鉢の口縁部で、推定口径26.3cmである。ロクロナデと思われる。

SD1008 (図版42・80-98) 98は珠洲焼片口鉢の底部で、底径10.6cmである。底面の約三分の一が残存するが、卸目は認められない。内面はロクロナデが明瞭に残るが、凸状部にも磨れの痕跡はない。底面は静止糸切りで、板状正痕も付く。珠洲I～II期と考えるが、底面の痕跡からII期の可能性が高い。

SK1044 (図版42・80-99) 99は珠洲焼片口鉢の底部で、底径16.2cmである。卸目は密で、ほぼ全面にあり、単位等は不明である。見込みは使用によりかなり磨り減っており、卸目も消えている。底面は静止糸切りだが、条痕の幅が広いので、太い糸を使用したものと思う。珠洲V期以降の所産であろう。

SD1045 (図版42・80-100) 100は須恵器無台杯の底部で、底径6.0cmである。底面は回転糸切りの無調整で、底部が厚くて高台状を呈する。体部は底部との境で屈曲を持って立ち上る。

SK1124 (図版42・80-101～103) 101は須恵器有台杯の底部で、底径5.6cmである。高台は断面逆台形状で、端面はやや凹状である。102は青磁の端反椀で、推定口径15.1cm、軸は白色が強く、内外面ともに無文である。103は手づくね成形の土師質土器の皿で、口径20.2cm、底径15.2cm、器高3.9cmである。底部調整は、剥落したためか、風化のためか器面が荒れており、不明である。円盤状の底部に体

部を接合する製作技法で、その接合痕が明瞭に残り、体部下半にも押しえによる指頭圧痕が幾つか認められる。そのため、体部外面は上半の横ナデと、下半の指頭圧痕部で段を形成している。体部内面は緩く湾曲し、口縁部は内側に折り畳まれて肥厚する。類例がなく、年代も不明であるが、近世以降のものや瓦器と胎土が異なるため、現段階では中世のものと考えたい。

SE1110 (図版 43・80-104・105) 104・105 は須恵器の甕で、104 が口縁～体部、105 が口縁部である。同一層から出土し、同一個体の可能性もあるが、観察できる範囲では内面のあて具痕が異なる。104 の口縁部は徐々に肥厚し、頸部付近で最大厚となる。外面は格子目のタタキで、頸部屈曲部から 2.5cm 離れた位置から認められる。内面はランダムで分かりづらいが、平行または放射状のあて具痕と考える。105 の体部内面のあて具痕は、同心円と思われる。外面上部の 1.2cm 幅の位置に、横方向の 3 条の波状文が認められる。

用 水 2 (図版 43・80-106～108) 106 は土師器の底部で、底径 6.3cm である。底面の調整は不明で、器厚が比較的厚く感じるが、小壺と考えた。107 は青磁の稜花皿で、口径 11.8cm である。稜は緩く、体部下半で屈曲して底部へと続く。体部内面に 2 条の沈線文が横位に巡る。15 世紀ころの製品である。108 は珠洲焼片口鉢の体部片である。内面には、左下隅に 1 単位 (幅 0.5cm) 3 条の卸目と、上部 2 か所に印花文が認められる。片口鉢への印花文の施文という点から、珠洲Ⅱ期と考える。

用 水 3 (図版 43・80-109) 109 は土師質土器の小皿で、口径 7.5cm、底径 4.0cm、器高 1.8cm である。底面は粘土が新たに貼られて (磨り付けられて) 不明瞭だが、回転系切りと考えられるため、ロクロ成形であろう。丁寧な作りである。口縁端部は外方に面を持っている。近代まで使用されていた用水から出土したもののだが、胎土や形態から 12 世紀第 4 四半期と考えたい。

土 壘 (図版 43・80-110-111) 110 は須恵器の無台杯で、底径 4.6cm である。底面は回転系切りで、体部は皿のように大きく直線的に開く。111 は近世の遺物であるが、土壘関連の遺物として、ここで報告する。肥前陶器の播鉢の口縁部で、推定口径 34.2cm である。内面は緩やかに外反し、外面は体部との境に段を持つ。盛土下のⅡ層からの出土で、18 世紀ころと考える。

3) 遺構以外から出土した中世以前の遺物

須 恵 器 (図版 43・80・81-112～123) 112・113 は杯蓋である。112 はボタン状のつまみで、径は 2.6cm である。113 は推定口径 17.2cm で、口縁端部は短く、垂直に屈曲する。焼成時の気泡膨れが多く、端部以外は形状があまり保たれていない。114～119 は有台杯である。底面の切り離しは、114・115・117 が回転系切り、116・118・119 が回転ヘラ切りである。高台の形状は様々で、116・117・119 が断面三角または撥状で、115・118 は逆台形状に近い。114 はその両者の中間形態を呈する。115 は杯身部の底面が柱状高台のように張り出して製作されており、その周囲に高台を貼り付けている。高台の貼付け位置は、回転系切り底がやや中央寄りだが、回転ヘラ切り底が外周部に近い位置などの傾向がある。

120 は長頸壺の頸部～肩部で、外面全面に薄く自然軸が付着する。121 は横瓶の閉塞部で、直径約 10.5cm である。同心円状のカキメが認められ、自然軸が外面は液だれ状に、内面は全面に付着する。122 は瓶類の底と考えた。内面のロクロナデは明瞭であり、袋物の様相を呈する。外面は底面に相当する部分以外は同心円のカキメが認められる。123 は甕の体部片で、外面平行タタキ、内面同心円あて具痕である。

土 師 器 (図版 44・81-124～129) 124・125 は碗である。124 は推定口径 24.0cm あり、鉢でもよ

い、88・89とサイズや胎土等、共通するものが多い。125は口径15.5cm、体部が緩く湾曲し、口縁部付近でわずかに外反する。126～129は小甕で、底面調整はすべて不明である。底径は126～128が5.1～6.3cmとほぼ同じく、129が推定で9.2cmとやや大きい。

青磁(図版44・81-130～132) 130は椀で、軸は貫入が多くて薄い。推定口径は12.9cmで、外面に浅くて細い筋引きの線が縦方向に見える。131は椀の底部で、高台径が5.8cmである。削り出しの高台で、畳付きのほぼ中央に線を付す。高台内側と底面以外は軸葉がかかる。周縁は人為的に打ち欠かれたものであろう。132は壺の頸部で、ロクロナデが明瞭に残る。軸葉は外面のみにかかる。

瀬戸美濃焼(図版44・81-133) 133は口径10.9cmの折縁の小皿で、全面に緑釉がかかる。受け口状でその上面に軸葉が厚くかかり、色調も濃い。16世紀後半ごろと考える。

珠洲焼(図版44・81-134・135) 134は甕の体部片で、外面は平行タタキにより綾形を呈する。やや軟質で、44と似ている。135は片口鉢で、推定口径24.0cmである。内面は良く磨れており、卸目が消えかかっている。卸目は1単位(幅1.5cm)5条までは確認できる。体部は直線的で、口縁部でやや内湾する。口縁端面は内側を向き、波状文等は施されない。珠洲V期と考える。

土師質土器(図版44・81-136・137) 136は口径17.2cm、底径14.6cm、器高2.2の大型の皿である。手づくね成形で、底部より体部が厚く、端部に向かって徐々に薄くなる。137は口径15.0cmで、器形は整っており、ナデも明瞭だが、手づくね成形と考える。厚みこそ異なるが、136同様に体部より底部の器厚が薄い。

4) 近世の陶器・瓦器

下割遺跡V及びVIからは、多量の近世の遺物が出土した。重量別では、越中瀬戸焼4,322g、越前焼36,101g、瓦器類6,624g、それ以外の近世陶磁器82,982gが出土している。肥前系の陶磁器が大半を占めているが、その中でも、北陸地方に生産地がある越中瀬戸焼と越前焼が一定量出土したことから、今回特に報告する。

越中瀬戸焼(図版44・45・81-82-138～157) 越中瀬戸焼の器種では、皿(138～142)・広口壺(143～156)・播鉢(157)が出土している。県内における越中瀬戸焼の分布は、上越地域から柏崎市平野周辺までを主体とし、中越～下越では海側を中心に散見される。

皿の口径は8.4cm(138)～11.8cm(139)と10cm前後が基本で、底面はすべて回転糸切りとなっている。体部が緩く湾曲してそのまま抜ける138のタイプと、体部が直線的に延び、口縁部で外反する139・140のタイプに分けられる。前者は丸皿、後者も口縁部の外反が弱いので折縁皿よりは丸皿に分類できる。軸葉は口縁部～体部の内外面を中心にかかけられているが、141のみ内面全面に軸葉が認められる。

143～156は口縁部が短く屈曲する小型の壺で、「広口壺」に分類できる。「広口壺」は、「器高が5～10cm程度で、胴部に最大径を持ち、頸部と胴部の境で捻れたのち、直立あるいは外反気味に立ち上る短い頸部を持つタイプ」と定義され、17世紀中ごろから見られるようである[相羽2003]。ロクロ成形され、底面の切り離しはすべて回転糸切りである。鉄軸は基本的に内外面の全面にかかっている。出土点数は多いが、口縁～底部まで接合する資料は少なく、全形を把握できるのは154だけである。154は口径10.6cm、器高9.1cm、底径11.2cmである。サイズ、口縁形状、胴部最大径の位置等で細分可能であるが、今回は分類をしていない。図示したものは、口径7.4cm(150)～11.8cm(153)、底径7.5cm(156)～11.2cm(154)の範囲に収まり、口径と底径の数値に大きな差は認められない。胴部最大径は

上位に持つものより、ほぼ中位に持つものが多いようである。[相羽 2003] 編年表を参照すると、①口縁部：長めで直立～内傾気味→短くて直立～外傾気味、②口縁の厚み：端部が肥厚→均一、③器高：高→低（径高指数の低下）、④胴部最大径：上位～中位→中位、⑤肩の張り出し：屈曲→湾曲など、おおまかな形態変遷の傾向が窺える。当然、器形のばらつきはあるだろうから、一方通行の変化とは考えていない。それでも、146・151・152などは、古い様相を見せ、17世紀後半に位置付けられるものであろう。また、全体的に寸詰まりで、特に底部の厚みを増した149・154のような器形は、新しい様相で、19世紀前半に位置付けられるものかもしれない。溝出土以外で肥前系陶磁器と共存したのはSE65（144～146）出土遺物のみで、17世紀後半～18世紀前半の年代が与えられる。

播鉢が1点だけ出土した。157は口径31.2cmで、体部は直線的に伸び、口縁端部で肥厚して上方に面を持つ。内外面に鉄軸がかけられ、卸目は1単位（幅2.5cm）11条である。

唐津焼（図版45・82-158）甕を1点だけ図示した。表土（1層）掘削中、地表下30cm下で正位の状態で見出したもので、屋敷の盛土内（明治以降の造成）に設置されていた。中には多量の炭が詰められていたが、ほかに人工物は出土しなかったため、性格は不明である。近世の遺物が近・現代まで雑器として使用されていた一例となる。底径20.9cm、現存高30.3cmで、内外面に鉄軸がかかる。外面に横位の沈線が数条、体部内面及び見込みに粗い格子目のあて具痕が認められる。体部内面のあて具痕の端部は曲線状の起伏があり、その形状から円形を呈した工具であったことが分かる。

瓦器（図版45・82-159）瓦器や中世以外の土師質と思われる土器類は、総量6,624g出土した。その内、全形が把握できる資料を1点図示した。159は台付鉢で、口径19.5cm、底径13.9cm、器高17.2cmである。獅子頭の持ち手が1対付く形状と思われ、入組み状の突起で縁取られる。内面はハケメにより、丁寧に調整されている。外面の体部文様は、上下を2段の菱形文で区画され、その内側に獅子頭周辺に巻文が配され、それ以外は松竹梅や草花等で装飾されている。

越前焼（図版45・46・82・83-160～170）越前焼は、中世以前と考えられるものは無く、すべて近世中期以降のもので、器種は甕と鉢が出土した。[木村 2004]・[楠 2003]を参考に、形態的な特徴を比較したが、大きな時期差を認めることはできなかった。18世紀後半～19世紀前半のものと考えたい。

160～165は甕である。[木村 2004]の分類によると、「大甕」には口径70cm以上、器高90cm以上が該当するため、それ以下のサイズである下割遺跡例は、すべて「中甕」に分類される。さらに中甕は、太鼓形の体部を持つAタイプ（162）、倒錐形の体部のBタイプ（161・165）に分けられる。Aタイプは、「口径30cm～50cm前後・器高60cm前後を測る」とされており、162の推定口径38.0cmは、ほぼ平均的な値を示す。Bタイプは、「器高に対して口径が大きくなる」とされており、162・165ともに矛盾しない。160は口縁端部外面に1条の沈線が巡り、2段の突起状を呈する。口縁端部はやや隆起し、凸状となっている。161は口縁端部が断面三角状に肥厚し、端面は波板状（波頂2つ）となっている。底面は比較的平らで凹凸が少ないが、一部窪んでいる部分に、焼成前の貼付けが認められた。設置時に安定させるためであろう。煤状の炭化物が付着しているが、使用痕か火事などの被熱かは不明である。外面底部付近には縦方向に3～4字が墨書されている。1字目は「米」の可能性もあるが、不明である。162は口縁端部が肥厚し、上方に平～やや凸状の面を持つ。端部のみ外方へ引き出されるが、残存するのは一部のみで、ほとんどが意図的に打ち欠かれている。163は底部で、軸葉の色調や胎土が162と似ることから同一個体の可能性がある。164の底部は焼き歪みが大きいもので、底部外面付近の2か所に縦方向の墨書が認められる。一方は正位の状態で「二口内」または「二口門」と読める。もう一方は逆位の状態で、

161と似た字が認められる。

165は22P12から出土したもので、底部が正位に据えられ、口縁部や襷が内部に落ち込んでいた。また見込みに近い部分から、銭貨(234・235)2枚(寛永通寶・銭種不明)が出土した。口縁～体部まで接合する部分はなかったが、復元したサイズは、口径69.8cm、器高66.4cm、底径24.4cmと大型で、「大甕」に分類してもよいかもしいない。また、この底面には当初から亀裂が入り、漆で補修して使用していたようである。大型甕と銭貨のセットは、墓としての機能が想定されるが、骨などの痕跡は認められなかった。金沢市野田山墓地の調査によると、18世紀代の土葬専用棺として越前系陶器の甕が使用されている[楠2003]。口径60cmを越えると成人男性が多いという傾向も示されている。下置跡例が甕であった確認は無く、またこのような出土状況はこの1点だけであった。そのほかの遺構からも集団墓地を示すような様相は無く、墓とすれば単独の屋敷墓であろう。

166～170はロクロ成形の鉢で、18世紀末葉ころから多く生産されるようである。[木村2004]の分類によると、鉢はA・Bの2種に分けられる。166・167は鉢Aで、「底部から直線的に立ち上がり、口縁が折り返されるもの」である。168～170は鉢Bで、「底部から内曲的に立ち上がり、口縁下に強いくびれを持つもの」である。口縁部でさらに細分しており、時代が降るにつれて、口縁端部が外下方に引き伸ばされる傾向がある。鉢Aでは166が18世紀末、167が1830年代以降に位置付けられる。鉢Bでは、169・170が19世紀前半、168は1830年代以降に位置付けられる。167は底面～体部にかけて三脚状の突起が張り出し、中央には意図的に円孔を空けたような磨れが認められる。植木鉢への転用か。また半分に割れた後、漆で補修されている。168は口縁端面に波状の起伏がある。170も167同様に、三脚を意識したようなボタン状の粘土の貼付けが認められる。

B 土 製 品

土製品の出土はわずかであることから、遺構出土や包含層出土の区別をせず、器種ごとに記述する。

土 鐘 (図版47・84-171) 土鐘の出土は1点のみである。171は近世以降の攪乱であるKR20から出土した。中央がやや膨らみ、上下端とも面を持つ。長さ5.25cm、幅4.25cm、厚さは4.35cmである。孔径は1.7cmで、重量は74.2gである。

羽 口 (図版47・84-172・173) 172はSD500の1層から出土した。外径は6.2cmで、孔径は破片のため不明である。173はIII層から出土し、外径5.6cm、孔径は推定2.4cmである。いずれも外面は被熱のため灰色、灰白色を呈し、端部に融解したガラス質の付着物が認められる。

C 石 器 ・ 石 製 品

石製品は砥石や石臼、硯などが出土した。その多くは近世以降のもので、所属時期の決定が困難なものも多い。以下では遺構出土のものを中心に、器種ごとにまとめて記述する。

磨 石 (図版47・84-174) SE304から出土した。磨石としたが磨面は不明瞭で、敲打痕などは認められない。調査区内で自然礫は検出されないことから、遺跡周辺から持ち込んだものと考えられる。

砥 石 (図版47・84-175～187) 13点を図示した。178は古代の溝であるSD260から出土した。177、182～186は近世以降、187は時期不明で、そのほかは中世のものと考えた。形状は直方体状のものも多く、厚みを持つものと扁平なものに大別できる。いずれも擦痕や線状痕が認められる。石材は177・183・185が頁岩で、ほかはすべて凝灰岩である。完形品が少なく、本来の形状を知り得るものは

ほぼないが、175や184は長さが15cmを超え、本遺跡出土の砥石の中では大型といえる。177は欠損した上端側の角を取るように砥面が形成され、180は側面や裏面が不整形であることから砥石の破片と考えられるが、裏面の一部にも砥面が認められる。これらは折損した砥石を使用し続けたことを示すものと考えられる。179・181・186はよく使い込まれ、厚みの最も少ない部分は最大厚の半分が、それ以下である。185は正面側に線状痕が顕著で、中央が浅く皿状にくぼむ。186は正面1面のみ使用する。ほかの面は多角柱状に整形され、粗い工具痕がそのまま残る。

礮 (図版47・84-188・189) 2点を図示した。ともに時期不明だが、土器類の傾向から考えると、近世以降のものとする。188は上部と左側を欠損する。丘の平坦面は少なく、右下隅にわずかに残る。全体的に海側から左隅に向かって緩く下る。視面、裏面ともに砥石で良く観察できる線状痕が多く認められ、普通の墨の磨り方では形成されないような楕円形状のくぼみもある。右側の縁の欠損面も磨滅しており、墨痕は所々に残るが、砥石として転用された可能性が高い。189は携帯用と思われる小型の礮で、幅2.3cm、厚さ1.05cmしかない。上部の海と、右縁を欠損する。視面に墨痕がわずかに残り、縦方向の線状痕が認められる。裏面に文字と思われる線刻があるが、判読できない。

五輪塔 (図版47・84-190) 190は空輪で、安山岩製である。幅15cm、高さ11.7cmで、横断面は奥行きが約2cm短く楕円形に近い。

石臼 (図版48・84-191~194) 石臼は4点出土した。いずれも近世、あるいはそれ以降の所産と考えられる。石材はすべて安山岩である。各部位の名称は〔三輪1978〕を参考にした。191はP83から出土した下臼で、直径約30cmである。断面形は上面が張り出し、ふくみが確認できる。表面は摩滅が著しく、裏面は中央が大きく欠けて凹凸が目立つ。溝は周縁部まで刻まれ、6分画である。192、193はSE352から出土した。ともに破片であるが、溝の幅や粗密の差から別個体と判断した。直径は推定26~29cmである。周縁が1段高く、反対側の面に溝が刻まれることから上臼と考えられる。192は挽き木を固定するための打込孔が側面に認められる。194はKR20から出土した上臼である。直径は約30cmで、側面に打込孔が認められる。溝は周縁部まで刻まれるが摩滅のため不明瞭で、区画の数は不明である。ものくぼりの形状から、回転方向は反時計回りと考えられる。

D 木製品

木製品の出土は少量で、時期の不明なものも多い。大半は井戸から出土したもので、溝やピットから出土したものはわずかである。以下では遺構ごとに記述する。

SE30 (図版48・85-195) 下駄(195)が1点出土した。台部と歯部が一体のいわゆる連歯下駄である。表面は指圧痕が認められ、裏面は台部、歯部とも後方の摩滅が顕著である。

SE142 (図版48・85-196) 196は薄い板目板で、右側面には粗い削りが確認できる。表裏面は鋸で挽いたような、平行する線状の工具痕が全面に認められる。

SE396 (図版48・85-197) 197は板状木製品で、上部中央に穿孔が認められる。孔は円形で、直径は約5mmである。下半は工具によって乱雑に切断されているが、これは二次的な加工と推測する。

SD695 (図版48・85-198) 198は断面方形の棒状木製品で、下端は欠損する。正面には削り痕が認められる。

SD834 (図版48・85-199) 199は半円形を呈し、曲物などの底板に類似するが、半円の弧ではなく、弦の側面に木釘孔が3か所認められることから部材とした。下方の孔には長さ約2cm、幅3mmの木釘

が残り、釘頭部は楕円形を呈する。また、厚みは均一でなく円の中心に向かって薄くなる。裏面の側縁は摩滅が顕著で丸味を帯び、刃物による線状痕が認められる。

SE352 (図版 48・85-200～203) 200・201 は漆器椀である。200 は内外面に赤漆が塗布され、体部外面に稜を持つ。201 は身が浅く、体部内外面に赤漆、底部外面に黒漆が塗布される。いずれも横木取りである。202 は 5 か所に円形の穿孔が認められ、1 か所には直径 4mm の木釘が残る。表面はわずかに丸みがあり、裏面は平坦に仕上げられる。203 は台形状の部材である。側面には孔が認められ、長さ約 1cm、幅 4mm の木釘が残る。木釘の頭部は三角形に近い。

SE1001 (図版 49・85-204～221) 木製品の大抵は 3～4 層で出土し、遺構下半でまとまって出土した。204・205 は曲物の底板、206・207 は側板である。204 は表・裏面、側面の工具痕が明瞭に確認できる。204・205 ともに木釘孔は認められない。206 は下端に木釘孔が 1 か所認められる。207 は比較的大きな孔が穿たれており、若干厚みがある。曲物の側板としたが、異なる器種の部材の可能性もある。208～217 は箸状木製品である。箸状木製品は破片を含め、全部で 90 点出土したが、その内 12 点は完形である。また、破損したもののうち、48 点は端部の一方が確認できる。廃棄された時点ですべてが完形であったかどうかは言及しえないが、おおよその数は推測できよう。長さは 20.0～21.5cm にほぼ取まり、断面は方形、ないし多角形を呈する。218 は中央に抉りを持つ用途不明品である。この抉りは正面、左右側面には施されるが、裏面には施されない。また、ほかの面が丁寧に面取りされているのに対し、裏面は割り裂いたままとと思われる凹凸をそのまま残し、平滑でない。形状は木鏝に類似するが、小型で抉り部分に摩滅などは観察できない。219・220 は棒状木製品である。面取りは全面に施され、断面形は楕円に近い。219 は端部の一方を細く仕上げる。221 は板状木製品で、右側面は割れている可能性があるが、ほかは意図的に切断されている。一部炭化が認められる。

SE1057 (図版 49・85-222・223) 222 は左右の両端を欠損し、左端がわずかに段をなす板状の木製品である。左右両端と右、下側面に木釘孔が 7 か所認められることから部材とした。そのうち 4 か所には木釘が残る。木釘の頭部は円形で、直径 4mm 前後である。223 は棒状木製品で、下端は欠損するが、一部が削り取られ細くなる。

SE1105 (図版 49・85-224) 224 は上端を弧状に抉られた板状木製品である。完形と考えられるが、用途は不明である。

SE1183 (図版 49・85-225～227) 225 は漆器椀である。内面は赤漆が塗布され、外面は黒漆の下地に赤漆で草花文が描かれる。227 は下端を杭状に尖らせたもので、その先端はつぶれている。先端付近に 2 か所の穿孔が認められることから部材とした。孔は直径 4～6mm で斜めに穿たれており、裏面に向かって「ハ」の字に開く。

P1108 (図版 49・85-228) 228 は杭である。芯持ち丸木を用い、樹皮は認められない。上端に向けて細くなるが、人為的な加工によるものかどうかは判断できなかった。

用水 3 (図版 49・85-229) 用水 3 は明治以降の構築で、用水に關係する施設の一部、部材や土止め杭などを多数検出したが、中世の溝 SD1031 などと切り合い、中世や近世の遺物も少量混入する。229 は漆器で、器種は皿であろうか。横木取りで、内面は赤漆、外面は黒漆が塗布される。中世、若しくは近世の所産と推測する。

E 銭貨 (図版 50・86-230～250)

銭貨は21枚出土した。内訳は中世の渡来銭1枚、近世の寛永通寶(不明を含む)18枚、近代2枚である。中世の渡来銭は紹聖元寶(初鑄1094年)で、中世の井戸SE135の最下層から出土している。下割遺跡VとVIを合わせた調査面積は5,350m²であり、1枚は非常に少ない点数である。ちなみに西側の下割遺跡I・IIでは中世の居住域を検出しているので、その場と比較してみたい。下割遺跡Iは調査面積6,500m²で、中世以前の銭貨が⁴107枚あり、土坑一括出土の鎔銭97枚を除けば10枚(650m²/枚)となる。また下割遺跡IIは7,500m²で18枚(418m²/枚)出土している。このことから、今回の調査範囲は、集落の縁辺部であったことが想定できる。

寛永通寶は大半が用水3から出土している。出土した18枚の内訳は、通称であるが、古寛永2枚(231・232)、文銭1枚(233)、新寛永12枚(234～245)、波銭・四文銭3枚(246～248)である。234・235は埋喪(165)からの出土で、副葬品の可能性もある。249・250は「一銭青銅貨幣(桐)」に分類されるもので、250は昭和11年製造である。耕地整理事業(昭和32年)前まで機能していたと思われる用水3からの出土で、埋め立て年代とも符合する。

第VI章 自然科学分析

1 はじめに

下朝遺跡は高田平野の中央部、飯田川左岸の自然堤防上に立地し、標高は14mを測る。時代は古代、中世、近世である。古代の遺構では溝が検出され、遺物では少量の須恵器、土師器が出土している。中世の遺構では、井戸、土坑、溝、道路状遺構、ピットが検出され、遺物では珠洲焼、青磁などが出土している。近世の遺構では掘立柱建物、井戸、土坑、溝、ピットが検出され、遺物では陶磁器などが出土している。遺構・遺物から古代、中世は集落の縁辺部、近世以降は集落である。

本報告では、調査区内で検出された用水の年代を明らかにする目的で、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行う。また、下朝遺跡VIの調査で出土した木製品に対し、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行い、当時の木材利用の傾向について検討する。

2 放射性炭素年代測定

A 原理

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(^{14}C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約6万年前までの年代測定が可能である。

B 試料と方法

試料は、用水1(24O25)と用水2(25P20)から出土した杭材2点である。測定試料の情報、調製データは第3表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

試料名	対象物	種別	前処理・調整	測定法
No.1	用水1 24O25	木材(杭)	超音波洗浄、 酸-アルカリ一般処理	AMS
No.2	用水2 25P20	木材(杭)	超音波洗浄、 酸-アルカリ一般処理	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

第3表 測定試料及び処理

C 測定結果

第4表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲を、第13図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

試料名	測定 No. (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (年 BP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (年 BP $\pm 1\sigma$)	暦年代 (西暦)	
					1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
No.1	19636	-23.74 \pm 0.20	55 \pm 18	55 \pm 20	AD1710-1720 (6.0%)	AD1690-1730 (14.2%)
					AD1820-1840 (2.7%)	AD1810-1840 (9.9%)
					AD1890-1910 (59.6%)	AD1870-1920 (71.2%)
No.2	19637	-22.98 \pm 0.18	87 \pm 18	85 \pm 20	AD1690-1720 (18.6%)	AD1690-1730 (26.6%)
					AD1810-1840 (13.2%)	AD1810-1920 (68.8%)
					AD1870-1920 (36.6%)	

BP: Before Physics (Present), AD: 紀元後

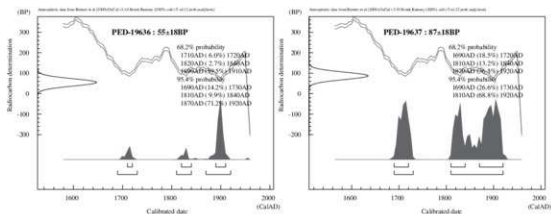
第 4 表 測定結果

暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年校正には OxCal 3.10 (校正曲線データ: IntCal 09) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

D 所 見

加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定の結果、用水 1 出土の杭材では、55 \pm 20 年 BP (2 σ の暦年代で AD1690 ~ 1730, AD1810 ~ 1840, AD1870 ~ 1920 年)、用水 2 出土の杭材では、85 \pm 20 年 BP (2 σ の暦年代で AD1690 ~ 1730, AD1810 ~ 1920 年) の年代値が得られた。



第 13 図 暦年校正結果

3 樹 種 同 定

A 原 理

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、おおむね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微小化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

B 試料と方法

試料は、下割遺跡VIから出土した曲物底板、板状木製品、棒状木製品、箸状木製品、漆器椀、漆器皿、杭、部材、用途不明品の木製品 26 点である。

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（径目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を製作し、生物顕微鏡によって 40～1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

C 結 果

以下に同定根拠となった特徴を記し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

・トウヒ属 *Picea* マツ科 報告番号 227 写真 1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平両樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部は狭く、正常な垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なトウヒ型で、1 分野に 3～6 個存在する。放射仮道管の有縁壁孔対の断面は、壁孔縁の先端が角張っているもの、壁孔縁に鋸歯状の突起をもつものが多く、孔口は小さいものが多い。

接線断面：放射組織は単列で 1～20 細胞高であり、水平樹脂道を含むものは大きな紡錘形を呈する。

以上の形質からトウヒ属に同定される。トウヒ属にはアカエゾマツ、エゾマツ、トウヒがあり、アカエゾマツとエゾマツは北海道に自生し、トウヒは関東山地、中部山岳地、大台ヶ原に自生する。寒冷な亜高山帯ないし亜寒帯に分布する常緑針葉樹である。

・スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 報告番号 204・206～224 写真 2・3・4・5・6・7

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1 分野に 2 個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15 細胞高である。樹脂細胞が存在する。

以上の形質からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ 40m、径 2m に達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

・ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 報告番号 205 写真 8

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で 1 分野に 2 個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15 細胞高である。

以上の形質からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ 40m、径 1.5m に達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱であり、耐朽性、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

・クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 報告番号 228 写真 9

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配

列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

・ブナ属 *Fagus* ブナ科 報告番号225・229 写真10

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔及び階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞であるが、上下端にのみ方形細胞が見られるものがある。

接線断面：放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるが、ほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の形質からブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬、緻密で靱性があるが、保存性は低い。容器などに用いられる。

・ウルシ *Rhus verniciflua* Stokes ウルシ科 報告番号226 写真11

横断面：年輪のはじめに大型の道管が単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。晩材部で小道管が単独、あるいは主に放射方向に2～数個複合して散在する。早材から晩材にむけて道管の径は徐々に減少していく。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。小道管の内壁にらせん肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～4細胞幅ぐらいいである。

以上の形質からウルシに同定される。ウルシは漆液採取の為、日本各地に植栽され、北は北海道にまで及ぶ。落葉高木で、高さ10m、径30cmに達する。材は建築、器具、土木、旋作などに用いられる。

D 所 見

同定の結果、下割遺跡VIの木製品は、スギ20点、ブナ属2点、ヒノキ1点、トウヒ属1点、クリ1点、ウルシ1点であった。

最も多いスギは、曲物底板、板状木製品、棒状木製品、管状木製品、部材、用途不明品と主に板状製品に使用されている。スギは日本産の針葉樹材の中では、やや軽軟な材と言えるが、加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。スギは特に積雪地帯や多雨地帯で純林を形成し、本道跡周辺地域の主要な森林であり、豊富に存在したと考えられる。

ブナ属は、漆器碗、漆器皿に使用されている。ブナ属の材は、強さ中庸、切削、加工も中庸であるが、弾性と従曲性に富み、縄文時代以降現在まで伝統的に木地に用いられている。トウヒ属は部材に使用されている。トウヒ属は概して木理通直で大きな材が取れる良材であるが、亜寒帯性ないし亜高山帯性の樹木である。これらブナ属とトウヒ属は山間部の生産地からもたらされた可能性が示唆される。またヒノキは

曲物底板に使用されているが、温帯下部に分布生育することから、流通によってもたらされた可能性が考えられる。クリは杭に使用されている。クリは重硬で保存性が良い材である。ウルシは板状木製品に使用されている。ウルシはやや弱く脆い材と言える。

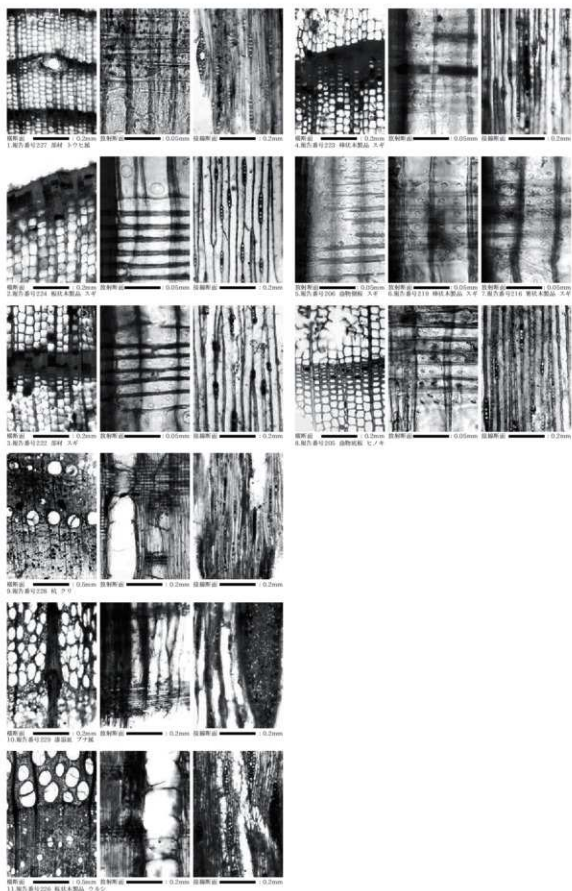
4 ま と め

下割遺跡VIにおいて検出された用水1・2の年代を検討した。加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定の結果、用水1出土の杭材は、 55 ± 20 年BP(2 σ の暦年代でAD1690~1730, AD1810~1840, AD1870~1920年)、用水2出土の杭材は、 85 ± 20 年BP(2 σ の暦年代でAD1690~1730, AD1810~1920年)の年代値であった。

また、中世の出土木製品の樹種は、スギが最も多く曲物底板、板状木製品、棒状木製品、箸状木製品、部材、用途不明品に、次いでブナ属が漆器椀、漆器皿に、トウヒ属が棒状木製品に、ヒノキが曲物底板に、クリが杭に、ウルシが板状木製品にそれぞれ使用されていた。スギは周辺地域から容易に入手できたと見られる。一方、トウヒ属は明らかに生産地からもたらされたと考えられ、ブナ属やヒノキも流通によってもたらされた可能性が考えられた。

参考文献

- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37 (2), 425-430.
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
- Paula J Reimer et al., 2004 IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP, Radiocarbon, 46, 1029-1058.
- 尾崎大真 2005 「INTCAL98からIntCal04へ」『学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア No.3 -炭素年代測定による高精度編年体系の構築-』14-15.
- 中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の¹⁴C年代』3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. 2009 IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP, Radiocarbon, 51, 1111-1150.
- 佐伯浩・原田浩 1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩 1985 「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p.49-100.
- 島地謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 p.296.
- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集」『植生史研究特別第1号』植生史研究会 p.242.



第 14 图 木制品显微写真

第七章 ま と め

下割遺跡の東端に位置する今回の調査区は、2010（平成22）年度と2011（平成23）年度に本発掘調査を実施した。遺構・遺物を概観し、明治22年の更正図（第15図）とも対応させながら、遺跡の性格についてまとめてみたい。

遺構は、掘立柱建物18棟、井戸75基、土坑70基、ピット876基、溝63条、性格不明遺構16基などを検出した。また平行する2条の溝を側溝と考え、道路状遺構として1基を検出した。遺物は古代、中世、近世、近代のものが出土している。近世の遺物が最も多く、中世、古代の順に続く。出土した重量比は古代5.0%、中世12.1%、近世82.9%であることから、遺構の大半は近世以降に構築された可能性が高い。ただし、遺物の出土しない遺構も多く、形態や埋土からだけではその帰属時期を明確に判断できなかったため、各時期の具体的な遺構配置等は不明である。

古代の遺物分布を見ると、20～24Q～Rグリッド付近で多く出土し、西側で希薄となる。遺物の帰属時期は、8世紀前半～中ころ、8世紀末～9世紀初頭ころ、9世紀第2四半期ころの大きく3時期に分けられ、出土量が多いのは8世紀末～9世紀初頭ころのものである。胎土的には関川左岸産、関川右岸産、佐渡産のものがあり、下割遺跡と地理的に近い関川右岸産のものが多く、古代と考える遺構は、溝2条（SD260・SD1017）のみで、溝の端部が24L18グリッドで直角に接する位置関係にある。SD260の方位（走向）はN-51°-Wで、この方位と近似する溝や建物は認められなかった。遺物は少ないが、当調査区の古代の中心時期となる、8世紀末～9世紀初頭ころの須恵器が出土している。溝は断面・底面ともに一定ではなく、区画溝と考えるが、ほかに古代の遺構がないことからその性格は不明である。下割遺跡の東側には古代集落と考える堂古遺跡（未調査）が隣接しており、その関連で判断していくべきだろう。

中世の遺物は、珠洲焼、土師質土器、青磁、瀬戸美濃焼、羽口、砥石、木製品、銭貨等が出土している。内、9割以上が珠洲焼である。遺物は遺構を中心に出土しており、道路状遺構（ここではSD500・SD695に統一）と考えた溝を中心に、重量の重いものが分布する。また、道路状遺構の方向性が変わる26・27Pグリッドに、集中が認められるのも特徴的である。出土位置が10m以上離れて接合したのも多く、距離10～19.9mで20例、20～29.9mで4例、30～39.9mで3例、40～49.9mで2例、50～54.6mで4例ある。製作年代と出土量の関係は、珠洲I期ころが少量で、II期に微増し、III・IV期に最盛期を迎え、V期・VI期と次第に減っていく。12世紀第4四半期～15世紀第3四半期ころの製品が認められ、13世紀後半～14世紀のものが最も多いことになる。

中世の遺構は、この13世紀後半～14世紀に構築されたものが大半と考える。中世とした遺構は溝が中心となるが、井戸・土坑なども見つかっている。掘立柱建物で中世の可能性のあるのが、22・23J・Kグリッドに位置するSB4～8の一群（図版6）である。この周辺は中世と考える遺構も多く、近世陶磁器の出土も少ない範囲であることから、中世の居住域の一角であろう。今回の調査区から西に50m程離れた位置は、2002・2003年度に調査され、同時期の集落跡や道路状遺構が検出されている（図版1・52）。一辺50～60mの溝や道路状遺構に囲まれた範囲が屋敷地の単位として認識され、その屋敷地が数個程度隣接して集落を形成している。屋敷地は、掘立柱建物約10棟・井戸10～20基・空白地で構成され、建物や井戸等の遺構はその屋敷地の一角に偏る傾向を示す。今回検出した溝も、そのほとんどが区画溝と

考えるが、そのように囲まれる状況を見出すことは出来なかった。屋敷地が隣接する過去の調査範囲を集落の中心と仮定するならば、その縁辺部なので様相が異なると考えることもできるが、もともと別の集落として認識していた可能性もある。下割遺跡の中世集落が、13世紀後半～14世紀に最盛期を迎え、16世紀には衰退している現象は、[水澤 1997]の論と一致する。つまり、「集落は巨視的にみて現在の集落立地に近いところに移動し、14世紀頃に集村化への動きをみせながら、16世紀頃に現在の集村へとさらに展開した」としており、16世紀には現在の集落へ移転する傾向が見られるようである。ただし、今回の調査区は現在の集落に近いめか、後述するように17世紀後半以降にまた発展していく。

中世の遺構で特に注目されるのが、道路状遺構である。延長約78m、側溝を含めた幅が8.1～8.9m、路面幅はおおむね4m前後を保つ。路面には特別に手を加えた痕跡は確認できなかった。主要な方位はN-83°-Eで、この方位と近似する溝や建物は認められない。北側の溝(SD500)は幅2.5～3.0m、深さ80cm前後、南側の溝(SD695)は幅1.4～2.2m、深さ50cm前後である。新潟県内の中世の道の調査事例を集めた[本田 2008]によると、13～14世紀の道は、「最大幅1.5m～8.3m、5～8m代のものが多い」と規模の傾向を示している。しかし、側溝の深さは50cmに満たないものが多く、今回の道路状遺構は大規模な部類に属する。道の存続期間は、集落の消長や出土遺物だけでは判断できないが、珠洲V期の資料が出土していることから、15世紀前半までは確実に機能していたと考える。中世の道を考える上で、参考となるのが1597(慶長二)年に作成された「越後国頸城郡絵図」である。下割遺跡の位置する米岡集落(「米岡村」)のほか、米岡集落の北西に位置する上真砂集落(「真砂新町」)も見ることができる。周辺に道も描かれているが、真砂新町から延びる幹線(通称、松之山街道)からは外れ、真砂新町と米岡村を直接結ぶ道も見当たらない。描かれた時には既に廃絶していた可能性がある。明治22年更正図には上真砂集落へ続く道が認められるが、この道路状遺構の方向性を見ることは出来ない。ただし、道路状遺構が南に折れ曲がる26Pグリッド付近が、上真砂集落へ続く道の屈曲点と重なることは注目すべき点である。道としての機能を失っていても、重要な地点(場)としての意識は、近代まで存続していた可能性がある。

近世の遺物は、17世紀後半以降から増加し、明治まで続く。18世紀代のものが最も数量が多い。肥前系陶磁器が主体となるが、越中瀬戸焼、越前焼も出土している。越中瀬戸焼は皿類が少量で、広口壺が主体となる。また越前焼は、16世紀以前のもは出土せず、18世紀後半以降のものが認められる。壺・鉢等大型品が主体で、肥前系陶磁器による器種構成を補完するものであったと思われる。今回検出した掘立柱建物の多くが近世に属するもので、柱穴・井戸・土坑等も多くあることから、集落であったことは間違いが無い。建て替えだけでは無く、複数の建物が存在していたことを想定させる。建物の中心となるのがSB12で、桁行方向N-22°-Eの南北棟の建物である。それと平行関係(北北東-南南西)または直交関係(西北西-東南東方向)にある溝は、近世の遺物が出土したのが多い。この17世紀後半以降の近世集落の発展や遺物量の増加は、中江用水の開削時期(1674～1678年)と重なることや、1672(寛文12)年以降の北前船を使用した西回り航路の発展と連動した動きである。

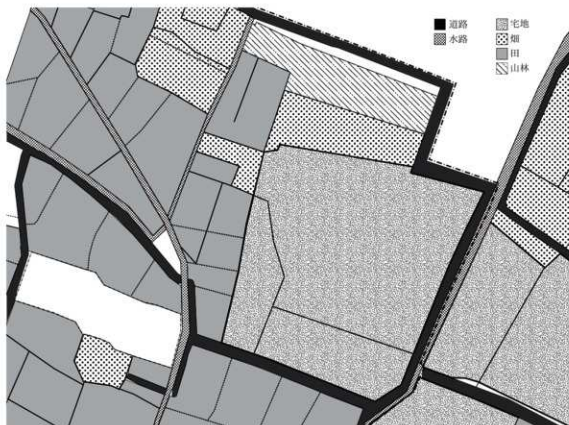
今回の調査地は、大部分が宅地であり、その宅地は土塁及び漆によってほぼ方形(南北約70m、東西約60m)に囲まれていた(図版2・55)。また、東側には鍵の手状に土塁を築いた出入口があり、中世の館のような景観を呈していた。西側南半に土塁・漆は無かったが、この範囲は後世に整地された範囲であり、近代掘立柱建物(第8図)を検出した範囲とも一致した。このような土塁や漆で囲まれた屋敷地は、上越地域の関川右岸から東頸城丘陵麓にかけて多く認められ、「環濠屋敷」と呼称される。洪水対策や排水・

灌漑目的との意見もあるが、中世豪族が自己防衛のためにつくった防衛的形態の一つであり、集落の核として機能したものと考えられている。また、その成立時期は中世後期から近世と想定されている。前述したように、2002・2003年度調査で検出した中世集落は、一辺50～60mの範囲を屋敷地の単位としており、この土塁・濠の規模とも合致していた。土塁・濠の断ち割り調査の結果（図版3・4）、土塁頂部と濠底面の比高差は1.7～2.0m程あった。しかし、土塁の盛土内から近世陶磁器が出土したこと、盛土より下位に基本層序Ⅱ層（近世以降）が存在したこと等から、その造成は明治以降まで降ることが予想された。そこで、明治22年更正図と照合した結果、北東部が道と交差し、南側は道と大部分が重なることが判明した。よって、この遺跡の土塁・濠の構築時期は、明治22年以降まで降ることが確定した。更正図はサイズ変更して照合したもののだが、道路・水路の大部分が現状の位置と一致すること、1947年の空撮写真と比べても、水田の畦畔が重なることから、問題は無いものとする。現存する環濠屋敷の発掘調査例が無いので、すべてに共通するわけではないが、その構築時期を示す一例となる。

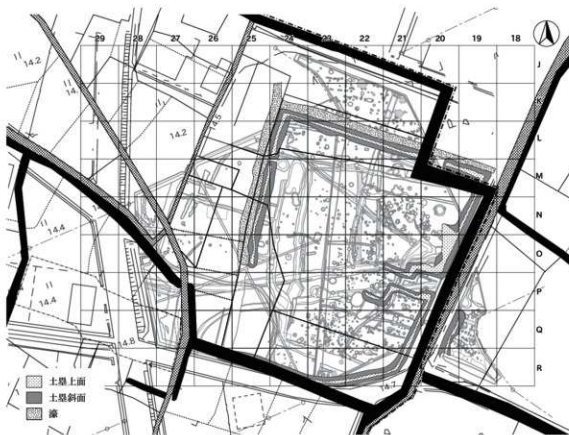
最後に、検出遺構と明治22年更正図とを照合した結果で、ほかに分かったことを幾つか述べてみたい。更正図の線と遺構が対応する場所は多くあり、検出時には幅狭な溝であったとしても、区画としての意味を有していたことが分かる。更正図の線と対応する遺構が、新しい時期の遺構の可能性もあるが、遺構検出面までの深さが50cmを超える場所もあり、一概には言えないであろう。中世の道路状遺構の東端が、明治以降に構築された土塁の出入口と重複する点も興味深い。土塁は北側に1か所、北西側に1か所途切れるところがあるが、前者は道の角に該当し、後者は宅地から畑地へ続く場所に該当する。

中世及び近世の柱穴・井戸等の遺構が集中する東側と、遺構が希薄で溝が主体となる西側を分けているのが、南北に走るSD1045・1046で、報文中では用水1として記述した。このSD1045と対応するのが、25R-24P-25Nグリッドにかかるラインで、24Pグリッドで屈曲する理由は、池状の広がり（図版25）に起因するものであろう。この場には多数の杭が集中して打たれ、堰としての機能も想定されている。この用水～西側土塁にかけては、明治22年には宅地となっているが、もともと地形的に低く、水田として利用されていたものと思われる。宅地の南側の分割線は、南東側から延びてくる道路の延長線上にあたる。さらにこの道路を延長すると、27Pグリッドに至り、上真砂集落へと続く道路の曲がり角に接する。この宅地の南側分割線は、現道に移設する前の道の名残の可能性もある。もしここに道が存在すれば、SD831-SD1045は道の南側側溝としての機能を有していたのかもしれない。それより北側にも同方位の溝が数条あるが、さらに古い段階にその場に道があり、宅地（近世であれば居住域）の拡張に伴って、徐々に南に移動していった結果とも考えることができる。

宅地の北側には畑と山林が位置するが、この範囲からの近世陶磁器の出土は少量である。この宅地と畑を南北に区画するのが、SD253及びSD1017である。この溝より北側は、遺構の重複が少なく、近世には既に居住域として利用されなかった場所なのかもしれない。このような点から、この範囲で検出した掘立柱建物や井戸等は、中世の遺構の可能性が高い。区画溝と考えるSD253の出土遺物は、江戸時代後期以降のものが多いが、近世集落の成立する17世紀中ごろには既に構築されていた可能性がある。以上のことから、近世集落の成立時は、20～23・M～Pグリッドの約40m四方が居住域であり、次第に南側に拡張していったと考えることができる。そして、この40m四方区画の中心に位置するのが、最も大型な建物のSB12であり、それを取り囲むように大型の土坑や性格不明遺構が位置するのは興味深い。この更正図の宅地内には、遺構数からすれば複数棟が建っていたことが想定されるが、最終的には個人所有の場となっている。近世集落の廃絶がいつごろなのかは、遺構・遺物から判断することは出来なかった。



第 15 図 明治 22 (1889) 年 舘訪村大字米岡更正図 (1:1,000)



第 16 図 明治 22 年更正図と遺構配置図 (1:1,000)

要 約

- 1 下割遺跡の今回の調査区は、新潟県上越市大字米岡番場 780 番地ほかに所在する。下割遺跡の東端にあたる。関川の支流である飯田川左岸の自然堤防上に立地し、現況は宅地・山林・水田で、遺構検出面の標高は 13.7～14.2m である。
- 2 発掘調査は一般国道 253 号上越三和道路の建設に伴い、2010（平成 22）年 4 月 26 日～8 月 30 日、2011（平成 23）年 4 月 12 日～7 月 12 日にかけて実施した。
- 3 2010 年度が下割遺跡の第 5 次調査（下割遺跡 V）で、調査面積は 2,550m² である。2011 年度が第 6 次調査（下割遺跡 VI）で、調査面積は 2,800m² である。
- 4 調査の結果、古代・中世・近世以降の遺構と、古代・中世・近世・近代の遺物を検出した。
- 5 遺構は掘立柱建物 18 棟、井戸 75 基、土坑 70 基、ピット 876 基、溝 63 条、性格不明遺構 16 基を検出した。また、2 条の溝が平行する範囲を道路状遺構とし、1 基検出した。帰属時期が明らかな遺構は少なく、大半は近世以降の構築と考える。
- 6 古代の遺構は溝 2 条のみである。古代の遺物は須恵器・土師器があり、大きく 3 時期の遺物がある。8 世紀前半～中ごろ、8 世紀末～9 世紀初頭、9 世紀第 2 四半期ごろのものに分けられ、8 世紀末～9 世紀初頭が主体となる。地理的に近い関川右岸産のものが多い。
- 7 中世の主な遺構は、井戸・土坑・溝・道路状遺構である。掘立柱建物は、調査区北側に位置するものがその可能性が高い。道路状遺構は側溝まで含めた幅が 8m を越えるもので、県内においては大規模なものである。遺物は青磁、瀬戸美濃焼、珠洲焼、土師質土器、磁石などの石製品、曲物、箸などの木製品と銭貨（紹聖元寶）が出土した。珠洲焼は I₉～VI 期のものが確認できるが、主体は II～IV 期（13～14 世紀代）で、特に IV 期のものが多い。
- 8 中世は 13 世紀後半～14 世紀に主体があり、2002・2003 年度調査で検出した集落と同時期であるが、その様相は異なる。集落の縁辺部、あるいは別集落としてとらえることができる。
- 9 近世の遺物は最も多く出土し、陶磁器、瓦器、磁石などの石製品、漆器碗・部材などの木製品、銭貨（寛永通寶）がある。陶磁器は肥前系陶磁器を主体に越中瀬戸焼、越前焼を定量含み、17 世紀後半～19 世紀前半のものが出土した。掘立柱建物も含めた大半の遺構がこの近世に属し、複数棟が存在する集落であったと想定される。
- 10 中世の館のような様相を呈する、「環濠屋敷」の土塁と濠を調査した。上越地域の関川右岸で多く認められる居住形態の一つで、成立時期が中世後期から近世と考えられているが、今回は明治以降の構築であることが分かった。

引用・参考文献

- 相沢 央 2004 「第3部2 頸城部への国府の移転」『上越市史』 通史編1 自然・原始・古代 上越市
- 愛知県史編さん委員会 2007 『愛知県史 別編 中世・近世 瀬戸系』 愛知県
- 相羽重徳 2003 「越中瀬戸広口壺に関する粗描」『研究紀要 第4号』 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史・加藤 学 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第93集 和泉A遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰・高橋保雄^{13a} 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第227集 狐宮遺跡Ⅱ・下羽遺跡Ⅳ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰・桐原雅史^{13a} 2007 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第171集 狐宮遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 池田嘉一 1967 『中江用水史』 中江土地改良区
- 石川智紀^{13a} 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第103集 新保遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石黒厚雄 2002 「1-4-1 頸城地方の農家住宅」『歴史的建造物の保存と活用に関する調査報告書』 上越市創造行政研究所
- 伊藤啓雄 2006 「新潟県における中世土師器皿と輸入陶磁器・瀬戸美濃製品—中世後半～近世初頭の様相—」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』 北陸中世考古学研究会
- 今井昭俊 2011 「第Ⅱ章2 遺跡の分布と歴史的環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第227集 狐宮遺跡Ⅱ・下羽遺跡Ⅳ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』 No.2 日本貿易陶磁研究会
- 大橋康二 1993 『考古学ライブラリー55 肥前陶磁』 ニューサイエンス社
- 岡本郁栄 1999 『序章 第1節 新潟県の地形概観』『新潟県の考古学』 新潟県考古学会編 高志書院
- 尾崎高広^{13a} 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第217集 下羽遺跡Ⅲ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田由美子^{13a} 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第149集 滝寺古窯群・大貫古窯群』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加賀真樹 1997 「第6章 第1節 珠洲窯」『中・近世の北陸』 北陸中世土器研究会編 桂書房
- 春日直実 1999 「第4章 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会編 高志書院
- 加藤 学^{13a} 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第128集 仲田遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学^{13a} 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第159集 用言寺遺跡1』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 亀井 功^{13a} 1992 『新潟県歴史の道調査報告書 第三集 松之山街道』 新潟県教育委員会
- 木村孝一郎 2004 「近世越前における編年の研究ノート」『福井城跡Ⅳ』 福井市文化財保護センター
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』
- 楠 正勝 2003 「第三章第二節(五) 越前系陶器について」『野田山墓地』 金沢市文化財紀要200 金沢市埋蔵文化財センター
- 久保田好郎^{13a} 2006 『新編中江用水史』 新編中江用水史編集委員会
- 小島幸雄^{13a} 1984 『新潟県上越市 本長者原廃寺確認調査概要』 上越市教育委員会
- 坂井秀弥^{13a} 1982 『栗原遺跡 第4次・5次発掘調査概報』 新潟県教育委員会・新井市教育委員会
- 坂井秀弥^{13a} 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第35集 上信バイパス関係発掘調査報告1 今池・下新町・子安遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1997 「第5章 第8節 中・近世の越後国」『中・近世の北陸』 北陸中世土器研究会編 桂書房
- 笹澤正史 2003a 「第5章 第1節 時代概説」『上越市史』 資料編2 考古上越市
- 笹澤正史 2003b 「越前遺跡」『上越市史』 資料編2 考古上越市

- 笹澤正史 2004 「古代から中世へと続く道」『中世のみちを探る』藤原良章編 高志書院
- 佐藤友子・榎原雅史^{ほか} 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第187集 近世新潟町跡広小路堀地点』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 沢田 敦^{ほか} 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第154集 三角田遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 品田高志 1997 「第5章 第2節 越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編 桂書房
- 品田高志 1999 「越後における中世後期の土師器Ⅲ—京都系土師器第2波の流入と展開—」『中近世土器の基礎研究 XIV』日本中世土器研究会
- 品田高志 2004 「越後国佐橋庄の中世古道と町並み」『中世のみちを探る』藤原良章編 高志書院
- 高田平原団体グループ 1962 「高田平原の神積層について—高田平原の団体研究・そのIV—」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第7号 新潟大学教育学部高田分校
- 高田平野団体研究グループ 1981 「高田平野の第四系と形成史—新潟県の第四系・そのXXIV—」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第25号 新潟大学教育学部高田分校
- 高野武男 2002 「第1章 第2節 神積平野の地形」『上越市史 資料編1 自然』上越市
- 高橋 勉^{ほか} 1984 『栗原遺跡 第7次・第8次発掘調査報告書』新井市教育委員会
- 高橋 勉 1997 「新井市高柳遺跡群の概要」『新潟県考古学会第9回大会研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 戸根与八郎 2003 「第1章 第1節 時代概説」『上越市叢書8 考古—中・近世資料—』上越市
- 土橋由理子^{ほか} 2011 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第221集 古渡路遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 新潟県考古学会編 1999 『新潟県の考古学』高志書院
- 日本地誌研究所編 1972 『日本地誌』第9巻 二宮書店
- 野村忠司^{ほか} 2009 『新潟県上越市 子安遺跡』上越市教育委員会
- 福原圭一 2004 「第7章 第四節『頸城郡絵図』に描かれた道と城と町」『上越市史 通史編2 中世』上越市史編さん委員会
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 藤原良章編 2004 『中世のみちを探る』高志書院
- 本田祐二 2008 「越後・佐渡（新潟県）の様相」『北陸中世のみち』北陸中世考古学研究会
- 水澤幸一 1997 「第5章 第5節 中世集落の展開と城館の動向」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編 桂書房
- 水澤幸一 2003 「横曾根遺跡」『上越市叢書8 考古—中・近世資料—』上越市
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 水澤幸一 2007 「中世越後の土器と陶磁器—11～14c.前半」『中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・施軸陶器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
- 宮田進一 1997 「第4章 第4節 越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編 桂書房
- 三輪茂雄 1978 『白』ものとの人間の文化史 25 法政大学出版局
- 山崎忠良^{ほか} 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第201集 延命寺遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎忠良・外山浩史^{ほか} 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第120集 下割遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山崎忠良^{ほか} 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第134集 下割遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 山本信夫 2000 『大宰府糸坊跡XV—陶磁器分類編—』大宰府市の文化財第49集 大宰府市教育委員会
- 矢部英生 2011 「第Ⅱ章 1 地理的環境」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第227集 狐宮遺跡Ⅱ・下割遺跡Ⅳ』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 吉岡康暢 2003 『珠洲焼概論』『珠洲焼概論』平成15年度埋蔵文化財専門職員実務研修資料集 新潟県教育庁文化行政課

擬立柱建物觀察表 (1)

遺構番号	位置	軒行	2間		2間	軒行方向	床面積	備考
			4間	梁間				
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(立面別)	柱間	距離(m)	
P1	0.53	13.33	×	×	南(A-A)	P1-P6東	2.12	
P6東	0.49	13.43	×	×	南(A-A)	P6東-P16	2.22	
P16	0.34	13.58	×	×	南(A-A)	P16-P17西	1.98	
P17西	0.56	13.33	×	×	南(A-A)	P17西-P24	1.72	
P24	0.67	13.25	×	×	北(B-B)	P56-P42	2.22	
P56	0.29	13.62	×	×	北(B-B)	P42-P36	1.98	
P42	0.44	13.41	×	×	西(C-C)	P36-P33	2.06	
P36	0.36	13.45	×	×	西(C-C)	P33-P1	2.02	
P33	0.52	13.32	×	×				

遺構番号	位置	軒行	3間		1間	軒行方向	床面積	備考
			4.64m	梁間				
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(立面別)	柱間	距離(m)	
P6西	0.45	13.44	×	×	南(A-A)	P6西-P11	1.22	
P11	0.48	13.45	×	×	南(A-A)	P11-P76	2.10	
P76	0.54	13.38	×	×	南(A-A)	P76-P17東	1.32	
P17東	0.25	13.65	×	×	北(B-B)	P82-P47	2.38	
P82	0.71	13.24	×	×	北(B-B)	P47-P43	1.18	
P47	0.61	13.32	×	×	西(C-C)	P43-P6西	2.64	
P43	0.37	13.53	×	×				

遺構番号	位置	軒行	2間		1間	軒行方向	床面積	備考
			4.06m	梁間				
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(立面別)	柱間	距離(m)	
P52	0.27	13.60	×	×	西(A-A)	P52-P46	1.74	
P46	0.39	13.54	×	×	西(A-A)	P46-P9	2.32	
P9	0.25	13.61	×	×	南(B-B)	P9-P22	3.76	
P22	0.28	13.65	×	×				

遺構番号	位置	軒行	2間		2+1間	軒行方向	床面積	備考
			5.86m	梁間				
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(立面別)	柱間	距離(m)	
P141	0.66	13.39	×	×	東(A-A)	P141-P122	3.02	
P122	0.72	13.29	×	×	東(A-A)	P122-P119	2.84	
P119	0.77	13.24	×	×	西(B-B)	P106西-P110	2.90	
P106西	0.32	13.65	×	×	西(C-C)	P106東-P111	2.90	
P106東	0.52	13.60	×	×	北(D-D)	P119-P114	2.10	
P110	0.20	13.79	×	×	北(D-D)	P114-P106東	1.84	
P111	0.54	13.44	×	近畿	北(D-D)	P106東-P106西	0.58	
P114	0.57	13.42	×	古代	南(E-E)	P132-P141	1.76	
P132	0.65	13.44	×	×	中(F-F)	P110-P111	0.58	
P115	0.61	13.39	×	×	中(F-F)	P111-P115	2.20	
					中(F-F)	P115-P122	1.76	
					中(G-G)	P132-P116	3.02	

遺構番号	位置	軒行	2間		2間	軒行方向	床面積	備考
			5.88m	梁間				
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(立面別)	柱間	距離(m)	
P133	0.34	13.75	×	×	東(A-A)	P133-P116	2.86	
P116	0.44	13.60	×	×	東(A-A)	P116-P301	3.02	
P301	0.64	13.34	×	×	中(B-B)	P112西-P303	3.02	
P112西	0.87	13.10	×	×	中(B-B)	P303-P1115	2.88	
P112東	0.69	13.28	×	×	北(C-C)	P301-P112西	2.22	
P303	0.88	13.09	×	×	北(C-C)	P112西-P105	1.88	
P1115	0.67	13.37	×	×	南(D-D)	P1115-P133	2.48	
P105	0.48	13.49	×	×	中	P303-P116	2.36	
P1116	0.67	13.36	×	×				

掘立柱建物観察表 (2)

遺構番号	位置	掘行	2+α間		梁間	2間		掘行方向	床面積	備考
			5.14m	梁間		4.30m	N-2'-E			
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(方位)	柱間	柱間	距離(m)		
P118	0.49	13.45	×	×	西(A-A')	P118-P121		2.64		
P121	0.30	13.73	×	×	西(A-A')	P121-P136		2.50		
P136	0.54	13.51	×	×	東(B-B')	P155-P153		1.96		
P155	0.44	13.58	×	×	南(C-C')	P136-P150		2.24		
P153	0.27	13.76	×	×	南(C-C')	P150-P155		2.06		
P150	0.40	13.60	×	×						

遺構番号	位置	掘行	1+α間		梁間	1間		掘行方向	床面積	備考
			2.80m	梁間		4.02m	N-1'-E			
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(方位)	柱間	柱間	距離(m)		
P134	0.39	13.61	×	×	西(A-A')	P134-P139		2.80		
P139	0.45	13.55	×	×	東(B-B')	P158-P154		2.68		
P158	0.63	13.42	×	×	南(C-C')	P139-P158		4.02		
P154	0.51	13.51	×	×	中(D-D')	P134-P154		4.02		

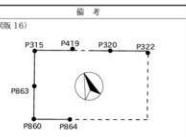
遺構番号	位置	掘行	3+α間		梁間	2間		掘行方向	床面積	備考
			6.44m	梁間		3.82m	N-7'-E			
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(方位)	柱間	柱間	距離(m)		
P178	0.56	13.45	×	×	東(A-A')	P178-P175		2.20		
P175	0.66	13.29	×	×	東(A-A')	P175-P174		2.24		
P174	0.49	13.44	×	×	西(B-B')	P165-SK160		4.24		
P165	0.41	13.57	×	×	西(B-B')	SK160-P162		2.20		
SK160	0.14	13.91	×	×	南(C-C')	P162-P176		1.94		
P162	0.73	13.34	×	×	南(C-C')	P176-P178		1.88		
P176	0.58	13.47	×	×	中(D-D')	SK160-P170		1.90		
P170	0.27	13.76	×	×	中(D-D')	P170-P175		1.90		

遺構番号	位置	掘行	2+α間		梁間	2間		掘行方向	床面積	備考
			6.56m	梁間		4.16m	N-22'-E			
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(方位)	柱間	柱間	距離(m)		
P213	0.76	13.30	×	×	西(A-A')	P213-P215		1.66		
P215	0.63	13.41	×	近跡	西(A-A')	P215-P216		0.68		
P216	0.49	13.53	×	×	西(A-A')	P216-P277		3.26		
P277	0.60	13.41	×	×	西(A-A')	P277-P276		0.96		
P276	0.73	13.30	×	×	東(B-B')	P286-P284		0.94		
P286	0.77	13.16	×	×	東(B-B')	P284-P225南		3.20		
P284	0.46	13.48	×	×	東(B-B')	P225北-P225南		0.70		
P225北	0.66	13.33	×	×	南(C-C')	P276-P286		4.16		
P225南	0.84	13.15	×	×						

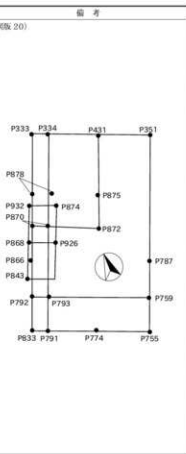
遺構番号	位置	掘行	2間		梁間	2間		掘行方向	床面積	備考
			4.58m	梁間		3.26m	N-3'-E			
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(方位)	柱間	柱間	距離(m)		
P247	0.42	13.77	×	×	東(A-A')	P247-P245		2.20		
P245	0.49	13.69	×	×	東(A-A')	P245-P243		2.38		
P242	0.24	13.93	×	×	西(B-B')	P240-P245		2.12		
P243	0.58	13.57	×	×	北(C-C')	P243-P242		1.72		
P240	0.41	13.76	×	×	北(C-C')	P242-P240		1.54		
P245	0.22	13.92	×	×						
P242	0.10	14.04	×	×						

擬立柱建物觀察表 (3)

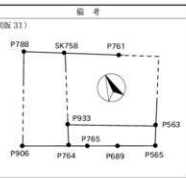
遺構番号	位置 SB11	位置 22N	新行	3間		梁間	2間		新行方向 N-70°-W	床面積 21.8㎡	備考 (図版 16)
				3間 5.98m	梁間		3.64m	2間			
柱穴番号	深さ (m)	底面標高 (m)	柱根	出土遺物	面 (方向)	柱間	距離 (m)				
P322	0.44	13.77	×	×	北 (A-A)	P322-P320	2.00				
P320	0.74	13.39	×	×	北 (A-A)	P320-P419	1.98				
P419	0.13	13.45	×	×	北 (A-A)	P419-P315	2.00				
P315	0.62	13.50	×	×	南 (B-B)	P860-P864	1.92				
P860	0.68	13.38	×	×	西 (C-C)	P315-P863	1.92				
P864	0.65	13.43	×	×	西 (C-C)	P863-P860	1.72				
P863	0.73	13.31	×	×							



遺構番号	位置 SB12	位置 21-22N-O	新行	3間		梁間	2+1間		新行方向 N-22°-E	床面積 64.2㎡	備考 (図版 20)
				3間 10.36m	梁間		6.20m	2+1間			
柱穴番号	深さ (m)	底面標高 (m)	柱根	出土遺物	面 (方向)	柱間	距離 (m)				
P755	0.30	13.57	×	×	東 (A-A)	P755-P759	1.78				
P759	0.49	13.42	×	近視	東 (A-A)	P759-P787	1.90				
P787	0.44	13.42	×	×	東 (A-A)	P787-P951	6.64				
P951	0.53	13.61	×	近視	西 (B-B)	P333-P787 西	3.20				
P333	0.23	13.86	×	×	西 (B-B)	P787 西 - P870 西	1.64				
P878 西	0.66	13.56	×	×	西 (B-B)	P870 西 - P866	1.82				
P878 東	0.79	13.44	×	×	西 (B-B)	P866-P792	1.90				
P870 西	0.60	13.59	×	×	中 (C-C)	P792-P833	1.80				
P870 東	0.63	13.56	×	×	中 (C-C)	P334 - P878 東	3.04				
P792	0.58	13.55	×	近視	中 (C-C)	P878 東 - P870 東	1.84				
P833	0.27	13.45	×	×	中 (C-C)	P870 東 - P792	3.70				
P334	0.40	13.70	×	×	南 (D-D)	P793-P791	1.80				
P793	0.61	13.52	×	近視	南 (D-D)	P833-P791	0.82				
P791	0.15	13.64	×	×	南 (D-D)	P791-P774	2.56				
P774	0.29	13.61	×	×	中 (E-E)	P774-P755	2.78				
P431	0.37	13.69	×	近視	中 (E-E)	P792-P793	0.84				
P872	0.20	13.97	×	×	北 (F-F)	P793-P759	5.34				
P875	0.92	13.30	×	×	北 (F-F)	P351-P431	2.74				
P932	0.68	13.56	×	×	北 (F-F)	P431-P334	2.60				
P868	0.51	13.65	×	×	中 (G-G)	P334-P333	0.86				
P866	0.67	13.48	×	×	中 (G-G)	P872 - P870 東	2.66				
P843	0.67	13.48	×	×	中 (H-H)	P870 東 - P870 西	0.84				
P874	0.63	13.58	×	近視	中 (H-H)	P932-P868	1.94				
P926	0.64	13.49	×	×	中 (H-H)	P868-P843	1.92				
					中 (I-I)	P874-P926	1.96				



遺構番号	位置 SB13	位置 21-22O-P	新行	3間		梁間	1 ~ 2間		新行方向 N-66°-W	床面積 33.5㎡	備考 (図版 31)
				3間 6.78m	梁間		4.94m	2間			
柱穴番号	深さ (m)	底面標高 (m)	柱根	出土遺物	面 (方向)	柱間	距離 (m)				
P906	0.42	13.48	×	×	南 (A-A)	P906-P764	2.24				
P764	0.37	13.68	×	×	南 (A-A)	P764-P689	2.56				
P765	0.59	13.47	×	×	南 (A-A)	P689-P565	1.98				
P689	0.69	13.30	×	×	北 (B-B)	P761-SK758	2.84				
P565	0.46	13.46	×	×	北 (B-B)	SK758-P788	2.20				
P761	0.26	13.55	×	瓦葺	中 (C-C)	P933-P563	4.62				
SK758	0.42	13.52	×	×	東 (D-D)	P565-P563	1.06				
P788	0.72	13.36	×	×	西 (E-E)	P788-P906	4.94				
P933	0.42	13.61	×	×	中 (F-F)	SK758-P933	3.72				
P563	0.45	13.54	×	近視	中 (F-F)	P933-P764	1.12				



掘立柱建物観察表 (4)

遺構番号	位置	掘行	3~2間		築間	2~1間		掘行方向	床面積	備考
			12.18m	梁間		3.12m	N-79°-W			
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(正面)	柱間	距離(m)			
P469	0.20	13.58	×	×	北 (A-A)	P469-P471	1.94			
P471	0.36	13.47	×	×	北 (A-A)	P471-P472	1.84			
P472	0.61	13.24	×	近世	西 (B-B)	P512-P511	0.94			
P512	0.35	13.49	×	×	西 (B-B)	P511-P509	0.64			
P511	0.26	13.62	×	×	西 (B-B)	P509-P510	0.78			
P509	0.76	13.09	×	×	北 (C-C)	P509-P506	3.52			
P510	0.42	13.29	×	×	北 (C-C)	P506-P501	3.04			
P506	0.38	13.42	×	×	南 (D-D)	P683-P704	2.98			
P501	0.43	13.33	×	×	南 (D-D)	P704-P512	3.54			
P683	0.15	13.66	×	×	西 (E-E)	P501-P683	1.56			
P704	0.50	13.31	×	×						

遺構番号	位置	掘行	4間		築間	2間		掘行方向	床面積	備考	
			3.90m	梁間		2.54m	N-77°-W				9.9㎡
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(正面)	柱間	距離(m)				
P732	0.11	13.84	×	×	北 (A-A)	P732-P733	0.76				
P733	0.28	13.65	×	×	北 (A-A)	P733-P718	1.14				
P718	0.32	13.61	×	×	北 (A-A)	P718-P719	1.14				
P719	0.39	13.52	×	×	北 (A-A)	P719-P720	0.86				
P720	0.25	13.71	×	×	南 (B-B)	P652-P654	0.88				
P652	0.46	13.47	×	×	南 (B-B)	P654-P658	0.66				
P654	0.45	13.41	×	×	東 (C-C)	P658-P730	1.80				
P658	0.42	13.45	×	×	東 (C-C)	P730-P732	0.74				
P730	0.07	13.84	×	×							

遺構番号	位置	掘行	2~4間		築間	1~3間		掘行方向	床面積	備考
			4.14m	梁間		3.20m	N-85°-W			
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(正面)	柱間	距離(m)			
P629	0.49	13.32	×	×	南 (A-A)	P629-P625	2.12			
P626	0.53	13.33	×	×	南 (A-A)	P625-P618	2.02			
P625	0.66	13.22	×	×	北 (B-B)	P601-P664	1.06			
P618	0.45	13.40	×	×	北 (B-B)	P664-P663	0.86			
P601	0.17	13.09	×	×	北 (B-B)	P663-P650	1.18			
P664	0.27	13.58	×	×	北 (B-B)	P650-P644	0.92			
P663	0.75	13.12	×	×	西 (C-C)	P644-P641	0.68			
P650	0.61	13.21	×	近世	西 (C-C)	P641-P631	1.60			
P644	0.30	13.53	×	×	西 (C-C)	P631-P629	0.92			
P643	0.57	13.28	×	×	東 (D-D)	P618-P601	3.18			
P641	0.32	13.53	×	×						
P631	0.21	13.65	×	×						

遺構番号	位置	掘行	1間		築間	1間		掘行方向	床面積	備考
			4.24m	梁間		1.98m	N-78°-W			
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(正面)	柱間	距離(m)			
P1201	0.74	13.04	×	×	南 (A-A)	P1201-P642	4.24			
P642	0.74	13.12	×	×	北 (B-B)	P646-P1198	4.08			
P646	0.63	13.28	×	×	東 (C-C)	P642-P646	1.98			
P1198	0.88	12.96	×	×	西 (D-D)	P1198-P1201	1.88			

遺構番号	位置	掘行	2間		築間	1間		掘行方向	床面積	備考
			3.68m	梁間		3.54m	N-13°-E			
柱穴番号	深さ(m)	底面標高(m)	柱根	出土遺物	面(正面)	柱間	距離(m)			
P1193	0.62	13.24	×	×	西 (A-A)	P1193-P1197	1.86			
P1197	0.47	13.36	×	×	西 (A-A)	P1197-P1220	1.82			
P1220	0.16	13.62	×	×	東 (B-B)	P636-P650	1.80			
P636	0.52	13.33	×	×	北 (C-C)	P650-P1193	3.54			
P650	0.61	13.21	×	近世						

遺構観察表 (1)

遺構名	全長 (m)	幅 (m)	写真 位置	グリッド	建物	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	高さ (cm)	主要な切り合い	時期・備考
P1	35	34	67	20Q21・22	SB01	木塀形	扇形状	40	37	53	なし	
SD4	35	34	63	19Q25 (20Q17・19R4)	—	—	弧状	830	30・140	4・7	SE5 < SD4 < P10, P11	中世
SE5	35	36	64	19Q20・25	—	円形	船状	105	—	214	P75 < SE5 < SD4	中世
P10	35	34	63	19Q25	—	楕円形	U字状	45	33	37	SD4 < P10, P11	近世
P11	35	34	63	19Q25, 19R5	SB02	円形	扇形状	43	40	48	SD4 < P10, P11	
P17	35	34	57	19R4	SB01 SB02	楕円形	半円状	90	71	57	なし	近世
KR20	35	—	—	19P19・20・24・ 25	—	円形	台形状	250・264	—	79	KR20 < KR55	明治以降
SE25	35	36	64	19Q10・15	—	楕円形	U字状	(166)	128	169	なし	近世
SE30	35	36	64	19Q14	—	円形	船状	62	—	155	なし	近世
SE39	35	36	64	19Q15	—	円形	船状	65	—	168	なし	近世
SE40	35	37	64	19P3・8	—	楕円形	台形状	83	94	(109)	なし	
P44	35	36	—	19Q20	—	円形	台形状	38	30	37	なし	近世
P47	35	36	57	19Q19・20	SB02	楕円形	半円状 U字状	70	42	61	なし	
KR50	35	—	—	19P8・13・14・ 17・19・22・23	—	円形	—	688	(300)	(55)	なし	明治以降
KR55	35	—	—	19P3・20Q17	—	溝状	—	2040	43・75	(5・15)	KR20 < KR55	明治以降
SE59	35	—	—	19Q14	—	円形?	船状	(34)	—	(60)	SE59 < SE60	近世
SE61	35	37	64	19Q5	—	円形	船状	67・73	—	116	なし	近世
SE62	35	37	64	19P24, 19Q4	—	楕円形	U字状	77	68	133	なし	
SE65	35	37	65	19Q4・5・9・10	—	円形	台形状	125	—	124	SE65 < SK70	近世
SE66	35	37	65	19P23, 19Q3	—	楕円形	階段状	94	78	91	なし	中世
SK70	35	37	65	19Q3・4・8・9	—	円形?	台形状	(215・225)	—	39	SK70 > SE77・79, SE65	近世
SE77	35	37	65	19Q3	—	円形	船状	94	—	110	SE77 < SK70, KR67	
SE78	35	37	65	19Q4・9	—	円形	U字状	71	—	88	SK70 > SE78 SE78 ≠ SE79	近世
SE79	35	37	65	19Q3・4	—	円形	U字状	98	—	167	SK70 > SE79 SE78 ≠ SE79	近世
SK81	35	37	65	19Q24	—	円形	台形状	115	—	31	なし	
P83	35	37	65	19Q18・19・23・ 24	—	楕円形	扇形状	(72)	63	(63)	なし	
SE123	06	08	66	22J25	SB07	楕円形	船状	110	90	122	なし	
SE125	06	09	66	22K8	—	楕円形	船状	88	76	125	なし	
P132	06	07	57	23K11・12	SB04	円形	船状	44	—	65	なし	
P133	06	07	57	23K11	SB05	円形	U字状	32	—	34	なし	
SE135	6	10	66	22K19	—	円形	U字状	102	—	154	なし	中世
P136	06	08	57	22K10, 23K6	SB06	楕円形	U字状 弧状	75	56	54	なし	
SE142	06	10	66	22K15	—	楕円形	船状	180	108	146	なし	
P175	06	09	57	21K15	SB08	楕円形	扇形状	54	40	66	なし	
P176	06	09	57	22K16	SB08	楕円形	船状	50	42	58	なし	
P178	06	09	—	21K20	SB08	楕円形	扇形状	78	55	58	P178 > SK340	
SD180	15・ 19	17・ 18	69・ 61・ 71	21K9・23Q20	—	—	半円状 台形状	4600	120・180	25・87	SD180 ≠ SE300, P305, P306, SD268, SD500 SD180 < P178, SD253, SD267, SE937, SE895, SD900, SE916, SE903, SE834, SE304 SD180 > SD269, SD260, SD265	中世
P213	19	21	58	21L6・7	SB09	円形	階段状	60・72	—	76	なし	
P241	6	—	—	22L14	—	長方形	台形状	149	52	92	なし	近世
SD253	15	18	60	20M17・23M10	—	—	船状 台形状	3604	68・200	24・45	SD253 < P252, P249, SK341 SD253 < SD180, SD265, P293, P294, SD269	近世
P254	19	21	—	21L11・16 20L15・20	—	楕円形	扇形状	60	50	69	なし	
SD260	15・ 19・ 30	17・ 18 34	69・ 60・ 61	20O22・24L18	—	—	U字状 扇形状	5192	100・190	25・78	SD260 > SK795, SX258, P335 SD260 < SD180, SD253, SD269, P318, P335, SD268, P330, P332, P334, SD327, SD344, SD500, SE936, SD1017, P1148, P1150, SK1156, SD1046	古代
SE261	15	16	66	22M19・20	—	楕円形	船状	120	110	170	なし	中世
SD267	19	18	61・ 62	20M8・13・ 22L16・21	—	—	台形状 半円状	1700	120・188	49・82	SD267 > SD180, SD268 SD267 < SK417, KR275, SK291	中世
SD268	19	18	61・ 62	22L16・22O16	—	—	弧状	2980	80・120	22・36	SD268 ≠ SD180 SD268 < SD267, SD253, P311, SD900 SD268 > SD260	中世

観察表

遺構観察表(2)

遺構名	分期 図版	断面 図版	写真 図版	グリッド	建物	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	時期・備考
SD269	15	17・ 18	59・ 60	22M8・9-22O19	—	—	台形状	2370	120-140	54-81	SD269 < SD180, SD253, SD900, SE34 SD269 > SD260, SD938	中世
KR275	—	3	—	21L24, 21M4	—	—	弧状	—	122	47	なし	明治以降
SE281	19	21	66	21M17・22	—	楕円形	扇形状	103	94	123	なし	
SD299	19	—	—	20N1-22M19	—	—	弧状	2300	58-120	10-21	機込に切られる	近世
SE300	06	10	66	21K8・9	—	楕円形	扇形状	270	93	198	SD180 < SE300	中世
SE304	06	10	66	21L5	—	円形	扇状	70-76	—	72	SD180 ≠ SE304	中世
SK340	06	09	67	21K20・25	—	不整形	台形状	232	170	65	SK340 > SD180 SK340 < P178	
SE352	19	21	67	21N5	—	円形	扇状	86-92	—	213	なし	
SE391	19	21	67	21N11	—	円形	扇状	75-78	—	177	なし	
SE396	19	22	67	20N15	—	円形	扇状	84-92	—	170	なし	
SE397	19	22	67	20N14・15	—	円形	扇状	91	—	176	SE397 ≠ SX398	近世
SE401	19	22	67	21N16・21	—	長方形	台形状	120	88	112	SE401 < SD403	近世
SD403	19	22	—	21N16-2005	—	—	扇状	520	28-44	9-15	SD403 > SE401	近世
SD404	19	—	—	20N20-21N5	—	—	扇状	330	23-32	6-10	なし	近世
SX407	15・ 19	—	—	21M25, 22M17 ・18・21-23	—	不整形	扇形状 台形状	770	324	29-174	SX407 > SD180, SD268, SD269, SD299, SE443	近世
SE410	19	22	—	20N24	—	楕円形	扇状	140	100	139	SE410 > SE441	近世
SX412	19	—	—	20N22・23 20O2・3	—	不整形	弧状	326	246	20-33	なし	近世
SX414	19	—	—	20N7・9・12-14	—	円形	弧状	308	300	40	なし	近世
SE433	19	22	67	21N9・14	—	楕円形	扇状	80	70	143	SE433 < P348, P355, P432	
SE441	19	22	—	20N23・24	—	楕円形	扇状	110	80	136	SE410 > SE441	近世
SE443	19	22	67	22N1, 21N6, 21M25, 22M21	—	円形	U字状	84-97	—	196	SE443 < SX407	中世
SE444	19	22	68	20O4・5	—	円形	扇状	90	—	156	なし	
SE445	30	32	68	20P25, 21P21	—	円形	扇形状	70-80	—	154	なし	
SK446	30	32	68	21P22・23	—	楕円形	台形状	130	90	31	なし	
SK448	30	32	68	21Q14・15	—	円形	台形状	138-146	—	68	SK448 > P449	
P449	30	32	—	21Q14	—	楕円形	扇状	(66)	56	12	SK448 > P449	
SE451	30	32	68	21Q13・18	—	楕円形	扇状	72	63	108	SK448 > SD450	
SD460	25・ 30	—	—	21Q11-23P24	—	—	扇状	—	54-76	18-35	SD460 < SN616 SD460 > SX447, P736, SE737	近世
SD500	25・ 30	27・ 31	63・ 71	23O23, 23P3- 30O11・16	—	—	U字状	3360	170-360	60-92	SD500 < SK777, SK816, KR827, SE903, SE936 SD500 > SD260 SD500 ≠ SD180, SE925	中世
SE504	30	33	68	22Q23	—	楕円形	扇形状	97	80	147	なし	中世
SK520	30	33	68	20P15・20, 21P16	—	不整形	弧状	444	138	29	SK520 > SE786	近世
SK521	30	—	—	21Q2	—	楕円形	扇状	84	82	36	なし	中世
SE530	30	33	68	21P13	—	楕円形	台形状	136	116	141	SE530 > SD695	
KR557	30	31・ 34	63	20O23・24・25	—	不整形	台形状	410	210	88	SD500 < KR557	明治以降
SD561	30	—	—	20O25-20P5	—	—	台形状	(210)	22-31	15-21	SD561 < KR557, SD660	近世
P589	30	33	—	21P15	—	円形	U字状	26	26	24	なし	
P598	25	28	69	22Q15・20	—	円形	扇形状	66-69	—	62	なし	
P612	30	—	—	22Q10	—	楕円形	V字状	38	27	32	なし	中世
SX016	25	—	—	22Q1	—	不整形	台形状	292	260	14	SX016 > SD460	近世
SE621	25	28	69	23R18	—	楕円形	扇状	80	60	114	なし	中世
SE622	25	26	69	23Q23	SB18	楕円形	扇状	110	92	157	なし	中世
SE623	25	28	69	23Q8・13	—	楕円形	扇状	78	60	88	なし	中世
SE627	25	28	69	23Q24	—	円形	扇状	100-120	—	150	なし	近世
P629	25	26	—	23Q23	SB16	楕円形	台形状	60	50	49	なし	
P645	25	—	—	23Q13	—	円形	U字状	60	55	47	なし	中世
P647	25	—	—	23Q8	—	円形	U字状	78	71	48	なし	中世
SE675	25	28	69	23R19	—	円形	台形状	76-84	—	70	なし	
SD695	25・ 30	27・ 30	63	23P12・17・ 20P8	—	—	弧状	3040	120-200	27-59	SD695 < SK762, SE530, SD615, P798, P799, SK795	中世
P700	30	—	—	21P5・22P1	—	長方形	台形状	132	54	44	P700 < P764, P765	中世
SK714	25	28	69	23Q9	—	楕円形	台形状	64	53	88	なし	
SE737	25	28	69	23P22	—	楕円形	扇形状	180	156	173	SD460 > SE737	
SK758	30	33	58	21O20	SB13	楕円形	台形状	112	70	42	SK758 > P759	
P759	30	—	—	21O19・20	—	楕円形	台形状	123	55	49	SK758 > P759	近世
SK762	30	33	63	21P15	—	楕円形	台形状	186	130	42	SK762 > SD695	近世

遺構観察表 (3)

遺構名	全長 (m)	幅員 (m)	写真 距離 (m)	グリッド	建物	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	高さ (cm)	主要な切り合い	時期・備考
P774	30	33	—	22O16	SB12	円形	半円状	40	—	29	P774 < SE775	
SE775	30	33	—	22O16	SB12	円形	扁円状	84-94	—	137	P774 < SE775	近世
SK777	30	33	70	22O16・17	—	楕円形	扁円状	80	70	74	SD500 < SK777	近世
P780	30	31	58	22O17・18	SB12	長方形	矩形	132	73	37	なし	近世
SK783	30	31	70	22O12	—	円形	扁状	82-92	—	65	なし	
SE786	30	34	70	20P10・15	—	円形	台形状	84-92	—	168	SE786 < SK520	
P788	30	31	58	22O11	SB13	円形	扁状	62-70	—	72	なし	
P792	19	20	58	22O12	SB12	不整形	U字状	72	58	58	P792 < P825	近世
P793	19	20	58	22O12	SB12	不整形	台形状	105	80	62	P793 < P826	近世
P798	30	33	63	21P9	—	円形	U字状	29	28	51	なし	
P799	30	33	63	21P13・14	—	円形	扇状	48	47	60	なし	
SX816	25	—	—	23P2・3・7・8	—	円形	台形状	190	170	73	なし	近世
P822	25	—	—	23R1	—	楕円形	U字状	28	18	30	P822 ≠ SK690	中世
P825	19	20	58	22O12	—	円形	U字状	40	36	42	P792 < P825	
P826	19	20	58	22O12	—	楕円形	U字状	42	32	46	P793 < P826	近世
SD831	25	—	—	22R14-23R9	—	—	—	—	322-374	—	SD831 > SK690	近世
SE834	15	16	70	23O14	—	円形	扁円状	96-108	—	189	SE834 > SD269, SD180, SD938	
SE840	15	16	70	23O11	—	円形	扇状	76-80	—	66	なし	
P857	15	16	70	23N11・12	—	円形	台形状	64-72	—	134	なし	
SE884	25	28	70	22P20	—	楕円形	扇状	98	84	136	SE884 < SK885	中世
SE895	15	16	70	23O5, 23O1	—	円形	扇状	69	—	—	SE895 < SD900	
SD900	15・ 19	16・ 18	—	23O3・8-22O7	—	—	扇状	1260	50-100	9-17	SD900 < SE895 SD900 > SD269, SD180, SD268	近世
P905	30	34	71	22P2	—	円形	U字状	66	—	90	P908 < P905	中世
P908	30	34	71	22P2	—	楕円形	U字状	(12)	18	18	P908 < P905	
P910	30	—	—	22P3・8	—	楕円形	U字状	54	44	80	なし	近世
SE916	15	16	71	23O10・15	—	円形	扇状	80	—	50	SD180 < SE916	
SD924	25	—	—	23P16・17	—	—	台形状	(275)	22	4・7	なし	近世
SE925	30	31	71	22O16・21	—	円形	台形状	57-67	—	70	SD500 ≠ SE925	
SE931	25	—	—	23P12	—	円形	U字状	100	97	207	なし	中世
SE936	30	34	71	20O17・18	—	不整形	扇状	68-73	—	180	SD500 < SE936 SD260 < SE936	
SE937	15	17	71	22N24・25, 22O4	—	不整形	扁円状	192	132	154	SE937 < SD180 SE937 > SD938	中世
SD938	15	17	69	22O4-22O19・20	—	—	弧状	760	70-80	37-48	SD938 < SD180, SD269, SE937, SE834	中世
SE1001	11	12	72	27N17	—	楕円形	U字状	102	77	208	なし	中世
SD1002	13	14	60	26M18-27M12	—	—	台形状	(880)	86	7-33	SD1002 > SD1016 SD1002 < 用本3, SX1006	近世?
SD1003	13	14	60	24N15-20-27N23	—	—	弧状	(2678)	59-202	8-37	SD1003 < SD1004, SD1005, 用本2, 用本3	近世
SD1008	11	—	—	28M22-28N16	—	—	弧状	(800)	93	1-12	SD1008 < 用本3	近世
SD1017	15	18	60	23M2-25L19	—	—	弧状	(2720)	44-103	17-35	SD1017 > SD253	近世
SK1018	13	14	72	25M4・5	—	楕円形	扇状	106	86	76	なし	中世?
SE1020	13	14	72	25L12	—	円形	U字状	114	—	272	なし	近世以降
SD1022	11	12	59	27P14-28P7・12	—	—	台形状	(608)	119-154	45-51	SD1022 = SD1071 SD1022 < 用本3	中世
SD1023	11	12	59	27P9-28P2・9	—	—	台形状	(676)	136-145	43-58	SD1023 = SD1031 SD1023 < 用本3	中世
SE1024	11	12	72	27O15・20	—	円形	U字状	95	—	145	SE1024 < SD1027, 用本3	中世
P1025	11	12	73	27O9	—	円形	U字状	29	—	33	なし	中世
SD1027	11・ 23	12・ 24	59・ 62	24R15-28N13	—	—	半円状	(3488)	80-128	34-59	SD1027 = SD1101 SD1027 > SE1024, SD1031, SD1032, SD1070 SD1027 < 用本1-3	中世 SD1101 と同一
SE1028	11	12	73	27O14	—	楕円形	扇状	140	78	152	SE1028 < P1083	中世
SD1031	11・ 23	12・ 24	59・ 62	23O23・23P3- 27Q23・24	—	—	台形状	(5296)	176-203	37-88	SD1031 = SD1023 SD1031 < SD1027, 用本3 SD1031 > SD1071	中世
SD1032	11・ 23	12・ 24	62・ 63	23P19-26R5・ 27R1	—	—	台形状	(3952)	127-196	37-61	SD1032 < SD1045, SD1046, SD1101, SE1182, SE1183	中世
P1037	11	12	73	27O8	—	円形	扁円状	27	—	42	なし	中世?
SE1041	13	14	73	25L11	—	円形	扇状	114	—	126	SE1041 < 用本2	近世以降?
SK1044	15	—	—	24M3・4・5・8・9・ 10	—	円形	台形状	344	—	41	なし	近世

観 察 表

遺構観察表 (4)

遺構名	分期 図版	類別 図版	写真 図版	グリッド	建物	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主要な切り合い	時期・備考
SD1045	13・15	14・18	60・61	23R5-24M13・14	—	—	台形状	(5304)	116-288	32-100	SD1045 = SD831, SD1003, SD1093 SD1045 < SD1047, SK1124, P1176 SD1045 > SD1031, SD1032, SE1075, SD1101, SD1102, SD1239	近世
SD1046	15	18	61	24P18-23M5	—	—	台形状	(3520)	154-208	44-62	SD1046 < SD253, SD1045, SD1078, SD1239 SD1046 > SD1031, SD1032	近世
SE1057	11	12	73	26O4・5	—	楕円形	U字状	92	75	131	なし	中世
SE1058	13	14	74	26O8・9	—	円形	U字状	76	—	120	なし	中世
SD1070	11	12	—	26O10-27O23	—	—	弧状	(915)	32-60	3-14	SD1070 < 用水3	古代
SD1071	23	24	62	26P12-27P11・16	—	—	台形状	(1048)	(154)	27-46	SD1071 = SD1022 SD1071 < SD1031	中世
SE1075	13	14	74	23O9	—	円形	U字状	88	—	156	SE1075 < 用水1 (SD1045)	中世?
SX1090	13	14	74	25O7	—	楕円形	弧状	196	151	18	なし	
SD1093	13	14	60	25O11・16-25O13	—	—	半円状	(496)	103-160	42-54	SD1093 = SD1045 SD1093 < 用水2	近世
SE1094	25	29	74	24Q17	—	円形	台形状	94	—	71	SE1094 > P1218	中世
SD1101	23	24	62・63	24R15-25P9	—	—	半円状 階段状	(2896)	84-128	34-48	SD1101 = SD1027 SD1101 < SD1045, SD1102 SD1101 > SD1031, SD1032	中世 SD1027 と同一
SD1102	23	24	63	25R11-24Q25	—	—	台形状	(640)	105-115	27-48	SD1102 > SD1045? > SD1101	明治以降
P1103	23	24	74	24R4	—	円形	U字状	28	—	48	なし	中世?
P1104	23	24	74	24R4	—	円形	U字状	15	—	32	なし	中世?
SE1105	25	29	75	24Q16	—	円形	階段状	110	—	97	SE1105 < SE1106	中世?
SE1106	25	29	75	24Q17・21・22	—	円形	台形状	121	—	103	用水1 > SE1106 > SE1105	中世
SK1107	25	—	—	23Q20	—	円形	台形状	75	68	53	なし	近世
P1108	25	29	75	24R8	—	円形	扇斗状	28	—	47	なし	近世以降?
SE1109	25	29	—	23R5	—	楕円形	U字状	75	62	128	SE1109 < SD1045	
SE1110	25	29	75	23R10	—	円形	U字状	83	—	192	SE1110 < SD1045	近世
SK1124	15	—	75	24M13・6・8・11・13・16-18・22・23	—	楕円形	台形状	936	429	94	SK1124 > SD1046, SX1050	明治以降
SK1126	15	17	76	24L2・7	—	円形	台形状	67	—	53	なし	近世?
P1148	15	—	—	24L21	—	円形	U字状	42	—	20	P1148 > SD260	
SK1181	13	14	76	25N17・22	—	円形	台形状	80	—	72	なし	中世?
SE1182	25	29	—	23P	—	楕円形	台形状	405	—	70	なし	明治以降
SE1183	25	29	76	23P9・10・14・15・19・20	—	円形	台形状	320	—	84	SD1031 < SE1183 < SE1182	中世～近世
SE1191	25	29	76	23Q4	—	円形	U字状	72	—	98	なし	
P1193	25	27	58	23Q14	—	円形	U字状	43	—	62	なし	
P1196	25	26	58	23Q10	—	円形	U字状	42	—	88	なし	
P1201	25	26	58	23Q15	—	円形	U字状	46	—	72	なし	

土器類観察表 (1)

※総合資料は、「遺構」・「グリッド」欄に各出土地点を記載した。重量・サイズが大きな順に並び、包含層と異なる場合は遺構を優先させた。
(胎土: 石=石瓦、白=白色胎土、赤=赤色胎土、黒=黒色胎土、長=長石、雲=雲母、チャ=チャート、角=角閃石、骨=海綿骨針、砂=砂眼)

報告 番号	図版 番号	分類 種別	形状 器形	遺構	グリッド	層位	口径 mm	器高 mm	口径 mm	色調		胎土 (裏人物)	時 期	備 考
										外面	内面			
1	38 77	須恵器	杯産	SD260	22M5	1	158	(21)	—	灰白 7.5V7/1	灰白	石・白・磯	春日IV 2-3期	・ロクロナ子 ・瀧川右岸産
2	38 77	土師瓦 土器	皿	SD4	20Q21	—	(16)	52	—	灰白～灰黒 10YR4/3	10YR3/3	石・白	15C中～後半	・回転糸切り
3	38 77	須恵器	長頸壺	SE5	19Q25	2	—	(78)	—	オリーブ灰 10Y3/1	灰 7.5Y4/1	白		・細手付 ・ロクロナ子 ・瀧川左岸産
4	38 77	須恵器	瓶台杯	SE66	19Q3	3	—	(24)	70	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/2	石・白	(春日IV 2-3期)	・ロクロナ子 ・瀧川右岸産
5	38 77	須恵器	長頸壺	—	19P24 19P23	IV IV	73	178	76	灰オリーブ 7.5Y6/2	灰オリーブ 7.5Y6/2	石・白・黒	春日IV 2-3期	・ロクロナ子 ・瀧川右岸産
6	38 77	古瓦	杆	SE335	22K19	2	(166)	(24)	—	オリーブ灰 2.5GY6/1	オリーブ灰 6Y6/1	—	13C中頃～ 14C初頃	・山本田 3b 型
7	38 77	須恵器	片口鉢	SE335	22K19	3	202	89	94	灰 10Y4/1	灰 10Y4/1	石・白・長 骨・磯	須田1～ 2期	・回転糸切り ・目目は無い
8	38 77	須恵器	横瓶	SD180	—	1	—	(37)	—	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	石・白	(春日IV 2-3期)	(外) 平行タタキ (内) 同心円状で具状 ・瀧川右岸産
9	38 77	須恵器	甕	SD180	21K14	2	—	(84)	—	灰 5Y6/1	灰白 7.5V7/1	白・磯		(外) 平行タタキ (内) 同心円状で具状 ・瀧川左岸産

土器類観察表 (2)

観内 番号	分 類	通標	グリッド	層位	口径 mm	器高 mm	口径 mm	色 調		胎土 (混入物)	時 期	備 考	
								外面	内面				
10	38 77	甕	SD180 P612	— 22Q10	1 1	—	(97)	—	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y6/1	白	(春日IV 2-3 期)	(外) 平行タタキ・カキメ (内) 同心円あて具痕 ・甕川右岸産
11	38 77	吉福 椀	SD180	21K25	3	—	(25)	—	灰オリーブ 7.5Y5/2	灰オリーブ 7.5Y5/2	白		
12	38 77	珠洲焼 甕	SD180	21L5	1	—	(39)	—	暗灰 N3/0	灰 10Y4/1	白・黄	珠洲I期	・ロクロ成形 ・体部外面ケズリ
13	38 77	珠洲焼 壺	SD180	2204	2	—	(71)	75	暗灰 10YR4/1	灰 5Y4/1	石・白		
14	38 77	珠洲焼 片口鉢	SD180	21K25	1	—	(49)	—	灰オリーブ 5Y6/2	灰オリーブ 5Y6/2	石・白・骨	珠洲V期	・即日 (幅1.9cm) 6条以上
15	38 77	珠洲焼 片口鉢	SD180	2204	1	—	(66)	142	灰 7.5Y5/1	灰 N5/0	白・骨	珠洲I期	・即日 (幅2.6cm) 16条 ・静止糸切り
16	38 77	土師質 土器	SD180	21K14	2	—	(22)	69	赤灰 2.5YR4/1	褐色 5YR4/1	白・赤	14C前半	・ロクロ成形 ・回転糸切り
17	38 77	土師質 土器	SD180	21K25	2	—	(21)	71	にぶい・緑褐色 10YR7/3	浅褐色 10YR8/4	石・赤	15C中～後半	・ロクロ成形 ・回転糸切り
18	38 77	土師質 土器	SD180	21K25	1	—	(17)	(66)	橙 5YR6/8	橙 5YR6/6	白・黒・赤	15C中～後半	・ロクロ成形 ・回転糸切り
19	38 77	珠洲焼 片口鉢	SE261 SD695 SD500 SD937 SD938 SD180 SD269	— 22M20 22P14 21O16 22N20 22O10 2 1 2 22M24 22O10	— 2 1 1 1	(298)	130	140	淡赤褐色 2.5YR7/4	浅褐色 7.5YR8/3	白・黄	珠洲III～IV期	・即日 (幅2.5cm) 14条 ・静止糸切り ・投合しないが4回一個体の可能性が高い
20	39 77	珠洲焼 片口鉢	SE304	21L5	4	—	(89)	130	浅黄 2.5Y7/3	灰黄 2.5Y7/2	石・白・黄	珠洲I期	・即日 (幅2.5cm) 16条 ・静止糸切り ・産文
21	39 77	吉福 椀	SE443	22N1	1	—	(17)	—	オリーブ灰 2.5GY6/1	緑灰 7.5GY8/1	—	13C前後～ 後半	・産文 ・山本目々型
22	39 77	土師器 杯蓋	SD500	20019	下	—	(16)	—	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y6/1	石・白・黒	春日II 2期	・ロクロナデ ・甕川右岸産
23	39 77	土師器 有台杯	SD500	21O21	1	—	(14)	80	灰 5Y6/1	灰 5Y5/1	石	春日IV 2-3期	・ロクロナデ ・甕川右岸産
24	39 77	土師器 高杯	SD500	22025	崩下	—	(30)	—	灰 7.5Y4/1	灰 7.5Y5/1	石・白・赤	春日IV 2-3期	・ロクロナデ ・甕川右岸産
25	39 77	土師器 長頸壺	SD500	20025	1	—	(21)	118	灰 7.5Y4/1	灰 N5/0	石・白		・ロクロナデ ・回転へう切り? ・佐渡産
26	39 77	土師器 甕	SD500	23O23	2	—	(60)	—	灰 7.5Y6/1	灰 N4/0	石・白		・(外) 縦格子タタキ
27	39 77	吉福 椀	SD500	22P3	上	(166)	(48)	—	オリーブ灰 5Y6/1	オリーブ灰 5Y6/1	—	13C前後～ 後半	・産弁文 ・山本目々型
28	39 77	吉福 椀	SD500	21O16	1	—	(29)	—	灰オリーブ 7.5Y6/2	灰オリーブ 7.5Y6/2	—		・山本IV型
29	39 77	珠洲焼 甕	SD500	22025	下	—	(50)	—	黒 N1.5/0	暗灰 N3/0	石・白・黒	珠洲I期	
30	39 77	珠洲焼 壺	SD500	22022	1	—	(62)	—	灰 N5/0	灰 N5/0	石・白		(外) 平行タタキ
31	39 78	珠洲焼 甕	SD500	20O12	—	—	(61)	146	明褐色 7.5YR5/6	にぶい・暗 7.5YR5/4	石・白・赤 長・骨	珠洲IV～V期	(外) 平行タタキ
32	39 78	珠洲焼 片口鉢	SD500	22O23	下	—	(53)	—	灰 10Y6/1	灰 10Y6/1	石・白	珠洲II～III期	
33	39 78	珠洲焼 片口鉢	SD500 SD1031	20O18 22P8	下	332	(79)	—	灰 N5/0	灰 N6/0	白・骨	珠洲II～III期	
34	39 78	珠洲焼 甕	SE504	22Q23	1	—	(96)	—	灰 N5/0	灰 N5/0	石・白・骨		(外) 平行タタキ
35	39 78	珠洲焼 片口鉢	SK521	21Q2	1	—	(54)	—	赤褐色 10R4/3	暗赤灰 10R4/1	白・黄	珠洲I期	・即日 (幅1.9cm) 8条以上 ・13条波状文 (幅1.4cm) 7条以上 ・No.35と同じか
36	39 78	土師器 有台杯	SE621	22R18	1	—	(22)	74	灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	石・白	春日IV 2-3期	・ロクロナデ ・回転糸切り? ・甕川右岸産
37	39 78	吉福 椀	SE622	22Q23	—	—	(21)	—	明オリーブ 灰 2.5GY7/1	明オリーブ 灰 5GY7/1	—	(15C後半)	・産弁文
38	39 78	珠洲焼 片口鉢	SE622 SE1105	22Q23 22Q16	2	(318)	(75)	—	黄灰 2.5Y4/1	にぶい・赤褐色 2.5YR5/4	石・白・黄	珠洲I期	・即日 (幅2.8cm) 11条 ・13条波状文 (幅1.8cm) 10条 ・No.35と同じか
39	39 78	珠洲焼 甕	P645	22Q13	1	—	(41)	—	灰 N5/0	灰 N5/0	白		(外) 平行タタキ
40	39 78	土師器 甕台杯	SD695	20P9	崩下	—	(15)	88	赤黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	石・長・黒	春日IV 2-3期	・甕川右岸産
41	39 78	土師器 甕	SD695	21P6	中	—	(89)	—	灰 7.5Y6/1	灰 10Y6/1	白		(外) 格子タタキ (内) 格子あて具痕 ・佐渡産
42	39 78	吉福 椀	SD695	22P13	KR	142	(42)	—	オリーブ灰 10Y5/2	オリーブ灰 10Y5/2	白・黒	14C初期～ 後半	・山本IV型
43	40 78	珠洲焼 壺	SD695	22P15	1	—	(76)	—	灰 N5/0	灰 N6/0	石・黒	珠洲IV～V期	(外) 平行タタキ

観察表

土器類観察表 (3)

報告番号	調査区分	土器分類	遺物	グリッド	層位	口径mm	器高mm	底径mm	色調	胎土(混入物)	時期	備考	
44	4078	珠洲焼 甕	SD695	21P12	下	—	(74)	—	裏灰 2.5Y6/1 灰黄 2.5Y7/2	白	珠洲IV~IV期	(外) 平行タタキ線付状	
45	4078	珠洲焼 片口鉢	SD695	22P12	1	—	(38)	—	灰 N4/0 暗灰 N3/0	白・骨	珠洲I~I期	口縁波状文(幅0.6cm)3条	
46	4078	珠洲焼 片口鉢	SD695 SD1071 SE1001	22P13 26P13 27N17	下 1 層上	—	(41)	130	裏灰 N5/0 灰 5Y6/1	石・白・黒	珠洲IV~IV期	・割目(幅2.6cm)13条 ・静止糸切り・板目状圧痕	
47	4078	須恵系 有台鉢	P700	22P1	1	144	43	100	灰白 2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1	石・白・黒	春日田2期	・ロクロナデ ・回転へう切り+ナデ ・割田右岸産	
48	4078	珠洲焼 甕	P822	23R1	1	—	(58)	—	裏灰 2.5Y5/1 灰 2.5Y5/1	石・白・骨	珠洲IV~IV期	(外) 平行タタキ線付状	
49	4078	珠洲焼 甕	P905	22P2	3	—	(40)	—	灰 7.5Y5/1 灰 5Y5/1	石・白・骨	珠洲IV~V期		
50	4078	須恵系 横鉢	SE931	23P12	—	—	割縁(184)	—	灰オリーブ 2.5Y7/1 灰 7.5Y5/3	石・白・黒	(春日田2-3期)	(外) 平行タタキ+カキメ (内) 同心円状具痕 ・割田右岸産	
51	4078	須恵系 杯蓋	SD938	22O10	2	127	(20)	—	裏灰 2.5Y6/2 裏灰 2.5Y6/1	白・黒	春日田2-3期	・ロクロナデ ・割田右岸産	
52	4078	珠洲焼 片口鉢	SE1001	27N16	3	—	(47)	122	黒陶 10YR3/2 灰 N7/0	白		・板目状圧痕	
53	4078	珠洲焼 片口鉢	SD1022	27P14	—	—	(51)	—	灰白 N5/0 灰 N5/0	白・黒	珠洲IV~IV期	・割目は不明 ・口縁面に線条痕	
54	4078	珠洲焼 片口鉢	SD1023	28P1	1	—	(61)	—	灰白 N7/0 灰 7.5Y6/1	石・白・黒	珠洲IV~IV期	・割田産	
55	4078	珠洲焼 片口鉢	SE1024 用米3	27Q23	—	—	(62)	126	灰 5Y5/1 灰 7.5Y5/1	石・白・骨	珠洲I~I期	・静止糸切り ・割田右岸産	
56	4078	土師質 土器	SE1024	27Q30	—	96	30	40	灰 2.5YR6/8 灰 2.5YR6/8	石・白	15C中~後半	・手づくね成形	
57	4078	珠洲焼 甕	SD1027	27P2	—	—	(90)	—	灰 N4/0 灰 N5/0	石・白・赤	珠洲IV~V期	(外) 平行タタキ	
58	4078	珠洲焼 甕	SE1028	27O14	—	—	(57)	88	灰 10Y4/1 灰 N5/0	石・白		・静止糸切り	
59	4078	須恵系 横鉢	SD1031 SD1032 SD1071	27P11 25P24 26P14	4 3 1	112	(41)	—	灰 N6/0 灰 N7/1	石・白・黒	(春日田2-3期)	・ロクロナデ ・ナデ ・割田右岸産	
60	4078	土師質 陶	SD1031	27P11	2	134	(28)	—	にぶい黄焼 7.5YR7/3 にぶい黄 7.5YR7/3	石・白・黒		・ロクロナデ	
61	4078	珠洲焼 甕	SD1031	27P11	4	(462)	(119)	—	灰 N4/0 灰 N6/0	石・白・緑	珠洲IV期	(外) 平行タタキ	
62	4078	珠洲焼 甕	SD1031	27P11	1	(462)	(75)	—	灰 N5/0 灰 N6/0	白・長	珠洲IV期	(外) 平行タタキ	
63	4179	珠洲焼 片口鉢	SD1031 SD1032 P647	27P11 26R5 23Q8	4 2 1	328 ~340	109	110	灰 5Y4/1 灰 N5/0 灰 N5/0	白・黒・骨 石・白・長 緑	珠洲IV期	(外) 平行タタキ線付状 (内) 具痕+ナデ	
64	4179	珠洲焼 片口鉢	SD1031 用米3	27P17 24O25 27Q19	1 2	—	(82)	—	暗灰 N3/0 灰 N5/0	石・白・赤 緑	珠洲IV期	・割目(幅0.6cm)3条 ・No.78と同一か	
65	4179	珠洲焼 片口鉢	SD1031	27Q13	2	—	(69)	—	灰 N4/0 灰 N4/0	白・骨・緑	珠洲IV期	・割目(幅3.0cm)10条 ・口縁波状文4条以上	
66	4179	土師質 土器	SD1031	26P13	2	—	(60)	124	灰 5Y6/1 灰 5Y7/1	石・白・骨	珠洲IV~IV期	・割目(幅2.8cm)9条 ・静止糸切り	
67	4179	土師質 土器	SD1031	26R6	1	126	(23)	—	にぶい黄焼 10YR7/3 にぶい黄焼 10YR7/4	白・赤・黒 角	15C中~後半	・手づくね成形 ・ナデ・熟煎圧痕	
68	4179	土師質 土器	SD1031	27P12	4	124	(28)	—	にぶい黄焼 10YR7/3 にぶい黄焼 10YR7/2	石・白・黒	14C第2-4期	・手づくね成形	
69	4179	土師質 土器	SD1031	27P18	4	(94)	(32)	—	灰黄 10YR8/4 灰黄 10YR8/4	石・白・緑	14C第3-4期	・手づくね成形	
70	4179	須恵系 杯蓋	SD1032	26Q14	2	106	(23)	—	緑灰 N6/0 灰 N6/0	白・黒・緑	春日田2期	・ロクロナデ ・割田右岸産	
71	4179	須恵系 有台鉢	SD1032	26Q20	2	(141)	(32)	—	灰白 5Y7/1 灰白 5Y7/1	石・白・黒	春日田2期	・ロクロナデ ・割田右岸産	
72	4179	須恵系 有台鉢	SD1032 SD695	26Q8 21P15	2 2	—	(21)	74	灰 5Y5/1 灰 5Y5/1	オリーブ黒 10Y3/1	石・白・黒	春日田2-3期	・ロクロナデ ・回転へう切り ・割田右岸産
73	4179	須恵系 有台鉢	SD1032	26Q14	2	—	(24)	70	灰 10Y4/1 灰 10Y5/1	白・黒・骨		・ロクロナデ ・回転へう切り ・割田左岸産	
74	4179	須恵系 無台鉢	SD1032	26Q25	2	120	38	86	灰白 7.5Y8/1 灰 10Y8/1	石・白・黒 角・緑	春日田2-3期	・ロクロナデ ・割田右岸産	
75	4179	須恵系 甕	SD1032	26Q20	2	—	(75)	—	灰 5Y5/1 灰 7.5Y5/1	白・骨・緑	(春日田2-3期)	(外) 平行タタキ (内) 同心円状具痕 ・割田右岸産	
76	4179	須恵系 甕	SD1032	27R1	2	—	(74)	—	暗灰 N3/0 灰 10Y5/1	石・白		(外) 格子タタキ (内) 平行あて具痕 ・佐渡産	
77	4179	古墳 陶	SD1032	23P19	F	154	(49)	—	オリーブ黄 5Y6/3 灰 5Y6/3	オリーブ黄 5Y6/3	13C前後~ 後半	・薄文土 ・山本直止	
78	4179	珠洲焼 片口鉢	SE1067	26O5	1	—	(58)	—	暗灰 N3/0 灰 N4/0	石・白	珠洲IV期	・割目(幅1.8cm)10条 ・No.64と同一か	

土器類観察表 (4)

観 察 番 号	分 類	遺構	グリッド	層位	口徑 mm	器高 mm	底径 mm	色 調		胎土 (製入物)	時 期	備 考				
								外面	内面							
70	79	灰意器	有台杆	SD1071	26P15	1	—	(13)	78	灰 10Y5/1	灰 10Y5/1	白・靑	春日IV 2-3期	・ロクロナデ ・回転ヘラ切り ・甕川右岸産		
80	41	79	灰意器	長頸壺	SD1071	26P13	1	—	(46)	—	オリーブ黒 10Y3/1	灰 7.5Y5/1	石・白・黒	・ロクロナデ ・佐渡産		
81	41	79	灰意器	甕	SD1071	26P14	1	—	(187)	—	灰 10Y5/1	灰 N6/0	白・青	珠洲IV期	(外) 平行タタキ ・N6.0と同-か	
82	42	80	灰意器	杯蓋	SE1105	24Q16	2	—	(18)	—	灰 10Y4/1	灰 10Y4/1	白	—	・ロクロナデ ・甕川左岸産	
83	42	80	灰意器	甕	SE1105	24Q16	1	—	(79)	—	灰 7.5Y5/1	灰 5Y6/1	白・黒	(春日IV 2-3期)	(外) 平行タタキ (内) 向心門めて具底 ・甕川右岸産	
84	42	80	灰意器	甕	SE1105	24Q16	中	—	(102)	—	灰 10Y4/0	灰 5Y5/1	石・白・靑	(春日IV 2-3期)	(外) 平行タタキ (内) 向心門めて具底 ・甕川右岸産	
85	42	80	灰意器	甕	SE1105 SD1045 SD1031 SE1094 SD1032 SD1032	24Q16 24P18 26P14 24Q17 25P04 24P16	中 — 2 1 3 下	532	(171)	—	暗灰 N3/0	灰 5Y5/1	白・青	珠洲IV期	(外) 平行タタキ	
86	42	80	土師質土器	皿	SE1106	24Q22	1	103	21	62	にがい赤橙 10R6/4	赤橙 10R6/6	石	15C 中～後半	・手づくね成形 ・スス伏付器物	
87	42	80	灰意器	長頸壺	P1148	24L21	—	—	(98)	—	黄緑 2.5Y5/3	暗灰黄 2.5Y5/2	石	(春日IV 2-3期)	・ロクロナデ ・甕川右岸産	
88	42	80	土師器	碗	KR50	19P12	—	(188)	(23)	—	橙 5YR6/8	灰 5YR6/8	石・白・赤	—	・ロクロナデ	
89	42	80	土師器	皿? 鉢?	KR50	19P12	—	—	(19)	—	橙 5YR6/8	明赤褐 5YR5/8	白・赤・黒 雲	—	・ロクロナデ	
90	42	80	灰意器	甕	SE78	19Q4	3	—	(46)	—	オリーブ黒 5Y3/1	黒 5Y2/1	石・白・赤	—	(外) 平行タタキ	
91	42	80	灰意器	有台杆	F241	22L14	—	—	(14)	66	灰 5Y5/1	灰 5Y6/1	石・白	春日IV 2-3期	・ロクロナデ ・甕川右岸産	
92	42	80	土師質土器	皿	SD267	21L25	—	121	(19)	—	橙 5YR6/6	橙 5YR6/8	石・白・赤	13C 末～ 14C 前半	・手づくね成形	
93	42	80	灰意器	短頸長頸壺	KR275	21M4	—	(194)	(53)	—	海灰 10YR5/1	黄灰 2.5Y5/1	石・白・黒	春日IV 2-3期	・ナデ (内) 向心門めて具底 ・甕川右岸産	
94	42	80	瀬戸、美濃焼	小皿	SX407	22N3	KR	(114)	(21)	—	浅黄 5Y7/4	オリーブ黄 7.5Y6/3	—	古瀬戸後期 (15C 後半)	・緑釉	
95	42	80	灰意器	甕	SD561	20Q25	1	—	(49)	—	灰 N5/0	灰 N6/0	石・白	珠洲IV～V期	—	
96	42	80	土師質土器	皿	SX016	23Q1	1	—	(13)	61	橙 5YR7/8	橙 5YR7/6	白・赤・靑	15C 中～後半	・ロクロ成形?	
97	42	80	土師器	鉢	SD831	23R18	—	(263)	(41)	—	黒褐 5YR3/1	明赤褐 5YR5/6	白・赤・雲	珠洲IV～V期	・ロクロナデ	
98	42	80	灰意器	片口鉢	SD1008	28N16	KR	1	—	(38)	106	灰 5Y6/1	灰 N6/0	石・白・青	珠洲I～II期	・即日は無い
99	42	80	灰意器	片口鉢	SK1044	24M4	2	—	(84)	162	黄灰 2.5Y6/1	にがい黄 7.5Y6/1	石・白・靑	珠洲V期	・即日不明 ・静土未切り	
100	42	80	灰意器	無台杆	SD1045	24P1	1	—	(20)	60	灰黄 2.5Y6/2	にがい黄 2.5Y6/3	石・黒	春日IV 2-3期	・ロクロナデ ・甕川右岸産	
101	42	80	灰意器	有台杆	SK1124	24M17	1	—	(15)	56	灰 N5/0	灰 10Y6/1	石・白	—	・ロクロナデ ・甕川左岸産	
102	42	80	吉甕	磁鉢	SK1124	24M17	1	(151)	(42)	—	明緑灰 10GY7/1	明緑灰 10GY7/1	—	14C 初頭～ 後半	・山本IV型	
103	42	80	土師質土器	皿	SK1124	24M11	1	202	39	152	黄緑 10YR5/1	にがい黄緑 10YR7/2	石・白・黒	—	・手づくね成形 ・ナデ・黄緑斑底	
104	43	80	灰意器	甕	SE1110	23R10	4	—	(88)	—	黄灰 2.5Y6/1	灰 5Y5/1	石・白・靑	(春日IV 2-3期)	(外) 格子目タタキ (内) 平行or放射状めて具底 ・甕川右岸産	
105	43	80	灰意器	甕	SE1110	23R10	4	—	(112)	—	灰 7.5Y4/1	灰 5Y6/1	石・白	(春日IV 2-3期)	(外) 手づくね状文 (内) 向心門めて具底 ・甕川右岸産	
106	43	80	土師器	小壺	雨水2	25P25	—	—	(30)	63	にがい橙 7.5YR7/4	にがい橙 7.5YR7/3	石・白・黒	—	—	
107	43	80	吉甕	種花皿	雨水2	25P4	1	118	(20)	—	緑白 5G5/1	緑白 5G5/1	—	15C 中葉	—	
108	43	80	灰意器	片口鉢	雨水2	26R1	—	—	(48)	—	赤灰 7.5Y5/1	灰 N4/0	石・白・靑	珠洲I期	・即日 (幅0.5cm) 3条 ・内面に白灰文2条	
109	43	80	土師質土器	皿	雨水3	27P5	—	75	18	40	橙 5YR6/6	橙 2.5YR6/6	石・白	12C 第4四半期	・ロクロ成形 ・回転糸切り	
110	43	80	灰意器	無台杆土器	新面A	22L15	—	(10)	46	灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	石・白	—	・ロクロナデ ・回転糸切り ・取土№2		
111	43	80	肥前陶器	磁鉢	新面B	21L19	II	(342)	(35)	—	赤黒 10R1.7/1	赤黒 10R1.7/1	—	18C	・取土№3	
112	43	80	灰意器	杯蓋	—	21M3	IV	—	(14)	—	灰 10Y6/1	灰 5Y4/1	白	春日V 2期	・甕川右岸産	
113	43	80	灰意器	杯蓋	—	20N22	KR	(172)	(23)	—	黄赤 2.5Y6/2	灰白 2.5Y7/1	白	春日IV 2-3期	・甕川右岸産	

観 察 表

土器類観察表 (5)

報告 番号	調査 年度	分 類	通 達	グリッド	層位	口径 mm	器高 mm	口径 mm	底径 mm	色調	胎土 (装人物)	時 期	備 考
43 81	114	灰志器	有台枠	—	20O25	KR	119	37	71	灰 7.5Y5/1 灰 N6/0	石・白・黒	春日V 2期	・ロクロナデ ・甕田右岸産
43 81	115	灰志器	有台枠	—	21Q15	Ⅲ	123	42	73	暗赤灰 5B4/1 オリーブ灰 2.5GY6/1	石・白・赤 黒・緑	春日V 2期	・ロクロナデ ・甕田右岸産
43 81	116	灰志器	有台枠	—	22P24	Ⅳ	125	44	80	灰白 N7/0 灰白 N7/0	石・白	春日IV 2・3期	・ロクロナデ ・甕田右岸産
43 81	117	灰志器	有台枠	—	19R11	Ⅱ	—	(22)	82	灰 10Y4/1 灰 10Y4/1	石・白・黒 緑	春日IV 2・3期	・ロクロナデ ・甕田右岸産
43 81	118	灰志器	有台枠	—	23J19	Ⅱ	—	(16)	63	灰 10Y4/1 灰 7.5Y5/1	石・白	春日IV 2・3期	・ロクロナデ ・甕田右岸産
43 81	119	灰志器	有台枠	—	23P12	—	—	(20)	77	灰黄 2.5Y6/2 灰オリーブ 5Y6/2	白	春日IV 2・3期	・ロクロナデ ・甕田右岸産
43 81	120	灰志器	長頸壺	—	24L14	KR	—	(34)	—	オリーブ灰 5Y2/2 灰 10Y5/1	石・白		・ロクロナデ ・甕田右岸産
43 81	121	灰志器	横瓶	—	21N21	Ⅲ	—	(110)	—	灰黄 2.5Y7/2 灰オリーブ 7.5Y6/2	石・白・黒	(春日IV 2・3期)	(外) カキメ ・甕田右岸産
43 81	122	灰志器	瓶	—	24M16	Ⅱ	—	(19)	—	黒褐 2.5Y3/1 灰 10YR8/1	石・白		(外) カキメ (内) ロクロナデ
43 81	123	灰志器	壺	—	20N6	Ⅲ	—	(65)	—	暗灰 N3/0 灰 7.5Y6/1	白・緑	(春日IV 2・3期)	(外) 平行タキ (内) 湯心均赤 ・甕田右岸産
44 81	124	土師器	椀	—	19P13	KR	(240)	(33)	—	橙 5YR6/8 橙 5YR6/8	石・白・黒 赤		・ロクロナデ
44 81	125	土師器	椀	—	22O3	Ⅲ	155	(55)	—	黄橙 7.5YR7/8 橙 7.5YR6/8	石・白・赤 橙		・ロクロナデ
44 81	126	土師器	小壺	—	22L15	Ⅱ	—	(30)	63	浅黄橙 7.5YR8/4 7.5YR7/6	白・黒		
44 81	127	土師器	小壺	—	23J19	Ⅲ	—	(20)	51	橙 5YR7/8 橙 5YR7/8	石・白・赤 緑		
44 81	128	土師器	小壺	—	25K2	Ⅱ	—	(17)	51	橙 7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6	石・白・緑		
44 81	129	土師器	小壺	—	23L16	Ⅰ	—	(21)	(92)	橙 7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6	白・黒・赤		
44 81	130	青磁	椀	—	23R6	—	(129)	(24)	—	黄褐 2.5Y5/4 明緑灰 2.5Y6/4	赤・黒		
44 81	131	青磁	椀	—	19P12	KR	—	(18)	58	明緑灰 10GY7/1 明緑灰 7.5GY7/1			(14C 末～ 15C 初葉)
44 81	132	青磁	壺	—	19R11	Ⅱ	—	(64)	—	灰白 N8/0 明緑灰 7.5GY7/1			
44 81	133	瀬戸・ 美濃焼	小皿	—	22M10	Ⅲ	109	(14)	—	黄赤 2.5Y8/4 黄赤 2.5Y8/3		16C 後半	・緑釉
44 81	134	珠洲焼	壺	—	23J19	Ⅱ	—	(72)	—	灰黄 2.5Y6/2 浅黄 2.5Y7/3	白	珠洲Ⅲ～Ⅳ期	(外) 平行タキ緑釉状
44 81	135	珠洲焼	片口鉢	—	20M4	Ⅱ	(240)	(76)	—	灰 10Y5/1 灰 10Y5/1	石・白・黄 緑	珠洲V期	・胴口 (幅1.5cm) 5条以上
44 81	136	土師質 土器	皿	—	24M16	Ⅱ	172	22	146	橙 7.5YR7/6 浅黄橙 10YR8/4	石・赤	15C 前半	・手づくね成形
44 81	137	土師質 土器	皿	—	24M16	Ⅱ	150	(24)	—	橙 5YR7/6 橙 5YR7/6	白	15C 前半	・手づくね成形
44 81	138	越中 瀬戸焼	丸皿	—	—	表探	84	23	40	赤黄 7.5R2/1 赤黄 7.5R2/1	石・白・黒		・回転糸切り
44 81	139	越中 瀬戸焼	丸皿	SD404	20N25	Ⅰ	118	(19)	—	暗赤褐 5YR3/3 暗赤褐 5YR3/3	白・黒		
44 81	140	越中 瀬戸焼	丸皿	SX414	20N8	Ⅰ	100	(21)	—	暗赤褐 2.5YR3/2 暗赤褐 2.5YR3/2	白		
44 81	141	越中 瀬戸焼	皿	KR20	19P25	4・ 5	—	(19)	50	にがい橙 7.5YR7/4 暗赤褐 10R2/2	石・白		・回転糸切り
44 81	142	越中 瀬戸焼	皿	SE65	19Q4・ 5	—	—	(18)	38	浅黄橙 10YR8/4 橙 7.5YR6/6	石・白		・回転糸切り
44 81	143	越中 瀬戸焼	広口壺	SE25	19Q10	9	—	(15)	100	暗赤灰 7.5R4/1 暗赤灰 7.5R4/1	石・白		・回転糸切り
44 81	144	越中 瀬戸焼	広口壺	SE65	19Q4・ 5	2	—	(25)	102	暗赤褐 7.5R2/2 暗赤褐 7.5R2/2	石・白・黒		・回転糸切り
44 81	145	越中 瀬戸焼	広口壺	SE65	19Q4・ 5	4	—	(25)	96	暗赤褐 5YR3/4 暗赤褐 5YR4/4	石・白		・回転糸切り
44 81	146	越中 瀬戸焼	広口壺	SE65	19Q4・ 5	4	98	(84)	—	暗赤灰 10R3/1 暗赤灰 10R3/3	石・白		
44 81	147	越中 瀬戸焼	広口壺	SD253	23M10	—	—	(60)	96	暗赤褐 2.5YR3/3 暗赤褐 2.5YR3/3	石・白・緑		・回転糸切り
44 81	148	越中 瀬戸焼	広口壺	SD299	20N5	1	—	(23)	111	明赤褐 5YR5/6 明赤褐 5YR5/6	石		・回転糸切り
44 81	149	越中 瀬戸焼	広口壺	SD460 SD831	22Q7 25R4	1	—	(69)	104	暗赤灰 10R3/2 暗赤灰 7.5R3/2	石・白・黒		・回転糸切り
44 82	150	越中 瀬戸焼	広口壺	SB627	23Q24	上	74	(72)	—	暗赤灰 7.5R3/2 にがい赤 5YR4/4	石・白		
44 82	151	越中 瀬戸焼	広口壺	P910	22P6	1	97	(39)	—	暗褐 7.5YR3/4 暗褐 7.5YR3/4	石・白		
44 82	152	越中 瀬戸焼	広口壺	SK921	23P2	—	82	(63)	—	黒褐 7.5YR2/2 暗褐 7.5YR3/3	石・白・黒		

土器類観察表 (6)

報告 番号	分類	種類	通稱	グリッド	順位	口径 mm	器高 mm	底径 mm	色 調		胎土 (製入物)	時 期	備 考		
									外面	内面					
153	44	甗中焼	広口壺	SD024 SD095	23P17 21P12	1	118	(35)	—	暗赤褐色 5YR3/4	にんべい赤褐色 5YR4/4	石・白・黒			
154	44	甗中焼	広口壺	—	SK1107 —	23Q20 25Q1	1	106	91	112	暗赤褐色 10R3/2	暗赤褐色 10R2/2	石・白	・回転糸切り	
155	44	甗中焼	広口壺	—	P1193	23Q14	1	91	(58)	—	にんべい赤褐色 2.5YR5/4	明赤褐色 2.5YR5/6	石・白・黒	・回転糸切り	
156	44	甗中焼	広口壺	—	—	24M16	II	—	(53)	75	褐色 5YR4/3	褐色 7.5YR4/3	石・白	・回転糸切り	
157	45	甗中焼	鉢	SD500	23O17	1	312	(58)	—	灰赤 7.5R4/2	灰赤 7.5R4/2	石・白	・脚口 (幅 2.6cm) 11 葉		
158	45	甗中焼	甗	—	22O20	1	—	(303)	209	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 7.5YR6/2	白			
159	45	甗中焼	瓦器	台付鉢	SD1046	24M21 24M16	上 上	195	172	139	黒褐色 10YR3/1	灰褐色 10YR4/2	白		
160	45	甗中焼	中 甗	SE59	19Q14	—	—	(60)	—	暗赤褐色 7.5R3/2	暗赤褐色 7.5R3/2	石・白	18C 後半～ 19C 前半		
161	45	甗中焼	中 甗	B	SK1124	24M11 24M17	1 1	390	343	149	暗赤褐色 5YR3/4	暗赤褐色 5YR3/4	石・白・黒	18C 後半～ 19C 前半	
162	45	甗中焼	中 甗	A	SK1124	24M2- 7	1	(380)	(100)	—	暗赤褐色 5P4/1	暗赤褐色 5P4/1	白	18C 後半～ 19C 前半	
163	45	甗中焼	中 甗	—	SK1124	24M1- 6	1	—	(136)	162	黒褐色 10YR3/1	黒褐色 10YR3/2	白	18C 後半～ 19C 前半	
164	45	甗中焼	中 甗	—	SK1124 SK1124 SK1124 SD1046	24M- 1 24M11 24M13 24M11	ベリ 1 1 1 上	—	(202)	139	暗赤褐色 7.5R3/2	暗赤褐色 10R3/2	石・白・黒	18C 後半～ 19C 前半	
165	46	甗中焼	中 甗	B	—	22P12	—	698	664	244	暗赤褐色 7.5R3/2	にんべい赤褐色 7.5YR5/4	石・白・黒	18C 後半～ 19C 前半	
166	46	甗中焼	鉢	A	SX414	20N8	1	(272)	(99)	—	暗赤褐色 2.5YR3/4	暗赤褐色 2.5YR3/4	石・白	18C 末 ・口口成形 ・底面を漆で施す	
167	46	甗中焼	鉢	A	SD1046 SD1046 — SK1124	24M16 24M21 24M16 24M17	上 上 上 1	340 1	358	202	216	赤褐色 5YR4/6	赤褐色 5YR4/6	白	1830 年代以降 ・口口成形 ・脚状突起付 ・漆で施す
168	46	甗中焼	鉢	B	SK1124 SK1124	24M- 1	ベリ 1	406	162	254	暗赤褐色 5YR3/4	暗赤褐色 5YR3/4	石・白	1830 年代以降 ・口口成形	
169	46	甗中焼	鉢	B	SK1124 SK1124 SK1124	24M- 1 24M13 24M18	ベリ 1 1 1	298	126	194	暗赤褐色 2.5YR3/4	暗赤褐色 2.5YR3/4	白	19C 前半 ・口口成形	
170	46	甗中焼	鉢	B	SX412 SK1124 SK1124	20N22 24M- 24M22	ベリ 1 1	294	141	195	赤褐色 10R4/4	赤褐色 10R5/8	石・白・黒	19C 前半 ・口口成形 ・脚状突起付	

土製品・石器・石製品観察表

報告 番号	内装 番号	種類	器種	石種	出土位置			法量 (cm)			重量 (g)	備考
					通稱番号	グリッド	順位	長さ	幅	厚さ		
171	47-84	土製品	土鏃	—	KR20	19P24	2	5.25	4.25	4.35	74.2	口径 1.7cm
172	47-84	土製品	羽口	—	SD500	23P2	1	6.25	5.9	2.65	64.1	推定外径 6.2cm
173	47-84	土製品	羽口	—	—	23Q13	III	5.9	4.65	1.95	34.8	推定外径 5.6cm
174	47-84	石器	磨石	安山岩	SE304	21L5	4	10.9	8.75	4.75	589.3	磨面不明
175	47-84	石器	磨石	凝灰岩	SE135	22K19	8	15.5	6.6	5.7	657.5	砥面 3 (正・右側・裏) 面。上・半欠損
176	47-84	石器	磨石	凝灰岩	SD180	21K25	3	4.2	4.5	2.75	63.9	砥面 2 (正・右側) 面。上・半欠損
177	47-84	石器	磨石	頁岩	SD253	21M12	1	7.2	4.95	1.35	93.2	砥面 5 (正・左右側・裏・下側) 面。上端欠損
178	47-84	石器	磨石	凝灰岩	SD260	21N20	1	10.5	4.55	3.7	274.9	砥面 2 (正・右側) 面
179	47-84	石器	磨石	凝灰岩	SD500	23O22	2	9.5	4.8	2.8	153.3	砥面 4 (正・左右側・裏) 面
180	47-84	石器	磨石	凝灰岩	SD500	23O17	1	7.0	3.3	1.6	30.5	砥面 2 (正・裏) 面
181	47-84	石器	磨石	凝灰岩	SE622	23Q23	—	6.8	3.7	3.3	91.0	砥面 4 (正・左右側・裏) 面
182	47-84	石器	磨石	凝灰岩	SK759	22O19	1	6.1	3.5	3.2	104.4	砥面 3 (正・左右側・裏・下側) 面。上端欠損
183	47-84	石器	磨石	頁岩	SX816	23P2	1	3.95	3.2	0.7	9.1	砥面 3 (正・右側・下側) 面。上端・裏面欠損
184	47-84	石器	磨石	凝灰岩	SE1020	25L12	—	15.1	5.8	4.7	549.1	砥面 1 (正) 面
185	47-84	石器	磨石	頁岩	SD1046	24N15	1	7.25	6.5	1.45	71.1	砥面 4 (正・左右側・裏) 面。上端欠損
186	47-84	石器	磨石	凝灰岩	土原 C	—	—	7.3	4.1	2.9	89.8	砥面 5 (正・左右側・裏・下側) 面。上端欠損
187	47-84	石器	磨石	凝灰岩	—	23P7	—	10.2	5.2	2.0	128.5	砥面 4 (正・左右側・裏) 面。上端欠損
188	47-84	石器	砥石	粘板岩	SD180	22N9	1	7.2	4.35	1.85	81.8	上端・左側面欠損。砥石に欠損か
189	47-84	石器	砥石	粘板岩	SD831	23R4	1	3.3	2.3	1.05	10.2	上端・右側面欠損。小型。磨石(文字?)有り
190	47-84	石器	五輪塔	安山岩	覆丸	21N	—	15.0	11.7	2230.0	空輪	
191	48-84	石器	石臼	安山岩	P83	19Q23-24	2	30.1	30.1	11.9	14310.0	下臼
192	48-84	石器	石臼	安山岩	SE352	21N5	下	18.2	13.8	11.55	2570.0	上臼。打込孔は方形
193	48-84	石器	石臼	安山岩	SE352	21N5	下	17.6	15.5	11.4	2400.0	上臼
194	48-84	石器	石臼	安山岩	KR20	19P25	—	30.3	30.1	10.1	12150.0	上臼。方形の打込孔 2 あり

観 察 表

木製品観察表

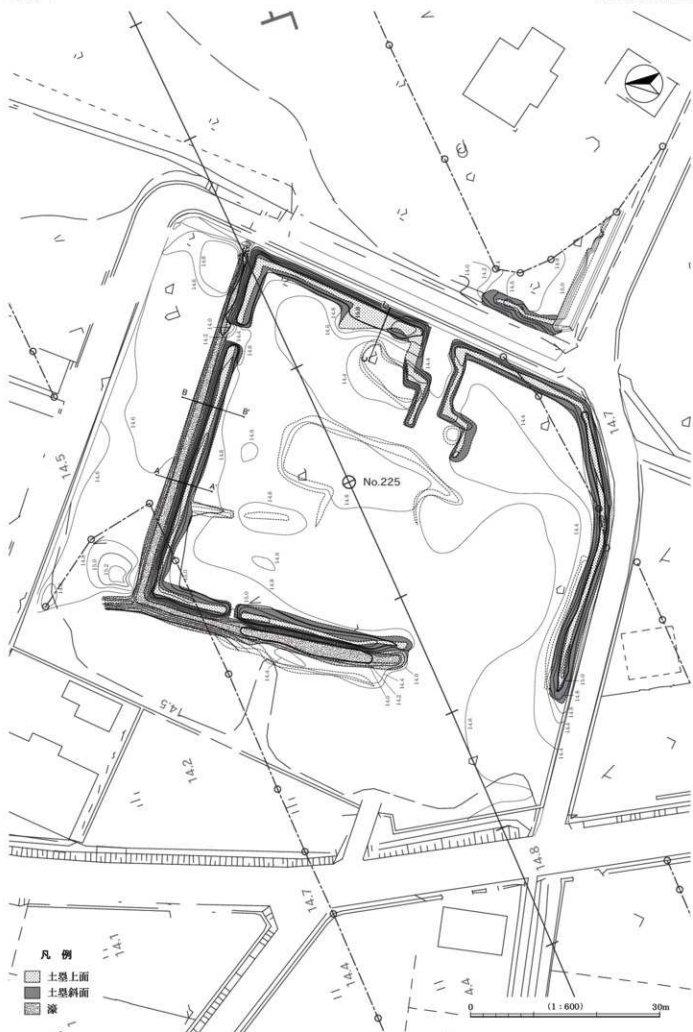
報告 番号	国産 番号	器種	出土位置			器種	木取り	法量 (cm)			備考
			遺構番号	グリッド	層位			長さ/口径	幅	厚さ/器高	
195	48-85	下駄	SE30	19Q14	4	—	板目	22.9	7.9	3.4	
196	48-85	板状木製品	SE142	22K15	9	—	板目	28.5	10.3	1.2	表面全面に線状の工具痕
197	48-85	板状木製品	SE396	20N15	4	—	板目	13.8	5	1.5	
198	48-85	棒状木製品	SD695	22P14	2	—	板目	18.0	2.2	1.8	
199	48-85	部材	SE834	22O14	下	—	板目	28.3	8.2	1.8	側面に木釘孔3か所
200	48-85	漆器桶	SE352	21N5	下	—	機木取り	9.8	—	(2.75)	内外面赤漆
201	48-85	漆器桶	SE352	21N5	下	—	機木取り	9.6	—	(2.2)	内外面赤漆、底部外周黒漆
202	48-85	部材	SE352	21N5	下	—	板目	3.8	8.1	0.5	5か所に穿孔、1か所は木釘残
203	48-85	部材	SE352	21N5	下	—	板目	37.1	10.3	1.25	側面に木釘孔1か所
204	49-85	曲物板板	SE1001	27N16	4	スギ	板目	11.3	11.0	0.9	
205	49-85	曲物板板	SE1001	27N16	2	ヒノキ	板目	23.3	8.5	1.5	木釘孔なし
206	49-85	曲物板板	SE1001	27N16	3	スギ	板目	5.9	24.6	0.4	木釘孔1か所
207	49-85	曲物板板	SE1001	27N16	3	スギ	板目	4.8	10.5	0.5	穿孔1か所
208	49-85	箸状木製品	SE1001	27N16	4	スギ	棒	20.9	0.6	0.5	
209	49-85	箸状木製品	SE1001	27N16	3	スギ	棒	21.5	0.5	0.4	
210	49-85	箸状木製品	SE1001	27N16	4	スギ	棒	21.3	0.5	0.5	
211	49-85	箸状木製品	SE1001	27N16	4	スギ	棒	20.6	0.6	0.5	
212	49-85	箸状木製品	SE1001	27N16	4	スギ	棒	21.3	0.6	0.5	
213	49-85	箸状木製品	SE1001	27N16	3	スギ	棒	21.6	0.5	0.5	
214	49-85	箸状木製品	SE1001	27N16	4	スギ	棒	20.3	0.5	0.5	
215	49-85	箸状木製品	SE1001	27N16	4	スギ	棒	17.5	0.5	0.4	
216	49-85	箸状木製品	SE1001	27N16	4	スギ	棒	20.0	0.5	0.5	
217	49-85	箸状木製品	SE1001	27N16	4	スギ	棒	23.7	0.5	0.4	
218	49-85	用途不明品	SE1001	27N16	3	スギ	板目	7.1	2.0	1.6	中央に決り
219	49-85	箸状木製品	SE1001	27N16	3	スギ	追い板目	28.5	1.5	0.8	
220	49-85	棒状木製品	SE1001	27N16	3	スギ	追い板目	8.7	0.9	0.5	上端欠損
221	49-85	棒状木製品	SE1001	27N16	4	スギ	板目	15.0	22.8	1.7	一部欠損
222	49-85	部材	SE1057	26O5	1	スギ	板目	6.0	16.5	0.9	木釘孔7か所、3か所木釘残
223	49-85	棒状木製品	SE1057	26O5	1	スギ	板目	23.8	1.7	1.1	下端削り
224	49-85	板状木製品	SE1106	24Q16	2	スギ	追い板目	23.5	2.4	0.3	上端J字状に決り
225	49-85	漆器桶	SE1183	23P15	4	ブナ属	機木取り	—	—	—	内外面赤漆、外面黒漆・赤漆文様
226	49-85	板状木製品	SE1183	23P14・15	4	ウレシ	追い板目	34.5	9.9	1.6	
227	49-85	部材	SE1183	23P14・15	中	トウヒ属	板目	60.0	3.1	1.4	下端軸状に加工し、2か所穿孔
228	49-85	杭	P1108	24R8	1	クリ	芯持ち丸太	23.5	4.8	3.8	
229	49-85	漆器皿	用水3	27P4	覆土	ブナ属	機木取り	—	—	—	内外赤漆・外面黒漆

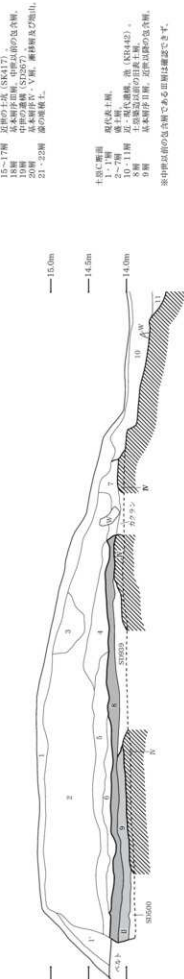
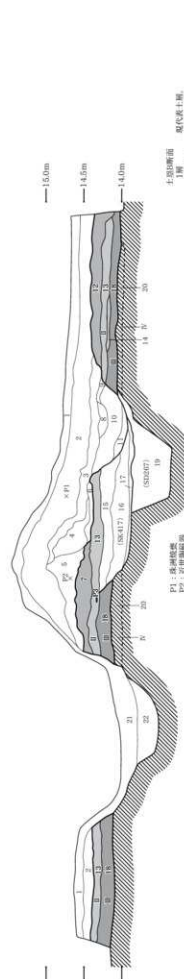
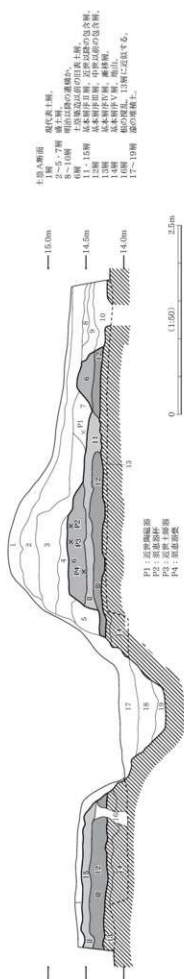
銭貨観察表

報告 番号	国産 番号	銭貨名	宗体 通称	王朝	初鋳年 (内清)	遺構	グリッド		層位	外径 mm	外径幅 mm	厚さ mm	備考		
							大	小							
230	50	86	紹聖元寶	蕃唐	北宋	1094	SE135	22	K	19	8	21.2	20.9	2.36	
231	50	86	寛永通寶	新寛永	江戸	1636	-	22	N	24	B	22.8	22.9	2.07	
232	50	86	寛永通寶	古寛永	江戸	1636	-	22	N	25	I	25.3	25.3	2.17	
233	50	86	寛永通寶	文銭	江戸	1668	用水3	27	P	3	3	25.2	25.3	3.28	「背文」
234	50	86	寛永通寶	新寛永	江戸	1697	埋蔵	22	P	12	12	23.3	23.3	2.00	埋蔵見込み付近、錆が多い
235	50	86	不明				埋蔵	22	P	12	12	23.1	23.2	2.03	埋蔵見込み付近、錆が多い
236	50	86	寛永通寶	新寛永	江戸	1697	SD900	22	O	9	1	21.0	21.0	0.85	
237	50	86	寛永通寶	新寛永	江戸	1697	KR55	20	P	21	1	22.6	22.8	1.39	
238	50	86	寛永通寶	新寛永	江戸	1697	用水2	26	R	1	1	22.9	22.8	1.77	「背石」
239	50	86	寛永通寶	新寛永	江戸	1697	用水3					22.5	22.4	1.71	「背元」
240	50	86	寛永通寶	新寛永	江戸	1697	用水3	27	O	25		22.9	22.9	2.44	
241	50	86	寛永通寶	新寛永	江戸	1697	用水3				1	22.3	22.3	2.37	
242	50	86	寛永通寶	新寛永	江戸	1697	用水3				1	22.7	22.7	2.38	
243	50	86	寛永通寶	新寛永	江戸	1697	用水3				1	21.8	21.8	1.50	
244	50	86	寛永通寶	新寛永	江戸	1697	-	22	N	17	B	23.6	23.7	2.61	
245	50	86	寛永通寶	新寛永	江戸	1697	-	22	N	25	I	23.2	23.2	2.23	
246	50	86	寛永通寶	西文銭	江戸	1769	KR50	19	Q	8		24.3	25.2	1.66	波銭(11波)、非みあり
247	50	86	寛永通寶	西文銭	江戸	1769	用水3	27	Q	23		27.8	27.9	3.85	波銭(11波)
248	50	86	寛永通寶	西文銭	江戸	1769	用水3				1	28.3	28.2	4.47	波銭(11波)
249	50	86	一銭古銅貨(銅)			1930	KR	21	P	22		22.1	22.2	2.15	大正9年
250	50	86	一銭古銅貨(銅)			1936	用水3				1	22.8	22.8	3.40	昭和11年

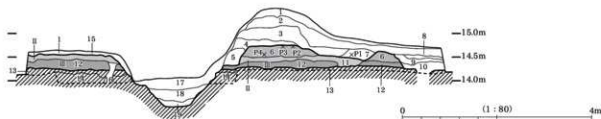
圖 版





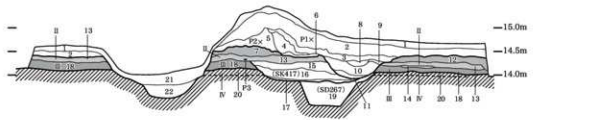


※中部以前の包合層である断面は確認できず。



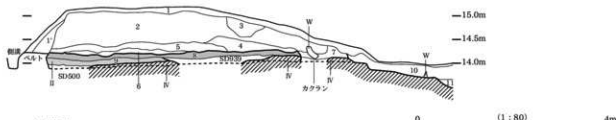
土壌A断面

- 1 暗褐色 (10YR4/6) 土 粘性なし、締りあり、現代表土層。
- 2 褐色 (10YR4/4) 土主体 粘性なし、締り強。指頭大の褐色 (10YR5/1)・明黄褐色 (10YR6/6) 土塊を多量含む。炭粒を含む。
- 3 黄褐色 (10YR5/6) 土主体 粘性なし、締り強。にぶい黄褐色 (10YR7/3) や2層の塊を含む。炭粒を含む。
- 4 暗褐色 (10YR3/3) 土主体 粘性なし、締り強。2・3層同様にして、地山の塊を含む。
- 5 褐色 (10YR4/4) 土主体 粘性なし、締り強。黄褐色少量を含む。
- 6 褐色 (10YR4/4) 土主体 粘性なし、締り強。5層より色調が暗い。底面に明黄褐色 (10YR6/6) 土塊が環状に点在する。
- 7 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土 粘性なし、締りあり。炭粒少量を含む。
- 8 褐色 (10YR4/6) 土 粘性なし、締り強。黄褐色塊を含む。
- 9 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト主体 粘性なし、締り強。赤化した部分が多い。褐色 (10YR4/6) 土を含む。
- 10 褐色 (10YR4/4) 土主体 粘性なし、締りあり。黄褐色 (10YR5/6) 土・地山土塊を含む。
- 11 褐色 (10YR4/4) 土 粘性なし、締り強。基本順序目録。
- 12 黄褐色 (10YR3/2) 土 粘性なし、締り強。炭粒少量を含む。基本順序目録。
- 13 にぶい黄褐色 (10YR5/4) + 黄褐色 (10YR5/6) 粘質シルト 粘性強。赤化した部分が多い。粘性強。締りあり。基本順序V層の堆積層。
- 14 褐色 (2.5YR5/8) + 黄褐色 (2.5Y7/3) 粘質シルト 粘性強。締りあり。基本順序V層の堆積山。
- 15 褐色 (10YR4/4) 土 粘性なし、締り強。基本順序目録。
- 16 褐色の塊。13層に近似する。
- 17 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質シルト 粘性あり、締り強。露の現代堆積土。ビニール等を含む。
- 18 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 粘性・締りあり。露の現代堆積土。
- 19 黄褐色 (10YR3/1) 粘質土 粘性強。締りあり。



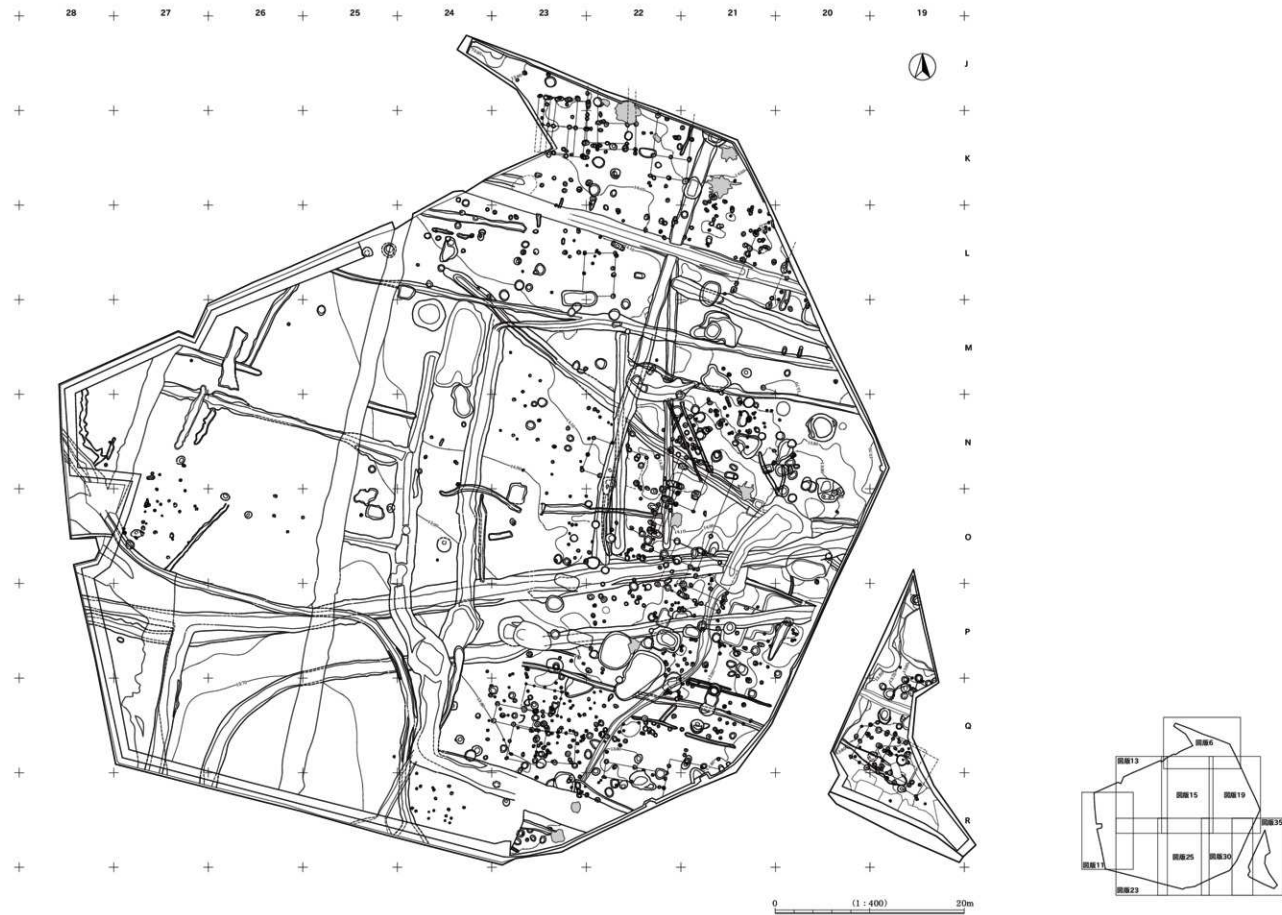
土壌B断面 (8~11層: KR275, 15~17層: SK417, 19層: SD267)

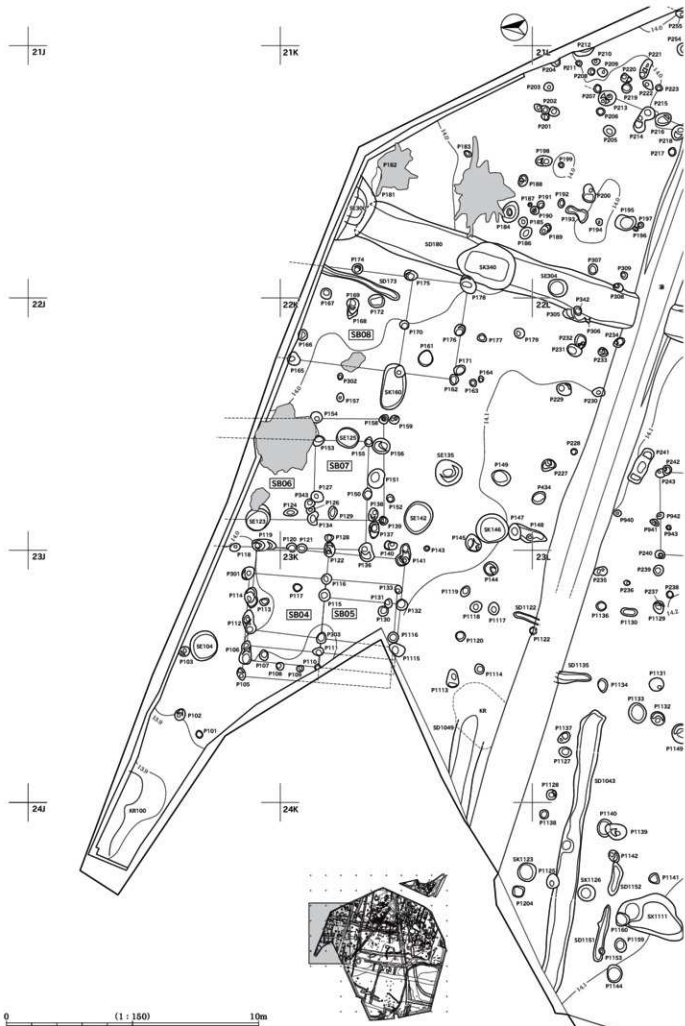
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 土 粘性なし、締りあり。現代表土層。
- 2 褐色 (10YR4/4) 土主体 粘性なし、締りあり。土原部付近ににぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘質シルト塊を含む。炭粒少量を含む。
- 3 にぶい黄褐色 (2.5Y7/4) 粘質シルト + 褐色 (10YR4/4) 土 粘性なし、締りあり。塊堆積土。
- 4 にぶい黄褐色 (10YR4/4) 土 粘性強。堆積物少量を含む。
- 5 明黄褐色 (10YR5/8) + にぶい黄褐色 (10YR7/3) 粘質シルト 粘性なし、締りあり。塊堆積土。3層と近似する。
- 6 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質シルト 粘性強。締りあり。
- 7 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土 粘性なし、締りあり。部分的に層状のにぶい黄褐色 (2.5Y6/4) シルト塊を含む。
- 8 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質シルト 粘性強。締りあり。6層と同一層か。
- 9 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質シルト 粘性強。締りあり。
- 10 にぶい黄褐色 (2.5Y6/4) + 黄褐色 (10YR5/8) シルト 粘性なし、締りあり。細い塊堆積土。
- 11 にぶい黄褐色 (10YR6/3) シルト + 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質シルト 粘性強。締りあり。6・8層に似る。
- 12 褐色 (10YR4/4) 土 粘性なし、締り強。黄褐色少量を含む。
- 13 褐色 (10YR4/4) 土 粘性なし、締り強。13層より色調はやや暗い。炭粒微量を含む。基本順序目録。
- 14 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質シルト 粘性強。締り強。
- 15 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性なし、締りあり。褐色色塊を含む。炭粒少量を含む。
- 16 灰黄褐色 (10YR5/1) 粘質シルト 粘性強。締り強。塊主体の堆積層。
- 17 オリーブ褐色 (5Y3/2) 粘質シルト 粘性なし、締り強。明黄褐色少量。φ1~2cmの炭粒を含む。基本順序目録。
- 18 黄褐色 (10YR3/2) 土 粘性なし、締り強。明黄褐色少量。φ1~2cmの炭粒を含む。基本順序目録。
- 19 暗褐色 (10YR3/2) + 黄褐色 (10YR5/6) + 灰黄色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強。締りあり。塊堆積土。炭粒少量を含む。
- 20 黄褐色 (10YR5/6) 粘質シルト主体 粘性強。締りあり。にぶい黄褐色 (10YR5/3) 塊を散状に含む。
- 21 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘質土 粘性なし、締り強。堆積物を多量含む。露の現代堆積土。
- 22 灰色 (5Y4/1) 粘土 粘性あり、締り強。有機物を多量含む。露の現代堆積土。

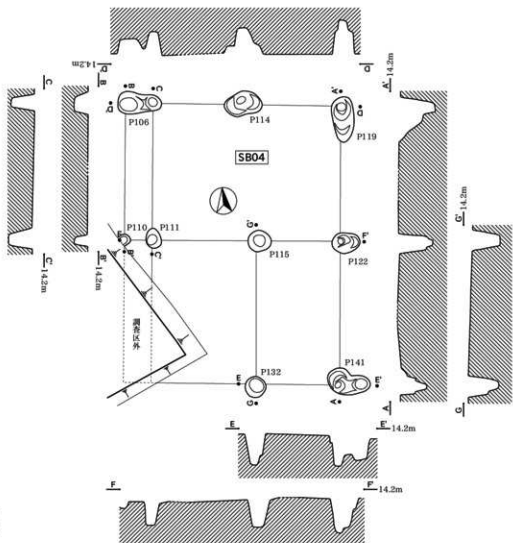


土壌C断面

- 1 暗褐色 (10YR3/4) 土 粘性なし、締りあり。現代表土層。
- 1' 黄褐色 (10YR5/6) 土 粘性なし、締りあり。成土層等で埋没を受けた層。
- 2 褐色 (10YR4/4) 土主体 粘性なし、締り強。にぶい黄褐色 (10YR5/3)・黄褐色 (10YR6/1) 土が混じる。部分的に明赤褐色 (5YR5/8)・明黄褐色 (10YR6/6) 土を含む。
- 3 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土主体 粘性なし、締りあり。灰黄褐色 (10YR6/2) 土を環状に含む。
- 4 黄褐色 (10YR3/2) 土主体 粘性なし、締りあり。にぶい黄褐色 (10YR5/3) + 黄褐色 (10YR7/8) の層状塊が混じる。指頭大の塊を含む。
- 5 褐色 (10YR4/4) 土主体 粘性なし、締り強。黄褐色少量を含む。
- 6 明黄褐色 (10YR6/6) シルト質土 粘性弱。締りあり。サラサラする。
- 7 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 土主体 粘性なし、締りあり。炭等の塊しか。
- 8 暗褐色 (10YR3/4) 土主体 粘性なし、締りあり。φ1~2cmの黄褐色塊を環状に少量含む。φ2~3mmの炭粒を含む。厚表土か。
- 9 暗褐色 (10YR3/4) 土 粘性なし、締り強。5層より色調がやや明るく、赤化している。8層がややボサボサしているのに対し、非常に固く締まる。基本順序目録か。
- 10 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質シルト 粘性・締り強。炭粒を含む。人工池堆積層。
- 11 灰色 (7.5Y5/1) 粘質シルト 粘性・締りあり。炭粒を含む。人工池堆積層。

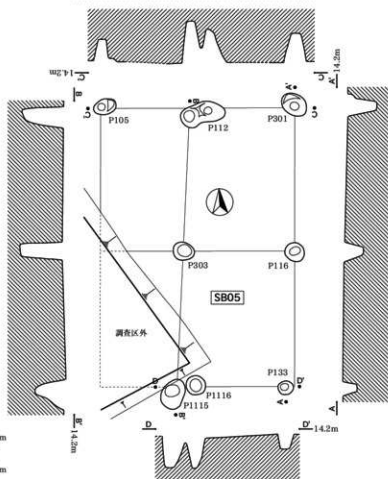
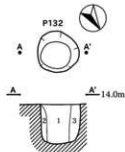






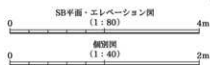
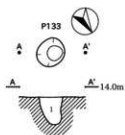
P132

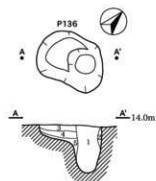
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 土
粘性・締りあり。黄褐塊多量。
炭灰少量含む。
- 2 明黄褐色 (10YR6/8) 土
粘性・締りあり。灰色塊少量含む。
- 3 暗褐色 (10YR3/4) 土
粘性・締りあり。黄褐塊中量含む。



P133

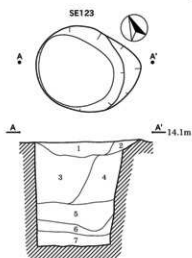
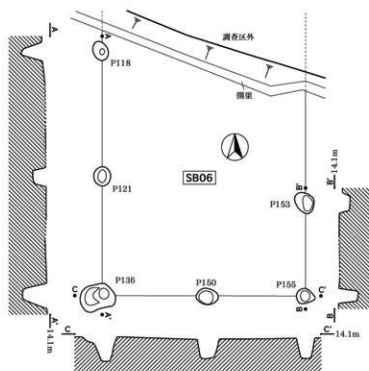
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 土
粘性・締りあり。
黄褐塊中量含む。





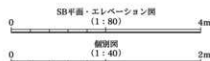
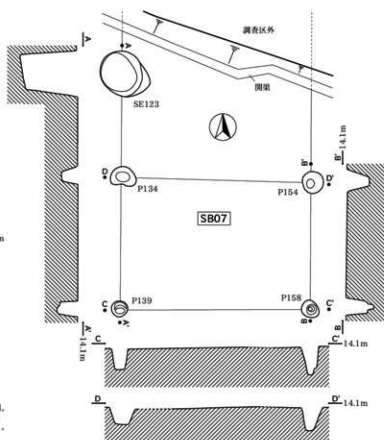
P136

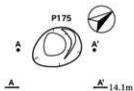
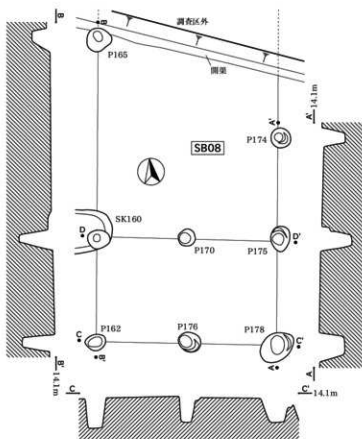
- 1 黄褐色(10YR3/4)土 粘性・締りあり、炭灰中量、炭粒少量含む。
- 2 褐色(10YR4/6)土 粘性・締りあり、灰色塊多量、炭粒少量含む。
- 3 黄褐色(10YR2/3)土 粘性あり、締りやや強、炭灰塊・炭粒少量含む。
- 4 黄褐色(10YR3/4)土 粘性・締りあり、炭灰塊・炭粒少量含む。
- 5 褐色(10YR4/6)土 粘性・締りあり、灰色塊・炭粒少量含む。



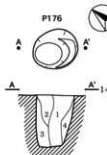
SE123

- 1 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土 粘性・締りあり、炭粒中量含む。
- 2 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土 粘性あり、締りやや弱、灰色塊中量、炭粒少量含む。
- 3 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土 粘性やや弱、締りあり、炭灰塊少量、灰黄塊・炭粒中量含む。
- 4 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土 粘性やや弱、締りやや強、灰色塊少量、炭灰塊・炭粒少量含む。
- 5 黄褐色(10YR3/2)粘質土 粘性・締りあり、炭粒多量含む。
- 6 灰白色(N7/1)粘質土 粘性・締りあり、炭灰塊・炭粒中量含む。
- 7 黄褐色(10YR3/2)粘質土 粘性・締りあり、炭粒多量含む。

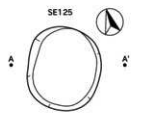




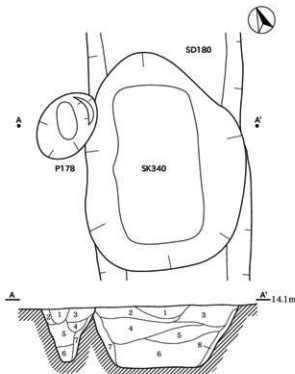
- P175**
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 土 粘性あり、締りやや強。黄褐色・炭粒少量含む。
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) 土 粘性・締り強。黄褐色中量含む。
 - 3 黒褐色 (10YR2/3) 土 粘性・締り強。黄褐色中量含む。
 - 4 褐色 (10YR4/6) 土 粘性・締りあり。褐色少量含む。



- P176**
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 土 粘性あり、締り強。黄褐色・炭粒少量含む。
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) 土 粘性・締りあり。黄褐色・炭粒少量含む。
 - 3 褐色 (10YR4/4) 土 粘性・締りあり。黄褐色中量、炭粒微量含む。
 - 4 二色い暗褐色 (10YR6/3) 土 粘性・締りあり。黄褐色中量、炭粒少量含む。



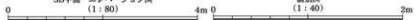
- SE125**
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 粘性・締りやや強。炭粒多量含む。
 - 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 粘性やや強、締りやや弱。1層に灰色塊混じる。
 - 3 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 粘性やや強、締りあり。黄褐色塊含む。炭粒中量含む。
 - 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 粘性やや強、締りあり。炭粒中量含む。
 - 5 二色い黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 粘性やや強、締りあり。炭粒・黄褐色塊少量含む。
 - 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 粘性・締りあり。黄褐色塊微量含む。
 - 7 褐色 (10YR4/1) 粘質土 粘性あり、締りやや強。炭粒中量、灰色塊含む。
 - 8 灰白色 (10Y7/1) 粘質土 粘性あり、締りやや弱。炭粒・黒褐色土多量含む。
 - 9 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土 粘性あり、締りやや弱。炭粒中量含む。

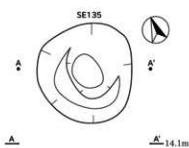


- P178**
- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 土 粘性・締りやや弱。黒カクラン。
 - 2 明黄褐色 (10YR6/6) 土 粘性あり、締りやや弱。炭粒少量含む。
 - 3 灰黄褐色 (10YR5/2) 土 粘性あり、締りやや弱。黄褐色・炭粒微量含む。
 - 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性・締りあり。炭粒少量含む。
 - 5 二色い黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性・締りあり。黄褐色多量、炭粒中量含む。
 - 6 二色い黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性あり、締りやや強。炭粒多量含む。
 - 7 明黄褐色 (10YR7/6) 土 粘性あり、締りやや強。黄褐色多量、炭粒中量含む。

- SK340**
- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 土 粘性・締りやや弱。黒カクラン。
 - 2 灰黄褐色 (10YR6/2) 土 粘性やや弱、炭粒少量含む。
 - 3 二色い黄褐色 (10YR6/3) 土 粘性やや弱、締りあり。炭粒少量。黄褐色塊微量含む。
 - 4 褐色 (10YR6/1) 土 粘性・締りあり。炭粒中量。黄褐色塊微量含む。
 - 5 灰白色 (N7/0) 土 粘性・締りあり。炭粒微量含む。
 - 6 灰白色 (N7/0) 土 粘性やや強、締りあり。炭粒少量含む。12層より厚み強い。
 - 7 明黄褐色 (10YR6/6) 土 粘性あり、締りやや強。炭粒微量含む。
 - 8 明黄褐色 (10YR7/6) 土 粘性あり、締りやや強。地山混含む。

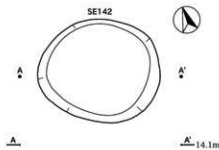
SB平面・エレベーション図





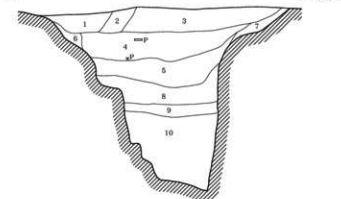
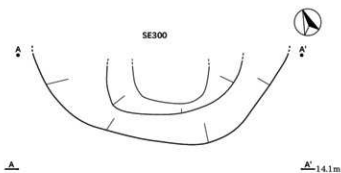
SE135

- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 粘性やや中強、締りあり、炭粒中量含む。
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 粘性やや中強、締りあり、黄褐色塊、炭粒中量含む。
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 粘性あり、締りやや中強、黄褐色塊中量、炭粒中量含む。
- 4 褐色 (10YR4/1) 粘質土 粘性やや中強、締りあり、炭粒、黄褐色塊少量含む。
- 5 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 粘性あり、締りやや中強、炭粒中量含む。
- 6 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土 粘性あり、締りやや中強、灰色塊少量、炭粒中量含む。
- 7 褐色 (10YR4/1) 粘質土 粘性あり、締りやや中強、炭粒少量含む。
- 8 灰白色 (5Y7/1) 粘質土 粘性あり、締りやや中強、炭粒少量含む。



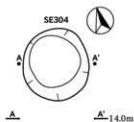
SE142

- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 粘性あり、締りやや中強、灰色塊少量、炭粒中量含む。
- 2 明褐色 (10YR6/6) 粘質土 粘性あり、締りやや中強、灰色塊少量、炭粒中量含む。
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 粘性、締りあり、黄褐色塊、炭粒中量含む。
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 粘性あり、締りやや中強、黄褐色塊多量、炭粒少量含む。
- 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 粘性、締りあり、4層より黄褐色塊多量含む。
- 6 灰白色 (N7/1) 粘質土 粘性、締りやや中強、褐色塊中量含む。
- 7 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘質土 粘性、締りあり、灰色、黄褐色塊中量含む。
- 8 褐色 (10YR6/3) 粘質土 粘性、締りあり、褐色塊中量含む。
- 9 明青灰色 (5B7/1) 粘質土 粘性、締りやや中強。



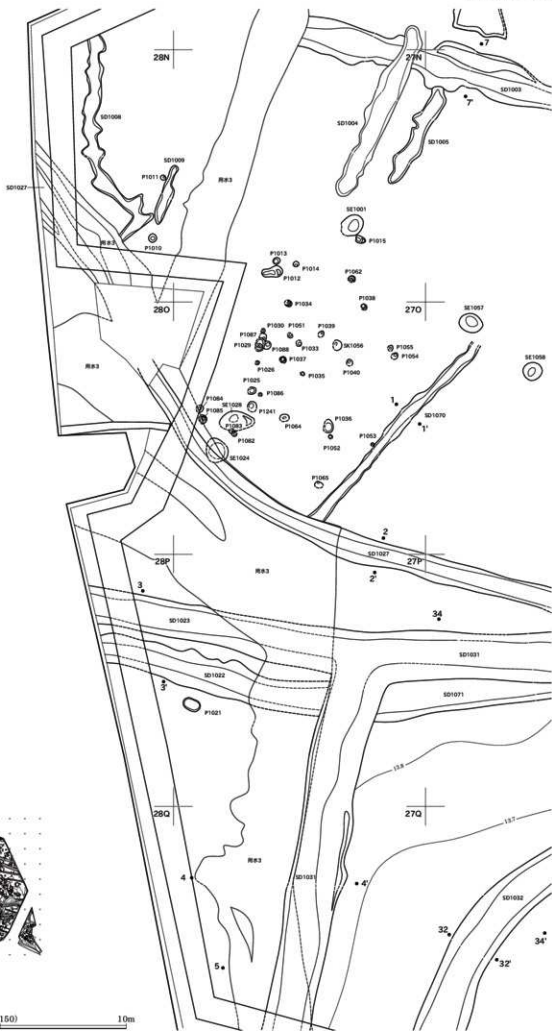
SE300

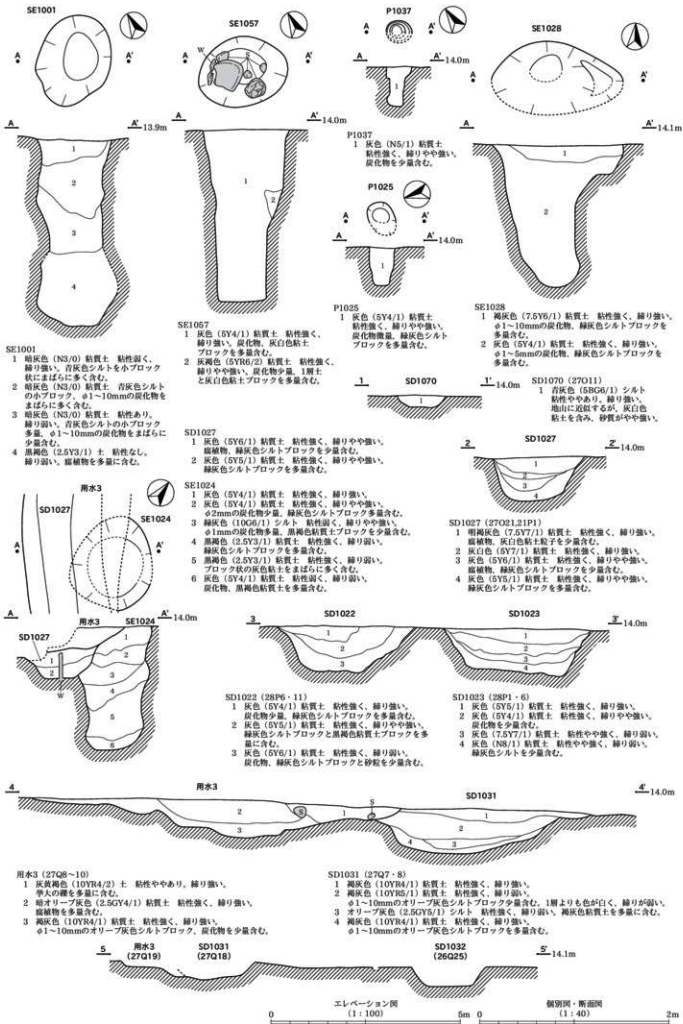
- 1 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 土 粘性、締りあり、炭粒少量、黄褐色塊含む。
- 2 灰黄褐色 (10YR6/2) 土 粘性、締りあり、炭粒少量、黄褐色塊含む。
- 3 にぶい黄褐色 (10YR7/2) 土 粘性、締りあり、灰白色、炭粒中量含む。
- 4 褐色 (10YR6/1) 土 粘性やや中強、締りあり、炭粒多量含む。
- 5 明青灰色 (5B7/1) 土 粘性、締りやや中強、炭粒少量含む。
- 6 にぶい黄褐色 (10YR6/1) 土 粘性やや中強、締りあり、炭粒少量含む。
- 7 にぶい黄褐色 (10YR7/2) 土 粘性やや中強、締りあり、褐色塊、炭粒少量含む。
- 8 明青灰色 (5B7/1) 土 粘性、締りあり。
- 9 褐色 (10YR4/1) 土 粘性あり、締りやや中強、炭粒中量含む。
- 10 緑灰色 (5G6/1) 土 粘性やや中強、締りあり、細粒少量含む。

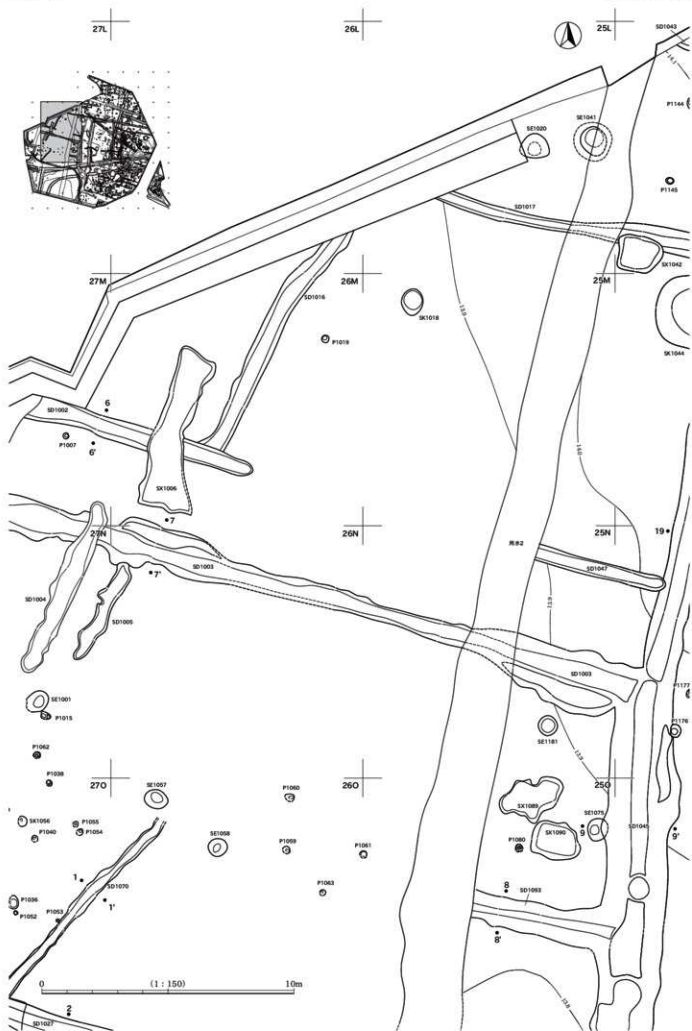


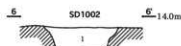
SE304

- 1 褐色 (10YR4/4) 土 粘性、締りあり、灰色塊多量、炭粒少量含む。
- 2 明褐色 (7.5YR5/8) 土 粘性やや中強、締り強、灰色塊中量、炭粒少量含む。
- 3 黒色 (7.5YR1.7/1) 土 粘性弱、締りあり、褐色塊中量、炭粒少量含む。
- 4 褐色 (7.5YR4/1) 土 粘性あり、締りやや中強、黄褐色塊、炭粒少量含む。
- 5 褐色 (7.5YR6/6) 土 粘性あり、締り強、褐色塊中量、炭粒少量含む。
- 6 明褐色 (7.5YR5/6) 土 粘性弱、締り強、灰色塊中量、炭粒少量含む。
- 7 黒褐色 (10YR3/1) 土 粘性弱、締りあり、黄褐色塊少量含む。
- 8 明黄褐色 (10YR6/8) 土 粘性やや中強、締りやや中強、灰色塊中量含む。

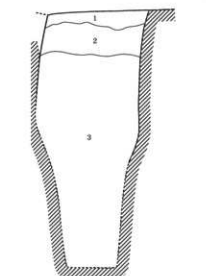
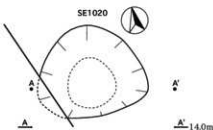




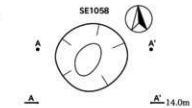




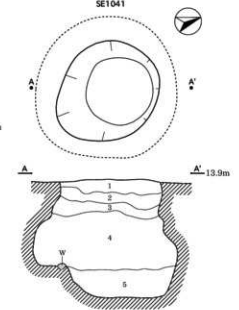
SD1002 (27M11・18)
1 灰色 (N4/0) 粘質土 粘性強く、締りや中強い。
青灰色シルトブロックをまばらに含み、下部には
腐植物が混入する。



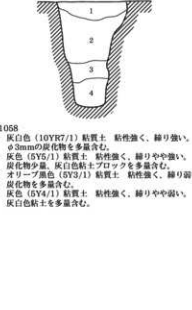
SD1003 (26N4・5)
1 灰色 (N4/0) シルト 粘性弱く、締り強い。
腐植物多量。青灰色シルトブロックをまばらに少量含む。



SE1058
1 灰白色 (10YR7/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
φ3mmの炭化物を多量含む。
2 灰色 (5Y5/1) 粘質土 粘性強く、締りや中強い。
炭化物多量。灰白色粘土ブロックを少量含む。
3 オリーブ褐色 (5Y3/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
炭化物を少量含む。
4 灰色 (5Y4/1) 粘質土 粘性強く、締りや中強い。
灰白色粘土を少量含む。

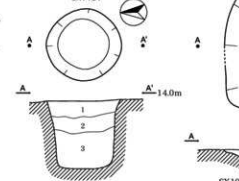
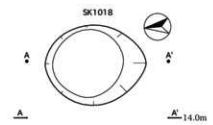


SK1181
1 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 粘性弱く、締りや中強い。φ1~5mmの炭化物を少量含む。
2 灰色 (N4/0) 粘質土 粘性あり。締りや中強い。暗青灰色粘土ブロックを多く含む。
3 緑灰色 (10G5/1) 粘質土 粘性あり。締りや中強い。灰色粘土。白色粒子をまばらに多く含む。
4 灰色 (N5/0) 粘質土 粘性強く、締りや中強い。白色粒子をまばらに含む。
5 灰色 (N6/0) 粘質土 粘性あり。締り弱い。腐植物を含む。

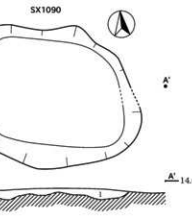


SK1090
1 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
φ1mmの炭化物、黄褐色シルトを少量含む。

SE1020
1 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 粘性弱く、締り強い。
2 灰色 (N5/0) 粘質土 粘性あり。締りやや中強い。
3 灰色 (N5/0) 粘質土 粘性あり。締り弱い。
白色粒子をまばらに多く含む。腐植物を多く含む。

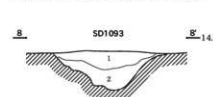


SK1181
1 褐灰色 (10YR4/1) 土 粘性なし。締り強。
2 褐灰色 (10YR5/1) シルト 粘性弱く、締り強い。
黄褐色土が混在する。
3 灰色 (N4/0) 粘土 粘性あり。締りや中強い。
青灰色粘土。φ1~3mmの炭化物を少量含む。

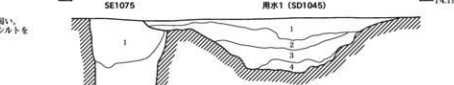


SK1090
1 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
φ1mmの炭化物、黄褐色シルトを少量含む。

SK1018
1 暗青灰色 (5P6S/1) 粘質土 粘性弱く、締りや中強い。
φ1~10mmの炭化物粒をまばらに多く含む。褐灰色シルトを
小ブロック状に多量含む。
2 灰色 (N5/0) 粘質土 粘性あり。締り弱い。
暗青灰色粘土を少量含む。
3 多量の炭化物からなる層 締りは弱い。
4 灰色 (N4/0) 粘質土 粘性あり。締りや中強い。



SD1093 (25O13)
1 灰白色 (10YR7/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
炭褐色シルトを少量含む。
2 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締りや中強い。
φ1~3mmの炭化物を多量含む。

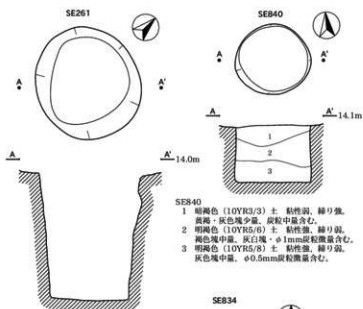
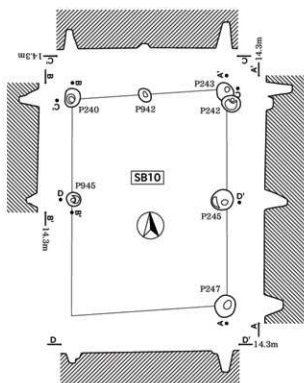


SE1075 (25O1)
1 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
φ3mmの炭化物多量。灰白色粘土を少量含む。
2 オリーブ褐色 (5Y3/1) 粘質土 粘性強く、締り弱い。
φ1~3mmの炭化物を少量含む。
3 暗灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 粘性強く、締りや中強い。
φ1~5mmの炭化物を多量含む。
4 褐灰色 (7.5Y4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
φ1~2mmの炭化物、黄褐色シルトを少量含む。

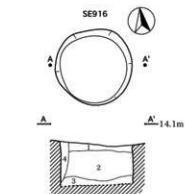
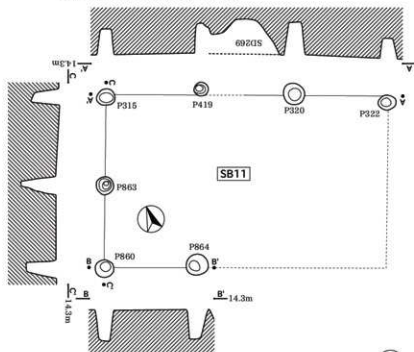
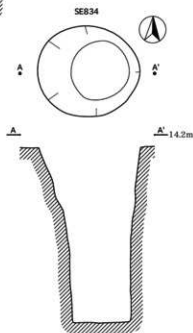
用水1 (SD1045) (24O4・5)
1 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 粘性や中強く、締りや中強い。
φ1~3mmの炭化物少量含む。褐鉄鉱が立つ。
2 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 粘性や中強く、締りや中強い。
φ1~3mmの炭化物を少量含む。1層よりも粘性が強い。
3 暗灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 粘性強く、締りや中強い。
φ1~5mmの炭化物を多量含む。
4 褐灰色 (7.5Y4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
φ1~2mmの炭化物、黄褐色シルトを少量含む。



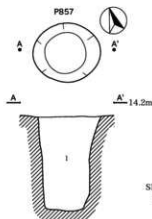




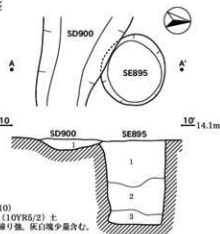
- SE840
- 1 暗褐色(10YR3/3)土 粘性強、締り強、灰白色少量、炭粒中量含む。
 - 2 明褐色(10YR5/6)土 粘性強、締り弱、褐色塊中量、灰白塊・ ϕ 1mm炭粒微量含む。
 - 3 明褐色(10YR5/8)土 粘性強、締り弱、灰白色中量、 ϕ 0.5mm炭粒微量含む。



- SE916
- 1 暗褐色(10YR3/3)土 粘性強、締り強、黄褐色・灰白色、 ϕ 2mm炭粒少量含む。
 - 2 暗褐色(10YR3/4)土 粘性やや弱、締りあり、灰白塊少量含む。
 - 3 明褐色(7.5YR5/8)土 粘性あり、締りやや弱、灰白色中量、 ϕ 1mm炭粒少量含む。
 - 4 明褐色(7.5YR5/6)土 粘性やや強、締りあり、褐色塊中量、灰白色・ ϕ 1mm炭粒微量含む。



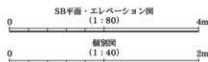
- P857
- 1 灰黄褐色(10YR4/2)土 粘性・締りやや強、炭粒多量、礫中量含む。
 - 2 灰白・黄褐色塊中量含む。

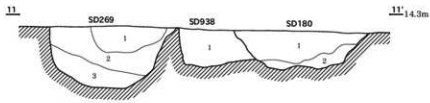
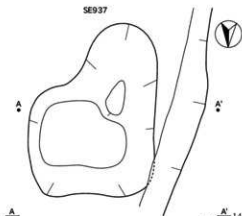


- SD900 (22010)
- 1 灰黄褐色(10YR5/2)土 粘性弱、締り強、灰白塊少量含む。

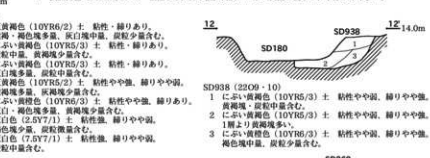
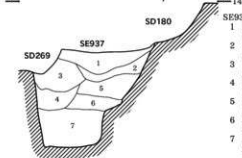
SE895 (2205)

- 1 黒褐色(10YR2/1)土 粘性・締りあり、黄褐色・ ϕ 1mm炭粒少量、灰白・灰白色多量含む。
- 2 明褐色(7.5YR5/8)土 粘性強、締り弱、灰白色塊・ ϕ 1mm炭粒中量含む。
- 3 褐色(10YR4/1)土 粘性強、締り弱、黄褐色・灰白塊少量含む。



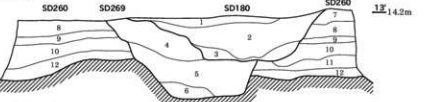
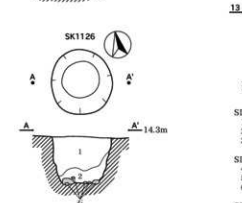


SD180 (22020)
 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性なし、締り強。にぶい黄褐色混り。炭粒少量含む。
 2 黄褐色 (10YR5/8) 土 にぶい黄褐色 (10YR7/3) + 灰褐色 (10YR4/2) 土 粘性なし、締り強。マンガン粒多量含む。
 SD269 (22019)
 1 黄褐色 (10YR7/8) + にぶい黄褐色 (10YR6/4) 土 粘性なし、締り強。
 2 黒褐色 (10YR3/2) + 黄褐色 (10YR5/8) + 灰褐色 (10YR6/2) 土 粘性なし、締り強。マンガン粒少量含む。
 3 明黄褐色 (10YR7/6) + 灰褐色 (10YR6/1) + にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性なし、締り強。マンガン粒多量含む。
 SD938 (22019)
 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性なし、締り強。褐色 にぶい黄褐色が混り、下部にやや多い。



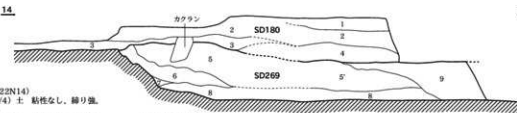
SE937
 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 土 粘性・締りあり、黄褐色・褐色多量、灰白塊中量、炭粒少量含む。
 2 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土 粘性やや強、締りあり。炭粒中量、黄褐色少量含む。
 3 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土 粘性・締りあり。灰白塊多量、炭粒中量含む。
 4 灰黄褐色 (10YR5/2) 土 粘性やや強、締りやや弱。黄褐色多量、灰白塊少量含む。
 5 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 土 粘性やや強、締りあり。灰白・褐色多量、黄褐色少量含む。
 6 灰白色 (2.5Y7/1) 土 粘性強、締りやや弱。褐色塊少量、炭粒微量含む。
 7 灰白色 (7.5Y7/1) 土 粘性強、締りやや弱。炭粒中量含む。

SD938 (2209・10)
 1 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土 粘性やや強、締りやや強。黄褐色・炭粒中量含む。
 2 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土 粘性やや強、締りやや強。1層より黄褐色多い。
 3 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 土 粘性やや強、締りやや強。褐色中量、炭粒少量含む。

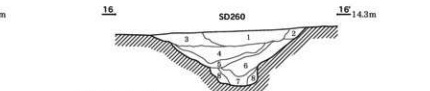
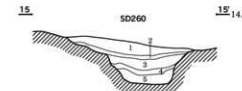


SD180 (22N7・8)
 1 褐色 (10YR4/4) 土 粘性なし、締り強。炭粒少量含む。
 2 褐色 (10YR4/4) 土 粘性なし、締り強。1層とはほぼ同じが、明黄褐色少量含む。炭粒も多い。
 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性弱、締り強。φ0.5~1cm明黄褐色粒・炭粒多量含む。
 SD269 (22N7・8)
 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 主体 粘性弱、締り強。5層の小塊を嵌状に含む。
 5 灰白色 (10YR8/2) + 明黄褐色 (10YR6/8) + 褐色 (10YR7/8) 土 + 黒褐色 (10YR3/1) 粘質シルトの互層。
 6 褐色 (10YR7/1) 粘土 粘性あり、締り強。炭粒少量含む。
 SD260 (22N3・7・8)
 7 褐色 (10YR4/4) 土 粘性なし、締り強。にぶい黄褐色塊少量含む。
 8 褐色 (10YR3/1) 土 粘性なし、締り強。炭粒少量含む。
 9 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性なし、締り強。
 10 黒色 (10YR2/1) 土 粘性弱、締りあり。地山塊少量含む。炭灰のようにザラザラする部分あり。
 11 にぶい黄褐色 (10YR7/2) + 灰褐色 (10YR4/1) 粘質シルトの互層 粘性弱、締りあり。炭粒少量含む。
 12 浅黄褐色 (10YR8/3) 粘質シルト 主体 11層が混じり、地山に極めて近い。

SK1126
 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 土 粘性なし、締り強い。黄褐色シルトブロック少量含む。
 2 黄褐色 (10YR5/6) 土 粘性弱く、締り強い。底面でも多数の小塊を抽出。

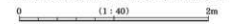


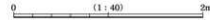
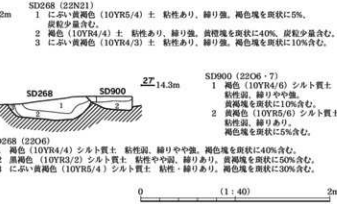
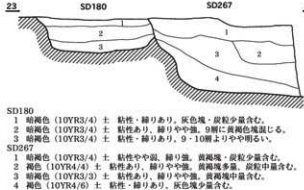
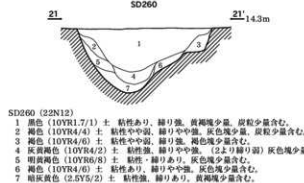
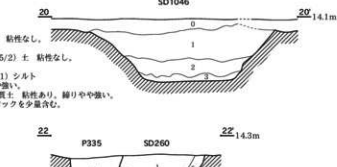
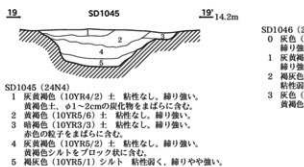
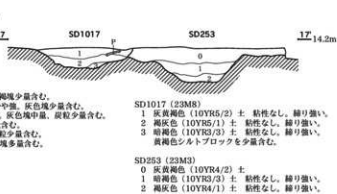
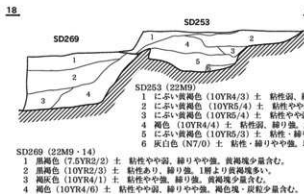
SD180 (22M3~22N14)
 1 褐色 (10YR4/4) 土 粘性なし、締り強。炭粒少量含む。
 2 褐色 (10YR4/4) 土 粘性なし、締り強。1層とはほぼ同じが、明黄褐色塊を少量含む。炭粒も多い。
 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性弱、締り強。明黄褐色塊多量含む。
 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性弱、締り強。φ0.5~1cm明黄褐色粒・炭粒多量含む。
 SD269 (22N3~22N14)
 5 暗褐色 (10YR3/3) 粘質シルト 主体 粘性弱、締りあり。黒色を嵌状、黄褐色塊嵌状に含む。炭粒少量含む。
 6 灰白色 (10YR8/2) + 明黄褐色 (10YR6/8) + 灰褐色 (10YR7/8) 土 + 黒褐色 (10YR3/1) 粘質シルトの互層
 6 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質シルト 主体 粘性弱、締りあり、地山含む。
 7 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質シルト 主体 粘性弱、締りあり、地山含む。
 8 褐色 (10YR7/1) 粘土 粘性あり、締り強。炭粒少量含む。
 9 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質シルト 主体 粘性弱、締りあり。明黄褐色・褐色塊、炭粒含む。

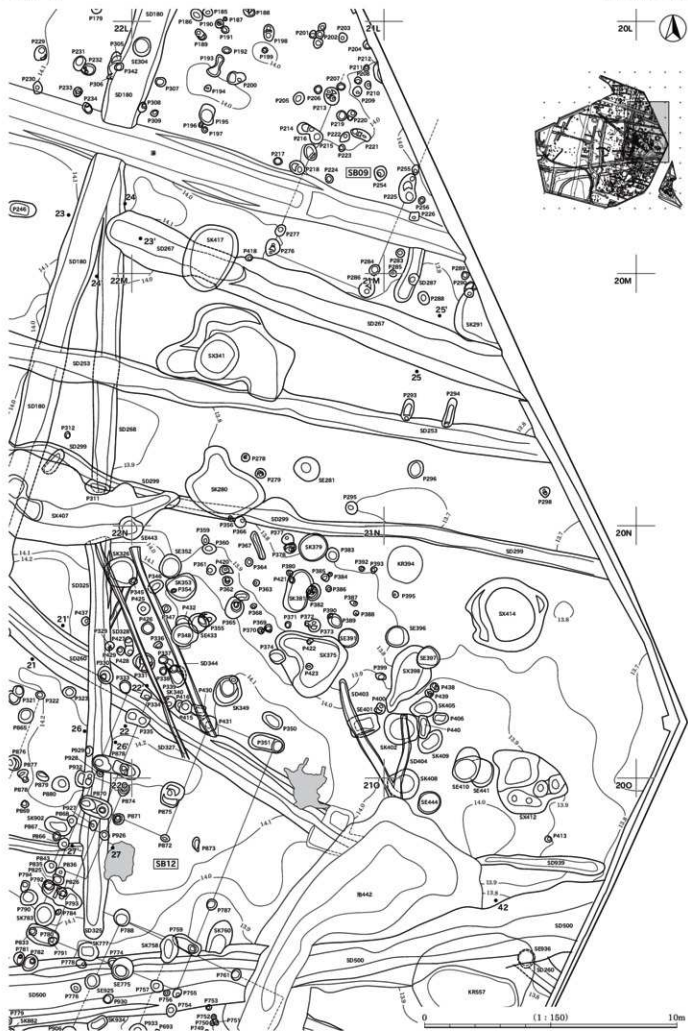


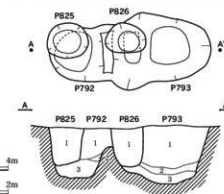
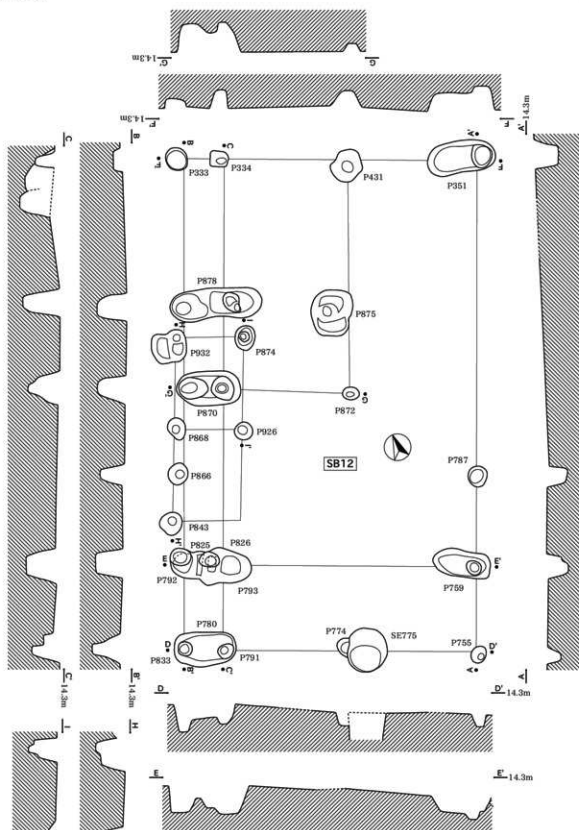
SD260 (24L17・22)
 1 黒褐色 (10YR3/2) 土 粘性なし、締り強。黄褐色シルトブロック少量含む。
 2 暗褐色 (10YR3/3) 土 粘性なし、締り強。黄褐色シルトを少量含む。
 3 褐色 (10YR3/2) 土 粘性なし、締り強。
 4 黒褐色 (10YR2/1) 土 粘性なし、締りやや強い。
 5 灰白色 (10YR7/1) シルト 粘性弱く、締りやや強い。

SD260 (23M8・14)
 1 黒褐色 (10YR3/1) 土 粘性なし、締り強い。
 2 暗褐色 (10YR4/1) 土 粘性なし、締り強い。
 3 黒褐色 (10YR3/2) 土 粘性なし、締り強い。1層より粘性が強い。
 4 黒色 (10YR2/1) 土 粘性なし、締り強い。粒子細かく、黄褐色シルトブロックを少量含む。
 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性なし、締り強い。黄褐色シルトブロックを少量含む。
 6 黄褐色 (2.5YR/1) 土 粘性なし、締り強い。
 7 灰色 (5Y6/1) 土 粘性なし、締り強い。
 8 灰色 (5Y6/1) 土 粘性なし、締り強い。7層よりも薄い。



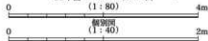


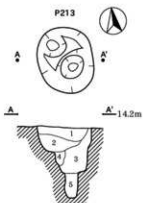
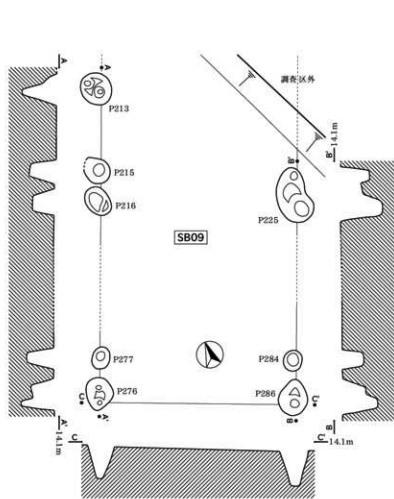




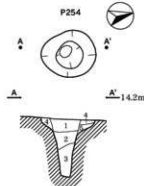
- P825**
 1 褐色 (10YR6/1) 土 粘性弱、締り強。
 黄褐色少量含む。
- P792**
 1 に少い黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性弱、締り強。
 黄褐色中量、炭粒微量含む。
 2 明黄褐色 (10YR6/8) 土 粘性・締りあり。
 褐色中量、炭粒少量含む。
 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性強、締りあり。
 黄褐色中量、 $\phi 1\text{mm}$ 炭粒微量含む。
- P826**
 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 土 粘性弱、締りやや強。
 黄褐色中量、 $\phi 3\text{mm}$ 炭粒少量含む。
- P793**
 1 褐色 (10YR4/4) 土 粘性やや強、締りやや強。
 帯状に灰色・黄褐色中量、 $\phi 3\text{mm}$ 炭粒少量含む。
 2 明黄褐色 (10YR6/6) 土 粘性強、締り強。
 黄褐色中量、褐色塊・ $\phi 2\text{mm}$ 炭粒少量含む。
 3 に少い黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性強、締り強。
 黄褐色中量・灰白塊少量含む。

SB平面・エレベーション図
 (1:80)

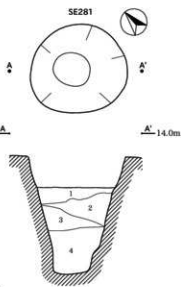




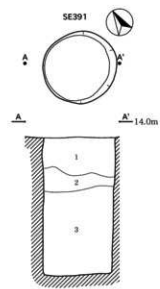
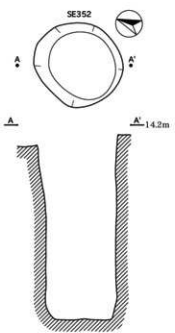
- P213
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 土 粘性弱、締り強、黄褐色少量含む。
 - 2 褐色 (10YR4/4) 土 粘性弱、締り強、黄褐色中量含む。
 - 3 暗褐色 (10YR3/3) 土 粘性あり、締り強、黄褐色・炭粒少量含む。
 - 4 黄褐色 (10YR5/8) 土 粘性あり、締り強、灰色塊少量含む。
 - 5 暗灰色 (10YR5/1) 土 粘性・締り強、黄褐色中量、炭粒少量含む。



- P254
- 1 褐色 (10YR4/4) 土 粘性弱、締り強、黄褐色中量、炭粒少量含む。
 - 2 暗褐色 (10YR3/3) 土 粘性あり、締り強、黄褐色少量含む。
 - 3 暗褐色 (10YR3/4) 土 粘性あり、締り強、黄褐色中量含む。
 - 4 褐色 (10YR4/6) 土 粘性弱、締り強、灰色塊・炭粒少量含む。
 - 5 黄褐色 (10YR5/8) 土 粘性弱、締りやや強、灰色塊少量含む。

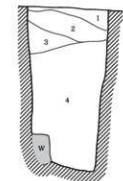
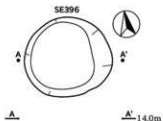


- SE281
- 1 灰色 (N6/0) シルト質土 粘性・締りあり、灰白塊少量、炭粒少量含む。、炭分付着する。
 - 2 灰色 (10Y5/1) シルト質土 粘性やや強、締りやや弱、灰白塊・炭粒少量、炭分付着する。
 - 3 灰色 (7.5Y5/1) シルト質土 粘性やや強、締りやや弱、黄褐色多量、炭粒少量含む。
 - 4 灰色 (10Y4/1) シルト質土 粘性強、締りやや弱、黄褐色・炭粒少量含む。

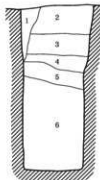
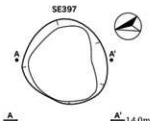


- SE391
- 1 に近い黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性あり、締りやや強、炭粒・灰色塊多量含む。
 - 2 に近い黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性あり、締りやや強、黄褐色中量、炭粒多量含む。
 - 3 灰色 (N6/0) 粘質土 粘性強、締りあり。

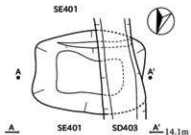




- SE396
- 1 に近い黄色 (2.5Y6/4) 土 粘性あり、締りやや強。炭粒・灰色塊少量含む。
 - 2 に近い黄色 (2.5Y6/4) 土 粘性・締りあり。炭粒・灰色塊多量、黄褐塊少量含む。
 - 3 黄褐色 (2.5Y5/6) 土 粘性あり、締りやや強。炭粒少量含む。
 - 4 青灰色 (5B5/1) 土 粘性強、締りやや強。

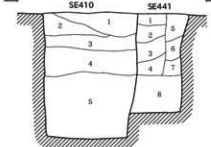
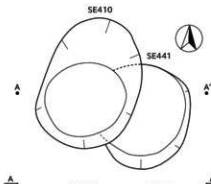


- SE397
- 1 に近い黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性あり、締り強。黄褐塊、炭粒少量含む。
 - 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性弱、締り強。黄褐塊中量、炭粒少量含む。
 - 3 黄褐色 (10YR4/1) 土 粘性・締りあり。黄褐塊中量、白灰塊、炭粒少量含む。
 - 4 浅灰色 (2.5Y7/4) 土 粘性・締り弱。黄褐塊、炭粒中量含む。
 - 5 黒褐色 (10YR3/1) 土 粘性強、締りあり。黄褐塊少量含む。
 - 6 灰色 (7.5Y5/1) 土 粘性強、締りあり。黄褐塊少量含む。



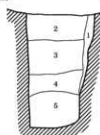
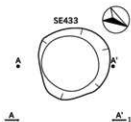
- SE401
- 1 褐色 (10YR4/4) 土 粘性弱、締り強。
 - 2 灰色塊・炭粒少量含む。
 - 3 黄褐色 (10YR5/6) 土 粘性あり、締りやや強。灰色塊・炭粒少量含む。
 - 4 に近い黄褐色 (10YR5/4) 土 粘性・締りあり。白灰塊・炭粒少量含む。
 - 5 黄褐色 (2.5Y5/5) 土 粘性あり、締りやや強。黄褐塊中量、炭粒少量含む。

- SD403
- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 土 粘性やや強、締り強。灰色塊少量含む。
 - 2 明若灰色 (N7/0) 土 粘性あり、締りやや強。黄褐塊・炭粒少量含む。

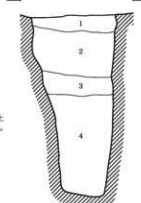
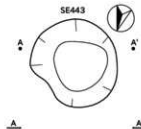


- SE410
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性・締りあり。灰色塊多量、黄褐塊・炭粒少量含む。
 - 2 褐色 (10YR4/4) 土 粘性あり 締りやや強 灰色塊・黄褐塊・炭粒少量含む。
 - 3 褐色 (10YR4/4) 土 粘性・締りあり。灰色塊・黄褐塊・炭粒少量含む。
 - 4 に近い黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性やや強、締りやや強。灰色塊多量 (鉄分付着)、炭粒少量含む。
 - 5 オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 土 粘性強、締り弱。炭粒中量含む。

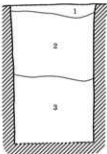
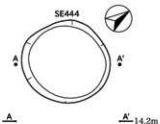
- SE441
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 土 粘性・締りあり。灰色塊・炭粒少量含む。
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) 土 粘性・締りあり。灰色塊・炭粒少量含む。
 - 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性やや強、締りやや強。灰色塊多量、炭粒少量含む。
 - 4 に近い黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性やや強、締り弱。灰色塊多量 (鉄分付着)、炭粒少量含む。
 - 5 褐色 (10YR4/6) 土 粘性あり、締りやや強。灰色塊・炭粒少量含む。
 - 6 黄褐色 (10YR5/6) 土 粘性やや強、締りやや強。灰色塊・炭粒少量含む。
 - 7 黄褐色 (10YR5/6) 土 粘性強、締り弱。灰色塊・炭粒塊・炭粒少量含む。
 - 8 オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 土 粘性強、締り弱。炭粒中量含む。



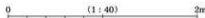
- SE433
- 1 褐色 (10YR4/4) 土 粘性やや強、締りあり。黄褐塊・炭粒少量含む。
 - 2 黄褐色 (10YR5/6) 土 粘性やや強、締りあり。褐色塊・炭粒少量含む。
 - 3 褐色 (10YR4/6) 土 粘性やや強、締りあり。灰色塊・炭粒少量含む。
 - 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性やや強、締りやや強。黄褐塊・炭粒少量含む。
 - 5 灰色 (N5/0) 土 粘性強、締り弱。黄褐塊・炭粒少量含む。

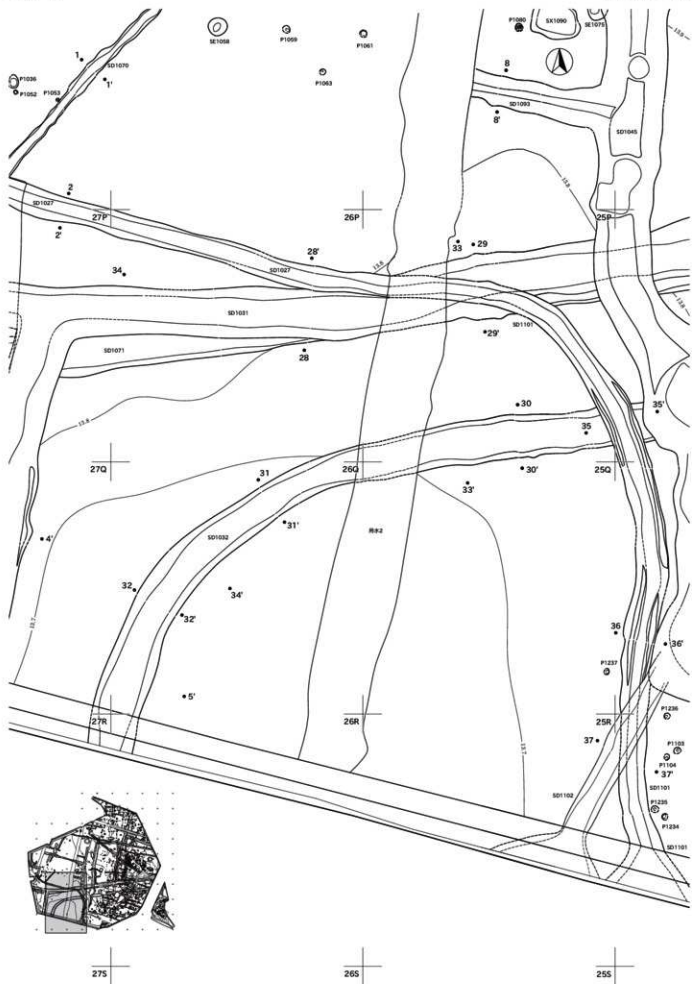


- SE443
- 1 褐色 (10YR4/4) 土 粘性あり、締りやや強。黄褐塊中量含む。
 - 2 黄褐色 (10YR5/6) 土 粘性あり、締りやや強。褐色塊中量、炭粒少量含む。
 - 3 灰色 (10Y4/1) 土 粘性強、締り弱。
 - 4 オリーブ褐色 (5Y3/2) 土 粘性強、締り弱。



- SE444
- 1 明黄褐色 (10YR6/6) + 褐色 (10YR4/4) 土 粘性なし、締り強。地山の塊状土。
 - 2 灰黄褐色 (10YR5/2) + 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質シルト 粘性強、締りあり。炭粒少量含む。
 - 3 緑灰色 (10G6/1) + 緑灰色 (10G4/1) 粘質シルト 粘性・締りあり。







SD1071 (26P12)

1 褐色色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
φ1~10mmの黒褐色粘土ブロック、緑灰色シルト
ブロックを多量、炭化物少量含む。

SD1027 (26P7)

1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 粘性強く、締り強い。
にやや黄褐色土の層と腐植物を混在含む。
2 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 粘性強く、締りやや弱い。
1層よりも色が濃く、φ1~3mmの緑灰色シルトブロック。
炭化物を少量含む。
3 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 粘性強く、締り弱い。
φ1~20mmの緑灰色シルトブロックを多量に含む。

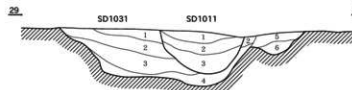
SD1031 (26P7・12)

1 褐色色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、
締り強い。φ1~3mmの炭化物を少量含む。
2 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 粘性強く、
締りやや弱い。
φ1~5mmの緑灰色シルトブロック、黒褐色
粘土ブロックを少量含む。1層より締りが弱い。
3 緑灰色 (7.5GY5/1) シルト 粘性強く、締り弱い。
黒褐色粘土を多量、φ1~5mmの黒褐色粘土ブロック
を少量含む。



SD1032 (25P22)

1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 粘性強く、締り強い。
2 褐色色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
3 褐色色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
黒褐色粘土ブロック、灰黄褐色粘土ブロックを多量含む。
4 褐色色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
黒褐色粘土ブロック、灰黄褐色粘土ブロックを多量含む。
5 緑灰色 (7.5GY5/1) シルト 粘性強く、締り弱い。
黒褐色粘土を少量含む。



SD1031 (25P3・8・13)

1 褐色色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
2 褐色色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
1層よりも色が薄い。
3 灰色 (5Y4/1) 粘質土 粘性強く、締りやや弱い。
φ1~5mmの緑灰色シルトブロック、炭化物少量含む。
4 緑灰色 (10G5/1) 粘質シルト 粘性強く、締り弱い。
炭色粘土を多量含む。
5 褐色色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
φ1~5mmの黒褐色粘土ブロック、緑灰色シルトブロック
を多量含む。
6 灰色 (5Y6/1) 粘質土 粘性強く、締り弱い。
黒褐色粘土ブロックを少量含む。

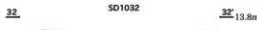
SD1101 (25P8)

1 褐色色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
にやや黄褐色粘土と、腐植物に
含む腐層を含む。
2 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
3 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
φ1~5mmの黒褐色粘土ブロック、緑灰色シルトブロック
を多量、腐植物・細砂をまばらに含む。



SD1032 (26Q2)

1 褐色色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
φ1~10mmの炭色粘土ブロック、黒褐色粘土ブロックを多量含む。
2 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 粘性強く、締りやや弱い。
φ1~3mmの炭化物を微量含む。
3 緑灰色 (7.5GY5/1) シルト 粘性強く、締り弱い。
黒褐色粘土を多量に含む。



SD1032 (26Q1・15)

1 褐色色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
2 褐色色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
1層よりわずかに色が白く、締りが弱い。φ5mmの緑灰色
ブロックを多量含む。腐植物、細砂をまばらに含む。
3 オリーブ灰色 (2.5GY5/1) シルト 粘性強く、締り弱い。
黒褐色粘土を多量含む。



SD1031 (25P9・14)

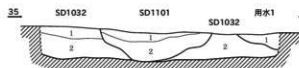
SD1032 (25P23)



SD1031 (26P10・15)

SD1071 (26P15)

SD1032 (26Q8・9)



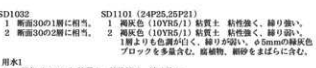
SD1032

SD1101

SD1032

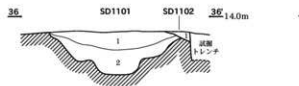
雨水

SD1032



SD1101 (24P25,25P21)

1 褐色色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
φ5~10mmの炭色シルトブロック、黒褐色粘土
ブロック少量、下部に腐植物を微量含む。
2 褐色色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
1層よりも色が白く、締りが弱い。φ5mmの緑灰色
ブロックを多量含む。腐植物、細砂をまばらに含む。
雨水
1 灰色 (5Y4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。

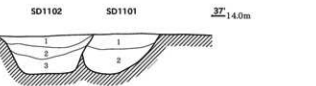


SD1101

SD1102

試掘トレンチ

SD1102



SD1102

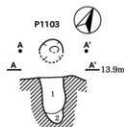
SD1101

SD1101 (24R5)

SD1101 (24Q20)
1 灰色 (5Y6/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
上部にφ1mmの褐色粘土粒子を多量含む。
2 褐色色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
灰オリーブ色シルトブロックを少量含む。

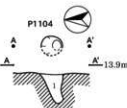
SD1102 (24R5,25R1)
1 褐色色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
粘性強く、締り強い。
にやや黄褐色粘土を混在に多量含む。
2 灰色 (5Y4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
緑灰色シルトブロックを少量含む。

SD1101 (24R5)
1 褐色色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
φ5~10mmの炭色シルトブロック、黒褐色粘土
ブロック少量、下部に腐植物を微量含む。
2 褐色色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
φ1~10mmの緑灰色シルトブロック、黒褐色粘土
ブロックを多量含む。



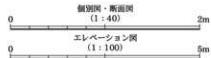
P1103

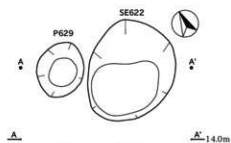
1 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
φ1cm程度の褐色粘土粒子を多量含む。
2 褐色色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
黒褐色粘質土ブロック少量含む。



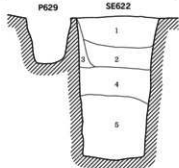
P1104

1 褐色色 (10YR6/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
黒褐色粘土ブロック、
緑灰色シルトブロックを多量含む。



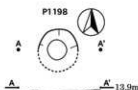


A A' 14.0m



SE622・P629

- 1 灰色 (7.5Y3/1) 土 粘性弱、締り強。
黄粒中量。炭粒微量含む。
- 2 灰色 (7.5Y4/1) 土 粘性あり、締り強。
黄粒中量。炭粒少量含む。
- 3 明黄褐色 (10YR6/8) 土 粘性強、締りあり。
灰色塊微量含む。
- 4 灰白色 (10YR7/1) 土 粘性強、締り弱。
灰色塊中量含む。
- 5 黄灰色 (7.5YR5/1) 土 粘性やや強、締りあり。

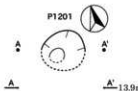


A A' 13.9m



P1198

- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト
粘性強く、締りやや弱い。

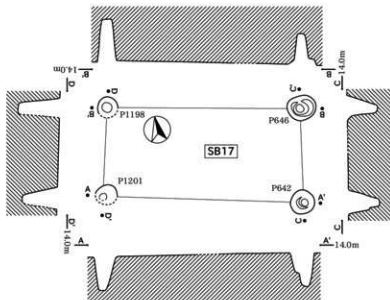
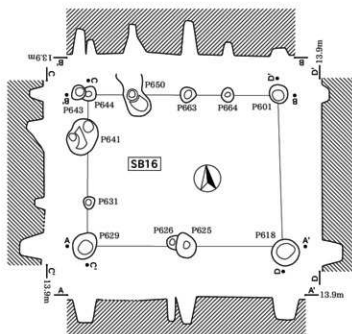
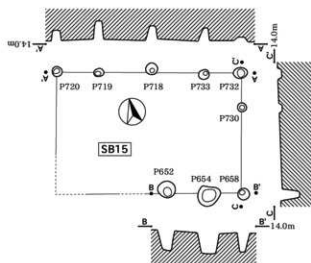


A A' 13.9m

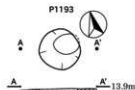
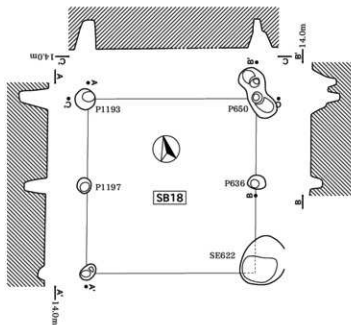


P1201

- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト
粘性やや強く、締り強い。
- 2 黄灰色 (10GY6/1) シルト
粘性やや強く、締り弱い。



SB平面・エレベーション図 (1:80) 縮尺図 (1:40) 0 4m 0 2m



P1193
1 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト 粘性やや強く、締り強い、

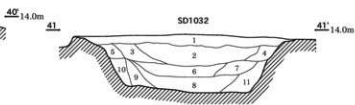
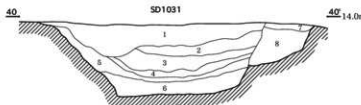


SD695 (22P14)

- 1 灰白色 (10YR7/1) 粘質土 粘性弱、締りあり。
- 2 褐色色 (10YR5/1) 粘質土 粘性弱、締りあり。灰白塊を帯状に含む。
- 3 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 粘性弱、締りあり。灰白塊を帯状に含む。φ1~3mm炭粒少量含む。

SD500 (22D19-24)

- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 土 粘性なし、締り強。マンガン粒・炭粒少量含む。
- 2 褐色色 (10YR4/1) 土 粘性弱、締り強。砂質の部分があり、炭粒に認められる。
- 3 黄褐色 (10YR3/1) 粘質シルト土主体 粘性弱、締りあり。右側に黄褐色粘質土含む。地山底・炭粒少量含む。
- 4 黄灰色 (10YR2/1) 粘質シルト 粘性・締りあり、炭粒少量含む。
- 5 褐色色 (10YR5/1) 粘質シルト 粘性弱、締りあり。マンガン粒の沈着が多い。
- 6 灰色 (N4/0) 粘質土 粘性・締りあり。炭粒少量含む。植物質も一定量含まれる。
- 7 褐色色 (10YR5/1) 粘質シルト 粘性弱、締りあり。
- 8 におい・黄褐色 (10YR6/4) 土 粘性なし、締り強。地山に近視。



SD1031 (24P3-8)

- 1 褐色色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。φ1mmの炭化物、黒褐色粘土粒子を多量に含む。
- 2 褐色色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締りやや強い。灰白色粘土を少量含む。
- 3 灰白色 (10YR7/1) 粘質土 粘性強く、締りやや強い。φ1mmの炭化物を少量含む。
- 4 褐色色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締りやや強い。炭化物を少量、灰白色粘土をマール状に多量含む。
- 5 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土 粘性強く、締りやや強い。
- 6 灰白色 (N5/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。φ1~3mmの炭化物多量。明青灰色シルト少量含む。
- 7 褐色色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
- 8 褐色色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。下部に黒褐色粘質土ブロック、灰黄褐色シルトブロックを少量含む。

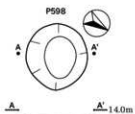
SD1032 (24P16-21)

- 1 褐色色 (5YR5/1) 土 粘性なし、締り強い。
- 2 灰白色 (10YR2/1) シルト 粘性弱く、締り強い。
- 3 褐色色 (10YR5/1) シルト 粘性弱く、締り強い。
- 4 褐色色 (10YR5/1) 土 粘性なし、締り強い。
- 5 褐色色 (10YR7/1) シルト 粘性弱く、締り強い。
- 6 灰色 (N4/0) 粘質土 粘性あり、締りやや強い。
- 7 灰白色 (N2/0) 粘質土 粘性あり、締りやや強い。
- 8 暗灰色 (N3/0) 粘質土 粘性あり、締りやや強い。
- 9 灰色 (5Y5/1) 粘質土 粘性あり、締りやや強い。
- 10 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土 粘性あり、締り強い。
- 11 灰色 (N6/0) 粘質土 粘性あり、締りやや強い。

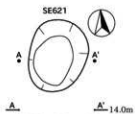
SB平面・エレベーション図
38通しセクション図・39エレベーション図

縦断面・断面図

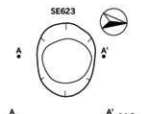




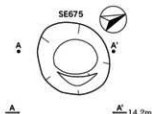
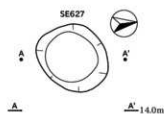
- P598
- 1 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト粘性弱、締り強、φ1~5cm明黄褐色塊含む、φ2cm程の暗赤褐色の塊土塊を少量含む。
 - 2 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土、粘性・締りあり、炭粒少量含む。



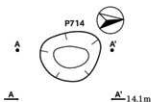
- SE621
- 1 にかい黄褐色(10YR5/3)土、粘性・締りあり、炭粒少量、黄褐色中量含む。
 - 2 にかい黄褐色(10YR5/3)土、粘性・締りあり、炭粒微量含む。
 - 3 灰黄褐色(10YR5/2)土、粘性・締りあり、炭粒微量含む。
 - 4 褐灰色(2.5Y4/1)土、粘性やや強、締りやや弱。
 - 5 褐灰色(2.5Y4/1)土、粘性やや強、締りやや弱、炭粒微量、灰色塊中量含む。



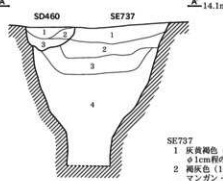
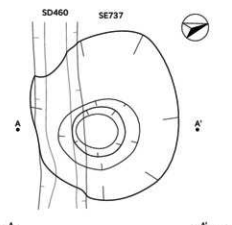
- SE623
- 1 灰黄褐色(10YR6/2)土、粘性あり、締りやや強、炭粒・黄褐色中量含む。
 - 2 褐灰色(10YR4/1)土、粘性あり、締りやや強。
 - 3 黒褐色(10YR3/1)土、粘性やや強、締りあり、礫少量、灰色塊・炭粒少量含む。
 - 4 明黄褐色(2.5Y6/8)土、地山。



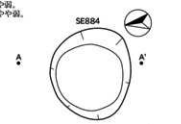
- SE675
- 1 にかい黄褐色(10YR5/3)土、粘性・締りあり、炭粒少量、黄褐色中量含む。
 - 2 にかい黄褐色(10YR5/3)土、粘性・締りあり、炭粒微量含む。
 - 3 灰黄褐色(10YR5/2)土、粘性・締りあり。
 - 4 灰白色(10YR7/1)土、粘性やや強、締りやや弱。
 - 5 灰黄褐色(10YR5/2)土、粘性やや強、締りやや弱、炭粒微量、灰色塊中量含む。



- P714
- 1 暗褐色(10YR3/3)土、粘性やや強、締りあり、黄褐色中量、炭粒微量含む。
 - 2 灰黄褐色(10YR5/2)土、1より粘性強、締りあり、黄褐色中量、炭粒微量含む。
 - 3 黄褐色(10YR5/6)土、粘性・締りあり、灰色塊中量、炭粒少量含む。
 - 4 黄褐色(10YR5/6)土、粘性やや弱、締りあり、褐色塊少量、炭粒微量含む。

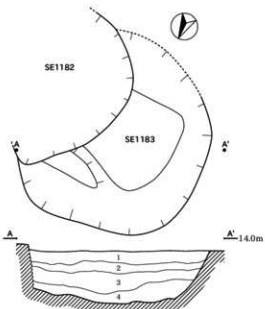


- SE737
- 1 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質土、粘性弱、締りあり、φ1cm程のマンガン粒多量、炭粒少量含む。
 - 2 褐灰色(10YR5/1)シルト質土、粘性弱、締りあり、マンガン・炭粒少量含む、下部に向かい粘質土化する。
 - 3 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘質土、粘性・締りあり。
 - 4 黄灰色(5BG5/1)オリーブ灰色(2.5GY5/1)粘土の混じり、粘性・締りあり。

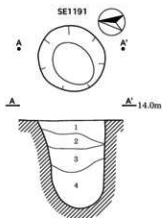


- SE884
- 1 灰色(N6/0)土、粘性・締りあり、白色・黄褐色中量、炭粒少量含む。
 - 2 灰白色(N7/0)土、粘性強、締りあり、灰色塊中量、炭粒少量含む。
 - 3 灰白色(N7/0)土、粘性強、締りやや弱、灰色塊中量、炭粒少量含む。
 - 4 灰色(5Y4/1)土、粘性強、締りやや強、炭粒多量、礫微量含む。
 - 5 灰色(5Y6/1)土、粘性強、締りやや強、地山か。

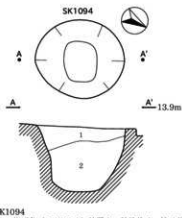
- SD460
- 1 褐色(7.5YR6/8)粘質土、粘性弱、締り強。
 - 2 灰黄褐色(10YR6/2)シルト・粘質泥、締りあり。
 - 3 褐灰色(10YR6/1)粘質土、粘性・締りあり。



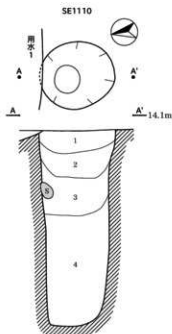
- SE1183
- 1 褐色 (10YR5/1) 土 粘性なし、締り強い。
 - 2 灰色 (N5/0) シルト 粘性強く、締りやや弱い。
 - 3 灰色 (N5/0) シルト 粘性弱く、締りやや弱い。
 - 4 灰色 (N4/0) 粘質土 粘性あり、締りやや弱い。



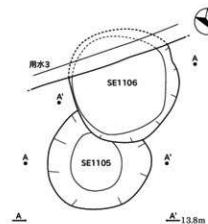
- SE1191
- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト 粘性やや強く、締り強い。
 - 2 褐色 (10YR6/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
 - 3 褐色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締りやや弱い。
 - 4 褐色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り弱い。



- SK1094
- 1 褐色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。にぶい黄褐色シルトブロックを多量含む。
 - 2 灰色 (7.5Y6/1) 粘質土 粘性強く、締りやや弱い。黒褐色粘土ブロックを多量含む。

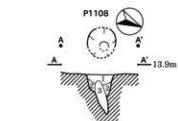
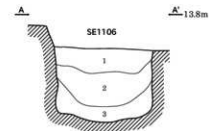
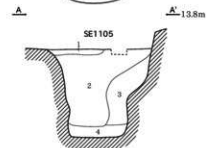


- SE1110
- 1 褐色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。にぶい黄褐色シルトブロック多量を含む。
 - 2 緑灰色 (10G5/1) シルト 粘性強く、締りやや弱い。褐色粘質土を多量含む。
 - 3 褐色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。5~10mmの緑灰色シルトブロックを多量含む。
 - 4 緑灰色 (10G5/1) シルト 粘性強く、締り弱い。褐色粘質土を多量含む。

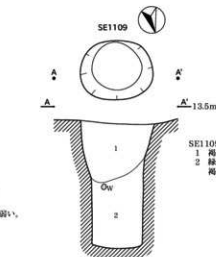


- SE1105
- 1 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。φ5mmの緑灰色シルトブロックを多量含む。
 - 2 黒褐色 (10YR2/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。φ1~10mmの緑灰色シルトブロック多量含む。
 - 3 褐色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り弱い。φ1~10mmの緑灰色シルトブロック、黒褐色粘土ブロックを多量含む。
 - 4 褐色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り弱い。

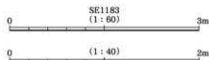
- SE1106
- 1 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
 - 2 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 粘性やや強く、締り弱い。腐植物を多量に含む。
 - 3 褐色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り弱い。緑灰色シルトブロックを多量含む。

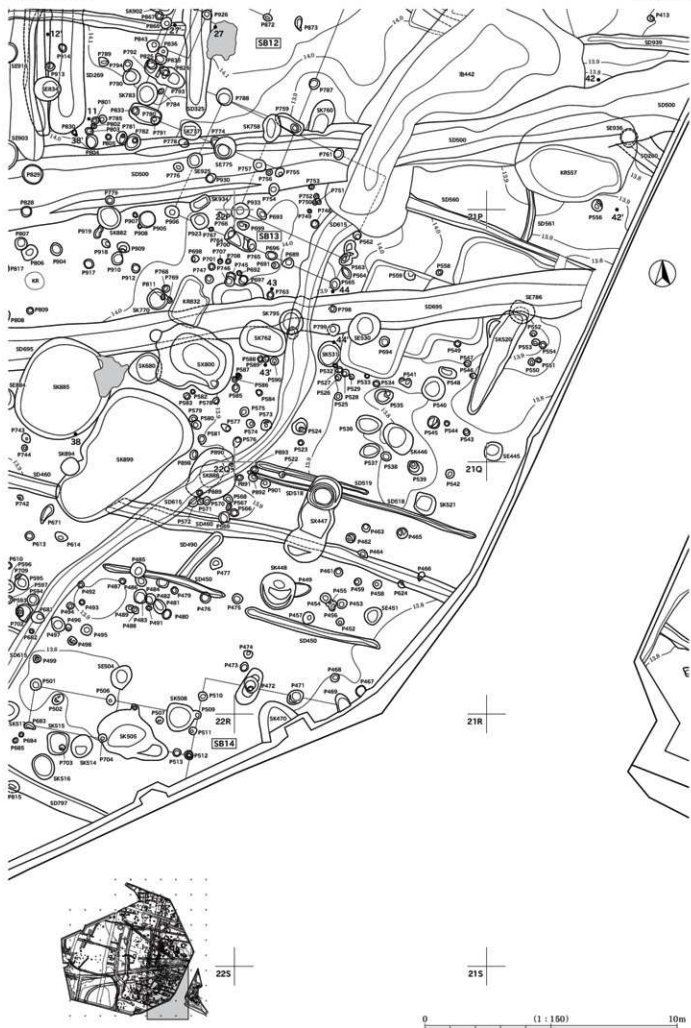


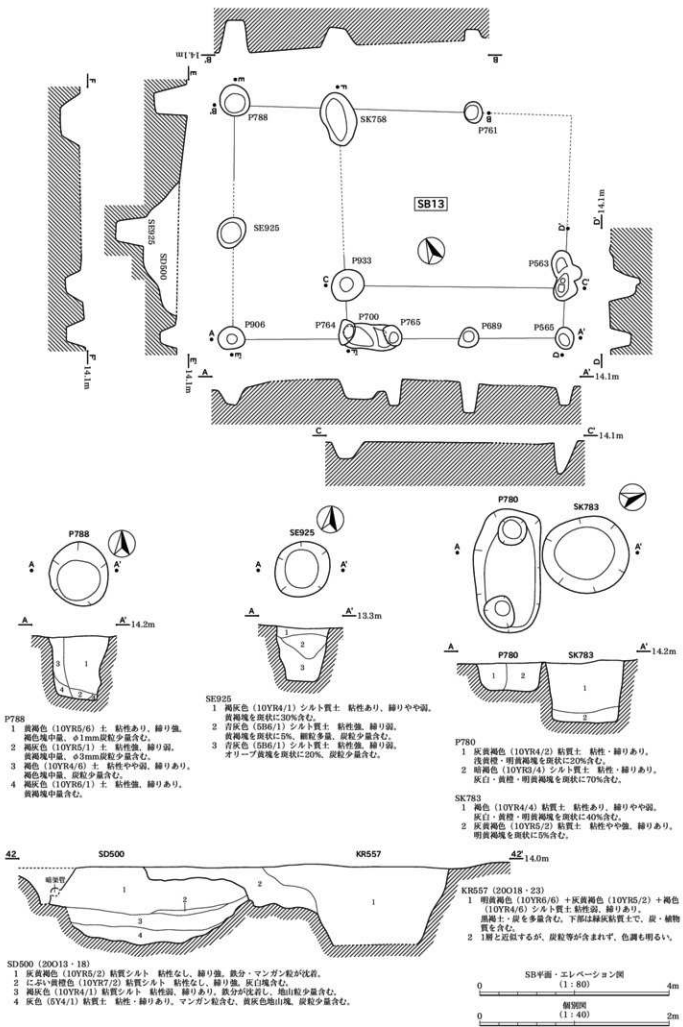
- P1108
- 1 褐色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。
 - 2 褐色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強く、締り強い。にぶい黄褐色ブロックを少量含む。
 - 3 褐色 (10YR5/1) 粘質土 粘性強く、締り非常に弱い。

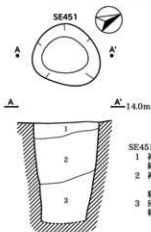
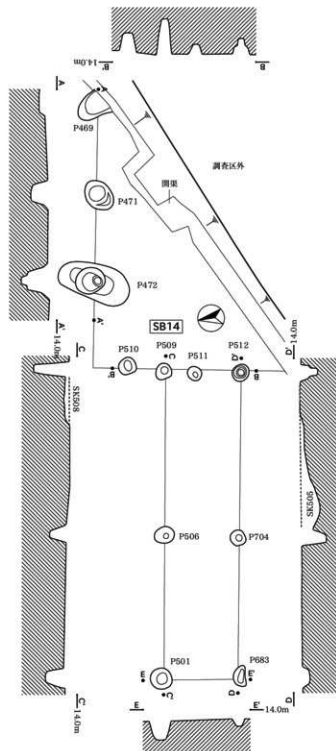


- SE1109
- 1 褐色 (10YR4/1) 粘土 粘性強く、締り弱い。
 - 2 緑灰色 (10G5/1) シルト 粘性やや強く、締り弱い。褐色粘土を多量、腐植物少量含む。

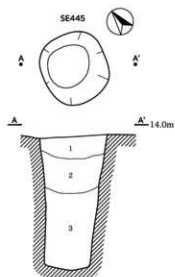




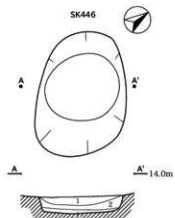




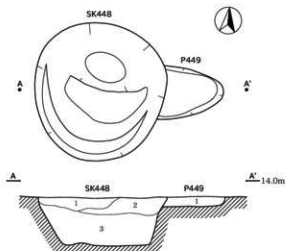
- SE451
- 1 褐色 (10YR4/4) 土主体 粘性なし、締り強。φ5cm以下の地山褐色塊含む。
 - 2 褐色 (10YR5/1) + 赤い黄褐色 (10YR6/4) + 黄緑 (10YR8/8) 粘質土 粘性弱、締り強、塊堆積。
 - 3 灰オリーブ色 (5Y6/2) 粘質土 粘性・締りあり。



- SE445
- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 土主体 粘性弱、締り強。明赤帯+に赤い黄褐色を挟む。φ2cm炭粒少量含む。
 - 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 土主体 粘性弱、締り強。1層に褐色土多量。炭粒少量含む。
 - 3 暗黄褐色 (5B3/1) 粘質シルト 粘性・締りあり。



- SK446
- 1 褐色 (10YR4/4) 粘質シルト主体 粘性弱、締りあり。黄灰色が混じる。
 - 2 暗黄褐色 (2.5Y4/2) 粘質シルト 粘性あり、締り弱。植物炭化の茎を多く含む。
 - 3 赤い黄褐色 (10YR7/2) 粘質シルト 粘性あり、締り弱。



- SK448
- 1 赤い黄褐色 (10YR6/3) 土主体 粘性弱、締り強。黄緑・灰白塊含む。塊堆積。
 - 2 褐色 (10YR4/4) 粘質シルト 粘性弱、締り強。浅黄褐色含む。塊堆積。
 - 3 褐色 (10YR5/1) 粘質シルト 粘性弱、締り強。橙・灰白塊含む。塊堆積。

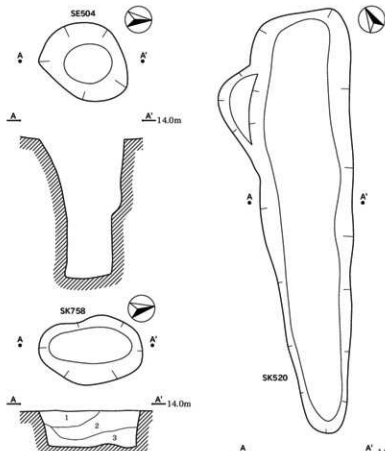
- P449
- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 土 粘性弱、締り強。灰白塊含む。

SB平面・エレベーション図
(1:80)

4m

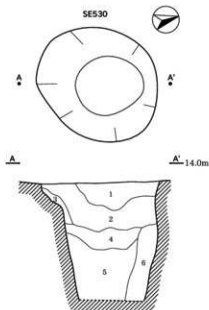
個別図
(1:40)

2m

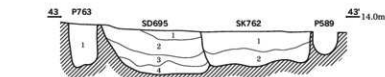


- SK758
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 土 粘性弱、締り強。炭粒少量。φ1mm炭粒少量含む。
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) 土 粘性あり、締り弱。炭粒塊・φ2mm炭粒少量含む。
 - 3 褐色 (10YR4/4) 土 粘性・締りあり。炭粒中量。φ3mm炭粒少量含む。

- SK520
- 1 黒褐色 (10YR3/2) 土 粘性なし、締り強。φ1~5cmの地山塊、炭粒少量含む。
 - 2 暗褐色 (10YR3/4) 土 粘性なし、締り強。



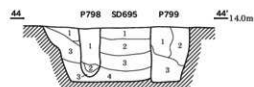
- SE530
- 1 黄灰色 (2.5Y4/1) 土 粘性なし、締り強。
 - 2 黄灰色 (2.5Y4/1) 土 粘性弱、締り強。地山の浅黄・灰白塊含む。底部付近の結合が弱い。
 - 3 におい褐色 (7.5YR6/3) + 浅黄色 (2.5Y7/3) 粘質シルト 粘性弱、締りあり。塊堆積。
 - 4 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘土 粘性・締りあり。
 - 5 暗灰黄色 (2.5Y4/1) + 青灰色 (5BG5/1) 粘土の互層 粘性・締りあり。炭粒少量含む。
 - 6 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粘土主体 粘性・締りあり。上部20cm程は褐色。地山と近似的。炭粒少量含む。



- SD695 (21P10 - 15)
- 1 明灰褐色 (10YR6/6) 土 粘性弱、締りあり。地山塊積土。
 - 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性なし、締り強。マンガング粒多量含む。
 - 3 灰黄褐色 (2.5Y5/2) 粘質シルト 粘性弱、締りあり。
 - 4 褐色 (10YR6/1) 粘質土 粘性弱、締りあり。マンガング含む。

- SK762
- 1 暗褐色 (10YR3/3) + 黄灰色 (10YR4/1) 粘質シルト 粘性弱、締り強。塊堆積土。地山塊・マンガング含む。
 - 2 オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘質シルト主体 粘性弱、締りあり。灰色粒含む塊堆積。

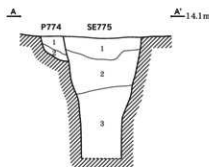
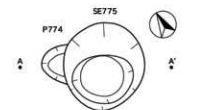
- P763
- 1 褐色 (10YR4/4) 土主体 粘性なし、締り強。地山塊中量。マンガング少量含む。



- SD695 (21P9 - 14)
- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) + 黄褐色 (10YR5/6) 土 粘性なし、締り強。塊堆積。
 - 2 明灰褐色 (10YR6/6) 土 粘性弱、締りあり。地山塊積土。
 - 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性なし、締り強。マンガング粒多量含む。
 - 4 褐色 (10YR6/1) 粘質土 粘性弱、締りあり。マンガング含む。

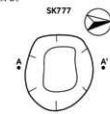
- P798
- 1 褐色 (10YR4/4) 土主体 粘性なし、締り強。地山の褐色・灰色粒少量含む。
 - 2 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土 粘性あり、締り弱。
 - 3 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘土 粘性・締りあり。

- P799
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質シルト主体 粘性弱、締り強。地山塊・炭粒・マンガング含む。
 - 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質シルト主体 粘性弱、締り強。地山塊多量。炭粒・マンガング含む。1層より明か。
 - 3 黄褐色 (10YR7/8) + 褐色 (10YR6/1) 粘質土 粘性・締りあり。マンガング含む。

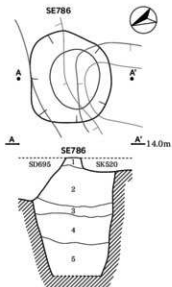


- SE775
- 1 褐色 (10YR4/4) 土 粘性弱、締り強。炭粒塊・φ5mm炭粒少量含む。
 - 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性・締りあり。褐色塊・φ1mm炭粒少量含む。
 - 3 黄褐色 (10YR5/1) 土 粘性弱、締り強。炭粒塊・炭粒中量含む。

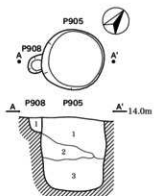
- P774
- 1 におい黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性弱、締り強。灰色塊少量含む。
 - 2 黄褐色 (10YR5/6) 土 粘性・締りあり。灰色塊少量含む。



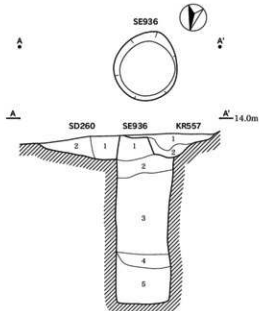
- SK777
- 1 褐色 (10YR4/4) シルト質土 粘性・締りあり。灰口・黄褐色を混状に20%含む。
 - 2 におい黄褐色 (10YR4/3) シルト質土 粘性やや強。締りあり。炭粒・明灰黄褐色を混状に70%含む。
 - 3 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト質土 粘性やや強。締りあり。炭粒・暗褐色を混状に20%含む。
 - 4 黄褐色 (10YR5/1) 粘質土 粘性やや強。締りやや弱。炭粒塊を10%含む。



- SE786
- 1 明黄褐色 (10YR7/6) 土 粘性・締り強。灰色塊少量含む。
 - 2 褐色 (10YR5/1) 土 粘性弱。締り強。褐色塊中量。φ3mm炭粒少量含む。
 - 3 明褐色 (7.5YR5/8) 土 粘性・締りあり。灰色塊中量。φ2mm炭粒少量含む。
 - 4 褐色 (10YR4/1) 土 粘性弱。締り強。黄褐色塊・φ2mm炭粒少量含む。
 - 5 黒褐色 (2.5Y4/1) シルト 粘性強。締り強。



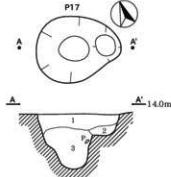
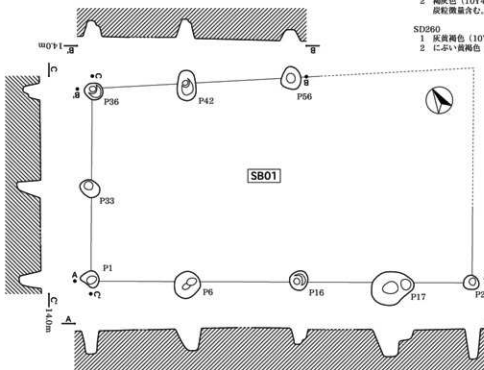
- P905
- 1 褐色 (10YR6/1) + 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性なし。締り強。塊層積。
 - 2 暗灰色 (2.5Y4/2) 粘質土 粘性弱。締り強。炭粒少量含む。
 - 3 暗マリアージュ灰色 (2.5GY4/1) 粘質土 粘性・締りあり。炭粒少量含む。
- P908
- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 土 粘性弱。締りあり。



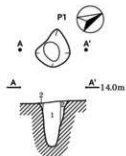
- SE936
- 1 褐色 (10YR4/6) 土 粘性弱。締り強。灰白塊・黄褐色塊少量含む。
 - 2 褐色 (10YR5/1) 土 粘性あり。締り強。地山の明黄褐色等少量含む。
 - 3 褐色 (10YR4/1) 土 2層より粘性強。締り強。黄褐色塊・φ5mm炭粒少量含む。
 - 4 オリーブ黒色 (5Y3/1) 土 粘性強。締り強。
 - 5 黒色 (2.5Y2/1) 土 粘性強。締り強。

- KR557
- 1 明黄褐色 (10YR6/8) 土 粘性弱。締り強。灰白塊少量。褐色塊中量。φ1mm炭粒少量含む。
 - 2 褐色 (10Y4/1) 土 粘性やや弱。締り強。炭粒少量。φ1mm炭粒少量含む。

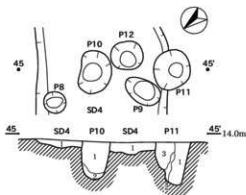
- SD260
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性弱。締り強。黄褐色塊少量含む。
 - 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 粘性弱。締り強。黄褐色塊少量含む。



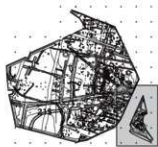
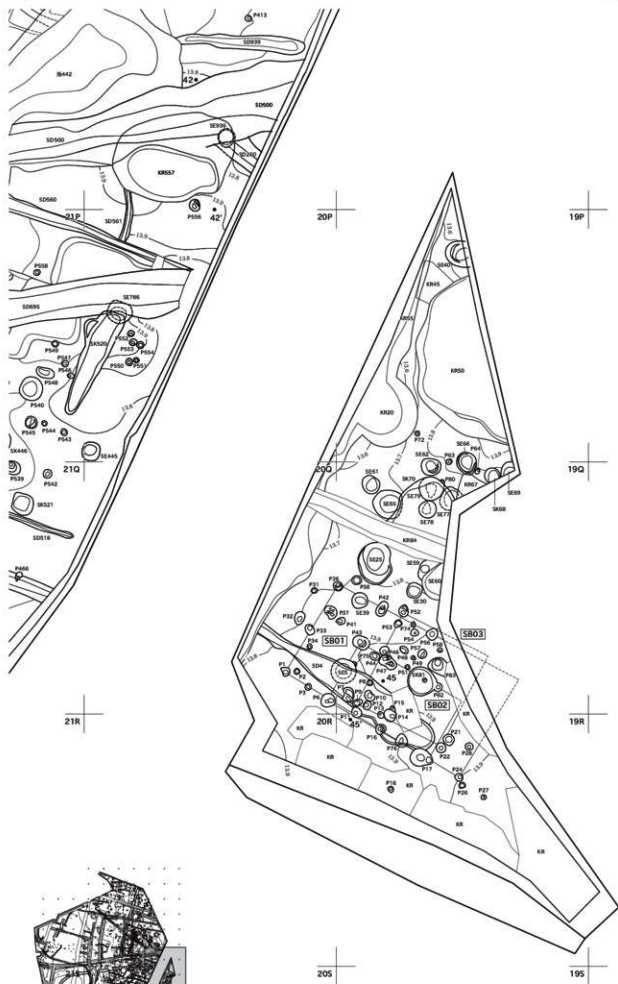
- P17
- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土主体 粘性なし。締り強。地山の明黄褐色等少量含む。
 - 2 暗灰色 (10YR5/2) 粘質シルト 粘性弱。締りあり。
 - 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質シルト 粘性・締りあり。

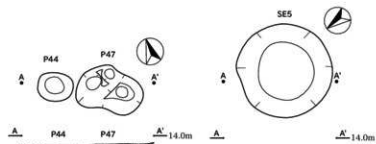
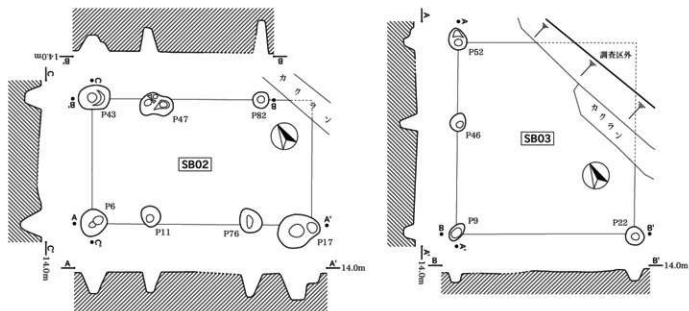


- P1
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 土 粘性弱。締り強。φ1~3cm明黄褐色塊少量含む。
 - 2 明黄褐色 (10YR7/6) + 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 粘性弱。締りあり。塊層積土。

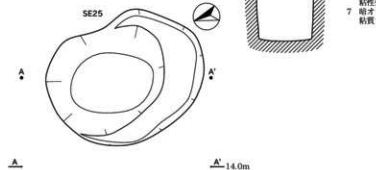


- SD4 (19Q25)
- 1 褐色 (10YR4/4) 土 粘性弱。締りあり。褐色少量含む。
- P10
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 土 粘性弱。締りあり。炭粒少量含む。
 - 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土 粘性・締りあり。
- P11
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 土 粘性弱。締りあり。
 - 2 褐色 (10YR6/1) 粘質土 粘性・締りあり。
 - 3 褐色 (10YR4/4) + 灰黄褐色 (10YR5/2) 土 粘性弱。締りあり。

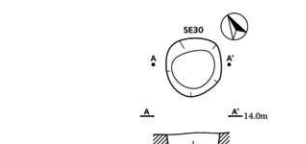




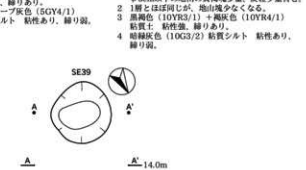
- P44**
 1 褐色 (10YR4/4) 土 粘性弱、締り強。
 φ2cmの地山の黄褐色含む。
- P47**
 1 に近い黄褐色 (10YR5/4) 土 粘性弱、締り強。
 褐色塊含む。
 2 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質シルト 粘性弱、締り強。
 地山塊含む。
 3 褐色 (10YR4/4) 粘質シルト 粘性弱、締りあり。
 地山塊含む。炭粒少量含む。



- SE25**
 1 に近い黄褐色 (10YR5/3) 土 粘性なし、締り強。
 2 褐色 (10YR4/1) 粘質シルト主体 粘性弱、締り強。
 3 に近い黄褐色・灰白粘質土少量含む。塊層。
 4 灰白色 (10YR8/2) 粘質シルト主体 粘性弱、締りあり。
 褐色に着色した部分多い。塊層。
 5 褐色 (10YR4/1) 粘質シルト主体 粘性弱、締りあり。
 2層と同じが、色調明るい。
 6 黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 粘性あり、締り強。
 非常に固く締まる。
 7 に近い黄褐色 (10YR7/2) 粘質シルト主体 粘性弱、
 褐色粘質シルト混じり。
 8 黄褐色 (7.5YR/3) 粘質シルト 粘性・締りあり。
 9 オリーブ灰色 (10Y4/2) 粘質土 粘性・締りあり。
 炭粒少量含む。

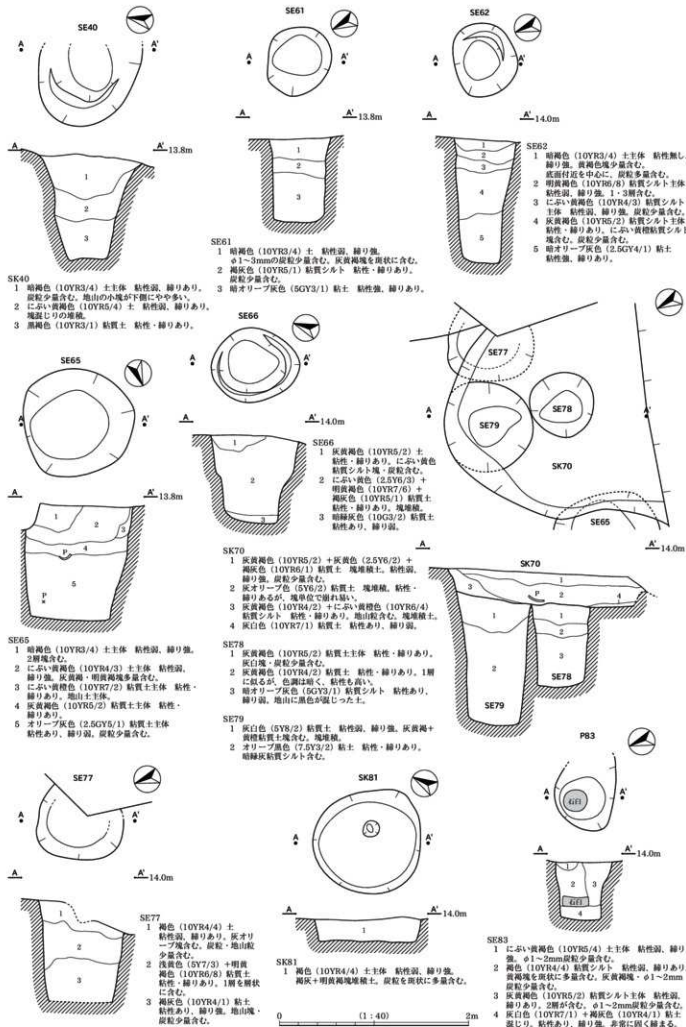


- SE5**
 1 黒褐色 (10YR3/2) 土主体 粘性弱、締り強。炭粒・黄褐+
 明黄褐粘質土少量含む。
 2 黒褐色 (10YR3/2) 土主体 粘性弱、締り強。炭粒少量含む。
 3 褐色 (10YR4/1) 粘質土 粘性・締りあり。
 4 に近い黄褐色 (10YR7/4) 粘質シルト 粘性あり、締り弱。
 5 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土 粘性・締りあり。
 6 暗黄灰色 (5BG4/1) 粘土 粘性弱、締りあり。
 7 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘質シルト 粘性あり、締り弱。



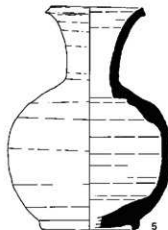
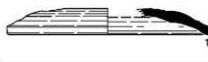
- SE30**
 1 暗褐色 (10YR3/4) 土主体 粘性弱、締り強。
 φ5cm以下の地山の黄褐色・灰白塊含む。
 炭粒少量含む。
 2 1層とほぼ同じが、地山塊少なくする。
 3 黒褐色 (10YR3/1) + 褐色 (10YR4/1) 粘質土 粘性強、締りあり。
 4 暗褐色 (10G3/2) 粘質シルト 粘性あり、
 締り弱。
- SE39**
 1 褐色 (10YR4/4) 土 粘性弱、締り強。
 φ2~3cmの地山の明黄褐・灰白塊含む。
 炭粒少量含む。
 2 浅褐色 (10YR8/3) 粘質シルト 粘性弱、締り強。塊層。
 3 褐色 (7.5YR5/8) 粘質土主体 粘性弱、
 締りあり。黄褐・灰黄粘質土含む。
 4 褐色 (7.5YR5/8) 粘質土主体 粘性弱、
 締りあり。黄褐粘質土少量含む。
 5 に近い黄褐色 (10YR7/2) 粘土 粘性・
 締りあり。黒粘粘土少量含む。

SB平面・エレベーション図 (1:80) 別図 (1:40) 2m

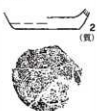


0 (1:40) 2m

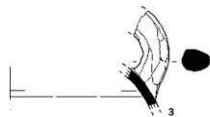
SD260



SD4



SE5



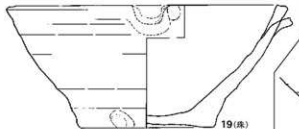
SE135



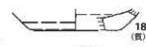
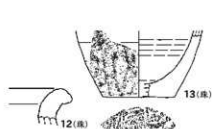
SD180



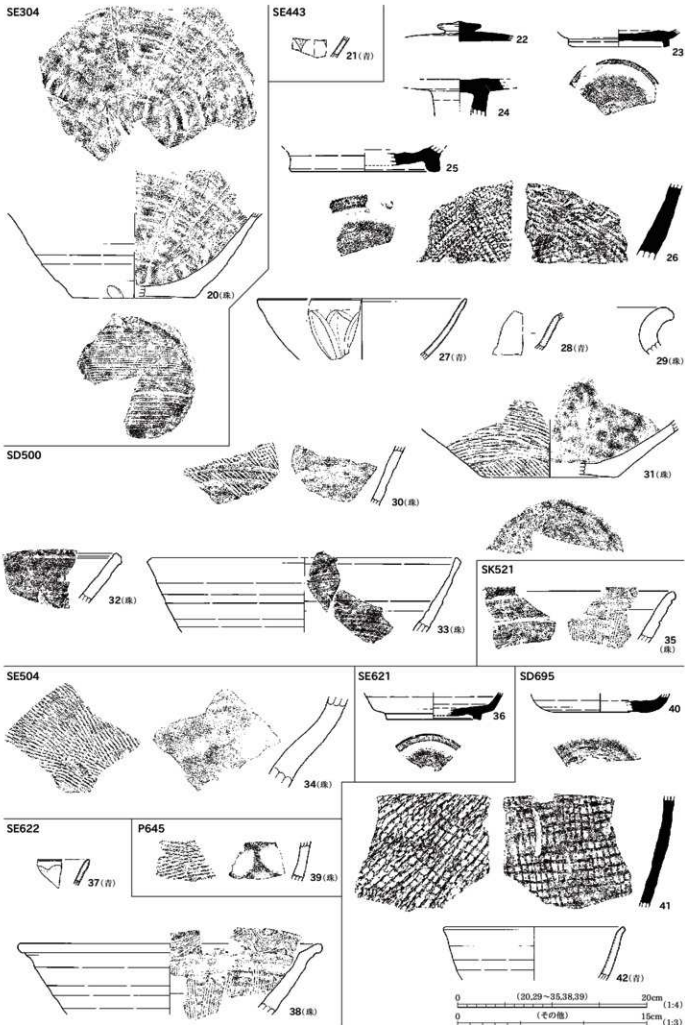
SE261



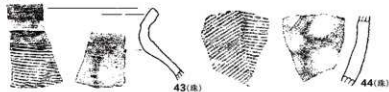
■ 11・14・17・18(2SK340)出土



0 (7,12~15,19) 20cm (1:4)
0 (その他) 15cm (1:3)



SD695



P822



P905



P700



SK931



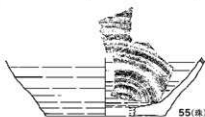
SE1001



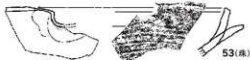
SD938



SE1024



SD1022



SE1028



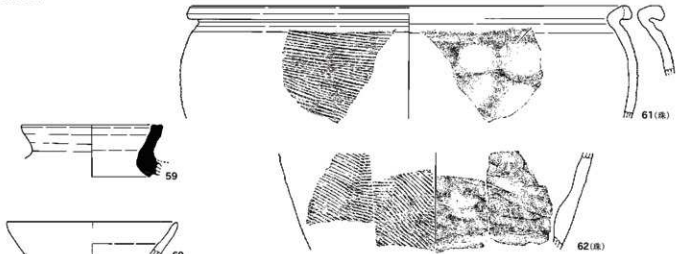
SD1023



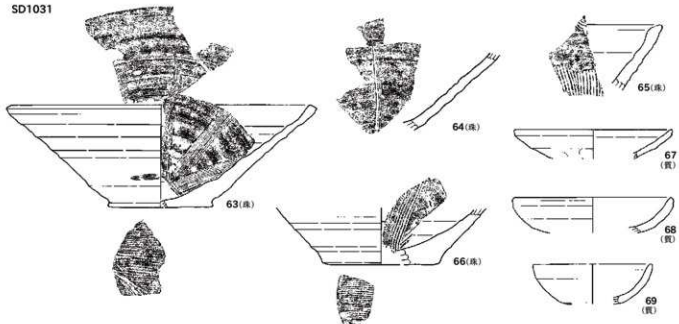
SD1027



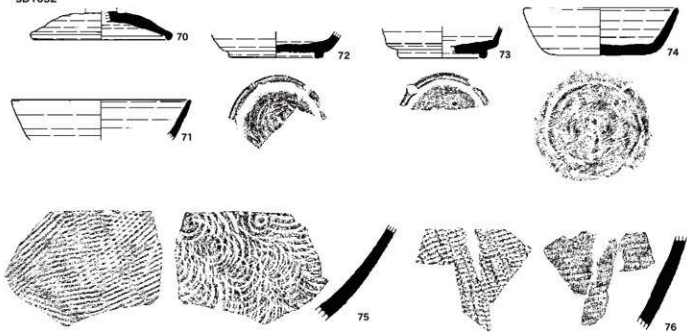
SD1031



SD1031



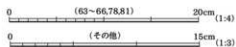
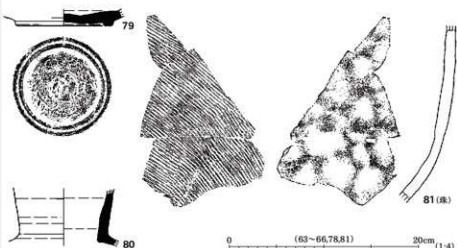
SD1032



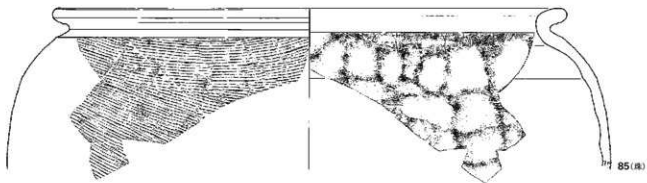
SE1057



SD1071



SE1105



SE1106



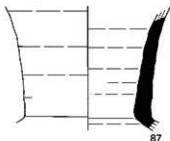
KR50



P241



P1148



SD267



SD267



SE78



KR275



SX407



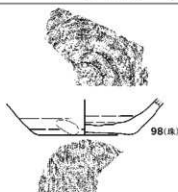
SD561



SX616



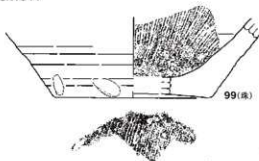
SD1008



SD831



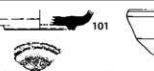
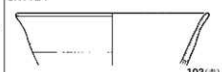
SK1044



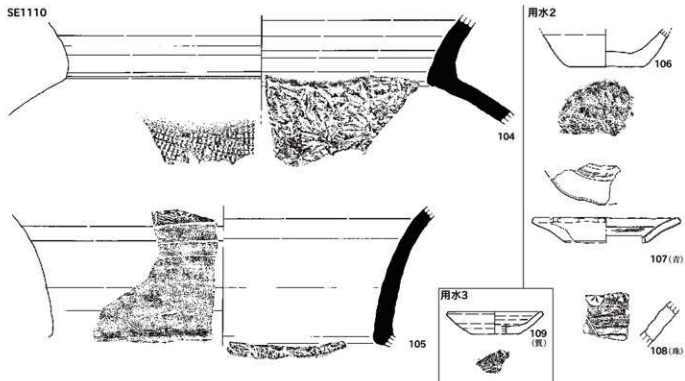
SD1045



SK1124



0 (85,90,95,96,99) 30cm (1:4) 0 (その他) 15cm (1:3)



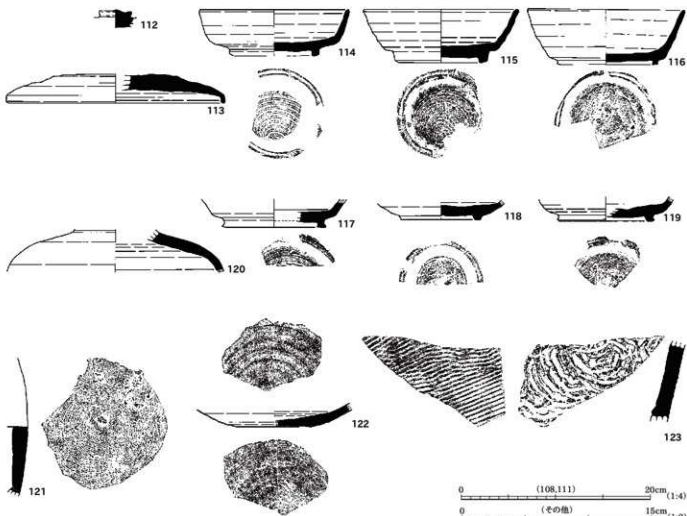
土塁A断面



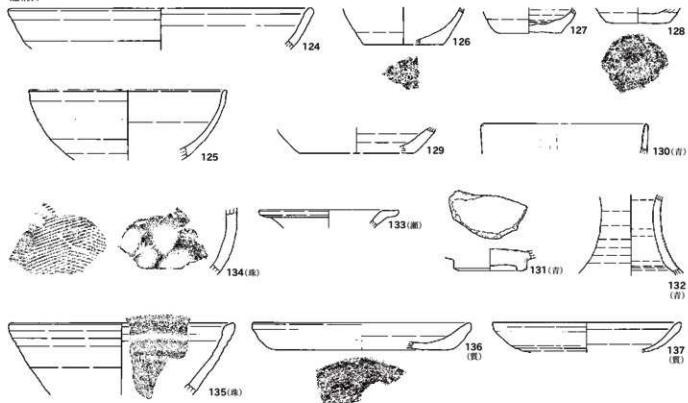
土塁B断面



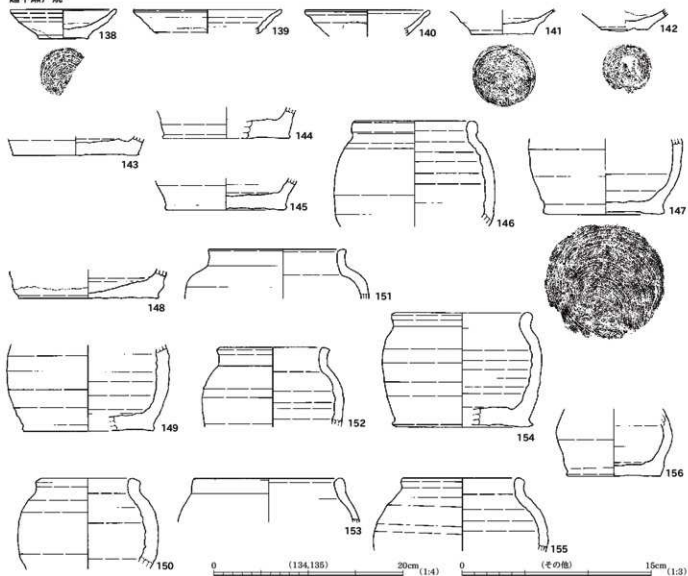
遺構外



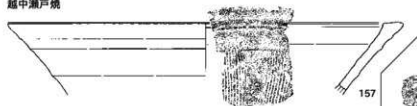
遺構外



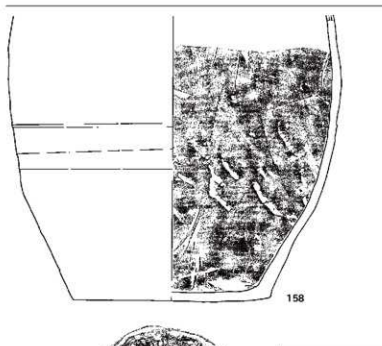
越中瀬戸焼



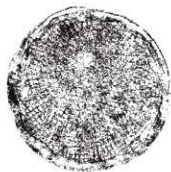
越中瀬戸焼



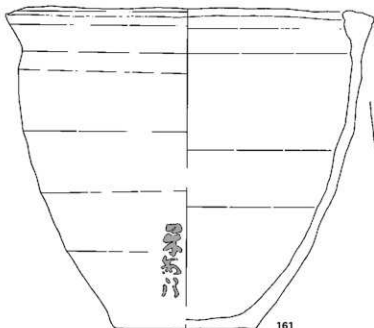
157



158



唐津焼



161

瓦器



159



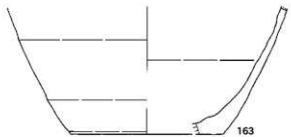
越前焼



160



162

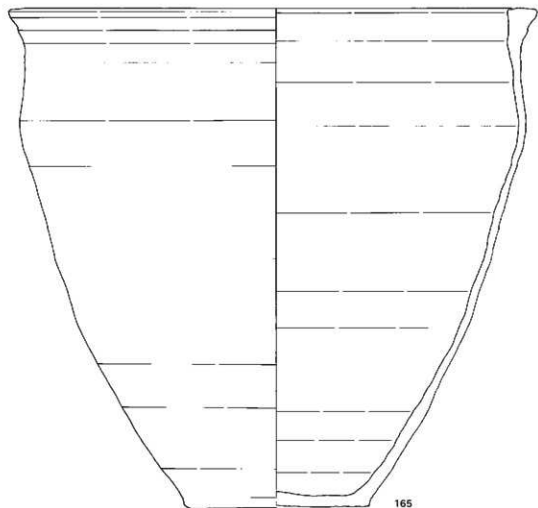


163



164

0 (157) 15cm (1:3)
0 (その他) 20cm (1:4)



165



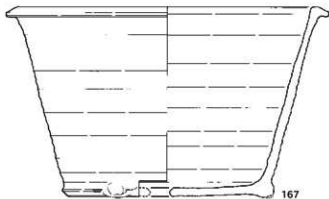
168



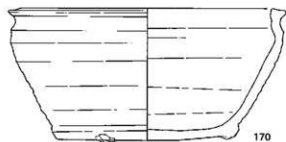
166



169



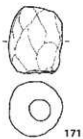
167



170

0 (165) 25cm (1:5) 0 (その他) 20cm (1:4)

土器



171

羽口

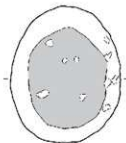


172



173

磨石



174



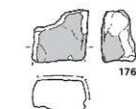
砥石



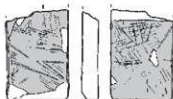
175



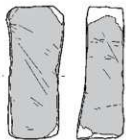
磨面
面



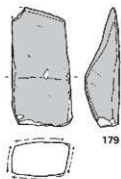
176



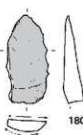
177



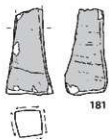
178



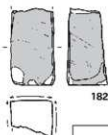
179



180



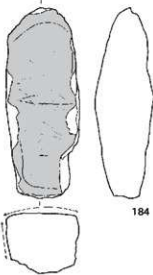
181



182



183



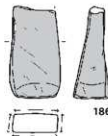
184



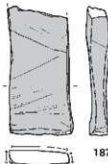
185



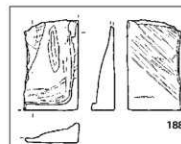
185



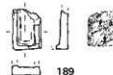
186



187



188



189

砥

空輪

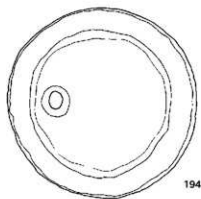
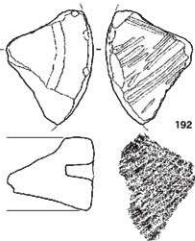


190

0 (その他) 15cm (1:3)

0 (190) 30cm (1:6)

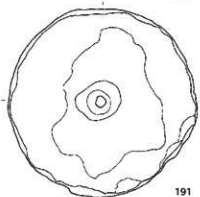
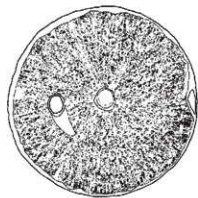
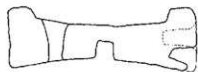
石白



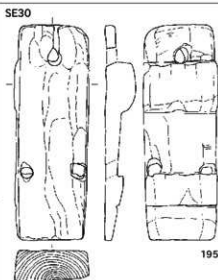
194



193



191



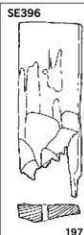
SE30

195



SE142

196



SE396

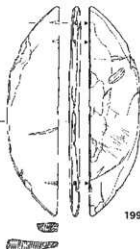
197

SD695

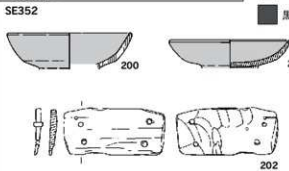
SE834



198



199



SE352

赤漆
黒漆

■

■

■

■

■

■

■

■

■

■

■

■

■

■

■

■

■

■

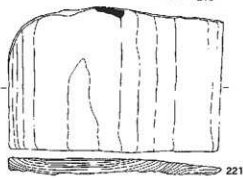
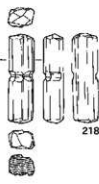
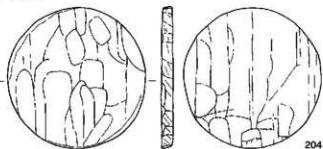
■

0 (197,198,200~202) 15cm (1:3)
0 (196) 20cm (1:4)
0 (その他) 30cm (1:6)



203

SE1001



SE1057

■ 炭化



SE1105



SE1183



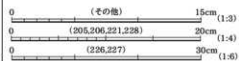
P1108

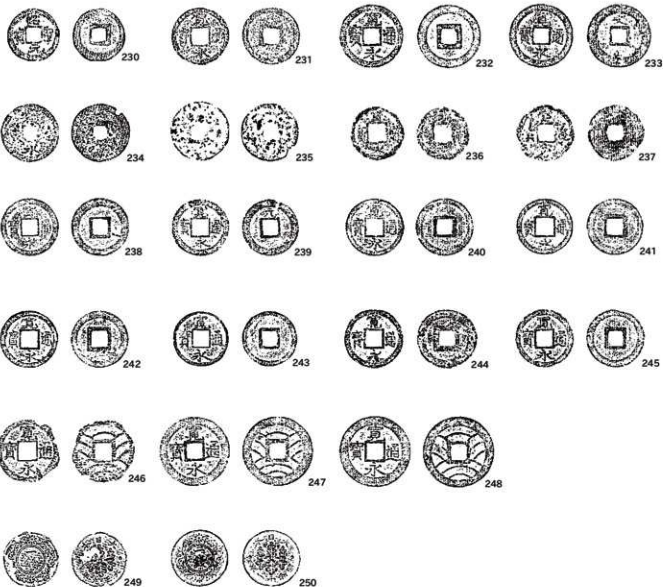


用水3



■ 赤漆
■ 黒漆







上谷三和道路と調査地点の位置

1947年11月4日米軍撮影 (1:50,000)



調査地点(下割遺跡V・VI)の位置

1946年10月10日米軍撮影 (1:10,000)



下割遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ 完掘（西上から、合成写真）



下割遺跡V 完掘 (東上)



下割遺跡M 完掘 (東上)



下割遺跡遠景 (東から)



下割遺跡Ⅴ 完掘 (南から)



下割遺跡Ⅴ東側 完掘 (北から)



下割遺跡Ⅵ 完掘 (南西から)



下割遺跡Ⅵ 完掘 (南東から)



道路状遺構東半部の検出状況（東から）



道路状遺構東半部の検出状況（西から）



道路状遺構西半部の検出状況（西から）



調査前現況（北東から）



土塁 A断面（南西から）



土塁 B断面（西から）



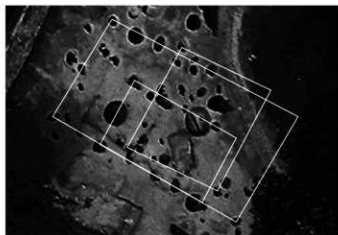
土塁 C断面（東から）



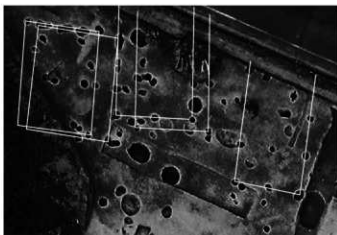
北側土塁・濠 発掘（西から）



21・22N～P区 SB11～13 検出状況 (南上から)



19・20Q区 SB1～3 検出状況 (南上から)



22・23K区 SB4～8 検出状況 (南上から)



23K20区 基本層序 (南から)



25R13・14区 基本層序 (北から)



SB1-P1 断面(西から)



SB1-P17 断面(南から)



P44・SB2-P47 断面(南から)



SB4-P132 断面(北東から)



SB4-P133 断面(北東から)



SB6-P136 断面(東から)



SB8-P175 断面(東から)



SB8-P176 断面(東から)



SB9-P213 断面 (南から)



SB12-P780 断面 (東から)



SB12-P792・793・825・826 断面 (南西から)



SB13-SK758 完掘 (南から)



SB13-P788 断面 (南から)



SB17-P1198 断面 (南から)



SB17-P1201 断面 (南から)



SB18-P1193 断面 (南から)



SD180 完掘(北から)



SD260 西半 完堀(東から)



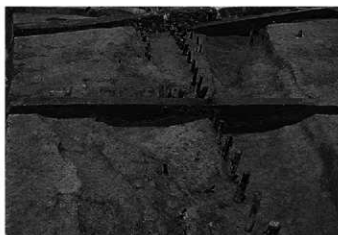
SD269 完掘(北から)



SD938・180・269 完堀(南から)



断面 2-SD1027 断面(西から)



断面 4-SD1031・用水 3 断面(南から)



断面 3-SD1022 断面(東から)



断面 3-SD1023 断面(東から)



断面 6-SD1002 断面 (西から)



断面 7-SD1003 断面 (南から)



断面 8-SD1093 断面 (西から)



断面 9-SD1045 断面 (南から)



断面 11-SD180・269・938 断面 (北から)



断面 13-SD180・260・269 断面 (南から)



断面 14-SD180・269 断面 (西から)



断面 17-SD253・1017 断面 (西から)



断面 16-SD260 上部 断面(西から)



断面 16-SD260 下部 断面(西から)



断面 19-SD1045 断面(南から)



断面 20-SD1046 断面(南から)



断面 21-SD260 断面(南東から)



断面 22-SD260・P335 断面(南東から)



断面 23-SD180・267 断面(南から)



断面 24-SD267・268 断面(東から)



断面 25-SD267 断面 (東から)



断面 26-SD268 断面 (南から)



断面 28-SD1031・1027・1071 断面 (東から)



断面 29-SD1031・1101 断面 (西から)



断面 30-SD1032 断面 (西から)



断面 32-SD1032 断面 (南から)



断面 35-SD1101・1032 断面 (南から)



断面 36-SD1101 断面 (南から)



断面 37-SD1101・1102 断面(南から)



断面 38-SD500 断面(東から)



断面 40-SD1031 断面(西から)



断面 41-SD1032 断面(西から)



断面 42-SD500・KR557 断面(西から)



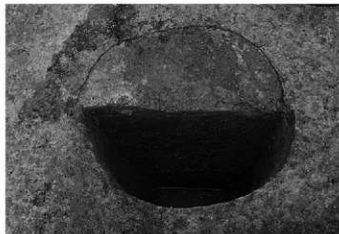
断面 43-SD695・SK762 断面(西から)



断面 44-SD695・P798・P799 断面(西から)



断面 45-SD4・P10・P11 断面(西から)



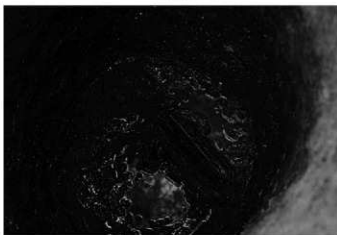
SE5 断面 (西から)



SE25 断面 (西から)



SE30 断面 (南から)



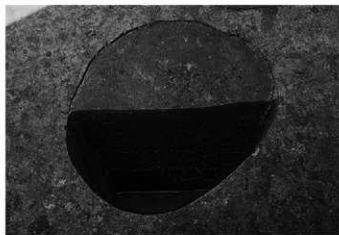
SE30 遺物出土状況 (北東から)



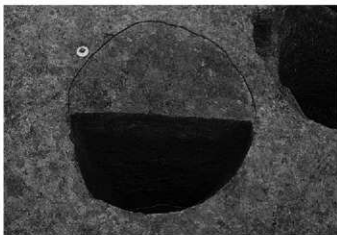
SE39 断面 (北から)



SE40 断面 (西から)



SE61 断面 (西から)



SE62 断面 (西から)



SE65 断面(北から)



SE66 断面(南西から)



SK70 断面(西から)



SE77 断面(西から)



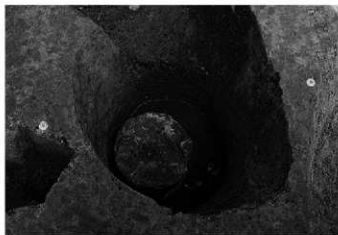
SE78 断面(西から)



SE79 断面(西から)



SK81 断面(南西から)



P83 石臼出土状況(西から)



SE123 断面(南から)



SE125 断面(南から)



SE135 遺物出土状況(南から)



SE142 木製品等出土状況(南から)



SE261 完掘(東から)



SE281 断面(南から)



SE300 断面(南西から)



SE304 断面(南から)



SK340 断面(南から)



SE352 断面(北東から)



SE391 断面(南西から)



SE396 完掘(北から)



SE397 断面(西から)



SE401 断面上部(北から)



SE433 断面(東から)



SE443 断面(北西から)



SE444 断面 (東から)



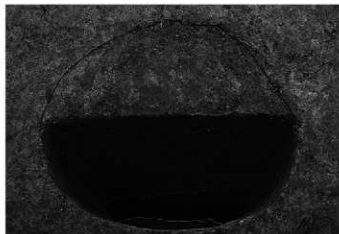
SE445 断面 (南から)



SK446 断面 (東から)



SK448 断面 (南から)



SE451 断面 (東から)



SE504 断面 (東から)



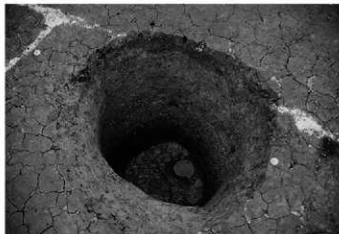
SK520 断面 (南から)



SE530 断面 (東から)



P598 断面 (北東から)



SE621 完掘 (南から)



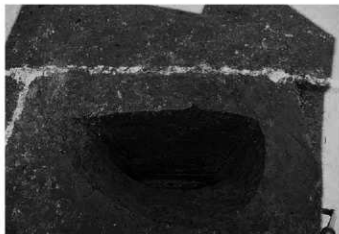
SE622 完掘 (南から)



SE623 断面 (東から)



SE627 完掘 (南から)



SE675 断面 (東から)



P714 断面 (東から)



SE737 断面 (東から)



SK777 断面(東から)



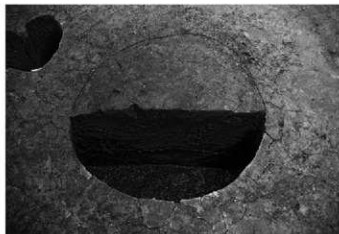
SK783 断面(東から)



SE786 断面(西から)



SE834 完掘(南から)



SE840 断面(南から)



P857 断面(南から)



SE884 断面(西から)



SE895 完掘(東から)



P905・908 断面 (南東から)



SE916 断面 (南から)



SE925 断面 (南から)



SE936 断面 (北から)



SE937 断面 (北から)



SE937 完掘 (北から)



SD500とSD180の合流部 (南から)



22P12区 埋甕(越前焼)出土状況(東から)



SE1001 断面 (南から)



SE1001 完堀 (南から)



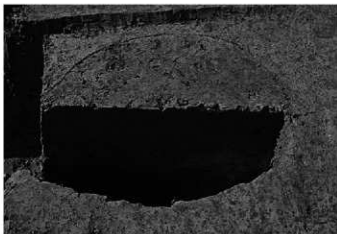
SK1018 断面 (西から)



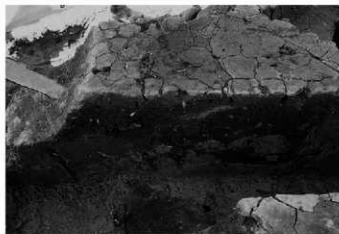
SK1018 炭層検出状況 (西から)



SK1018 完堀 (西から)



SE1020 断面 (南から)



SE1024 断面上部 (東から)



SE1024 断面下部 (東から)



P1025 断面 (東から)



SE1028 断面 (南から)



SE1028 完掘 (南から)



P1037 断面 (南から)



SE1041 断面 (東から)



SE1041 完掘 (東から)



SE1057 断面 (南から)



SE1057 遺物 出土状況 (南から)



SE1058 断面 (南から)



SE1058 完掘 (南から)



SE1075 断面 (南から)



SX1090 断面 (南から)



SE1094 断面 (南西から)



SE1094 完掘 (南西から)



P1103 断面 (南から)



P1104 断面 (西から)



SE1105 断面 (北から)



SE1106 断面 (南から)



SE1105・1106 完掘 (北東から)



P1108 断面 (東から)



P1108 完掘 (東から)



SE1110 断面 (西から)



SE1110 完掘 (西から)



SK1124 断面 (南西から)



SK1126 断面 (南から)



SK1126 完掘 (南から)



SK1181 断面 (西から)



SK1181 完掘 (西から)



SE1183 断面 (北から)



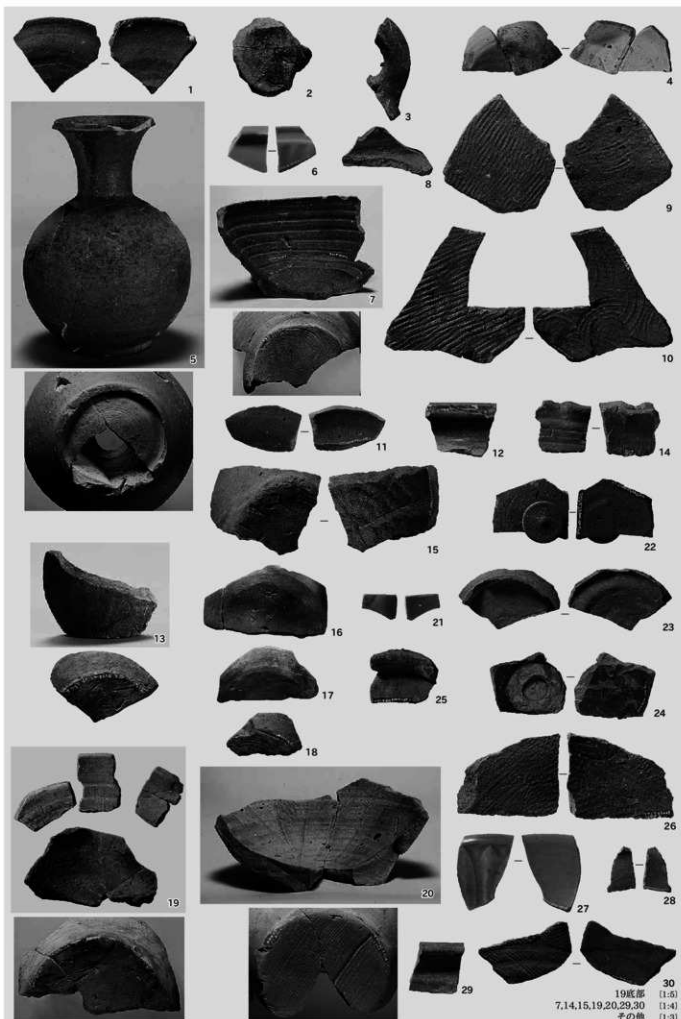
SE1183 完掘 (北から)



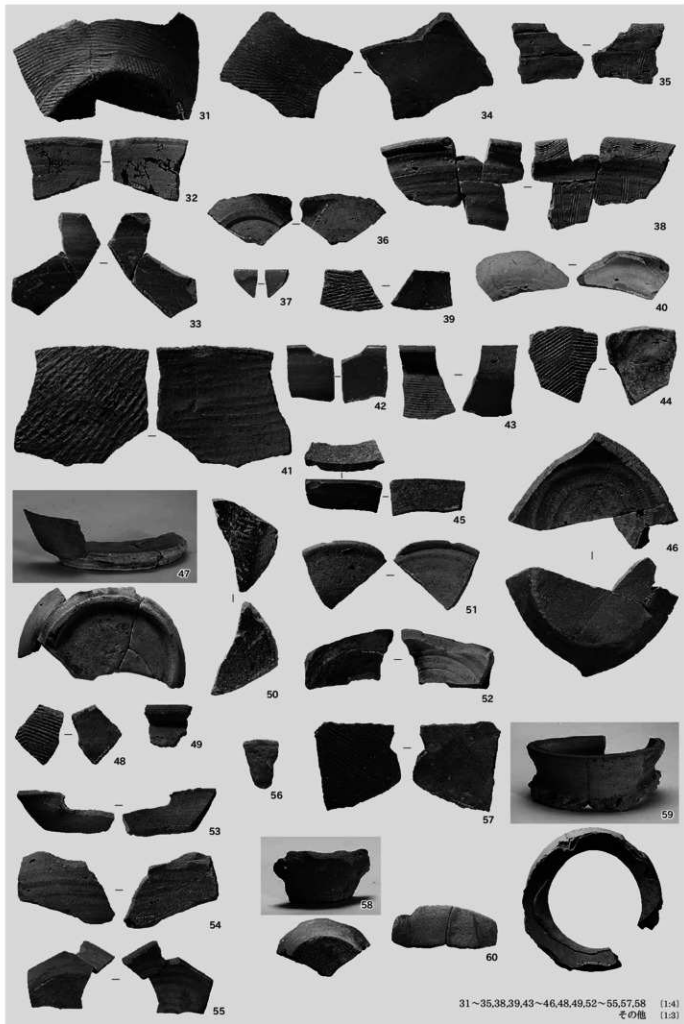
SE1191 断面 (西から)



近代掘立柱建物 (南上)

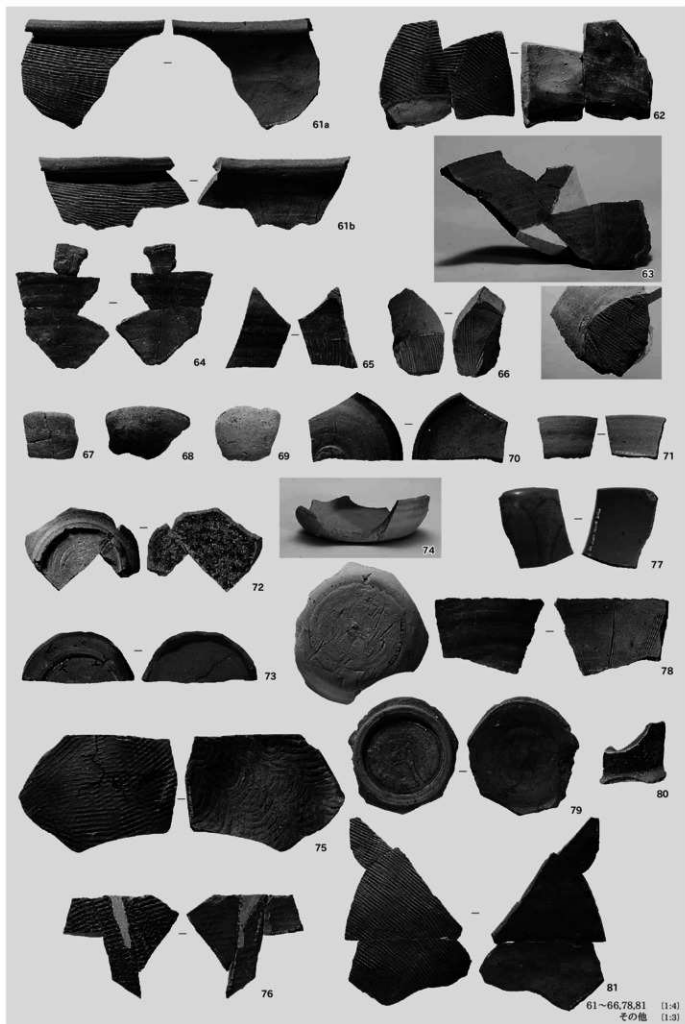


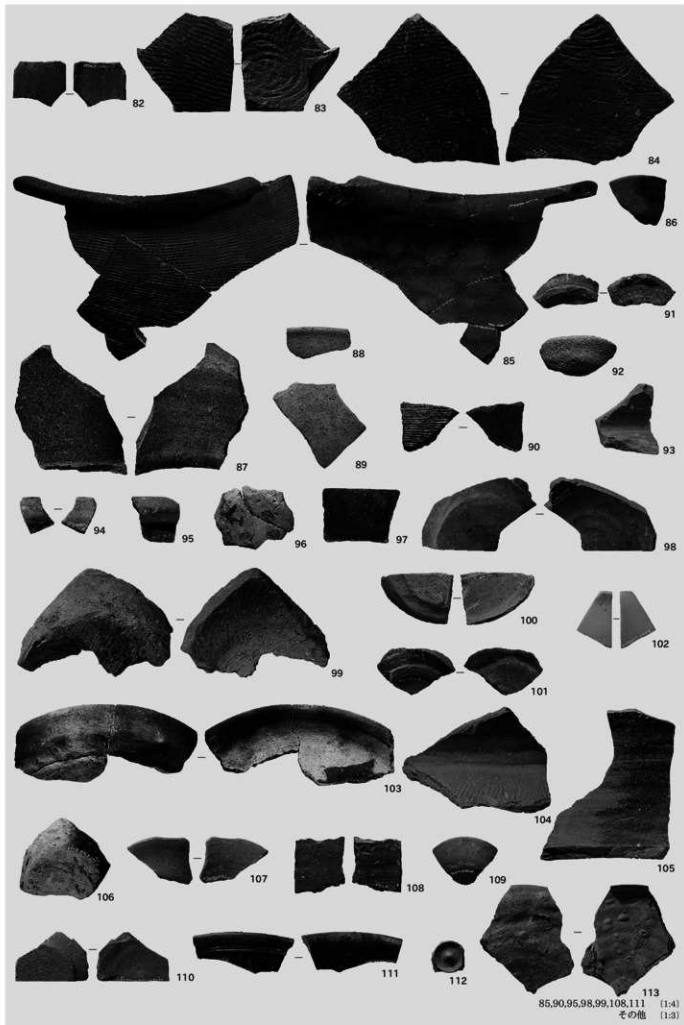
19底部 (1:6)
7,14,15,19,20,29,30 (1:4)
その他 (1:3)



31~35,38,39,43~46,48,49,52~55,57,58 (1:4)

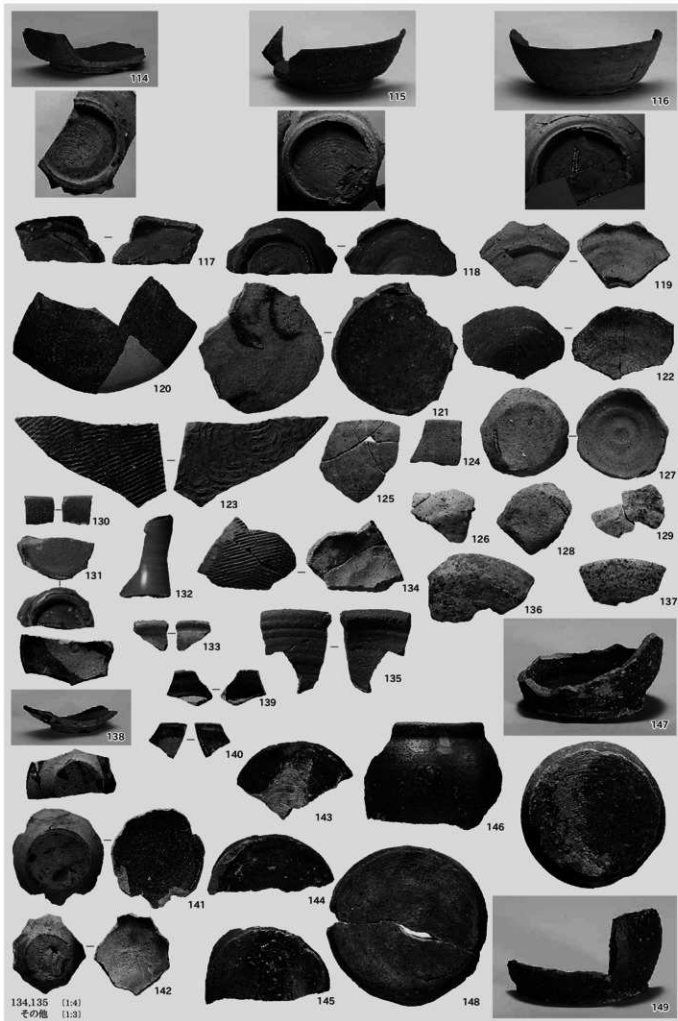
その他 (1:3)





85,90,95,98,99,108,111 (1:4)

その他 (1:3)







165a



165b



169



166



168

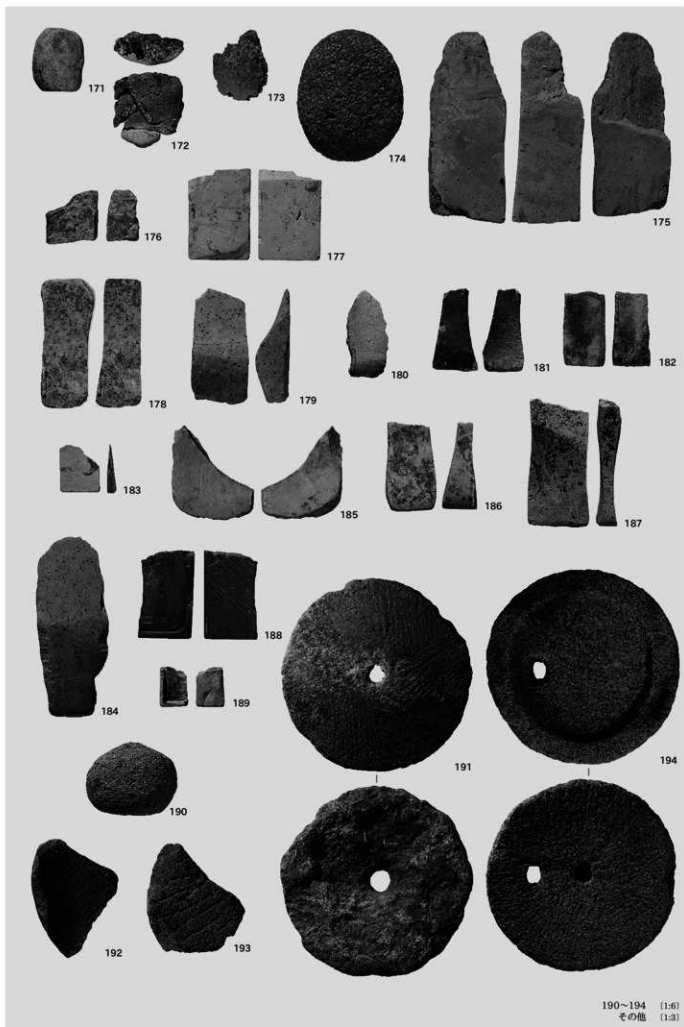


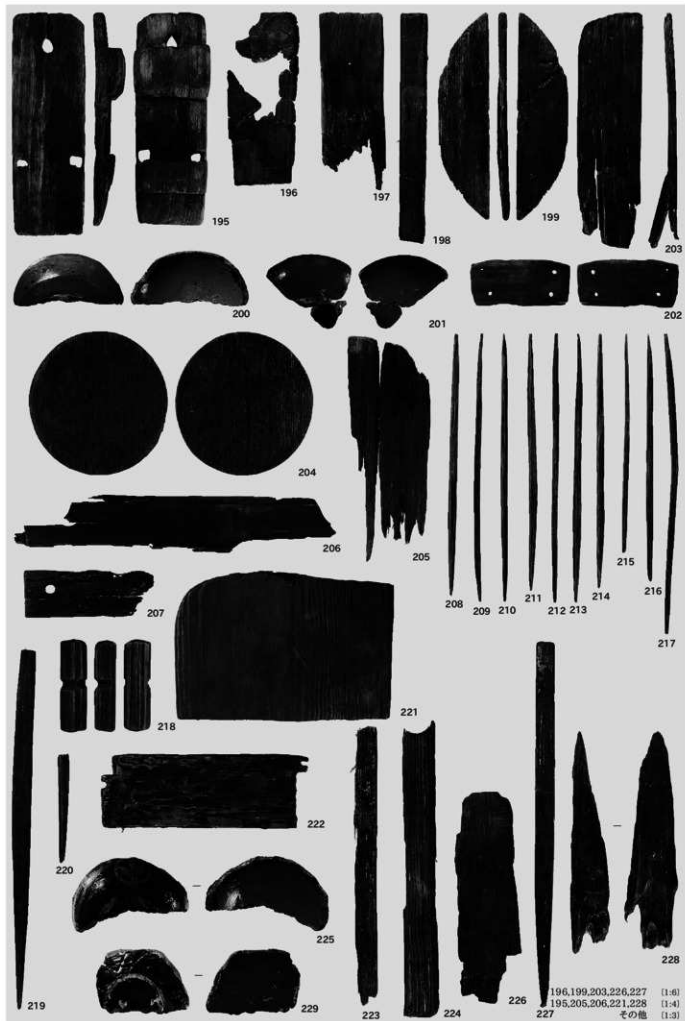
167



170

165 (1:5)
その他 (1:4)







230



231



232



233



234



235



236



237



238



239



240



241



242



243



244



245



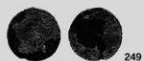
246



247



248



249



250

報告書抄録

ふりがな	しもわりいせきご							
書名	下割遺跡V							
副書名	一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書							
巻次	Ⅷ							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第230集							
編著者名	石川智紀(新潟県埋蔵文化財調査事業団)、山下 研(株式会社吉田建設)、日聖祐輔(株式会社イビソク)、金原 明(株式会社古墳地研究所)							
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社吉田建設							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL. 0250 (25) 3981							
発行年月日	2012(平成24)年3月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
下割遺跡	新潟県上越市 大字米岡字番場 780番地ほか	市町村 15222	遺跡番号 266	37度 8分 3秒	138度 19分 4秒	20100426～ 20100830 20110412～ 20110712	2,550 2,800	一般国道253号 上越三和道路建設
所収遺跡	種別	時期	主な遺構	主な遺物			特記事項	
下割遺跡	集落	古代(奈良・平安時代) 中世(12世紀末～15世紀) 近世(17世紀後半～19世紀前半)	掘立柱建物・井戸・土坑・ピット・溝・道路状遺構・性格不明遺構	須恵器、土師器、青磁、珠洲焼、土師貫土器、瀬戸美濃焼、越中瀬戸焼、越前焼、近世陶磁器・瓦器、土製品(土錘・羽口)、石製品(砥石・石臼・硯等)、木製品(下駄・漆器椀・漆器皿・曲物・箸状木製品・棒状木製品・板状木製品・部材等)、金属製品(銭貨)			13・14世紀を中心とする中世集落の一部。遺構は溝が中心だが、道路状遺構は新潟県内でも大規模なものである。	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第230集

一般国道253号上越三和道路関係発掘調査報告書Ⅷ

下割遺跡V

2012(平成24)年3月29日印刷

2012(平成24)年3月30日発行

編集・発行 新潟県教育委員会

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1

電話 025 (285) 5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1

電話 0250 (25) 3981

FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本 株式会社ハイングラフ

〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号

電話 025 (233) 0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第230集
『下割遺跡V.』の訂正について

		誤	正
16頁	上から 13行目	SD260 「深さ 22~78cm」	SD260 「深さ 25~78cm」
18頁	上から 11行目	SB07 「桁行1間 (5.14m) 以上、梁間1間 (4.30m)」	SB07 「桁行1間 (2.80m) 以上、梁間1間 (4.02m)」
25頁	上から 14行目	SE433 「SK348」	SE433 「P348」
28頁	上から 14行目	SE1001 「長軸 102cm」	SE1001 「長軸 102cm」
35頁	上から 23行目	SD831 「22R15から 23R 9に」	SD831 「22R14から 23R 9に」
43頁	下から 3行目	「1単位 (幅 1.7cm) 6条」	「1単位 (幅 1.9cm) 6条」
52頁	上から 14行目	「器高 2.2 の大型の皿である。」	「器高 2.2cm の大型の皿である。」
55頁	下から 2行目	SD834	SE834
84頁	報告 番号 222	備考 「3か所木釘残る」	備考 「4か所木釘残る」
84頁	報告 番号 228	木取り 「芯持ち丸太」	木取り 「芯持ち丸太」